静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第 39 集

御殿川流域遺跡群Ⅴ

手乱遺跡・鶴喰広田遺跡

三　　島　　市

平成 19 ～ 24 年度　一級河川御殿川広域河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１３

静 岡 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

序

富士山の伏流水を源流とした御殿川は、三島市内を流れる狩野川水系の支流として知られ、江戸期に徳川将軍家の為の御殿が川のほとりにあったことに由来する名称とされます。流路が蛇行する特徴があることから、大雨の際などには川が氾濫することが多い川でもありました。このため、昭和40年代より洪水対策のための河川改修が進められてきました。御殿川流域には埋蔵文化財包蔵地が数多く存在しており、工事に伴ってはこれまで三島市教育委員会、静岡県教育委員会、静岡県埋蔵文化財調査研究所により発掘調査が断続的に実施されています。

今回報告するのは御殿川流域遺跡群のうち、鶴喰広田遺跡及び手乱遺跡についての発掘調査成果であります。平成６～８年に実施された発掘調査区に隣接する地区が対象となりますが、調査区の大半は御殿川の旧流路にあたることが明らかとなりました。旧流路内からは弥生時代から近世に至る土器・陶磁器、木製品、石製品、金属製品といった日常生活に関わるあらゆる道具が多量に出土しました。これらは御殿川流域に広がっていた集落域よりもたらされたことは明らかで、当該期の人々の生活環境を知る上で貴重な成果を得ることができたといえるでしょう。

本書で報告するこれらの成果が、研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県沼津土木事務所ほか、各関係機関の御援助、御理解をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2013年３月

静岡県埋蔵文化財センター所長

勝　田　順　也

例　言

1　本書は静岡県三島市鶴喰他所在の手乱遺跡・鶴喰広田遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は平成19・21年度一級河川御殿川広域河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化財保護課（旧静岡県教育委員会文化課）の指導のもと、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。平成23年度以降は静岡県埋蔵文化財センターが同研究所の業務を引き継いで実施した。平成23年度調査については静岡県教育委員会文化財保護課が実施した。

3　手乱遺跡・鶴喰広田遺跡の本調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

本調査　平成20年５月～10月　調査対象面積　1,000㎡（手乱遺跡540㎡・鶴喰広田遺跡360㎡）

平成21年11月～22年３月　調査対象面積　359㎡

平成23年６月　調査対象面積　51㎡

資料整理・保存処理

平成22年６月～23年３月、平成23年10月～平成24年３月、

平成24年７月～平成25年３月

調査体制は、以下の通りである。

＜(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所＞

平成20年度（現地調査）

所長兼常務理事　清水　哲　　次長兼総務課長　大場正夫　　総務係長　山内小百合

会計係長　杉山和枝　　次長兼調査課長　及川　司　　次長兼事業係長　稲葉保幸

東部総括係長　中鉢賢治　　調査研究員　松川理治・日吉高幸

平成21年度（現地調査・資料整理）

所長兼常務理事　天野　忍　　次長兼総務課長　松村　享　　総務係長　山内小百合

会計係長　杉山和枝　　次長兼調査課長　及川　司　　次長兼事業係長　稲葉保幸

保存処理室長　西尾太加二　　次長兼東部総括係長　中鉢賢治

調査研究員　岩名建太郎

平成22年度（資料整理）

所長兼常務理事　石田　彰　　次長兼総務課長　松村　享　　専門監兼事業係長　稲葉保幸

総務係長　瀧みやこ　　総務課保存処理室長　西尾太加二

調査課長　中鉢賢治　　調査第二係長　岩本　貴　　調査研究員　岩名建太郎

＜静岡県埋蔵文化財センター＞

平成23年度（資料整理）

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　主幹兼事業係長　村松弘文

総務係長　瀧みやこ　　調査課長　中鉢賢治　　調査第二係長　溝口彰啓

主査　大森信宏　　主任　木崎道昭

平成24年度（資料整理）

所長　勝田順也　　次長兼総務課長　八木利眞　　主幹兼事業係長　前田雅人

総務係長　瀧みやこ　　調査課長　中鉢賢治

調査第二係長　溝口彰啓　　主査　大森信宏

4　本書は第１～３章を岩名健太郎・溝口彰啓が執筆し、第４～６章は溝口彰啓が執筆した。

5　出土した木・金属製遺物の保存処理は、当センターが実施した。
6　現地調査における掘削等業務委託は株式会社深谷（平成20・21年度）、安全管理等業務委託は小野建設株式会社（平成20年度）、基準点測量・空中写真撮影・測量業務委託は株式会社フジヤマ（平成20・21年度）、株式会社デジック（平成21年度）、株式会社シン技術コンサル（平成21年度）にそれぞれ委託した。出土動物遺体の同定については株式会社パレオ・ラボに委託した。平成23・24年度に実施した整理作業・保存処理業務委託については、株式会社パソナに委託した。
7　出土木材の樹種同定は東北大学名誉教授鈴木三男氏に依頼した。
8　発掘調査では以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。
松井一明　村上伸之　山本宏治（五十音順・敬称略）。
9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。
1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、周辺調査（平成６・７年度）との整合を図るため、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、日本測地系（改正前）を基準とした。
2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。国土平面直角座標Ⅷ系のＸ＝－99,650.000、Ｙ＝39,280.000を原点（Ａ1）として、座標方位を基準に１辺10ｍの方眼（グリッド）を、北から南へ向かって、１・２・３…、西から東へ向かって、Ａ・Ｂ・Ｃ…と設定し、さらにその中を１辺５ｍ幅で北西（ＮＷ）、北東（ＮＥ）、南西（ＳＷ）、南東（ＳＥ）の小区画に４分割して設定した。
3　第２章の周辺遺跡分布図（第２図）は国土地理院発行１：25,000地形図「三島」を複写し加工・加筆した。
4　遺構図、遺物実測図の縮尺は、それぞれにスケールを付した。
5　色彩に関する用語・記号は、新版『標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修1992）を使用した。
6　出土木製品の漆椀の文様については下記のように網掛けによって手法を区別した。

蒔絵　赤漆　黒漆

目　　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡の環境
第１節　地理的環境 …… 3
第２節　歴史的環境 …… 3
第３章　調査の経過と方法
第１節　調査の経過 …… 6
第２節　調査の方法 …… 8
第３節　基本土層 …… 8
第４章　手乱遺跡の遺構と遺物
第１節　検出された遺構 …… 9
第２節　出土遺物 …… 12
第５章　鶴喰広田遺跡の遺構と遺物
第１節　検出された遺構 …… 37
第２節　出土遺物 …… 39
第６章　まとめ …… 104
第１節　遺構について …… 104
第２節　出土遺物について …… 104

付編１　手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木製品の樹種 …… 107
付編２　手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土の動物遺体 …… 140
写真図版
抄録

挿図目次

第１図　御殿川流域遺跡群調査区配置図……2
第２図　周辺遺跡分布図……4
第３図　グリッド配置図……7
第４図　手乱遺跡調査区全体図……10
第５図　手乱遺跡杭検出状況図……11
第６図　御殿川・手乱川合流地点調査区全体図……11
第７図　手乱遺跡出土遺物実測図１（土器）……14
第８図　手乱遺跡出土遺物実測図２（土器）……15
第９図　手乱遺跡出土遺物実測図３（土器）……16
第10図　手乱遺跡出土遺物実測図４（土器）……17
第11図　手乱遺跡出土遺物実測図５（土器）……18
第12図　手乱遺跡出土遺物実測図６（土器）……19
第13図　手乱遺跡出土遺物実測図７（陶磁器）……20
第14図　手乱遺跡出土遺物実測図８（陶磁器・瓦・土製品）……21
第15図　手乱遺跡出土遺物実測図９（木製品）……26
第16図　手乱遺跡出土遺物実測図10（木製品）……27
第17図　手乱遺跡出土遺物実測図11（木製品）……28
第18図　手乱遺跡出土遺物実測図12（木製品）……29
第19図　手乱遺跡出土遺物実測図13（木製品）……30
第20図　手乱遺跡出土遺物実測図14（木製品）……31
第21図　手乱遺跡出土遺物実測図15（木製品）……32
第22図　手乱遺跡出土遺物実測図16（木製品）……33
第23図　手乱遺跡出土遺物実測図17（石器・金属製品）……34
第24図　鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区全体図……38
第25図　鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区全体図……39
第26図　Ｈ21調査区土器出土状況図……40
第27図　鶴喰広田遺跡杭検出状況図……41
第28図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図１（土器）……44
第29図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図２（土器）……45
第30図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図３（土器）……46
第31図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図４（土器）……47
第32図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図５（土器）……48
第33図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図６（土器）……49
第34図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図７（土器）……50
第35図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図８（土器）……51
第36図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図９（土器）……52
第37図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図10（土器）……53
第38図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図11（土器）……54

第39図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図12（土器）……55
第40図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図13（土器）……56
第41図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図14（土器）……57
第42図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図15（陶磁器）……58
第43図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図16（陶磁器）……59
第44図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図17（陶磁器・土製品・瓦）……60
第45図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図18（陶磁器）……61
第46図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図19（陶磁器他）……62
第47図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図20（木製品）……72
第48図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図21（木製品）……73
第49図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図22（木製品）……74
第50図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図23（木製品）……75
第51図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図24（木製品）……76
第52図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図25（木製品）……77
第53図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図26（木製品）……78
第54図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図27（木製品）……79
第55図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図28（木製品）……80
第56図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図29（木製品）……81
第57図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図30（木製品）……82
第58図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図31（木製品）……83
第59図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図32（木製品）……84
第60図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図33（木製品）……85
第61図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図34（木製品）……86
第62図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図35（木製品）……87
第63図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図36（木製品）……88
第64図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図37（木製品）……89
第65図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図38（木製品）……90
第66図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図39（木製品）……91
第67図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図40（木製品）……92
第68図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図41（木製品）……93
第69図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図42（木製品）……94
第70図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図43（木製品）……95
第71図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図44（木製品）……96
第72図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図45（石器・石製品・金属製品）……97
第73図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図46（金属製品）……98

挿表目次

第１表　御殿川流域遺跡群調査一覧……1
第２表　手乱遺跡出土土器・陶磁器一覧表……22
第３表　手乱遺跡出土木製品一覧表……35
第４表　手乱遺跡出土石器一覧表……36
第５表　手乱遺跡出土金属製品一覧表……36
第６表　鶴喰広田遺跡出土土器・陶磁器一覧表……63
第７表　鶴喰広田遺跡出土木製品一覧表……99
第８表　鶴喰広田遺跡出土石器・石製品一覧表……103
第９表　鶴喰広田遺跡出土金属製品一覧表……103

図版目次

図版１　１．手乱遺跡遠景（南より）
　　２．手乱遺跡杭検出状況
　　３．弥生土器出土状況
　　４．須恵器出土状況
　　５．木製品出土状況
図版２　１．手乱遺跡全景（北より）
　　２．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区全景（北より）
図版３　１．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区全景（南より）
　　２．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区北区全景（北より）
　　３．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区中区全景（北より）
　　４．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区南区全景（北より）
　　５．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区杭検出状況
図版４　１．鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区全景（南より）
　　２．鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区流路２遺物出土状況（北東より）
図版５　手乱遺跡出土遺物１（土器）
図版６　手乱遺跡出土遺物２（土器）
図版７　手乱遺跡出土遺物３（土器）
図版８　手乱遺跡出土遺物４（土器・陶磁器）
図版９　手乱遺跡出土遺物５（陶磁器）
図版10　手乱遺跡出土遺物６（陶磁器他）
図版11　手乱遺跡出土遺物７（木製品）
図版12　手乱遺跡出土遺物８（木製品）
図版13　手乱遺跡出土遺物９（木製品）
図版14　鶴喰広田遺跡出土遺物１（土器）
図版15　鶴喰広田遺跡出土遺物２（土器）

図版16　鶴喰広田遺跡出土遺物３（土器）
図版17　鶴喰広田遺跡出土遺物４（土器）
図版18　鶴喰広田遺跡出土遺物５（土器）
図版19　鶴喰広田遺跡出土遺物６（土器）
図版20　鶴喰広田遺跡出土遺物７（土器）
図版21　鶴喰広田遺跡出土遺物８（陶磁器）
図版22　鶴喰広田遺跡出土遺物９（陶磁器）
図版23　鶴喰広田遺跡出土遺物10（陶磁器）
図版24　鶴喰広田遺跡出土遺物11（陶磁器）
図版25　鶴喰広田遺跡出土遺物12（陶磁器他）
図版26　鶴喰広田遺跡出土遺物13（木製品）
図版27　鶴喰広田遺跡出土遺物14（木製品）
図版28　鶴喰広田遺跡出土遺物15（木製品）
図版29　鶴喰広田遺跡出土遺物16（木製品）
図版30　鶴喰広田遺跡出土遺物17（木製品）
図版31　鶴喰広田遺跡出土遺物18（木製品）
図版32　鶴喰広田遺跡出土遺物19（木製品）
図版33　鶴喰広田遺跡出土遺物20（木製品）
図版34　鶴喰広田遺跡出土遺物21（木製品）
図版35　鶴喰広田遺跡出土遺物22（木製品）
図版36　鶴喰広田遺跡出土遺物23（木製品）
図版37　鶴喰広田遺跡出土遺物24（木製品）
図版38　鶴喰広田遺跡出土遺物25（木製品）
図版39　鶴喰広田遺跡出土遺物26（木製品）
図版40　手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（石器・石製品）
図版41　手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（金属製品）

第１章　調査に至る経緯

御殿川は三島市街中心に位置する菰池から湧出する富士山伏流水を起源とし、三島扇状地の東部にあたる三島市街地中央部を南流して大場川へと合流する。その規模は流程６㎞、流路延長9.5㎞、流域面積2.3㎢で、狩野川二次支川とされている。

御殿川自体が流下の途中に数多くの蛇行部を持つ上、合流する大場川、さらにこれが下って合流する狩野川下流部は河床勾配が比較的緩やかであるため、その背水影響の及ぶ流域では、短時間の急激な降雨に対して排水処理能力が追いつかず、湛水・浸水被害が度々もたらされてきた。静岡県は昭和45年より、排水能力の向上と流域面積確保を目的とした御殿川蛇行部の直進化及び護岸整備工事事業を断続的に進めてきた。同時に工事計画箇所にある埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の必要が生じたため、静岡県沼津土木事務所、静岡県教育委員会、三島市教育委員会の間で協議のもと、大場川合流部より御殿川を遡る方向で遺跡分布調査・発掘調査が順次実施された。

昭和49年、御殿川と大場川合流部に位置する中島（城内）遺跡調査の後、昭和55年に中島地区、昭和57年には、鶴喰・八反田・中地区で分布調査が実施され、発掘調査対象地の選定がされた。中島地区の御殿川流域部（東岸部）に包蔵地登録されている中島Ｂ遺跡の範囲内では、昭和56年に中島下舞台遺跡、昭和61年に中島上舞台遺跡での発掘調査が三島市教育委員会によって実施されている。

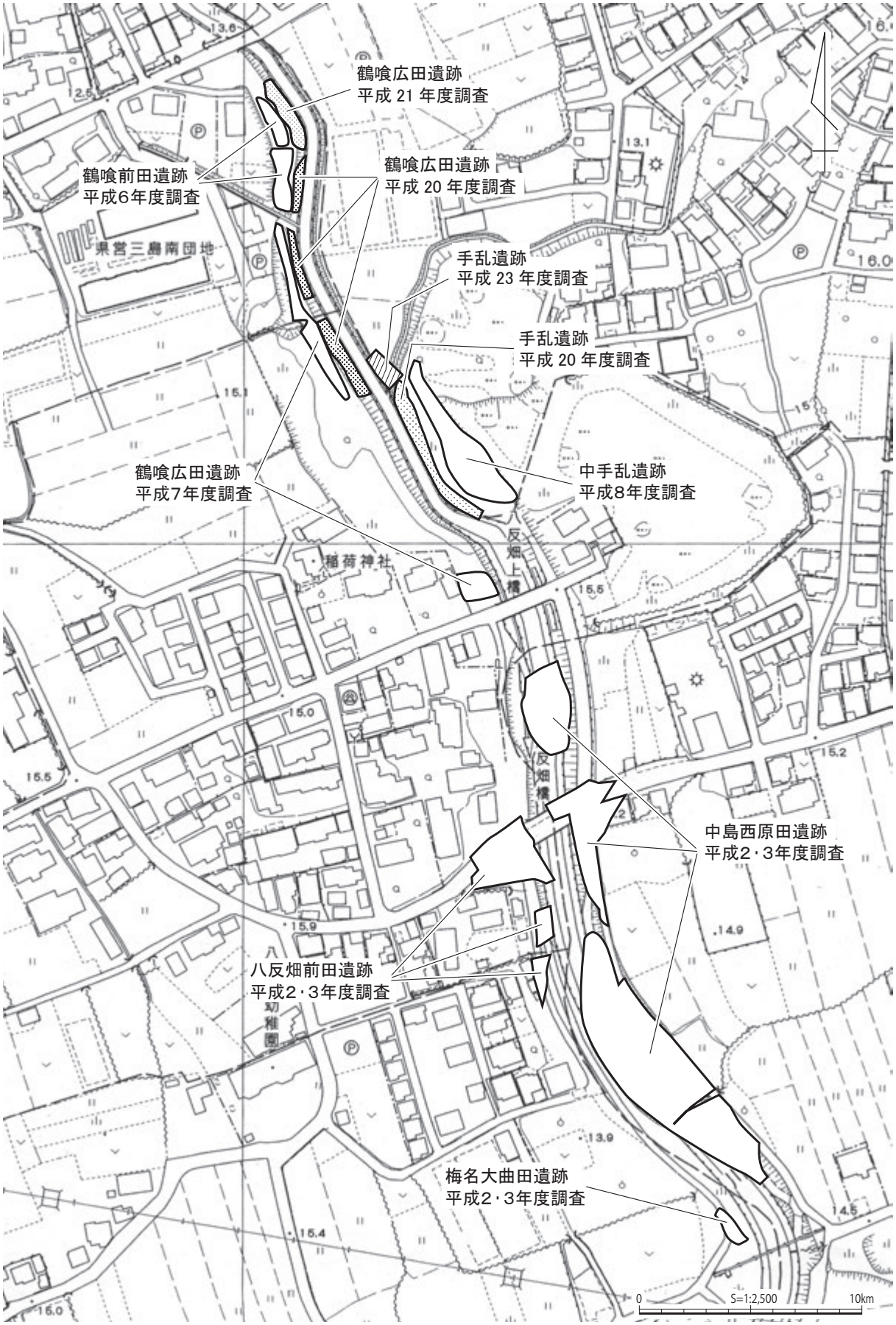
平成２年以降は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査担当を三島市教育委員会から引き継ぎ、第１表及び第１図にまとめたとおり、発掘調査を実施している。平成２～４年に中島西原田・梅名大曲田遺跡で発掘調査を行い、その上流部の西岸側では平成３年に八反田前田遺跡、平成６年に鶴喰前田遺跡、平成７年には鶴喰広田遺跡の南側地点の発掘調査を実施した。東岸側の中地区では、平成８・９年に中手乱遺跡の一部について、調査を行った。さらに上流部（東岸側）の南二日町地区でも、平成10～11・17～18・21年に青木原遺跡で発掘調査を実施している。

今回実施した手乱遺跡と鶴喰広田遺跡の調査は、平成６～９年の調査区に隣接する地区にあたり、浸水対策等の作業安全確保のため緩衝用地として残されたことにより未着手となっていた、御殿川本流に接地する河岸部を対象としたものである。また、平成23年には御殿川と手乱川が合流する地点において、静岡県教育委員会文化財保護課による本発掘調査が実施され、今回報告にその成果を報告する。

なお、静岡県埋蔵文化財調査研究所及び静岡県埋蔵文化財センターによる上記発掘調査ではそれぞれ別の遺跡名として報告されているが、今回の報告にあたっては第１表に示したとおり、現在の周知の包蔵地名に準じることとする。

第１表　御殿川流域遺跡群調査一覧

報告時遺跡名	遺跡名（現包蔵地名）	調査期間	調査面積	報告
中島西原田遺跡	中島B遺跡	平成2年9月～平成3年3月	4,096㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ』
八反畑前田遺跡	鶴喰広田遺跡	平成3年4月～平成4年3月	13,421㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ』
梅名大曲田遺跡	中島B遺跡	平成4年4月～平成5年3月	800㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅰ・Ⅱ』
鶴喰前田遺跡	鶴喰広田遺跡	平成6年10月～平成7年3月	1,055㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅲ』
鶴喰広田遺跡1･2区	鶴喰広田遺跡	平成7年10月～平成8年3月	1,292㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅳ』
鶴喰広田遺跡3区	鶴喰広田遺跡	平成8年4月～平成8年6月	866㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅳ』
中手乱遺跡	手乱遺跡	平成8年10月～平成9年3月	1,984㎡	『御殿川流域遺跡群Ⅳ』
手乱遺跡(H20)	手乱遺跡	平成20年5月～平成20年8月	540㎡	本報告
鶴喰広田遺跡(H20)	鶴喰広田遺跡	平成20年7月～平成20年10月	360㎡	本報告
鶴喰広田遺跡(H21)	鶴喰広田遺跡	平成21年11月～平成22年3月	359㎡	本報告
手乱遺跡(H23)	手乱遺跡	平成23年6月	51㎡	本報告



第１図　御殿川流域遺跡群調査区配置図

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

手乱・鶴喰広田遺跡は静岡県東部、伊豆半島の付け根の西方に当たる、北西側に愛鷹山、東側に箱根山、南側に静浦山地に囲まれた黄瀬川・狩野川下流域に広がる平野に立地する。

平野はおよそ現沼津市東部から三島市街地南部付近、西走する狩野川の南北で二分され、北側は三島・沼津平野と通称される地域の東部に当たり、愛鷹山・箱根山間の谷に富士火山溶岩（三島溶岩流／約１万年前）が流れ込んだのち、縄文海進・海退を経て、富士山体崩落により発生した火山砂礫層（御殿場泥流／約2900年前）の被覆により形成された扇状地（三島扇状地）である。一方、南側は田方平野または、狩野川平野と通称され、縄文時代前期の海進時に入江（古狩野湾）であった地域が、海退後に天城カワゴ平火山の降下軽石及び火砕流に由来する軽石質砂層によって埋められた谷底平野である。

堆積が先行した三島扇状地の南端部は、静浦山地の手前まで延び、これに行く手を阻まれる形で狩野川の流れは静浦山地に添いながら、北上から西走へと方向を変化させ、三島溶岩流が形成した台地端部より湧出する富士山の伏流水や箱根山を源流とする小河川との合流を重ね、静浦山地の北側で、南下して来る黄瀬川と合流したのち、静浦山地北西麓を廻り込むようにして駿河湾に注いでいる。

御殿川は富士山伏流水の湧出地である菰池を起源として、三島市街南部に相当する扇状地上を南東方向に蛇行を繰り返しながら狩野川の一次支川である大場川へと合流する。御殿川の中・下流域では、蛇行流路の消長により幅100～200mの開析谷が形成され、一部段丘が発達している。その内側の谷底平野部には、砂・砂礫質の氾濫物が堆積する。

手乱遺跡と鶴喰広田遺跡は御殿川中流域部の東西対岸にそれぞれ位置し、調査区の多くは御殿川の旧河道にあたっている。

第２節　歴史的環境

駿東・伊豆北地区における旧石器・縄文時代遺跡の立地は富士山南東麓・愛鷹山南～東麓・箱根山西麓の丘陵部に集中し、三島扇状地上では流入したと見られる少数の縄文土器が包含層中より確認されるのみである。

三島扇状地上で明確な人間の生活痕跡が認められるのは、弥生時代中期に至ってからである。当該期の遺物出土例は多数報告されるが、明確な遺構として把握されているのは、当該期の住居跡を検出した境川東岸の長伏遺跡、同じく住居跡が検出された御殿川中流西岸の青木Ｂ遺跡、６基の方形周溝墓が検出された御殿川下流東岸の中島上舞台遺跡（中島Ｂ遺跡上舞台地点）とそれほど多くはない。

弥生時代後期も中期同様、遺物の出土報告は多数認められる。住居を伴う集落域の検出例は境川流域では清水町瀬戸川遺跡、岩崎屋敷跡等の例が挙げられ、御殿川流域では、中島上舞台遺跡（中島Ｂ遺跡上舞台地点）で２軒の住居跡が検出され、青木Ｂ遺跡では方形周溝墓１基が検出されている。三島扇状地周辺では住居跡を伴う集落遺跡は、三島市谷田押切遺跡、夏梅木遺跡群、函南町向原遺跡、伊豆逓信病院遺跡など多数にのぼり、箱根西麓丘陵上に数多く展開している傾向がうかがえる。

当該地域周辺における集落域は古墳時代に入ると面的な広がりを見せるようになる。古墳時代前期に

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	鶴喰広田遺跡	11	谷田天台遺跡	21	蔵地原遺跡
2	手乱遺跡	12	源平山遺跡	22	青木B遺跡
3	青木原遺跡	13	猪追面遺跡	23	平田前田遺跡
4	伊豆国分寺跡	14	茶臼山遺跡	24	金沢遺跡
5	芝本町遺跡	15	御園川遺跡	25	中島B遺跡
6	三嶋大社・塔ノ森廃寺	16	壱町田遺跡	26	桶田遺跡
7	三島御殿跡	17	道下遺跡	27	長伏遺跡
8	三島代官所跡	18	西大久保遺跡	28	向山古墳群
9	市ヶ原廃寺	19	奈良橋向遺跡	29	上阿弥陀遺跡
10	上才塚遺跡	20	柳添遺跡	30	中島遺跡

第２図　周辺遺跡分布図

比定される住居跡を伴う集落遺跡は、箱根西麓に所在する夏梅木遺跡群、伊豆逓信病院遺跡でもみられるが、大場川・御殿川間の地域でも展開し、中島上舞台遺跡（中島Ｂ遺跡上舞台地点）、金沢遺跡、壱町田遺跡などで集落跡が検出される。奈良橋向遺跡及び西大久保遺跡では弥生時代末から古墳時代初頭に比定される集落跡と水田域が検出され、注目されている。御殿川流域でも青木原遺跡では微高地上の調査区で、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される方形周溝墓が３基検出されたほか、河岸部の調査区より、三遠系銅鐸の模倣品である小銅鐸と円環型銅釧の再加工品が出土しており、鶴喰広田遺跡の平成６年調査（鶴喰前田地点）では、円環型銅釧が出土している。

古墳時代中期以降は、手乱川間の段丘面から微高地上に立地する金沢遺跡をはじめとして、多数の住居跡を伴う集落遺跡が増加し、狩野川本流北岸部にも拡大する反面、箱根西麓では平井の台地と通称される地域に集落立地が限定されるようである。

奈良時代になると、湧水源流部が集中する溶岩台地末端部にあたる現三島市街中心部に国分寺が建立され、近隣に伊豆国庁が存在していたと想定されている。古代の寺院・官衙関連遺跡は、市ヶ原廃寺、塔ノ森廃寺、上才塚遺跡など、大場川と御殿川に挟まれた空間（御殿川東岸側）に集中している。現在もここに三嶋大社より南側へ旧下田街道が延びており、古代以降この地域の重要な交通起点の一つとなっていたことがうかがえる。

近世に入り、御殿川上流部と西側に流れるその支流を跨ぐ形で三島宿が整備される。宿場周辺には集落が展開し、手乱・鶴喰広田遺跡で出土した数多くの日常生活品は、これら近隣村落より廃棄され流入したものと考えられる。

鶴喰広田遺跡は元来、御殿川右（西）岸の崖線上に範囲設定されていた埋蔵文化財包蔵地である。昭和57年に住宅建設に伴い発掘調査が実施された際、弥生時代中・後期に比定される土器とそれに伴う方形周溝墓周溝の一部の可能性がある溝や土坑群、古墳時代後期に比定される竪穴住居１軒ほか、掘立柱建物跡１棟などが検出されている。対岸に位置する手乱遺跡もまた、微高地上に範囲設定された埋蔵文化財包蔵地であり、弥生土器や土師器が採取されていた。

平成６年以降、両包蔵地外縁に位置する河岸部で実施された、河川改修工事に伴う発掘調査の主たる成果は、近世以降と目される護岸杭列や排水用暗渠等の遺構が検出されたほか、旧流路中から断続的ながら縄文時代晩期から近現代に及ぶ多種多様な遺物の出土が挙げられる。しかし、調査区内における度重なる河川の開析・堆積により、それら遺物の具体的な流入・漂着経緯や時期の追求が出来ないことから、近接する微高地部や上流部の遺跡・包蔵地との具体的な関わりを言及するに至っていない。

第３章　調査の経過と方法

第１節　調査の経過

（１）手乱遺跡の調査経過

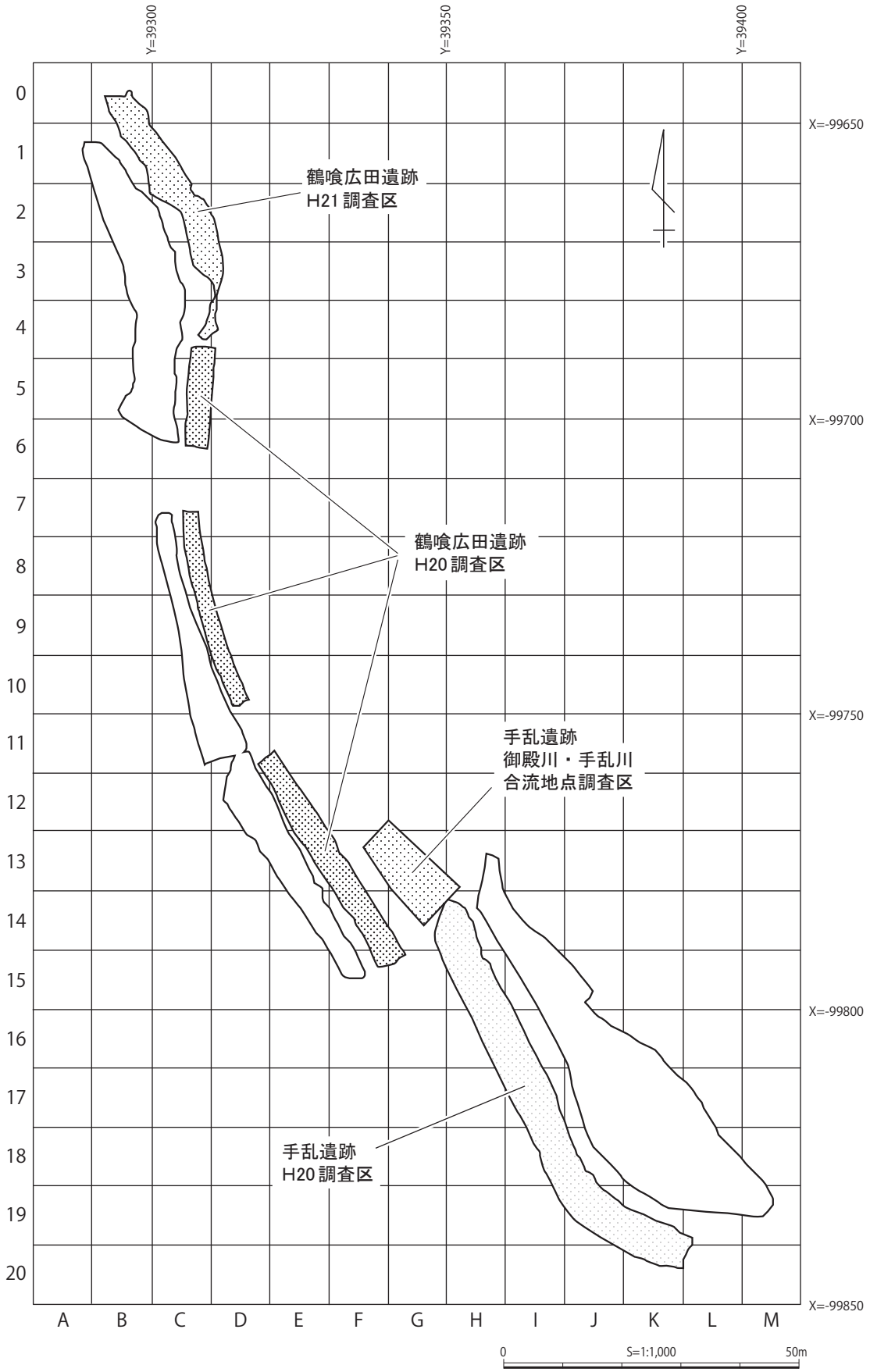
御殿川東岸、手乱川合流部より下流に位置する手乱遺跡調査区（以下Ｈ20調査区）は対象面積540㎡であり、平成20年５月下旬より、重機・車輌（バックホウ・クローラーダンプ）を用いた表土除去作業を開始した。表土除去終了後、６月上旬には基準点及びグリッド杭を打設し、ベルトコンベア・水中ポンプ等の機械用電源の架線・配線工事を行った後、包含層人力掘削作業を開始した。調査区北・中・南部３箇所に東西方向のトレンチを設定・掘削し、その壁面より土層堆積状況を確認しながら掘削作業を進めた。掘削作業と並行し、河川から浸水・湧水に対処するため、調査区周縁部に排水溝・集水枡を設定した。集中豪雨等により調査区が水没するなど、作業は困難であったが、遺物包含層の掘削を進め、８月上旬には掘削作業を完了させ、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、現地調査を終了した。

平成23年６月には御殿川と手乱川の合流地点において、静岡県教育委員会文化財保護課による対象面積51㎡に対する本調査が行われ、遺物包含層より土器類の出土が確認された。

（２）鶴喰広田遺跡の調査経過

御殿川西岸の鶴喰広田遺跡の平成20年調査区（以下Ｈ20調査区）は、対象面積360㎡である。西側集落からの生活排水等を河川に流すための土管により調査対象地が３つに分断されていたため、上流から北区、中区、南区の３つに分けて調査を行った。７月中旬より下旬まで、重機・車輌（バックホウ・ダンプトラック）を用いた表土除去を実施した。発生した排土は、鉄板を敷設した簡易道路及び市道を通過して、東岸側に設定した排土場へ搬出・管理した。交通安全のため誘導員を配置し、土埃が立たないように散水車を稼動させた。表土除去終了後、基準点及びグリッド杭を打設し、あわせて機械用電源の架線・配線工事を行った。８月上旬より北区、中旬より中区、９月上旬より南区にて包含層人力掘削を開始し、手乱遺跡と同様、発掘作業に並行して排水溝・集水枡を設定・掘削した。８月下旬には北区、９月上旬には中区、９月下旬には南区の掘削作業が終了し、ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査を完了した。

平成21年調査区（以下Ｈ21調査区）は、平成20年調査区の北側に当たり、対象面積は、359㎡である。平成21年11月上旬より、ベルトコンベア・水中ポンプ等の機械用電源の架線・配線工事を行い、重機・車輌を用いた表土除去を開始した。平成20年調査時と同様に発生した排土は、東岸側に設定した排土場へ搬出した。表土除去終了後の11月下旬３箇所に東西方向にトレンチを設定し、壁面より土層堆積状況を確認しながら、掘削作業を実施した。数度の降雨・増水に伴う調査区水没と復旧を繰り返しつつ、人力掘削を翌22年２月末まで行い、３月上旬に調査区完掘状況のラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行い、調査を終了した。


Y=39300
Y=39350
Y=39400
X=-99650
X=-99700
X=-99750
X=-99800
X=-99850
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
鶴喰広田遺跡
H21 調査区
鶴喰広田遺跡
H20 調査区
手乱遺跡
御殿川・手乱川
合流地点調査区
手乱遺跡
H20 調査区
0
S=1:1,000
50m

第３図　グリッド配置図

第２節　調査の方法

現地調査にあたり、過去の周辺調査との整合を図るため、測量基準点は平成６～８年に実施した調査区で設定されたグリッド軸を利用することとした。設定されたグリッドは10m間隔で、南北方向は北から順にアラビア数字を用い、東西方向は西から順にアルファベットを用いて表示し、改正前の日本測地系Ⅷ系国家座標に基づいている。遺物の取上げはグリッド・層位別一括取上げを基本としているが、一部の遺物の出土位置についてはトータルステーションによる平面位置の記録、あるいは縮尺率1/10の遺物出土状況図を作成した。遺跡完掘状況の全体図作成は株式会社フジヤマ（平成20年調査）及び株式会社デジック・株式会社シン技術コンサル（平成21年調査）に委託し、併せて空中写真撮影についても実施した。写真撮影は、現地発掘調査では35㎜版カラーネガ、６×７版モノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、資料整理では出土品の撮影に６×７版モノクロ･カラーリバーサルフィルムを使用した。

第３節　基本土層

鶴喰広田遺跡、手乱遺跡ともに今回の調査対象区は御殿川氾濫原内で、流水量の変化により浸食と堆積が繰り返された谷底平野に当たり、これまで御殿川流域遺跡群で実施された基本土層の考え方に準拠している（静文研1993・1994・1995・1998）。

表土層の多くは堤防構築用盛土であり、その下部には水田床として搬入・敷設されたとみられる粘土層が部分的にみられ、御殿川流域遺跡群基本土層第Ⅰ層と認識される層位である。

これより下に残る層位には、砂層及び砂礫層を主体とした河川堆積層が認められる。その上層は御殿川流域遺跡群基本土層第Ⅱ層と設定された砂層で、20～30㎝程度の堆積厚を持っている。今回の調査では検出された杭列の多くがⅡ層堆積後に設置されていることが確認され、Ⅱ層の一部はこれよりも新しい旧河川によって削平されている。Ⅱ層には多量の木製品を含む遺物が多数含まれている。

下層は、御殿川流域遺跡群基本土層第Ⅲ層と設定された砂礫層である。30㎜以下の亜角礫と砂の混合層で、下位の一部に粘土塊の混入が認められる。御殿川上流の青木原遺跡の砂礫層最下位には、玄武岩質の小児頭大から径１ｍに達する亜円礫・岩が含まれていたが、手乱遺跡・鶴喰広田遺跡では確認されていない。Ⅲ層は１ｍ～1.5m程度の堆積厚であるが、平面上での分離は困難で、重複が予想される旧流路の把握は基盤層まで浸食したものに限られる。Ⅲ層中位までは弥生土器から近世の陶磁器片が多量に出土しているが、Ⅱ～Ⅲ層中位までの出土土器の年代観は層の上下に対応しておらず、細片化したうえに表面に流磨痕が観察されるものが多数認められる。幾度もの増水に伴う流路の変更や底部攪拌に伴い、二次堆積が繰り返されて来たものであろう。ただし、Ⅲ層の最下層では一転して、残存率の高い弥生時代後期から古墳時代後期にかけての土器類が出土することから、Ⅲ層最下層のみは出土土器の年代観を反映した時期に堆積した土が、度重なる流路の変更にも関わらず削平されずに残存した可能性が高い。過去の調査において、Ⅱ層は中近世、Ⅲ層は古代以前の堆積層という推定がなされていたが、上述のようにⅢ層中位以上については、近世以降に堆積した二次堆積層の可能性が高いことから、基本層位の年代観には再考が必要となってきている。

Ⅱ・Ⅲ層の砂層及び砂礫層を除去すると、堅く締まった褐灰色を呈する硬質砂である基本土層第Ⅳ層が表出するが、これは三島扇状地の基盤を形成する火山砂礫再堆積層（通称マサ）であり、無遺物層となる。

第４章　手乱遺跡の遺構と遺物

第１節　検出された遺構

（１）旧流路

手乱遺跡調査区内では、前章で述べたように盛土と旧耕作土の下に河川堆積による堆積層が確認されている。その主体となるのは基本土層Ⅱ層とⅢ層となり、これらは度重なる流路の変更に伴って堆積したと考えられるが、その層位は錯綜した形でしか認識できないため、流路の新旧を平面・断面から捉えることは不可能であった。Ⅲ層を除去し、基盤層となるⅣ層を検出する段階になると、Ⅳ層を掘り込む形で流路の痕跡が確認されている。平成８・９年に行われた東隣の調査区（以下Ｈ８・９調査区）では、同じくⅣ層を浸食した弥生時代中期～古墳時代後期とみられる流路を３条、近世とみられる流路を１条確認しているが、その一部は西側に隣接する今回調査区（以下Ｈ20調査区）でも連続する形で検出されている。

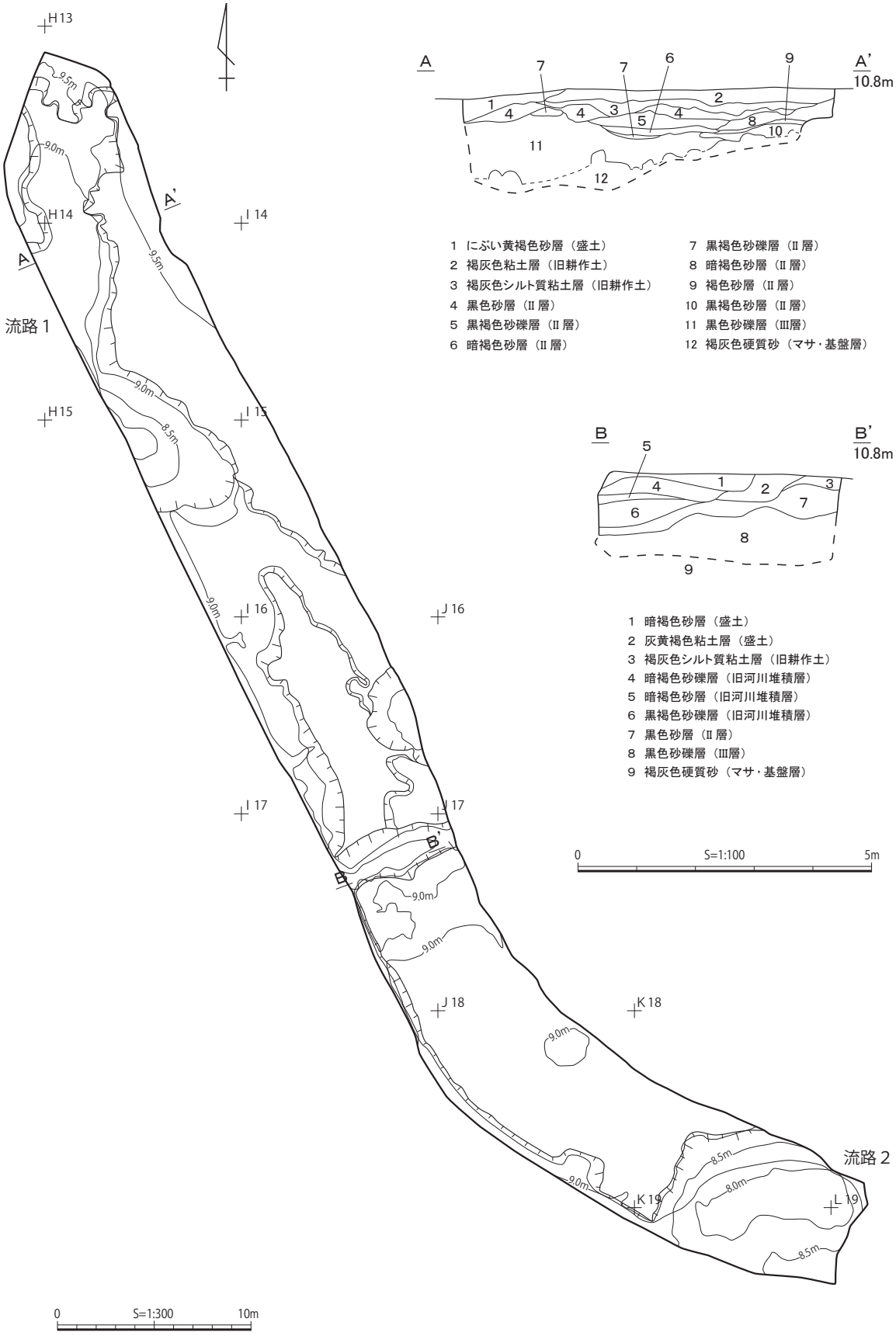
調査区北端のＨ13グリッド付近からＩ16グリッド付近にかけて蛇行する流路１が検出されており、全体としては30～50㎝程度の浅いものであった。Ｈ15グリッド付近にⅣ層上面との比高差が１ｍ近くにもなる澱み状の窪みも見受けられ、流路内での一様ではない水流の様子を窺うことができる。これら流路は北端に始まり、蛇行しつつ東方向へと抜けると考えられ、Ｈ８・９調査区方向で検出された東西方向の流路へと連続する可能性がある。Ⅳ層を基盤とした微高地を挟み、Ｋ18～19グリッドにかけて比高差80㎝～１ｍのやや深い流路２が検出されている。ほぼ東西方向を向くこの流路はＨ８・９調査区南端で検出された流路１と連続する可能性がある。

これら流路は手乱遺跡における最古段階の流路と考えられ、下層において出土する弥生時代～古墳時代の遺物群から古墳時代頃の流路である可能性が高い。ただし、上記のように流路上層のⅢ層中層以上では近世までの遺物群が混在するようになることから、近世以降の流路によって堆積層が削平され再堆積していく状況が窺える。

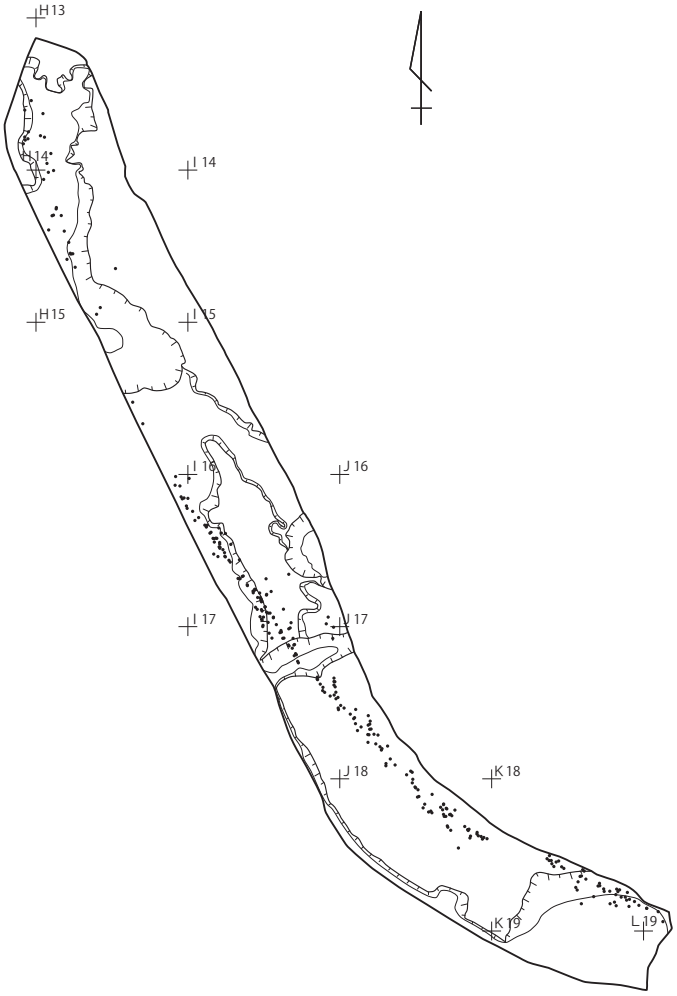
（２）杭列

これまでの御殿川流域遺跡群の調査同様、今回の調査でも多くの杭列を検出している（第５図）。杭の設置された時期は先端がⅢ層に及ぶ古い段階のものもあるが、多くはⅡ層堆積後に設置されたものである。隣接するＨ８・９調査区ではＨ20調査区側となる西側付近で検出されているが、散在する状況であったため杭列の多くはＨ20調査区側に設置されたといえる。杭はＨ16グリッド北西から南東方向に向かって調査区に沿う形で列を成して検出されている。これまで実施された調査成果によれば、これら杭列は護岸あるいは水流制御のために川岸付近に沿って打ち込まれている可能性が高いため（静文研1993・1995）、一時期の河川が杭列の西側にあったことが想定される。杭列の西側は第４図Ｂ－Ｂ'土層図が示すように、Ⅱ層を削り込む形で旧河川堆積層の堆積が確認され、Ⅱ層自体が残っていない部分もある。杭列はこの旧河川に伴って設置されたもので、杭列は旧河川の東側川岸になっていたとみられる。旧河道はⅡ層を削り込むことから、近世よりも新しい時期の流路であり、現御殿川以前の流路の一部であったことがわかる。

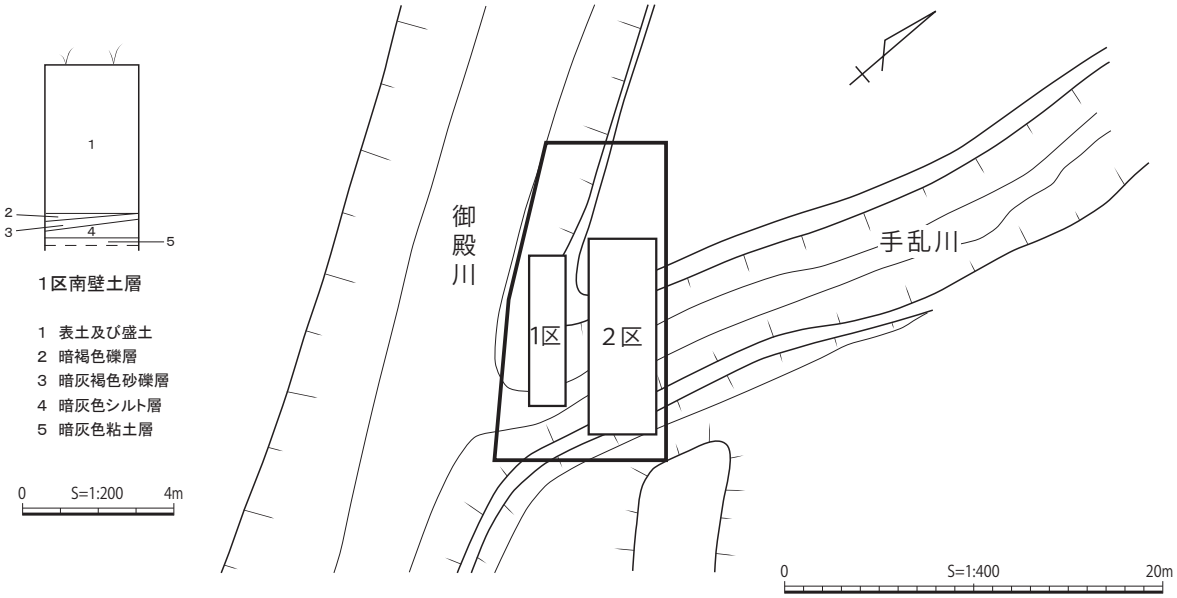
（３）御殿川・手乱川合流地点の調査



第４図　手乱遺跡調査区全体図



第５図　手乱遺跡杭検出状況図



第６図　御殿川・手乱川合流地点調査区全体図

御殿川と手乱川の合流地点については平成23年度に静岡県教育委員会文化財保護課による本発掘調査及び工事立会いが行われた。本発掘調査は合流地点を１区と２区に分割して実施している（第６図）。

１区、２区ともに現護岸施設の盛土が地表下３～４ｍまで確認され、その直下に遺物を含む河川堆積層である暗褐色砂礫層が確認されている。これは基本土層Ⅲ層に相当する遺物包含層とみられ、Ⅱ層に相当する砂層は確認されていない。暗褐色砂礫層は１区よりも２区側の方が厚く堆積しており、Ⅲ層が堆積する以前の流路は手乱川の川床の方が低いため、御殿川との合流部は澱み状となっていた可能性が高い。遺物は弥生時代～近世にかけての土器・陶磁器が出土しているが、暗褐色砂礫層下層は古墳時代までの遺物に限られるため、古墳時代頃までに堆積したもので、その後の流路の影響を受けていないと考えられる。なお、本調査区に隣接する現手乱川と御殿川川床部分については工事立会いによる調査が行われ、残存状況は不明瞭ながら包含層である暗褐色砂礫層の一部が確認されている。

第２節　出土遺物

（１）土器・陶磁器（第７～14図）

縄文土器・弥生土器・土師器　１・２は縄文晩期～弥生前期初頭頃に位置づけられる。１は甕で、内外面の調整は不明瞭である。２は深鉢で、口縁外面に２条の沈線が巡り、口縁端部は波状とみられる。３は弥生中期中葉の細頸の壺口縁で、縦位の縄文が施される。４・５・８は弥生後期～古墳前期の壺口縁で、５は内外面ともに比較的丁寧に磨かれる。６は完形の弥生後期後半の壺である。体部下半は丁寧なミガキ調整、頸部から口縁にかけてはハケ調整によって仕上げられる。７は古墳前期の壺口縁で、内外面はハケ調整の後、ミガキ調整がなされる。９～11は大廓様式とされる大型の複合口縁壺である。11は口縁内面端部に突帯を巡らせる特徴的な形態をなす。12・13は弥生後期の壺頸部、14は二重口縁壺の頸部である。15～18は弥生中期中～後葉の壺の肩部で、いずれもヘラ描きの文様が施される。19は弥生後期～古墳前期に比定される壺で、外面はミガキ、内面はハケ調整が施される。21の壺底部は木葉痕を模した文様がみられる。22～25は古墳前期の高坏の坏部､28～30は脚部である。22･23はハケ調整の後、縦位のミガキ調整が顕著にみられ、22は体部に焼成後の穿孔がなされる。26・27は器台で、26は内面に放射状のミガキ調整がなされ、27の底部中央には穿孔がみられる。31は弥生後期の所産とみられる高坏の脚部で、外面は丁寧にミガキ調整がなされる。32～34は弥生後期～古墳前期の甕口縁部で、いずれも内外面にはハケ調整が顕著にみられる。35・36はＳ字口縁甕の口縁部である。外面は縦位のハケ調整がなされ、内面には指頭圧痕が認められる。37～41は弥生後期～古墳前期の台付甕の脚部で、37～39は内外面ともにハケ調整が顕著である。

42～45は古墳時代中期の小型壺である。体部が半球状となり、平底となる形態を持つ。44は無頸形態となる小型壺である。いずれも口縁部は横ナデ調整がなされ、体部の調整は不明瞭であるが、42はミガキ調整がなされている。46～55は古墳時代中～後期の坏である。46は底部に木葉痕が残り、口縁部が内湾する駿豆型とされる坏である。内面には放射状のミガキ調整がなされ、外面は横方向にミガキ調整がなされるが、摩滅により不明瞭である。47・51～53は須恵器模倣坏で、47は坏身、51～53は坏蓋を模倣した坏とされるものである。51・53は黒色、52は赤色処理された後に丁寧にミガキ処理されている。また53は対面した口縁部を割り欠いていることから、何らかの祭祀的行為に伴う可能性もある。50・54・55はやや深めの形態となり、50・55は口縁端部が外側に引き出され、54は強い横ナデで口縁部に段を作りだして内湾する。56は浅い丸底の坏で、口径9.4cmと小振りである。内外面の摩滅が激しく調整は不明である。57・58は手捏ねの坏である。58は指頭痕が残る粗いつくりで、53の坏と同様に対面する口縁

部を割り欠いている。59・60は古墳時代中期の高坏の坏部である。59はハケ調整、60はミガキ調整が内外面に施される。61・62・64・65は古墳後期の甕、63は壺である。61は全体にハケ調整がなされ、口縁部はハケ調整の後に横ナデ調整される。62は口縁内部が肥厚する駿東甕で、全体にハケ調整がなされる。63・64はかなり硬質に焼成され、赤褐色を呈する。66は甲斐型坏とされる坏で、底部から体部外面にかけてヘラ削りされ、底部には糸切り痕が残る。内面には放射状のミガキ調整がみられる。67～69は灰釉陶器を模倣した有台坏である。底部は糸切り痕が残り、68は内部の一部にミガキ調整がみられる。70～72は平安時代の甕口縁部で、清郷型甕とされるものである。

須恵器・灰釉陶器・山茶碗　73・74は須恵器坏蓋である。73は頂部外面が回転ヘラ削りされ、口縁部は内湾する。７世紀前葉に位置づけられよう。74は頂部に宝珠つまみがつく蓋で、８世紀代のものであろう。75～79は坏身で、かえりのつく蓋坏である。75・76は長い口縁がやや内傾しつつ立ち上がり、端部に面を持つ古手の坏である。75はＴＫ47型式並行期に位置づけられ、体部外面に焼成前のヘラ記号らしきものがみられる。76はＴＫ10型式並行のものとみられる。77～79はかえり部が短く内傾し、特に78は口径が小さくなる。６世紀末～７世紀前葉の製品であろう。81は完形の有台坏である。高台内に判読不明の墨書がみられる。８世紀前半頃の製品であろう。80・82は高坏で、７世紀中頃のものであろう。83は脚付長頸壺で、頸部から口縁部と脚部が欠損している。７世紀前葉頃の製品であろう。84は器台脚部とみられ、体部に放射状、裾部に斜格子状のヘラ描きによる文様が施される。同様の遺物がＨ８・９調査区でも出土しており、同一個体の可能性もある。85は大型甕口縁である。７世紀代の製品であろう。86は灰釉陶器碗である。底部内面にはハケ塗りの灰釉が施される。Ｋ14窯式並行期に位置づけられる製品であろう。87は片口鉢の口縁部で、12世紀代の東遠江産の製品とみられる。

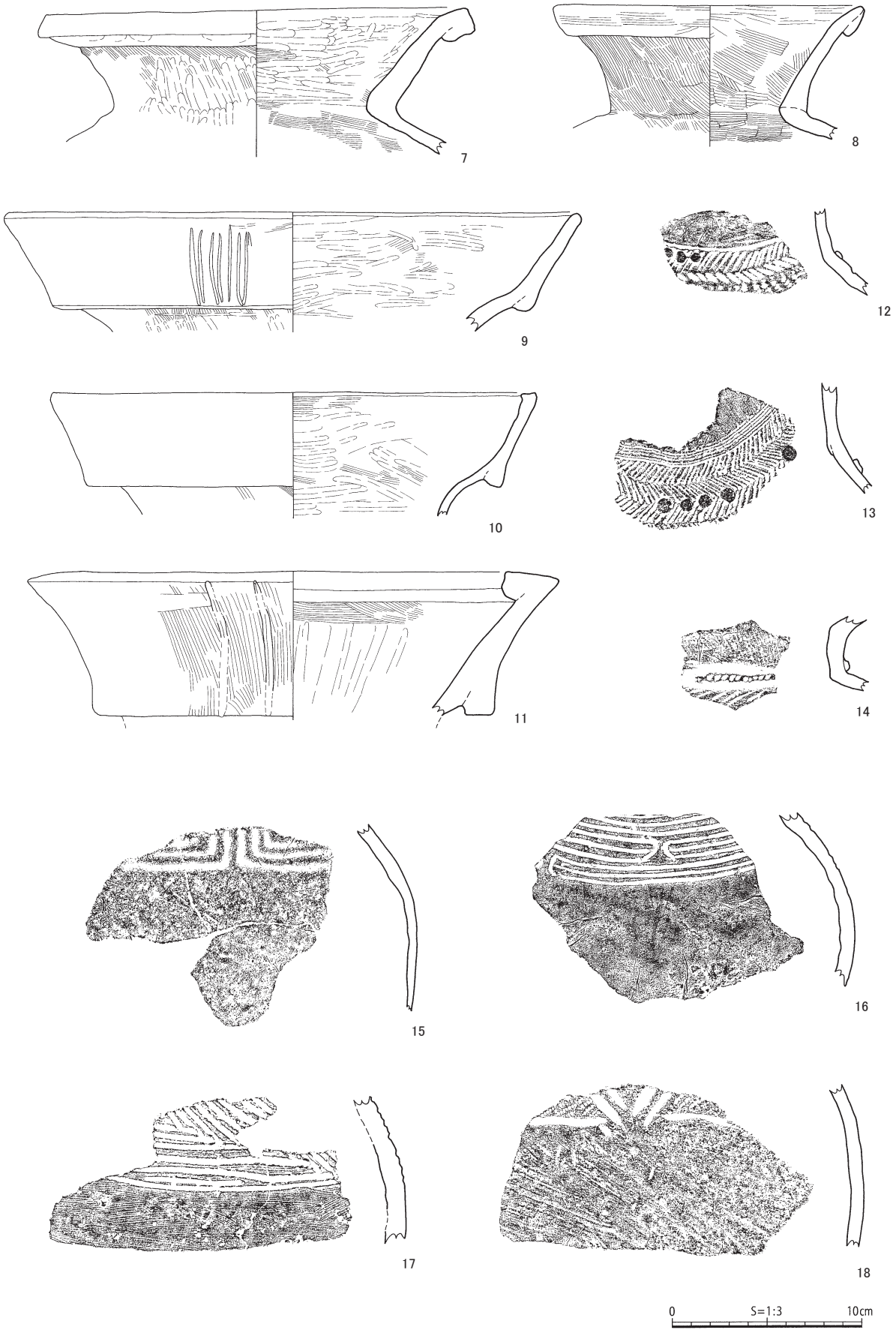
陶磁器・土師質土器　88～94は貿易陶磁である。88は青白磁梅瓶の体部である。89～91・93・94は青磁碗である。89は内面にヘラ描きの劃花文が施される青磁碗Ａ類（原1999）、90は体部外面に鎬連弁文が入るＢ１類に位置づけられる製品で、94はＢ１類の底部であろう。13世紀中葉～14世紀前半に位置づけられよう。91は無文の端反碗で青磁碗Ｄ類とされるものである。93はその青磁碗Ｄ類の底部とみられ、14世紀後半～15世紀前半の所産とされる。

95～100は瀬戸美濃産施釉陶器である。95は灰釉丸皿で、口縁部がヒダ状となるいわゆる襞皿である。大窯３段階の製品であろう。96は卸皿で、端部には灰釉が掛かる。古瀬戸後Ⅳ期の製品であろう。97は灰釉端反皿で、大窯２段階の製品であろう。98は灰釉縁釉小皿で、古瀬戸後Ⅳ期の製品である。99は天目茶碗、100は擂鉢である。いずれも古瀬戸後Ⅳ期新段階の製品である。101は常滑産の片口鉢である。口縁端部が内外に伸びる常滑10型式の製品であろう。102～105はかわらけである。いずれもロクロ成形であり、103は底部に明瞭な糸切痕が残る。104は底部が厚く、小さくなる。古代末に遡る可能性もある。105は底部内面に強いナデが渦巻き状にみられ、ススが付着する。

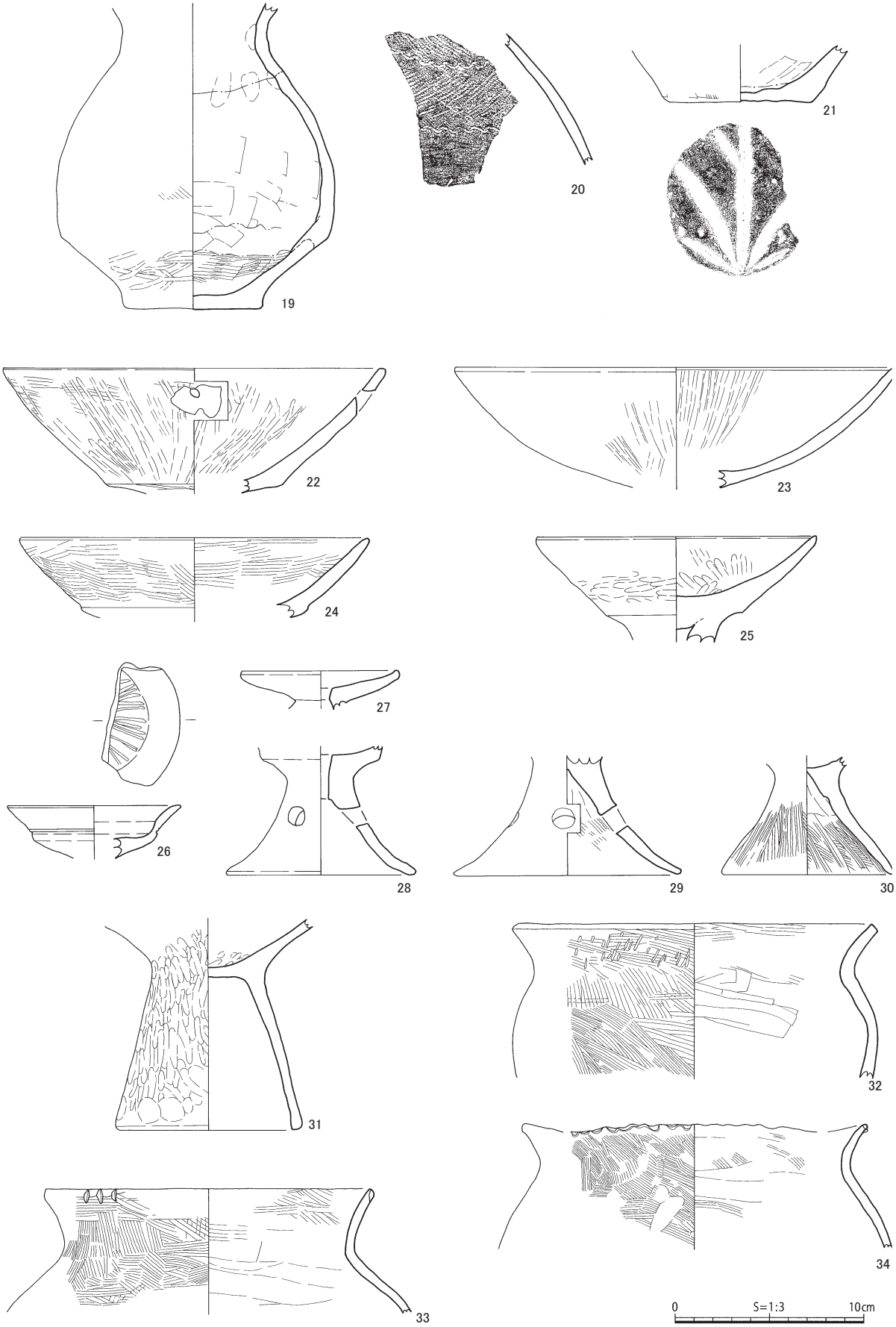
106～118は近世施釉陶器で、111・113が志戸呂窯産である以外は瀬戸美濃産である。106は灰釉反碗で、17世紀中頃の製品とみられる。107～110は灰釉小杯である。107の底部には判読不明の墨書がみられる。111は鉄釉小坏で、高台内に「志戸呂」印がみられる。112は反皿、113～115は丸皿である。113が鉄釉以外、いずれも灰釉掛けとなる。113は底部内面が無施釉となる。17世紀代の製品であろう。116は灰釉仏餉器である。117・118は灰釉徳利で、117は19世紀前半、118は18世紀後葉の製品であろう。

119～126は肥前産磁器である。119は染付端反碗の蓋で19世紀前半の製品であろう。120～122は18世紀後半頃の染付筒形碗で、122は青磁染付である。120の高台内には渦福銘がみられる。123は染付端反碗で、19世紀前半のものである。底部内面に「天」を互い違いにした銘を入れる。124は染付広東碗で19世紀前葉の製品であろう。125は染付蕎麦猪口で、体部外面には蛸唐草文が描かれる。19世紀前半の製品である。126の染付瓶は19世紀前半の製品である。127の仏飯器は18世紀代のものであろう。

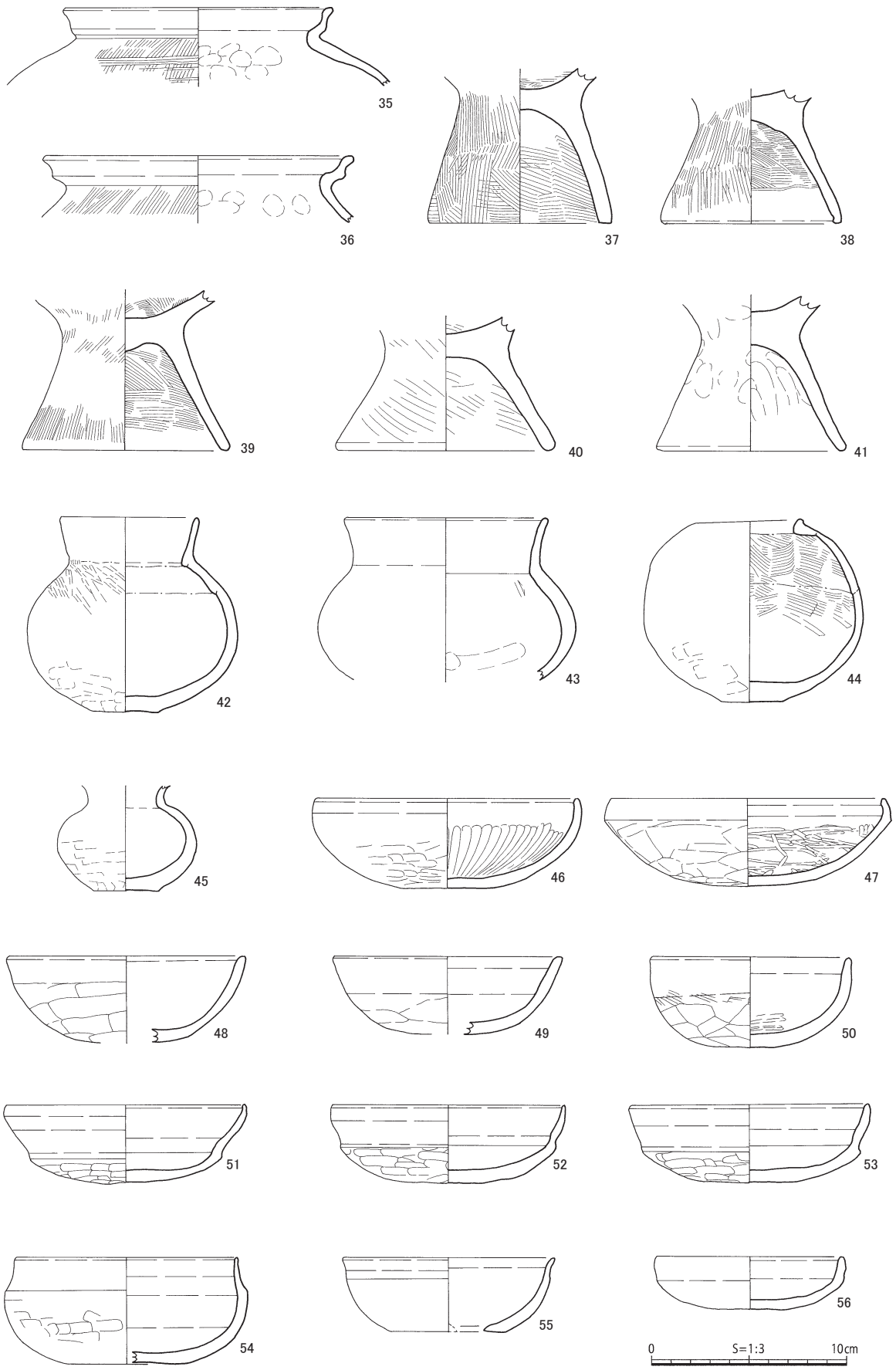
第７図　手乱遺跡出土遺物実測図１（土器）



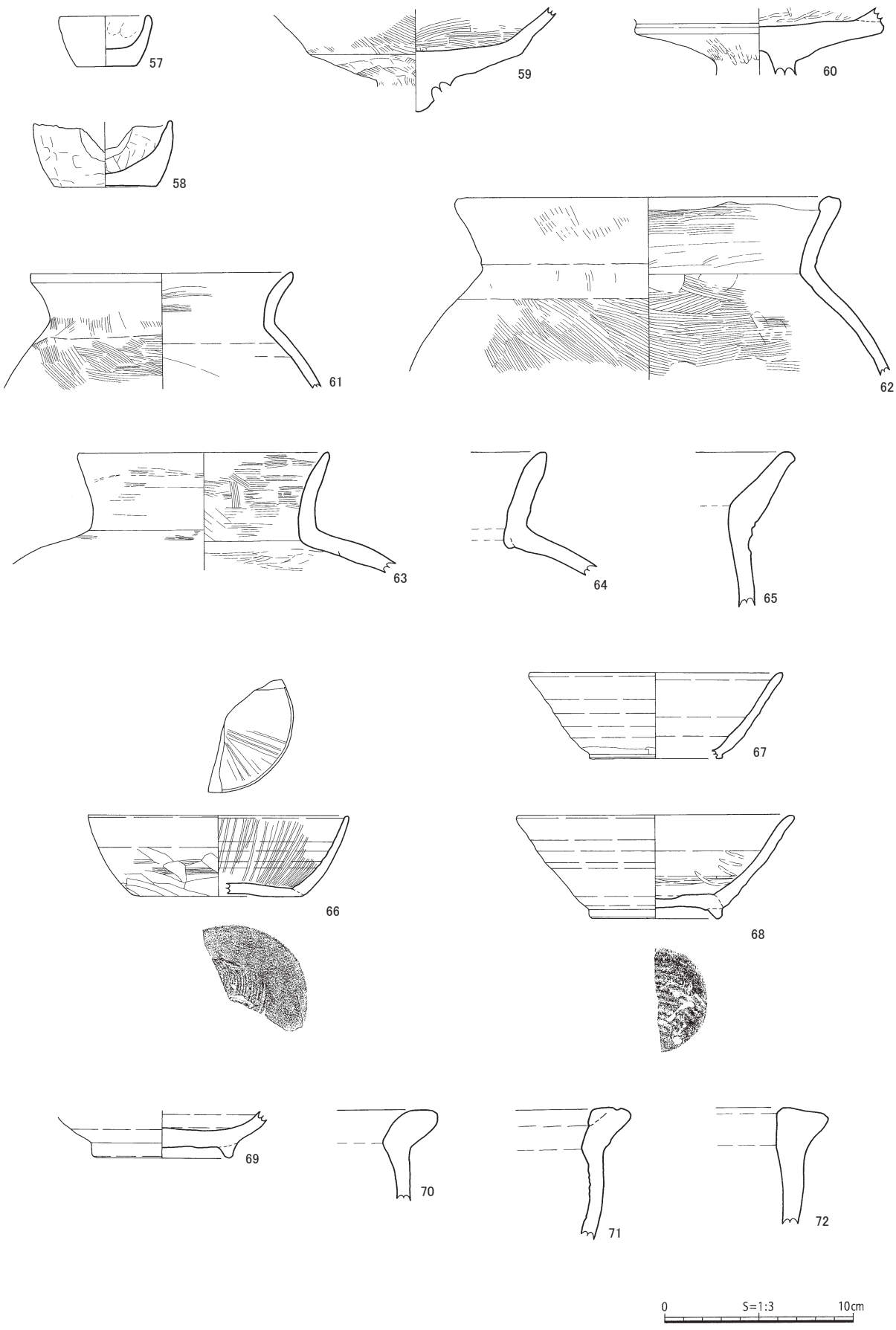
第８図　手乱遺跡出土遺物実測図２（土器）



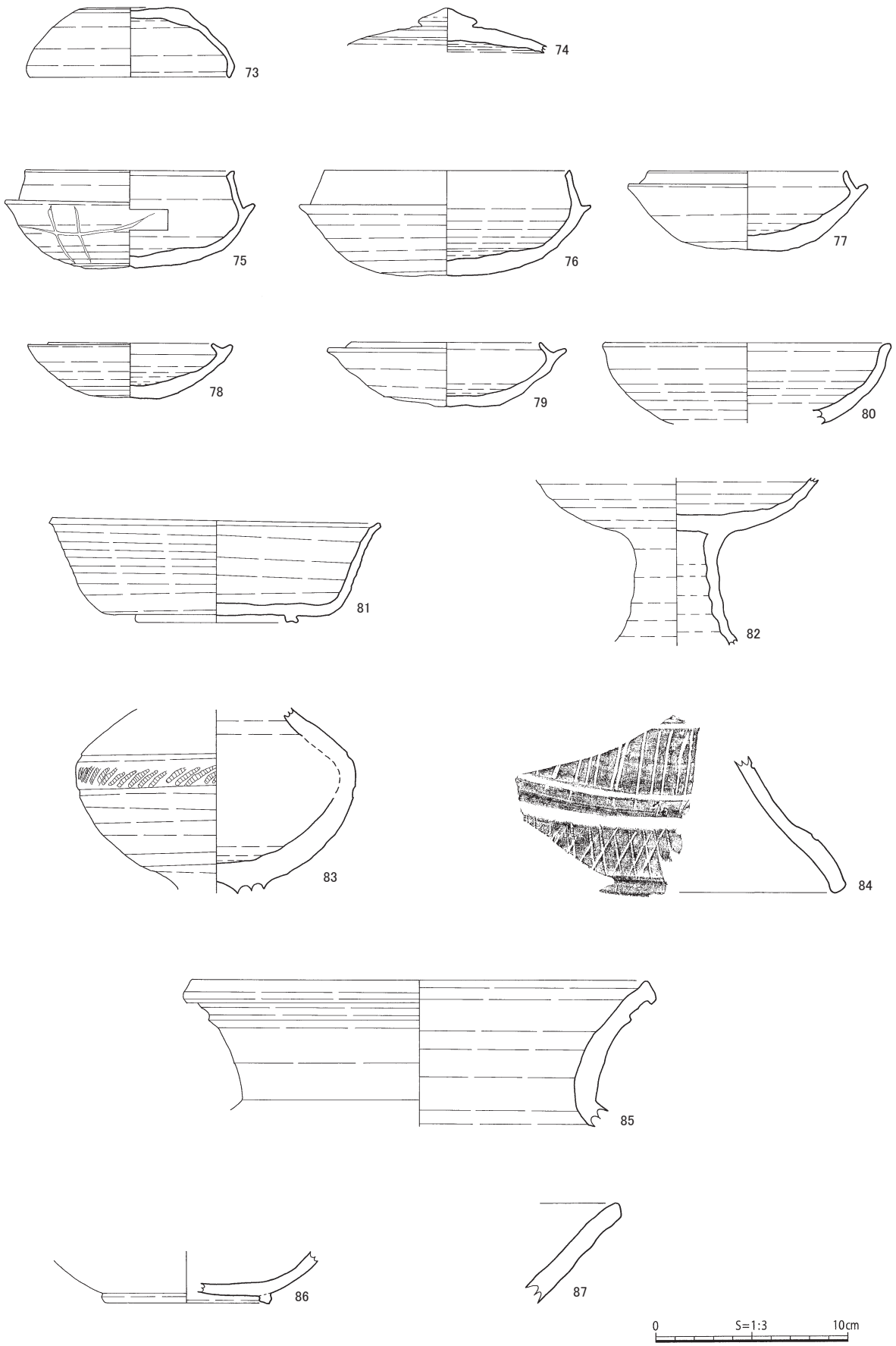
第９図　手乱遺跡出土遺物実測図３（土器）



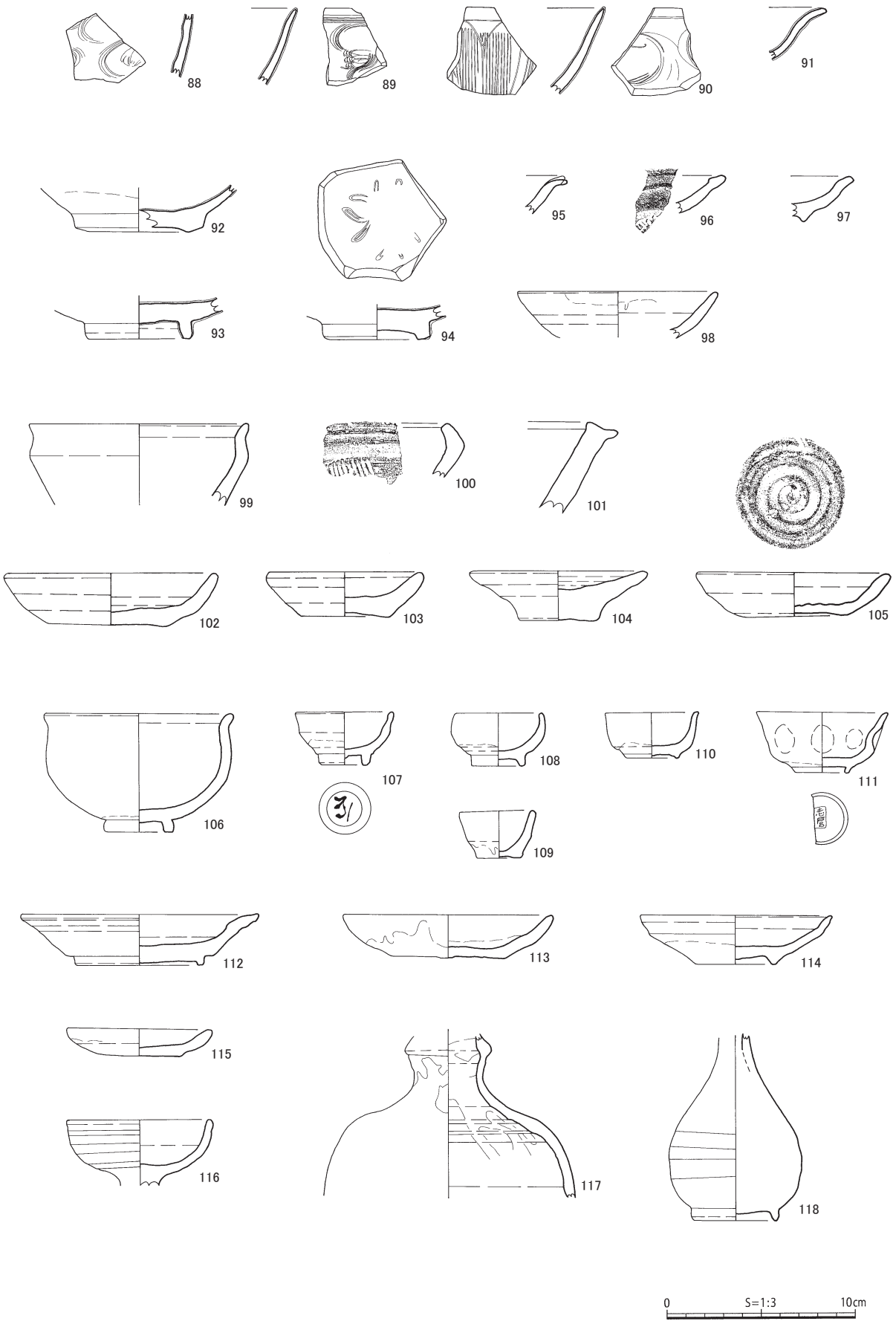
第10図　手乱遺跡出土遺物実測図４（土器）



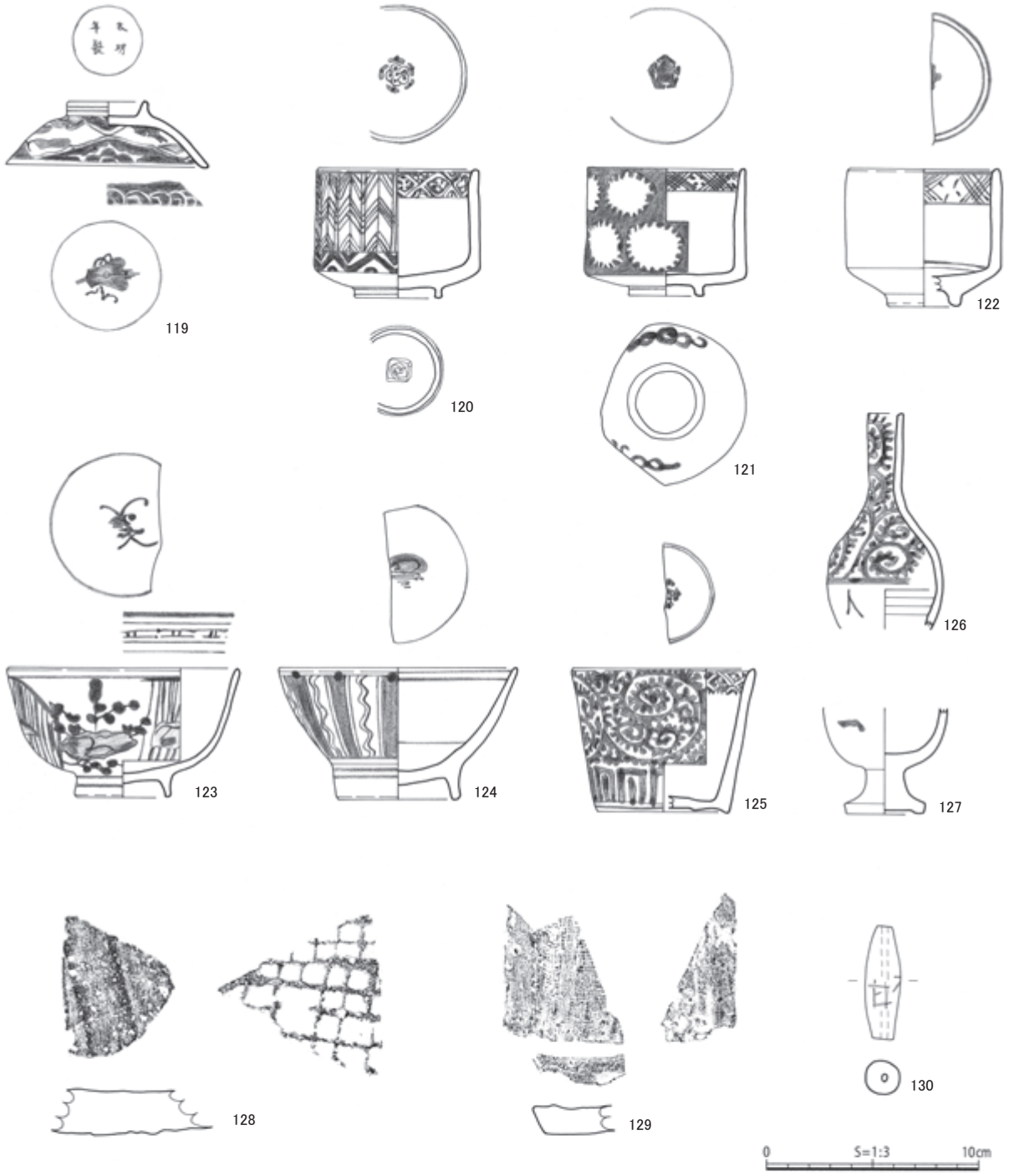
第11図　手乱遺跡出土遺物実測図５（土器）



第12図　手乱遺跡出土遺物実測図６（土器）



第13図　手乱遺跡出土遺物実測図７（陶磁器）



第14図　手乱遺跡出土遺物実測図８（陶磁器・瓦・土製品）

第２表　手乱遺跡出土土器・陶磁器一覧表

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
7	1	Ｉ18	Ⅲ	縄文～弥生土器	深鉢	－	－	－	(23.1)	内:2.5Y 4/1 黄灰 外:2.5Y 4/1 黄灰	口縁部～胴部	破片	
	2	Ｊ19	旧河川堆積層	縄文～弥生土器	深鉢	－	－	－	－	内:2.5Y 5/2 暗灰黄 外:2.5Y 6/1 黄灰	口縁部	破片	
	3	Ｋ19	Ⅲ	弥生土器	壺	(6.8)	－	－	(7.4)	内:5YR 4/4 にぶい赤褐 外:5YR 4/4 にぶい赤褐	口縁部～頸部	20%	
	4	Ｉ17	Ⅱ	弥生土器	壺	(13.4)	－	－	(11.7)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁部～頸部	30%	
	5	Ｋ20	Ⅲ	弥生土器	壺	(16.6)	－	－	(12.3)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部～肩部	30%	
	6	Ｌ19	Ⅲ	弥生土器	壺	13.2	7.1	17.5	23.2	内:10YR 7/4 にぶい黄橙 外:2.5Y 5/1 黄灰		完形	
8	7	Ｊ19 Ｋ20	Ⅲ 旧河川堆積層	土師器	壺	22.0	－	－	(7.8)	内:2.5YR 6/6 橙 外:2.5YR 5/6 明赤褐	口縁部	90%	
	8	Ｉ18	Ⅲ	土師器	壺	(16.3)	－	－	(6.8)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 6/4 にぶい橙	口縁部～肩部	10%	
	9	Ｋ19	－	土師器	壺	(30.0)	－	－	(6.2)	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部	20%	
	10	Ｋ19	－	土師器	壺	(25.4)	－	－	(6.6)	内:7.5YR 6/3 にぶい褐 外:7.5YR 7/3 にぶい橙	口縁部	20%	
	11	－	排水溝	土師器	壺	(22.4)	－	(28.0)	(7.6)	内:10YR 8/2 灰白 外:10YR 8/2 灰白	口縁部	20%	
	12	Ｋ20 Ｌ19 20	－	弥生土器	壺	－	－	－	(4.6)	内:10YR 6/3 浅黄 外:2.5Y 7/3 にぶい黄橙	頸部～胴部	破片	
	13	Ｊ19	旧河川堆積層	弥生土器	壺	－	－	－	(5.8)	内:10YR 4/1 褐灰 外:10YR 4/1 褐灰	頸部～胴部	破片	
	14	Ｋ20 Ｌ19 20	－	土師器	壺	－	－	－	(3.9)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:2.5YR 5/4 にぶい赤褐	頸部	破片	
	15	Ｊ18	Ⅲ	弥生土器	壺	－	－	－	(10.0)	内:7.5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5Y 6/2 灰オリーブ	頸部	破片	
	16	Ｉ17	Ⅲ	弥生土器	壺	－	－	－	(9.5)	内:10YR 6/2 灰黄 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	胴部	破片	
	17	Ｊ18	－	弥生土器	壺	－	－	－	(7.8)	内:10YR 6/2 灰黄褐 外:10YR 4/1 褐灰	胴部	破片	
	18	Ｉ18	Ⅲ	弥生土器	壺	－	－	－	(8.6)	内:7.5Y 2/1 黒 外:7.5Y 2/1 黒	胴部	破片	
9	19	合流地点	最下層	土師器	壺	－	－	－	(16.2)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 5/3 にぶい褐	胴部～底部	50%	
	20	Ｊ19	旧河川堆積層	土師器	壺	－	－	－	(3.9)	内:5Y 5/1 灰 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	胴部	破片	
	21	合流地点	砂礫層	土師器	壺	－	7.6	－	(2.7)	内:2.5YR 5/3 にぶい褐 外:7.5YR 5/2 灰赤	底部	70%	
	22	Ｊ19	Ⅲ	土師器	高坏	(20.1)	－	－	(6.7)	内:2.5YR 4/4 にぶい赤褐 外: 2.5YR 5/4 にぶい赤褐	口縁部～体部	40%	
	23	Ｈ15	Ⅲ	土師器	高坏	(23.2)	－	－	(6.4)	内:5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	口縁部～体部	10%	
	24	合流地点	最下層	土師器	高坏	(18.3)	－	－	(4.2)	内:10YR 5/4 赤褐 外:2.5YR 5/3 にぶい赤褐	坏部	30%	
	25	Ｉ17	Ⅲ	土師器	高坏	14.6	－	－	(5.7)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 6/4 にぶい橙	上半部～底部	30%	
	26	Ｊ19	Ⅲ	土師器	器台	(9.2)	－	－	(2.8)	内:N 3/ 暗灰 外:N 3/ 暗灰	口縁部～体部	20%	
	27	Ｊ19	－	土師器	器台	(8.2)	－	－	(2.0)	内:5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	口縁部～底部	70%	
	28	Ｉ16	Ⅲ	土師器	高坏	－	(10.0)	－	(6.8)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 6/4 にぶい橙	脚部～皿部	20%	
	29	Ｈ16	Ⅱ	土師器	高坏	－	(11.6)	－	(6.3)	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5YR 5/4 にぶい赤褐	脚部	60%	
	30	Ｈ15	Ⅲ	土師器	高坏	－	(8.9)	－	(6.2)	内:5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	脚部	50%	
	31	Ｊ19	Ⅲ	土師器	高坏	－	(9.4)	－	(11.2)	内:2.5YR 5/1 赤灰 外:2.5YR 5/4 にぶい赤褐	脚部～胴下半部	20%	
	32	Ｋ19	Ⅲ	土師器	台付甕	(18.7)	－	(19.3)	(8.2)	内:10YR 4/3 にぶい黄褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	口縁部～胴部	20%	
	33	Ｈ16	Ⅱ	土師器	台付甕	(17.2)	－	－	(6.6)	内:7.5YR 4/4 褐 外:7.5YR 4/4 褐	口縁部	20%	
	34	Ｊ19	－	土師器	台付甕	(18.0)	－	－	(6.6)	内:5Y 6/1 灰 外:10YR 5/1 褐灰	口縁部	20%	
10	35	Ｈ15	－	土師器	Ｓ字甕	(13.6)	－	－	(4.0)	内:2.5Y 6/2 灰黄 外:2.5Y 6/1 黄灰	口縁部～胴上部	10%	
	36	Ｊ18	－	土師器	Ｓ字甕	(15.6)	－	－	(3.4)	内:7.5YR 4/4 褐 外:7.5YR 4/4 褐	口縁部～頸部	30%	
	37	Ｈ15	Ⅲ	土師器	台付甕	－	9.4	－	(7.9)	内:5YR 5/6 明赤褐 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	脚部	100%	
	38	合流地点	最下層	土師器	台付甕	－	(9.2)	－	(6.7)	内:10YR 5/2 灰黄 外:10YR 5/2 灰黄	脚部	50%	
	39	Ｋ20	Ⅲ	土師器	台付甕	－	(10.4)	－	(8.2)	内:5YR 4/3 にぶい赤褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	脚部	60%	
	40	Ｋ19	Ⅲ	土師器	台付甕	－	10.8	－	(6.9)	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5YR 5/2 灰褐	脚部	100%	
	41	Ｊ19	Ⅲ	土師器	台付甕	－	(9.0)	－	(8.0)	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5YR 4/6 赤褐	脚部	30%	
	42	Ｋ19	Ⅲ	土師器	小型壺	(7.0)	3.3	－	10.0	内:10YR 4/2 灰黄褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	口縁部～底部	20%	
	43	－	排水溝	土師器	小型壺	(10.2)	－	(13.2)	(8.3)	内:10YR 4/2 灰黄褐 外:10YR 5/2 灰黄褐	口縁部～胴部	10%	
	44	Ｋ19	Ⅲ	土師器	小型壺	5.2	3.0	11.2	9.4	内:5YR 5/6 明赤褐 外:2.5YR 5/6 明赤褐	口縁部～底部	90%	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
10	45	I16	Ⅲ	土師器	小型壺	－	3.3	－	(5.4)	内:10YR 4/4 赤褐 外:10YR 4/4 赤褐	体部	100%	
	46	K20 L19 20	－	土師器	坏	(13.3)	－	(13.8)	4.6	内:10YR 6/3 にぶい黄橙色 外:7.5YR 6/3 にぶい褐色	口縁部～底部	40%	
	47	K19	－	土師器	坏	(14.0)	－	(14.6)	4.5	内:7.5YR 4/3 にぶい黄褐 外:7.5YR 4/3 にぶい黄褐	口縁部～底部	50%	
	48	J19	－	土師器	坏	(12.0)	－	－	(4.4)	内:2.5Y 4/1 黄灰 外:2.5Y 4/1 黄灰	口縁部～体下部	10%	
	49	K19	－	土師器	坏	(11.6)	－	－	(4.0)	内:7.5YR 6/3 にぶい褐 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	口縁部～体下部	20%	
	50	K20 L19 20	－	土師器	坏	(10.0)	－	－	4.6	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:7.5YR 6/6 橙	口縁部～底部	80%	
	51	I17	Ⅲ	土師器	坏	(12.2)	－	－	4.0	内:10YR 1.7/1 黒 外:10YR 1.7/1 黒	口縁部～底部	30%	黒色
	52	I16	Ⅲ	土師器	坏	11.8	－	－	4.0	内:2.5YR 4/6 赤褐 外:2.5YR 3/4 暗赤褐	口縁部～底部	70%	赤色
	53	I17	Ⅲ	土師器	坏	12.1	－	－	4.1	内:10YR 1.7/1 黒 外:10YR 1.7/1 黒	口縁部～底部	60%	黒色
	54	I16	－	土師器	坏	(11.2)	－	(12.4)	5.5	内:5Y 6/2 灰オリーブ 外:5Y 6/2 灰オリーブ	口縁部～底部	20%	
	55	H16	－	土師器	坏	(10.7)	5.8	－	3.8	内:5YR 5.5/6 橙～明赤褐 外:5YR 5.5/6 橙～明赤褐	口縁部～底部	20%	
	56	H15	Ⅲ	土師器	坏	9.4	－	－	2.7	内:7.5YR 5/3 にぶい褐 外:10YR 4/2 灰黄褐		完形	
11	57	K19	－	土師器 (手捏ね)	坏	4.7	3.1	－	2.7	内:7.5YR 5/6 明褐 外:7.5YR 5/6 明褐	口縁部～底部	10%	
	58	K20 L19 20	－	土師器 (手捏ね)	坏	7.3	5.4	－	3.5	内:10YR 5/6 黄褐 外:10YR 3/2 黒褐		完形	
	59	J19	Ⅲ	土師器	高坏	－	－	－	(5.45)	内:5YR 4.5/3 にぶい赤褐 外:5YR 4.5/3 にぶい赤褐	坏底部	50%	
	60	H17	Ⅲ	土師器	高坏	－	－	－	(3.60)	内:10YR 4.5/3 にぶい黄褐 外:5YR 4.5/6 明赤褐～赤褐	坏底部	40%	
	61	I17	Ⅱ	土師器	甕	(13.8)	－	－	(6.2)	内:10YR 6/4 にぶい黄橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部	40%	
	62	I17	Ⅲ	土師器	甕	(19.2)	－	－	(9.6)	内:7.5YR 5/3 にぶい褐 外:5YR 5/4 にぶい赤褐	口縁部	20%	
	63	G14	Ⅲ	土師器	壷	(13.2)	－	－	(6.4)	内:10YR 4/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/4 にぶい黄褐	口縁部	30%	
	64	K19	－	土師器	甕	－	－	－	(6.5)	内:7.5YR 4/3 褐 外:7.5YR 4/3 褐	口縁部	破片	
	65	J18	－	土師器	甕	－	－	－	(8.3)	内:7.5YR 6/1 褐灰 外:7.5YR 4/1 褐灰	口縁部	破片	
	66	K20 L19 20	－	土師器	坏	(13.7)	(9.1)	－	4.3	内:7.5YR 5/6 明褐 外:7.5YR 5/6 明褐	口縁部～底部	20%	
	67	K20 L19 20	－	土師器	坏	(13.3)	－	－	4.6	内:5YR 5/3 にぶい赤褐 外:5YR 5/3 にぶい赤褐	口縁部～底部	20%	
	68	K20 L19 20	－	土師器	坏	(14.6)	－	－	5.5	内:7.5YR 4/6 褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁部～底部	30%	
	69	H15	Ⅲ	土師器	坏	－	－	－	(2.5)	内:5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	底部	100%	
	70	H15	Ⅲ	土師器	清郷甕	－	－	－	(4.8)	内:7.5YR 4/4 褐 外:7.5YR 4/4 褐	口縁部	破片	
	71	H15	－	土師器	清郷甕	－	－	－	(7.0)	内:7.5YR 4/3 褐 外:7.5YR 4/3 褐	口縁部	破片	
	72	K19	－	土師器	清郷甕	－	－	－	(6.2)	内:7.5YR 4/4 褐 外:7.5YR 4/4 褐	口縁部	破片	
12	73	J19	旧河川 堆積層	須恵器	坏蓋	(10.4)	－	(10.8)	3.6	内:5Y 5/1 灰 外:N 5/0 灰	口縁部～天井部	20%	
	74	H15	Ⅲ	須恵器	坏蓋	－	－	－	(2.3)	内:5Y 6/1 灰 外:N 4/ 灰	天井部	100%	
	75	H16	Ⅲ	須恵器	坏身	10.8	－	13.0	5.1	内:N 5/ 灰 外:N 4/ 灰		完形	
	76	H14 15	Ⅲ	須恵器	坏身	12.8	－	15.2	5.5	内:N 5/0 灰 外:N 5/0 灰	口縁部～底部	90%	
	77	I17	Ⅲ	須恵器	坏身	10.2	－	12.4	4.2	内:N 7/ 灰白 外:N 6/ 灰	口縁部～底部	90%	
	78	K19	－	須恵器	坏身	8.5	－	10.7	2.9	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部～底部	60%	
	79	I17	Ⅲ	須恵器	坏身	9.8	－	12.4	3.4	内:5P 5/1 紫灰 外:5P 5/1 紫灰	口縁部～底部	60%	
	80	H16	Ⅲ	須恵器	高坏	(14.7)	－	－	(4.2)	内:N 8/ 灰白 外:N 6/ 灰	口縁部～底部	30%	
	81	J19	旧河川 堆積層	須恵器	有台坏	17.0	－	－	5.4	内:2.5Y 7/1 灰白 外:2.5Y 7/1 灰白	口縁部～底部	90%	
	82	K19	Ⅲ	須恵器	高坏	－	－	－	(8.7)	N 7/ 灰白	体部～脚部	40%	
	83	K19	Ⅲ	須恵器	脚付 長頸壺	－	－	14.5	(9.4)	内:N 7/ 灰白 外:N 7/ 灰白	胴部	100%	
	84	I18	Ⅲ	須恵器	器台	－	－	－	(7.1)	内:10YR 5/1 褐灰 外:5YR 4/2 灰褐	脚部	破片	
	85	J19	Ⅲ	須恵器	甕	(23.5)	－	－	(7.6)	内:N 7/ 灰白 外:N 7/ 灰白	口縁部	20%	
	86	I17	－	灰釉陶器	碗	－	－	－	(2.7)	内:2.5Y 7/1 灰白 外:2.5Y 7/1 灰白	底部	20%	
	87	K20 L19 20	－	中世陶器	片口鉢	－	－	－	5.2	内:N 6/ 灰 外:N 6/ 灰	口縁部	破片	
13	88	J19	旧河川 堆積層	貿易陶磁	青白磁 梅瓶	－	－	－	－	内:10Y 7/1 灰白 外:10Y 7/1 灰白	胴部	破片	
	89	－	－	貿易陶磁	青磁碗	－	－	－	－	内:7.5Y 5/3 灰オリーブ 外:7.5Y 5/3 灰オリーブ	口縁部	破片	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
13	90	－	－	貿易陶磁	青磁碗	－	－	－	－	内:10Y 6/2 オリーブ灰 外:10Y 6/2 オリーブ灰	口縁部	破片	
	91	－	－	貿易陶磁	青磁碗	－	－	－	－	内:10Y 7/2 灰白 外:10Y 7/2 灰白	口縁部	破片	
	92	－	－	貿易陶磁	白磁碗	－	－	－	－	内:10Y 7/1 灰白 外:10Y 7/1 灰白	底部	20%	
	93	－	－	貿易陶磁	青磁碗	－	－	－	－	内:7.5Y 4/3 灰オリーブ 外:7.5Y 4/3 灰オリーブ	底部	60%	
	94	－	－	貿易陶磁	青磁碗	－	－	－	－	内:10Y 6/2 オリーブ灰 外:10Y 6/2 オリーブ灰	底部	100%	
	95	Ｉ18	－	中世 施釉陶器	丸皿 （甕皿）	－	－	－	－	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	口縁部	破片	
	96	Ｉ18	－	中世 施釉陶器	卸皿	－	－	－	－	内:7.5Y 6/3 オリーブ 外:7.5Y 6/3 オリーブ	口縁部	破片	
	97	Ｈ14	－	中世 施釉陶器	端反皿	－	－	－	2.4	内:7.5Y 7/2 灰白 外:7.5Y 7/2 灰白	口縁部	破片	
	98	Ｋ20	－	中世 施釉陶器	縁釉小皿	(10.4)	－	－	(2.50)	内:7.5Y 6/3 オリーブ黄 外:7.5Y 6/3 オリーブ黄	口縁部～体部	10%	
	99	Ｊ19	－	中世 施釉陶器	天目茶碗	(11.6)	－	－	(4.3)	内:10YR 1.7/1 黒 外:10YR 1.7/1 黒	口縁部	10%	
	100	Ｊ18	旧河川 堆積層	中世 施釉陶器	擂鉢	－	－	－	(2.2)	内:7.5YR 2/1 黒 外:7.5YR 2/3 極暗褐	口縁部	破片	
	101	Ｉ18	旧河川 堆積層	中世陶器	片口鉢	－	－	－	(4.8)	内:5YR 4/4 にぶい赤褐 外:5YR 5/6 明赤褐	口縁部	破片	
	102	Ｋ19	－	土師質 土器	かわらけ	11.0	－	－	2.8	内:5YR 7/4 にぶい橙 外:5YR 7/4 にぶい橙	口縁部～底部	60%	
	103	Ｋ19	－	土師質 土器	かわらけ	(8.0)	－	－	2.3	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	口縁部～底部	10%	
	104	Ｋ20 Ｌ19 20	－	土師質 土器	かわらけ	(9.0)	(4.1)	－	2.6	内:5YR 8/4 淡橙 外:5YR 8/4 淡橙	口縁部～高台	20%	
	105	Ｊ18	Ⅲ	土師質 土器	かわらけ	10.0	－	－	2.4	内:5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	口縁部～底部	90%	
	106	Ｋ19	－	近世 施釉陶器	反碗	(9.8)	－	－	6.3	内:5Y 7/2 灰白 外:7.5Y 7/2 灰白	口縁部～底部	20%	
	107	－	トレンチＣ	近世 施釉陶器	小杯	(4.8)	－	－	2.8	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	口縁部～底部	50%	
	108	Ｊ19	－	近世 施釉陶器	小杯	4.6	－	－	2.8	内:7.5Y 7/1 灰白 外:7.5Y 7/1 灰白		完形	
	109	－	排水溝	近世 施釉陶器	小杯	(5.0)	－	－	2.4	内:10YR 7/4 にぶい黄橙 外:10YR 7/4 にぶい黄橙	口縁部～底部	50%	
	110	－	排水溝	近世 施釉陶器	小杯	3.8	2.3	－	2.5	内:5Y 6/2 灰オリーブ 外:5Y 6/2 灰オリーブ		完形	
	111	－	排水溝	近世 施釉陶器	小杯	(7.0)	－	－	3.2	内:10YR 2/3 黒褐 外:10YR 2/3 黒褐	口縁部～底部	30%	
	112	－	トレンチ内	近世 施釉陶器	反皿	(12.4)	－	－	2.7	内:5Y 7/3 浅黄 外:5Y 7/3 浅黄	口縁部～底部	20%	
	113	Ｊ19	－	近世 施釉陶器	丸皿	11.0	－	－	2.3	内:5Y 4/2 灰オリーブ 外:5Y 4/2 灰オリーブ		完形	
	114	Ｋ20	－	近世 施釉陶器	丸皿	(10.2)	－	－	2.6	内:5YR 2/2 黒褐 外:5YR 2/2 黒褐	口縁部～底部	20%	
	115	Ｋ19	－	近世 施釉陶器	丸皿	7.3	4.4	－	1.4	内:7.5Y 8/2 灰白 外:7.5Y 8/2 灰白	口縁部～底部	80%	
	116	Ｊ19	旧河川 堆積層	近世 施釉陶器	仏餉器	(7.4)	－	－	(3.5)	内:5Y 6/3 オリーブ黄 外:5Y 6/3 オリーブ黄	口縁部～胴部	50%	
	117	Ｊ19	旧河川 堆積層	近世 施釉陶器	徳利	－	－	－	(8.7)	内:5Y 7/2 灰白 外:5Y 7/3 浅黄	頸部	70%	
	118	Ｉ18	旧河川 堆積層	近世 施釉陶器	徳利	－	4.4	－	(9.8)	外:2.5Y 7/6 明黄褐	頸部～底部	100%	
14	119	Ｊ19	Ⅲ	磁器 染付	蓋	9.6	－	－	3.1	内:10Y 8/1 灰白 外:10Y 8/1 灰白	口縁部～底部	80%	
	120	Ｉ18	－	磁器 染付	筒形碗	(7.4)	－	－	6.1	内:2.5GY 7/1 明オリーブ灰 外:2.5GY 7/1 明オリーブ灰	口縁部～底部	30%	
	121	－	排水溝	磁器 染付	筒形碗	(7.4)	－	－	6.05	内:7.5GY 8/1 明緑灰 外:7.5GY 8/1 明緑灰	口縁部～底部	30%	
	122	－	旧河川 堆積層	磁器 染付	筒形碗	(6.9)	－	－	6.5	内:7.5Y 7/1 灰白 外:10Y 7/2 灰白	口縁部～底部	40%	
	123	－	旧河川 堆積層	磁器 染付	端反碗	10.6	－	－	6.1	内:5B 7/1 明青灰 外:5B 7/1 明青灰	口縁部～底部	70%	
	124	Ｉ18	－	磁器 染付	広東碗	(11.2)	－	－	6.2	内:10Y 8/1 灰白 外:10Y 8/1 灰白	口縁部～底部	30%	
	125	Ｋ20	－	磁器 染付	蕎麦猪口	8.4	－	－	6.8	内:N 8/ 灰白 外:N 8/ 灰白	口縁部～底部	50%	
	126	Ｊ19	Ⅲ	磁器 染付	徳利	1.6	－	(5.4)	(10.2)	内:10YR 8/1 灰白 外:N 8/ 灰白	口縁部～体部	70%	
	127	Ｊ19	旧河川 堆積層	磁器 染付	仏飯器	－	3.6	－	(5.1)	内:2.5GY 7/1 明オリーブ灰 外:2.5GY 7/1 明オリーブ灰	口縁部～台部	70%	
	128	Ｈ14	－	瓦	平瓦	－	－	－	1.8	内:7.5Y 6/1 灰 外:7.5Y 6/1 灰		破片	
	129	Ｈ16	－	瓦	平瓦	－	－	－	1.3	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰		破片	
	130	表採	－	土製品	土錘	全長 5.4	孔径 0.4	1.7	質量 14.1g	7.5YR 5/6 明褐		完形	

瓦・土製品　128・129は平瓦の破片である。128にはタタキ痕、129の内面には布目が残る。130は土錘である。

（２）木製品（第15～22図）

農耕土木具　１は平鍬の直柄鍬の身である。全体的に摩滅が進んでいるが、鍬先約10cmに刃を装着した痕跡がわずかに窪みとして残っている。

服飾具　２～８は下駄で、近世の製品とみられる。２・４～８は一木造りの連歯下駄である。４・５は全長13cm前後の小型品である。歯の下部はいずれも使用による摩滅が顕著にみられる。９はかんざしである。かなり流磨が激しく、表面の塗りの有無などは不明である。

容器　10～44は漆椀及び蓋で、近世の製品とみられる。10～13は蓋で、10・11は蒔絵と漆による蔓草文が描かれる。14～44は漆椀である。14～18はやや浅い形態をなし、三つ柏紋などの家紋や蔓草文を朱漆によって描く。19はやや箱形となる器形で、高台内には丸に一つ星一文字紋が朱で入れられる。20の高台内にも朱による文字か記号が書かれるが、判読できない。21は腰が張らずに立ち上がり、高台を削り出す形態の椀である。体部下半はいわゆるかつら目に仕上げられ、その部分は黒下地のみとなる。内外面は朱漆による鋸歯文状の文様が描かれる。23は丸に三階松紋、24は丸に桔梗紋が体部外面に朱漆によって描かれる。26・27・29・31は無文であるが、高台が高い特徴を持つもので、近世でも古い段階の製品とみられる。30・32～39は無文の漆椀で、30・32・33はやや深め、それ以外は浅い形態となる。37の高台内には判読不明の記号かと思われるものが書かれる。44は浅い皿状の製品であるが、あるいは蓋の可能性もある。45・46は内外面黒漆塗りされるが、底部に穿孔がみられる。47～49は合子である。47は筒状の体部中央と底部にかつら目がみられ、本来蓋が伴うため口縁部外面が削り込まれる。48・49は地点・層位とも隔たった箇所で出土しているが、形態と法量から同一個体あるいは同一の製品となる可能性が高い。50～52は皿で、いずれも木地のままである。51は内外面、52は底部内面に同心円状のかつら目が顕著に残る。

53～56は曲物等の蓋板である。56は組合せの蓋板で、中央に把手を取り付けた痕跡が残る。

食事具　58は折敷の底板である。端部中央に樺紐が残る。59は膳の側板である。欠損しているが、朱漆の上から黒漆を全面に塗布する。

土木材　60～66は杭である。流路の護岸で使用されたもので、いずれも丸太の先端を粗く尖らせた簡素なものである。

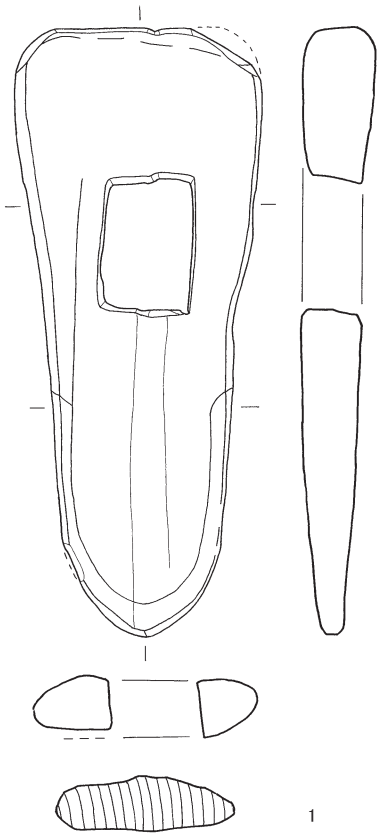
用途不明品　67・68は何らかの部材であろう。67は先端がホゾ状に加工され、中央にもホゾ穴がみられる。68は先端の角が落とされ、やはりホゾ穴がみられる。70は箱状に組み上がる製品の部材であろう。側面や底面には部材同士を固定する木釘が残存する。71も何らかの部材であるが、用途不明である。ホゾによって部材同士が組まれた状態で出土し、もう一方の端部は円形の穿孔が認められる。

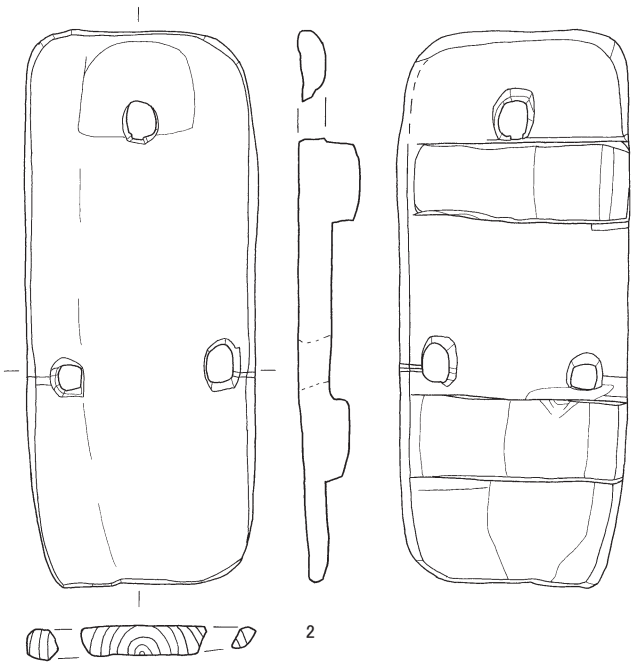
（３）石器・石製品（第23図）

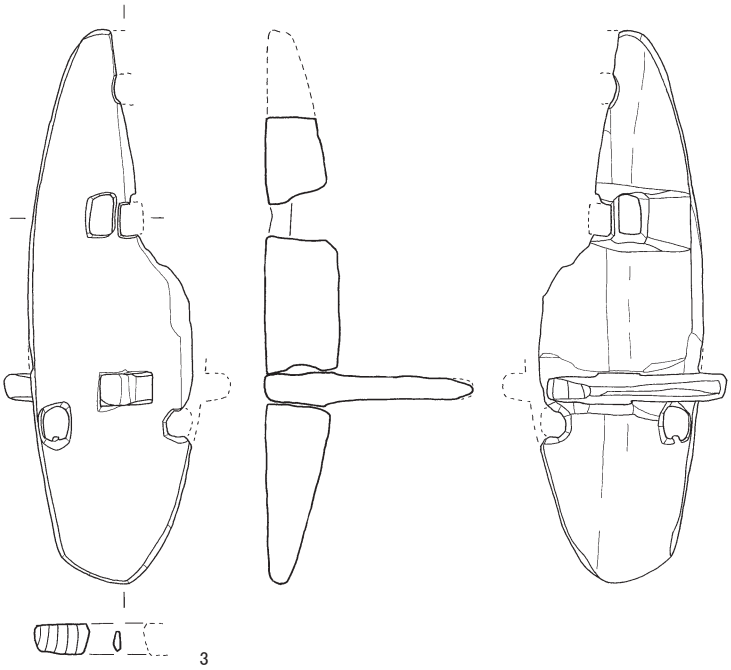
１・２は太型蛤刃の磨製石斧である。いずれも閃緑岩製で、敲打による成形後に刃先を中心に丁寧に磨かれる。２の刃先は使用による破損がみられる。３はガラス小玉である。青色を呈する。

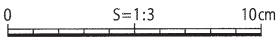
（４）金属製品（第23図）

４～６はいずれも宋銭である。４は太平元寶（976～983年鋳造）、５は景祐元寶（初鋳1034年）である。６は篆書体の治平元寶（初鋳1064年）である。７は□□元寶とみえるが、判読不明である。

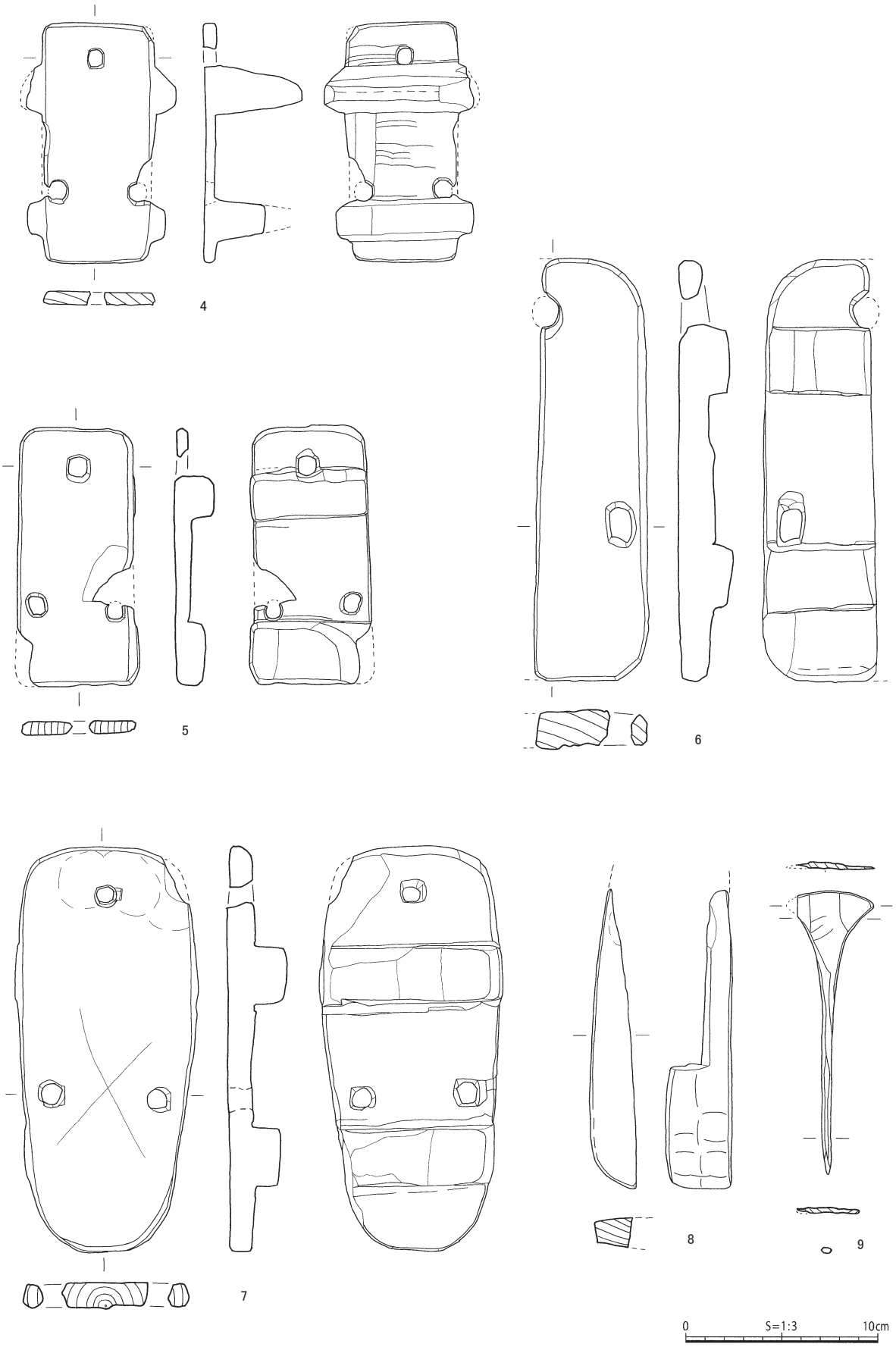




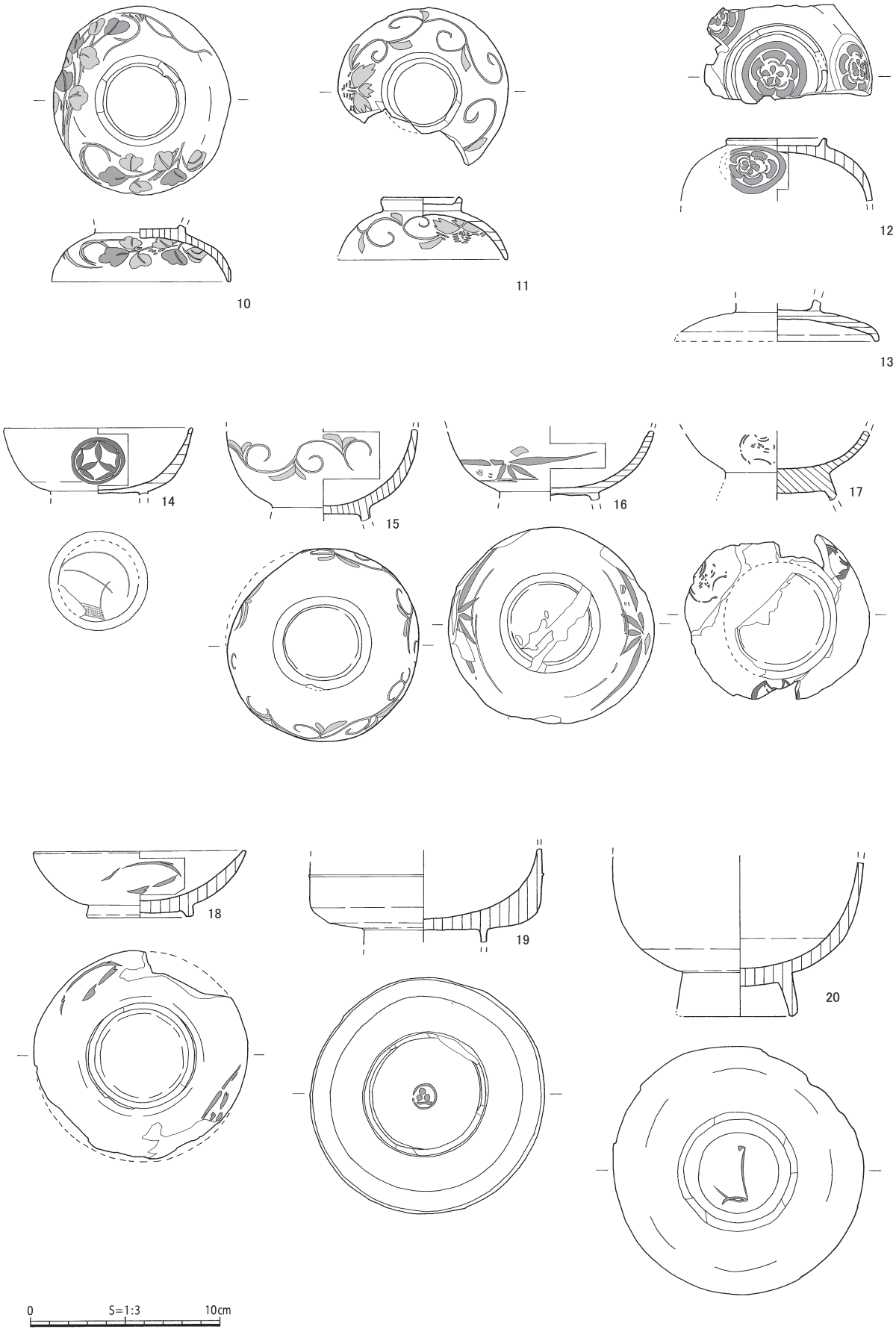




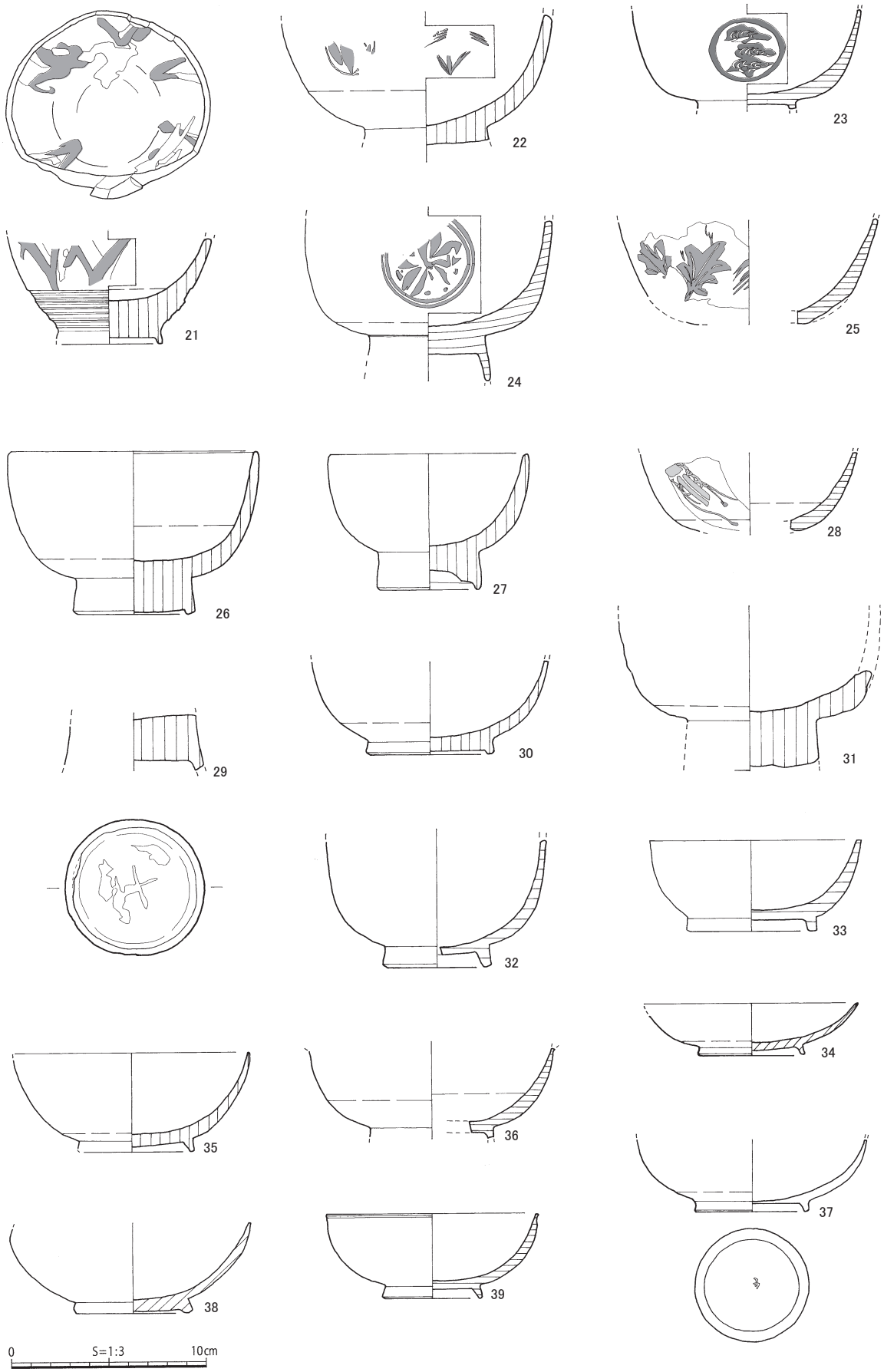
第15図　手乱遺跡出土遺物実測図９（木製品）



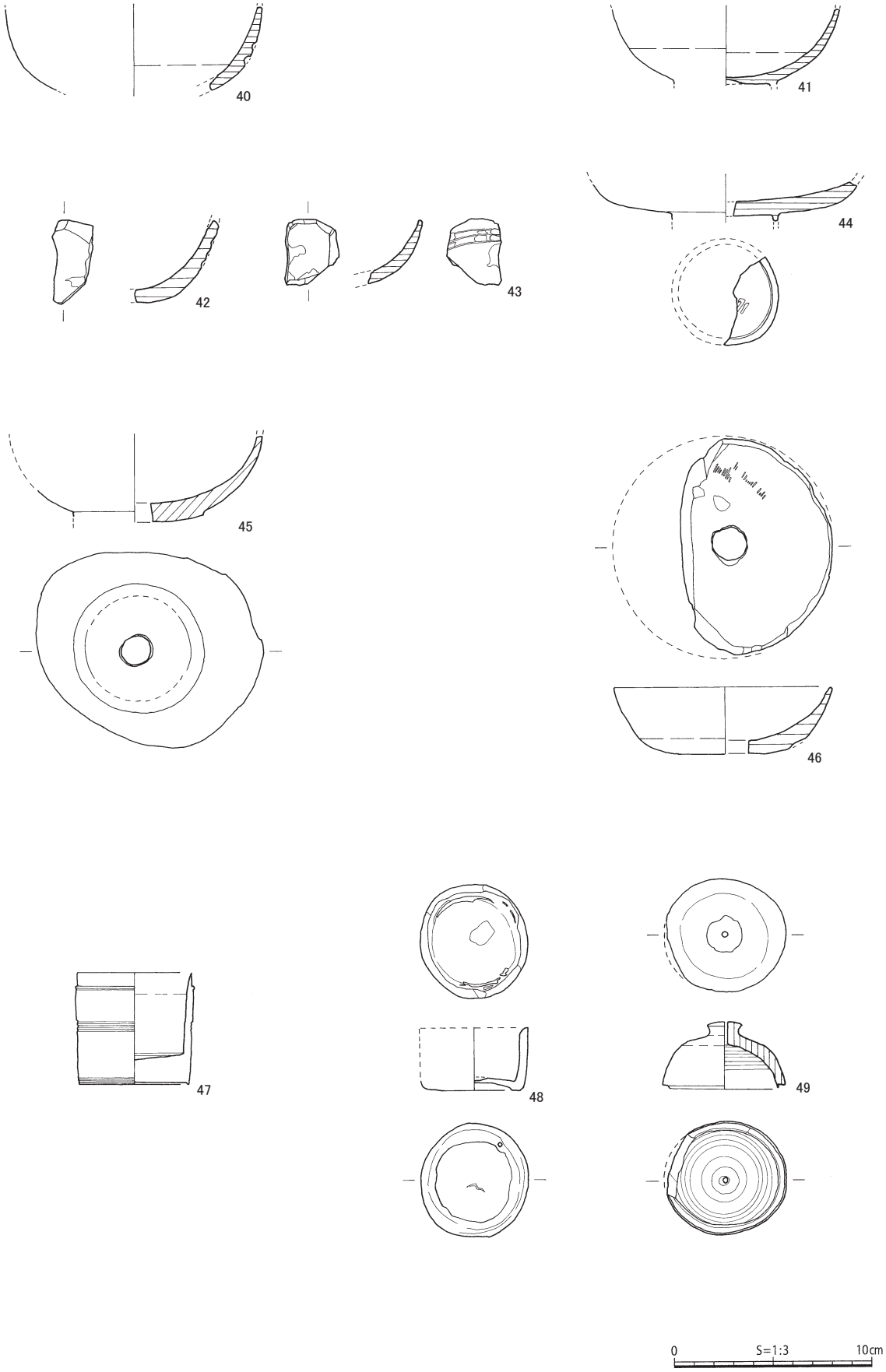
第16図　手乱遺跡出土遺物実測図10（木製品）



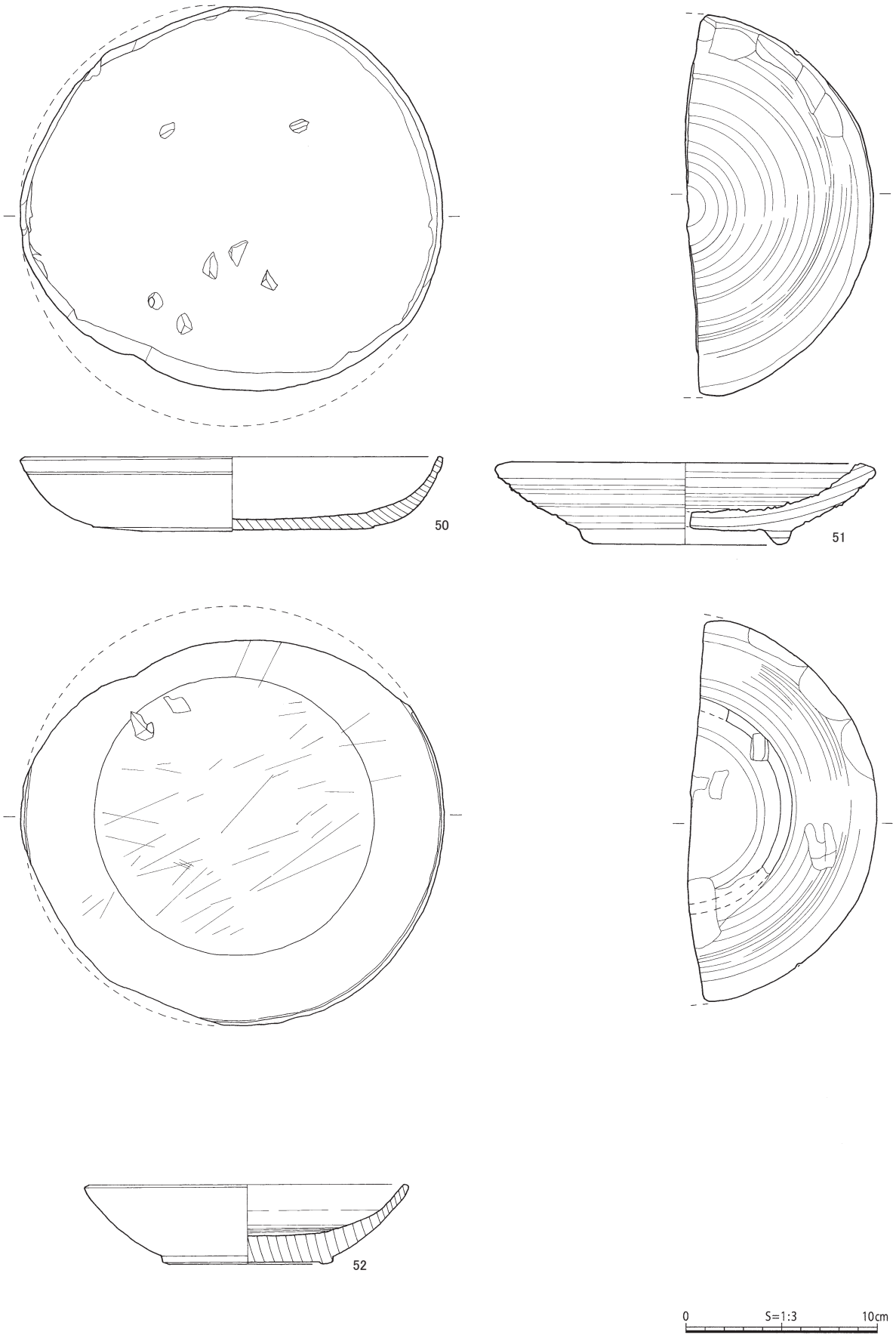
第17図　手乱遺跡出土遺物実測図11（木製品）



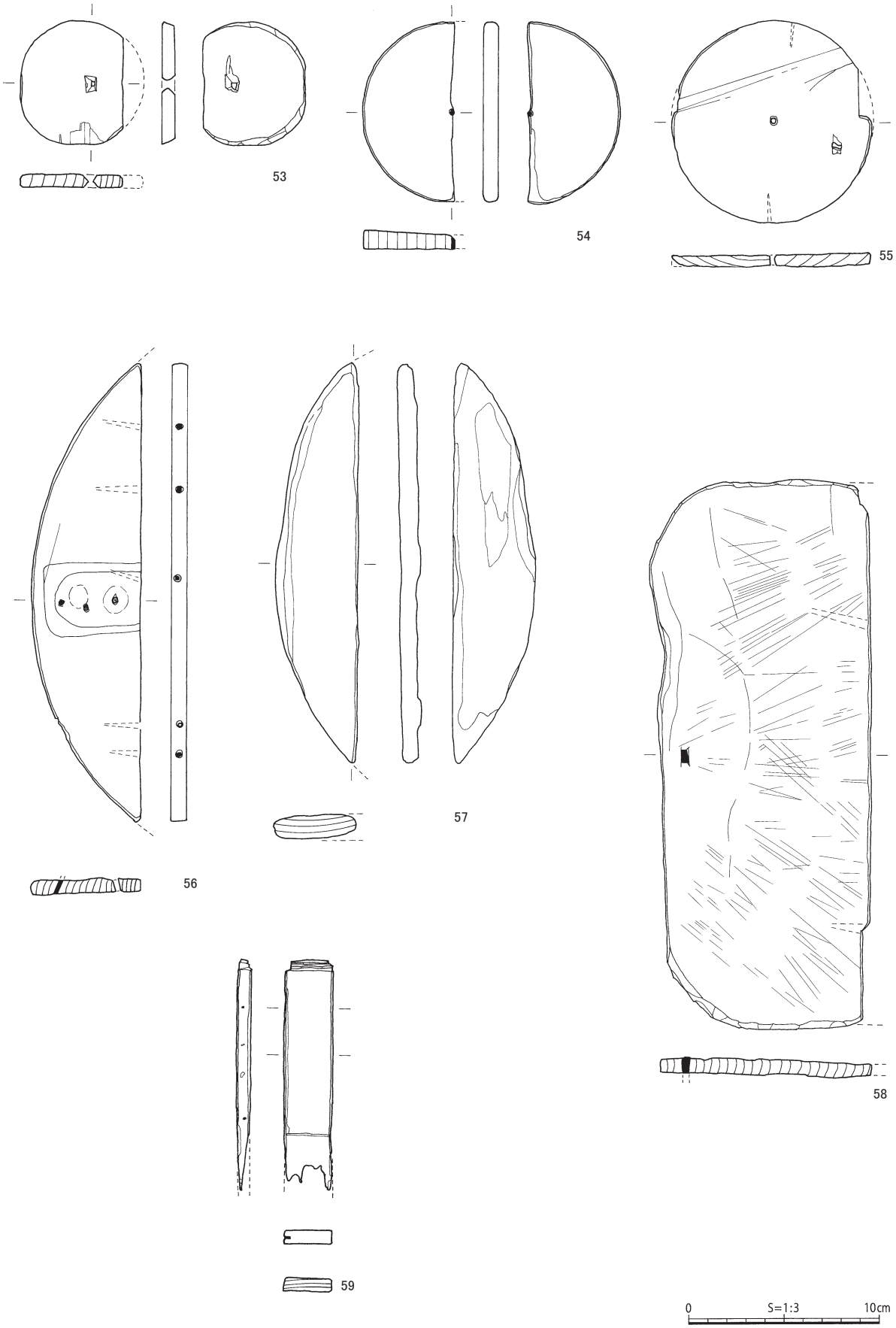
第18図　手乱遺跡出土遺物実測図12（木製品）



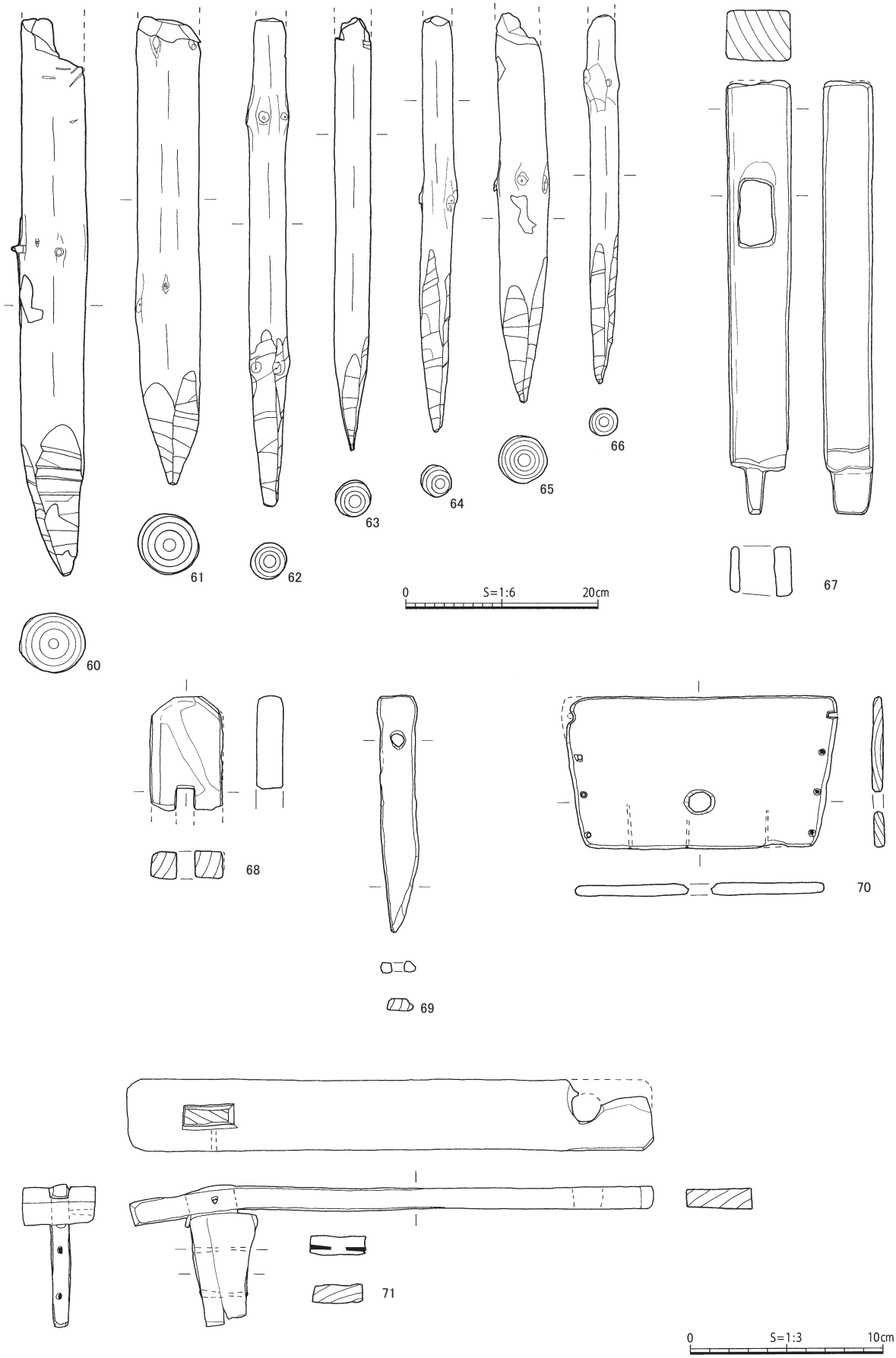
第19図　手乱遺跡出土遺物実測図13（木製品）



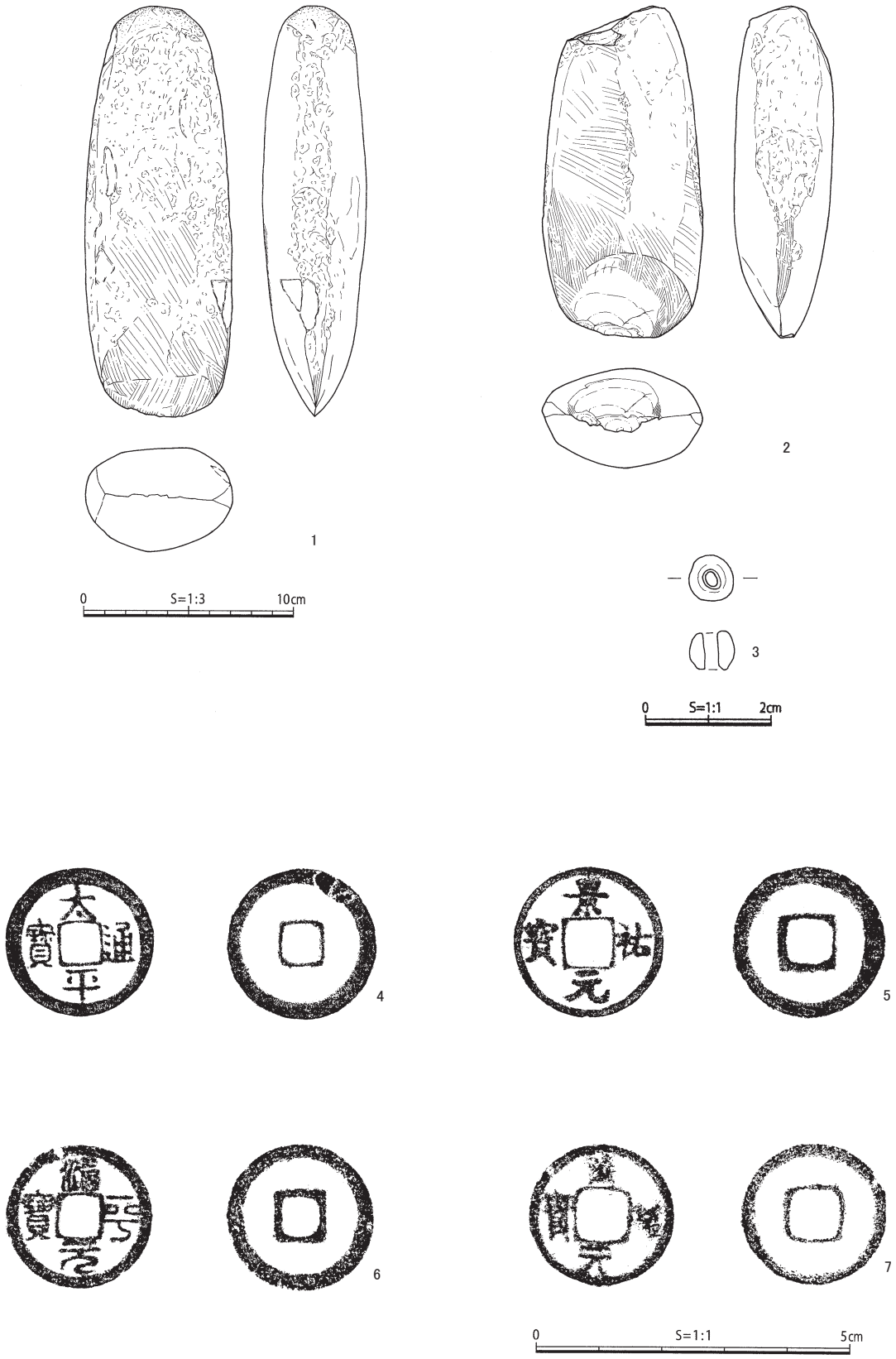
第20図　手乱遺跡出土遺物実測図14（木製品）



第21図　手乱遺跡出土遺物実測図15（木製品）



第22図　手乱遺跡出土遺物実測図16（木製品）



第23図　手乱遺跡出土遺物実測図17（石器・金属製品）

第３表　手乱遺跡出土木製品一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
15	1	Ｉ16	Ⅱ	農耕土木具	鍬	直柄鍬	平鍬	24.1	9.8	2.2	アカガシ 亜属	柾目	
	2	Ｉ17	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	22.2	9.3	2.5	ヒノキ	芯持材	
	3	Ｊ19	南部旧河川 堆積層	服飾具	履物	下駄	差歯 （歯・台）	21.7	6.3	8.2	クリ	柾目	
16	4	Ｉ18	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	12.5	7.8	5.1	クリ	割材	
	5	Ｊ19	南部旧河川 堆積層	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	13.6	6.4	1.5	ケヤキ	柾目	
	6	Ｉ16	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	22.1	(6.0)	2.8	スギ	板目	
	7	H16	排水溝	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.2	9.6	3.5	ヒノキ	芯持材	
	8	Ｉ17	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯	(15.6)	(2.4)	3.5	ツガ	板目	
	9	Ｌ20	Ⅱ	服飾具	髪飾	簪		15.0	(4.0)	0.3	散孔材	板目	
17	10	Ｉ16	Ⅱ	容器	蓋	挽物		(9.5)	(4.8)	(3.0)	トチノキ	縦木取り 柾目	内面・赤漆 外面・黒漆
	11	Ｉ18	Ⅱ	容器	蓋	挽物		(9.0)	4.3	3.3	ブナ	縦木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	12	Ｊ19	南部旧河川 堆積層	容器	蓋	挽物		10.1	5.4	(3.2)	トチノキ	横木取り 柾目	内外面・赤漆
	13	Ｉ17	Ⅱ	容器	蓋	挽物		(10.8)	4.5	2.2	散孔材	横木取り 板目	内外面・赤漆
	14	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		10.0	5.1	3.5	ブナ	横木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	15	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.1)	5.2	4.7	ブナ	横木取り 柾目	内面・赤漆 外面・黒漆
	16	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(11.1)	(5.3)	3.8	トチノキ	横木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	17	H15	Ⅱ	容器	椀	挽物		(9.7)	(6.6)	3.7	ケヤキ	横木取り 板目	内外面・赤漆
	18	K19	旧河川堆積層	容器	椀	挽物		11.2	5.7	3.5	ブナ	横木取り 柾目	内面・赤漆 外面・黒漆
	19	Ｊ19	南部旧河川 堆積層	容器	椀	挽物		(12.4)	(6.5)	(4.9)	トチノキ	横木取り 柾目	内外面・黒漆
	20	Ｊ18	Ⅱ	容器	椀	挽物		(13.3)	6.4	(8.2)	ブナ	縦木取り 柾目	内外面・赤漆 高台内・黒漆
18	21	H16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.5)	5.5	(5.3)	ブナ	縦木取り 柾目	内外面・黒漆
	22	H16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(14.0)	(6.5)	(6.0)	ケヤキ	横木取り 柾目	内面・赤漆 外面・黒漆
	23	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(11.8)	(5.1)	(5.1)	トチノキ	縦木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	24	Ｉ18	Ⅱ	容器	椀	挽物		(12.7)	(6.5)	(8.3)	散孔材	縦木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	25	Ｉ18	旧河川堆積層	容器	椀	挽物		(13.6)	－	(5.4)	トチノキ	横木取り 板目	内外面・黒漆
	26	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(13.0)	(6.4)	8.4	ケヤキ	横木取り 柾目	内面・赤褐色漆 外面・黒漆
	27	H15	表土（旧耕作土）	容器	椀	挽物		10.4	5.4	7.0	クリ	横木取り 柾目	内外面・黒漆
	28	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(11.1)	－	(4.0)	トチノキ	横木取り 板目	内面・赤漆 外面・灰漆
	29	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		－	7.2	(2.9)	ケヤキ	横木取り 柾目	内外面・黒漆
	30	H16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(12.3)	6.6	(4.8)	トチノキ	横木取り 柾目	内外面・赤漆
	31	Ｉ16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(13.5)	(7.0)	8.2	ケヤキ	横木取り 柾目	内面・赤漆 外面・黒漆
	32	Ｉ18	旧河川堆積層	容器	椀	挽物		(11.3)	5.6	(6.5)	トチノキ	横木取り 板目	内面・赤漆
	33	H14	表土 （旧耕作土）	容器	椀	挽物		10.9	6.8	4.7	ブナ	横木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	34	Ｉ16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.1)	5.6	2.7	ケヤキ	横木取り 追柾目	内外面・黒漆
	35	Ｉ16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(12.2)	6.1	(5.1)	ケヤキ	横木取り 柾目	内外面・黒漆
	36	Ｉ16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(13.2)	(6.4)	4.6	トチノキ	横木取り 板目	内外面・赤漆
	37	K19	南部旧河川 堆積層	容器	椀	挽物		(11.8)	5.9	(3.7)	トチノキ	横木取り 板目	内外面・赤漆
	38	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(12.3)	6.2	5.0	ケヤキ	横木取り 追柾目	内面・赤漆 外面・黒漆
	39	Ｊ18	Ⅱ	容器	椀	挽物		11.0	5.2	4.4	ブナ	縦木取り 板目	内外面・赤漆 高台内・黒漆 口縁玉緑
19	40	Ｊ18	Ⅱ	容器	椀	挽物		(13.0)	－	(4.1)	トチノキ	横木取り 板目	内外面・赤漆
	41	K19	南部旧河川 堆積層	容器	椀	挽物		(11.6)	5.2	(3.9)	トチノキ	横木取り 板目	内外面・赤漆
	42	H16	Ⅱ	容器	椀	挽物		－	－	(4.2)	トチノキ	破片 板目	内外面・黒漆
	43	H16	Ⅱ	容器	椀	挽物		－	－	(3.4)	トチノキ	破片	内外面・赤漆
	44	Ｌ19	南部旧河川 堆積層	容器	椀	挽物		(13.5)	(5.4)	(2.1)	トチノキ	横木取り 板目	内面・赤漆 外面・黒漆
	45	H16	Ⅱ	容器	椀	挽物		(12.8)	6.7	(4.3)	ケヤキ	横木取り 追柾目	内面・赤漆 外面・黒漆　底部穿孔

図	番号	遺構グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
19	46	Ｉ17	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.6)	-	3.4	散孔材	横木取り 板目	底部穿孔 内外面・黒漆
	47	Ｉ17	Ⅱ	容器	合子		身	5.8		5.7	散孔材	縦木取り 芯持材	内外面・黒漆
	48	Ｉ17	Ⅱ	容器	合子		身	(5.5)	4.7	3.2	タケ	横木取り 柾目	内外面・黒漆 49とセット？
	49	Ｊ19	南部旧河川 堆積層	容器	合子		蓋	6.3	1.8	3.5	ツバキ？	横木取り 柾目	内外面・黒漆 48とセット？
20	50	Ｉ16	Ⅱ	容器	皿	挽物		22.1	14.7	3.5	ケヤキ	横木取り 柾目	黒漆
	51	Ｉ18	Ⅱ	容器	皿	挽物		20.0	10.9	4.3	ケヤキ	横木取り 板目	
	52	Ｉ17	Ⅱ	容器	皿	挽物		12.0	9.0	4.2	ブナ	横木取り 柾目	
21	53	Ｉ18	Ⅱ	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		6.5	5.4	0.8	トウヒ	柾目	
	54	Ｉ17	旧河川堆積層	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		9.5	(4.8)	0.8	ネズコ	柾目	
	55	Ｈ15	表土 (旧耕作土)	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		10.6	10.6	0.7	ヒノキ	柾目	
	56	Ｉ16	Ⅱ	容器	底板(蓋板)	曲物蓋板		(24.1)	(5.8)	0.8	ニノキ	柾目	全面・黒漆
	57	Ｈ16	表土 (旧耕作土)	容器	底板(蓋板)	曲物底板		(20.9)	(4.3)	1.1	スギ	板目	
	58	Ｈ16	Ⅱ	食事具	折敷	底板		29.0	(11.8)	0.9	モミ	柾目	
	59	Ｉ18	Ⅱ	食事具	膳	側板		(12.1)	2.6	0.8	ヒノキ	板目	表面・黒漆
22	60	Ｈ16	－	土木材	杭			(58.9)	8.1	6.4	クロマツ	芯持材	
	61	Ｉ16	－	土木材	杭			(49.3)	6.9	6.5	アカマツ	芯持材	
	62	Ｊ18	－	土木材	杭			(51.6)	4.5	4.0	クロマツ	芯持材	
	63	―	－	土木材	杭			(45.8)	4.0	3.9	クロマツ	芯持材	
	64	―	－	土木材	杭			(43.8)	4.0	3.4	アカマツ	芯持材	
	65	Ｉ17	－	土木材	杭			(41.2)	6.0	5.1	アカマツ	芯持材	
	66	Ｉ18	－	土木材	杭			(39.0)	3.8	3.0	クロマツ	芯持材	
	67	Ｈ16	Ⅱ	用途不明	その他不明	その他不明		22.6	3.1	2.6	ヒノキ	柾目	
	68	Ｋ19	トレンチＣ	用途不明	その他不明	その他不明		(6.0)	3.8	1.5	アカガシ 亜属	柾目	
	69	Ｊ19	排水溝	用途不明	その他不明	その他不明		8.4	2.3	0.7	ヒノキ	柾目	
	70	Ｉ17	Ⅱ	用途不明	その他不明	四方転び		8.0	14.1	0.7	ツガ	柾目	
	71	Ｉ17	Ⅱ	用途不明	その他不明	その他不明		27.3	3.9	1.2	モミ	板目	

第４表　手乱遺跡出土石器一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	器種	計測値（cm）				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	質量(g)		
23	1	Ｉ18ＳＥ	Ⅲ	磨製石斧	15.8	7.7	4.7	830.0	閃緑岩	
	2	Ｊ18ＳＷ	Ⅲ	磨製石斧	19.6	7.0	4.9	1070.0	閃緑岩	
	3	－	－	ガラス小玉	0.75	0.75	0.65	0.5		穴径0.25×0.3　青紺色

第５表　手乱遺跡出土金属製品一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	種別	計測値（cm）	質量(g)	備考
23	4	Ｈ15ＳＷ	Ⅲ	銭貨	銭径2.4	2.87	太平通寳（976～983年鋳造）
	5	Ｈ17ＮＥ	Ⅲ	銭貨	銭径2.4	2.95	景祐元寳（初鋳1034年）
	6	Ｋ19ＳＷ	Ⅲ	銭貨	銭径2.3	3.65	治平元寳（篆書）（初鋳1064年）
	7	Ｈ15ＳＥ	Ⅲ	銭貨	銭径2.3	1.76	□□元寳

第５章　鶴喰広田遺跡の遺構と遺物

第１節　検出された遺構

（１）流路

Ｈ20調査区は北・中・南区の３地区に分割した調査を実施している（第24図）。いずれの調査区においても手乱遺跡と同様、河川による堆積層が確認されている。度重なる流路の変更に伴って堆積した基本土層Ⅱ層とⅢ層に相当する層位であるが、前章で述べたように流路の新旧を平面・断面から捉えることは不可能であった。Ｈ20調査区ではⅢ層を除去し基盤層となるⅣ層を検出すると、やや凹凸はあるものの、ほぼ平坦な面が表出し、調査区全体がⅣ層を掘り込む最古段階の時期の流路の川床であったと考えられる。西側に隣接するＨ７調査区ではこの時期の西側河岸が検出されているため、流路自体が西側に寄っていたのであろう。

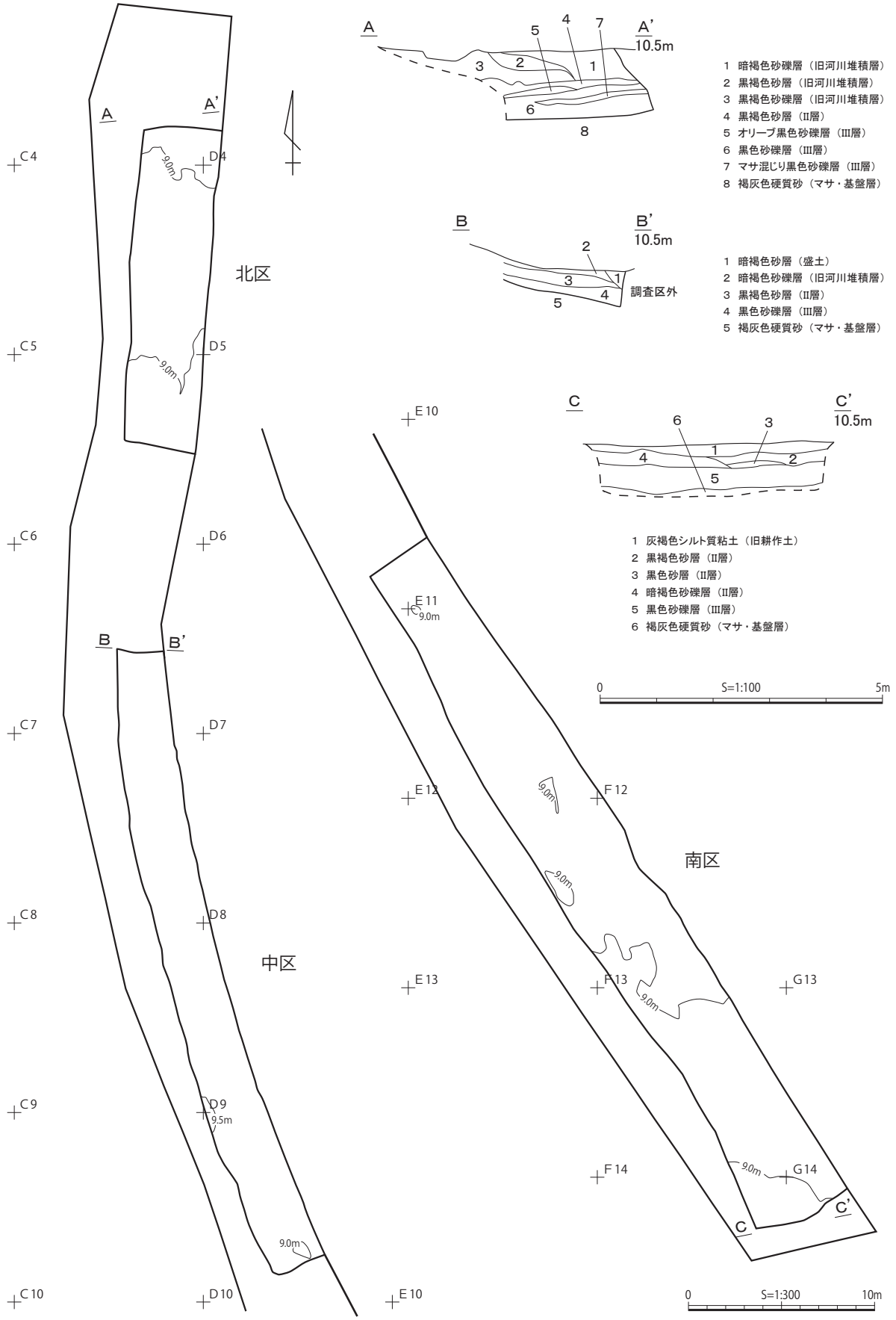
一方、Ｈ21調査区ではⅢ層を除去すると、Ⅳ層を削り込む東西方向に走る旧河道跡が３条確認された（第25図）。すべてが同時期の流路とは限らないが、鶴喰広田遺跡でみられる最古段階の旧河道が蛇行していた様子を反映するものと考えられる。いずれもⅣ層上面からの深さは30～50㎝程度であった。調査区中央Ｃ１グリッド南の流路２は幅１～５ｍ程度の小規模な流路であるが、その底面では古墳時代後期を中心とした時期の完形に近い土器がまとまって出土している（第26図）。穿孔された甕（第39図139）の存在などから、川辺における何らかの祭祀行為に伴う可能性がある。ただし、西端の第39図140～142のように弥生後期に遡る土器を含み、また出土レベルにもやや差があるため、流路によって運ばれた土器が二次的に集積した可能性もある。調査区北側Ｂ０～Ｃ０グリッドにかけての流路１と、南端Ｄ２～Ｄ３グリッドにかけての流路３はこれよりも大規模なものであり、位置関係から同時期に流れたとは考えにくいが、これら流路に堆積するⅢ層下層の遺物様相から、流路２と近い時期に流れていた流路と考えられる。

（２）杭列

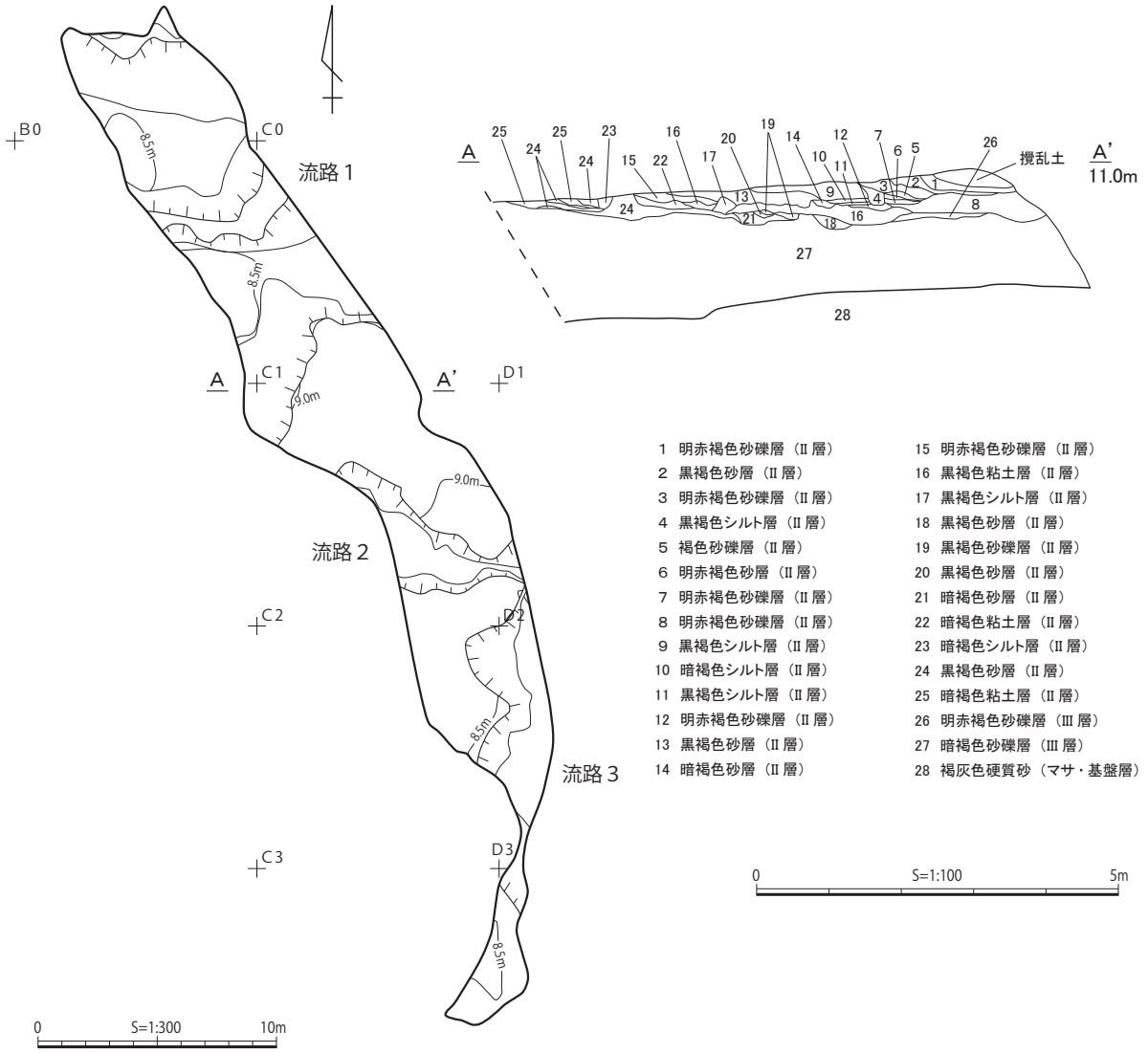
今回の鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区、Ｈ21調査区ともに多くの杭列が検出されている（第27図）。杭の設置された時期はⅢ層に打ち込まれた古い段階のものもあるが、散在的であり、列をなす形で設置される多くの杭はⅡ層堆積後に打ち込まれたものである。

Ｈ20調査区では各区で杭列の状況が異なる。北区では北西から南東にかけてきれいに列を成すのに対し、中区は南部のみとなり、南区は調査区を縦断する形で杭列が並ぶ様子が窺える。北・中区では基本土層Ⅱ層、Ⅲ層に相当する層位の上に旧河川の堆積層が確認される。これは手乱遺跡Ｈ20調査区で確認された近世より新しい時期の旧御殿川流路に関連するものと考えられ、これら杭列もそれに伴う可能性が高い。南区については旧河川堆積層が確認されないが、杭の様相から同じ性格の遺構とみられる。

Ｈ21調査区では調査区北端から西側にかけて弧状に杭列が並ぶ様子が窺える。調査区外で検出された杭は安全勾配をとった法面で検出されたものである。調査区中央付近にⅢ層に及ぶ杭もあるが、やはり散在的であり、列として認識することはできず、列状となるのはⅡ層堆積後に打ち込まれた杭である。Ｈ20調査区北・中区のような旧河川堆積層は明瞭でないが、やはり近世より新しい時期の旧河川に伴う杭列であり、弧状となった杭列が旧河川の西側河岸であった可能性が高い。



第24図　鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区全体図

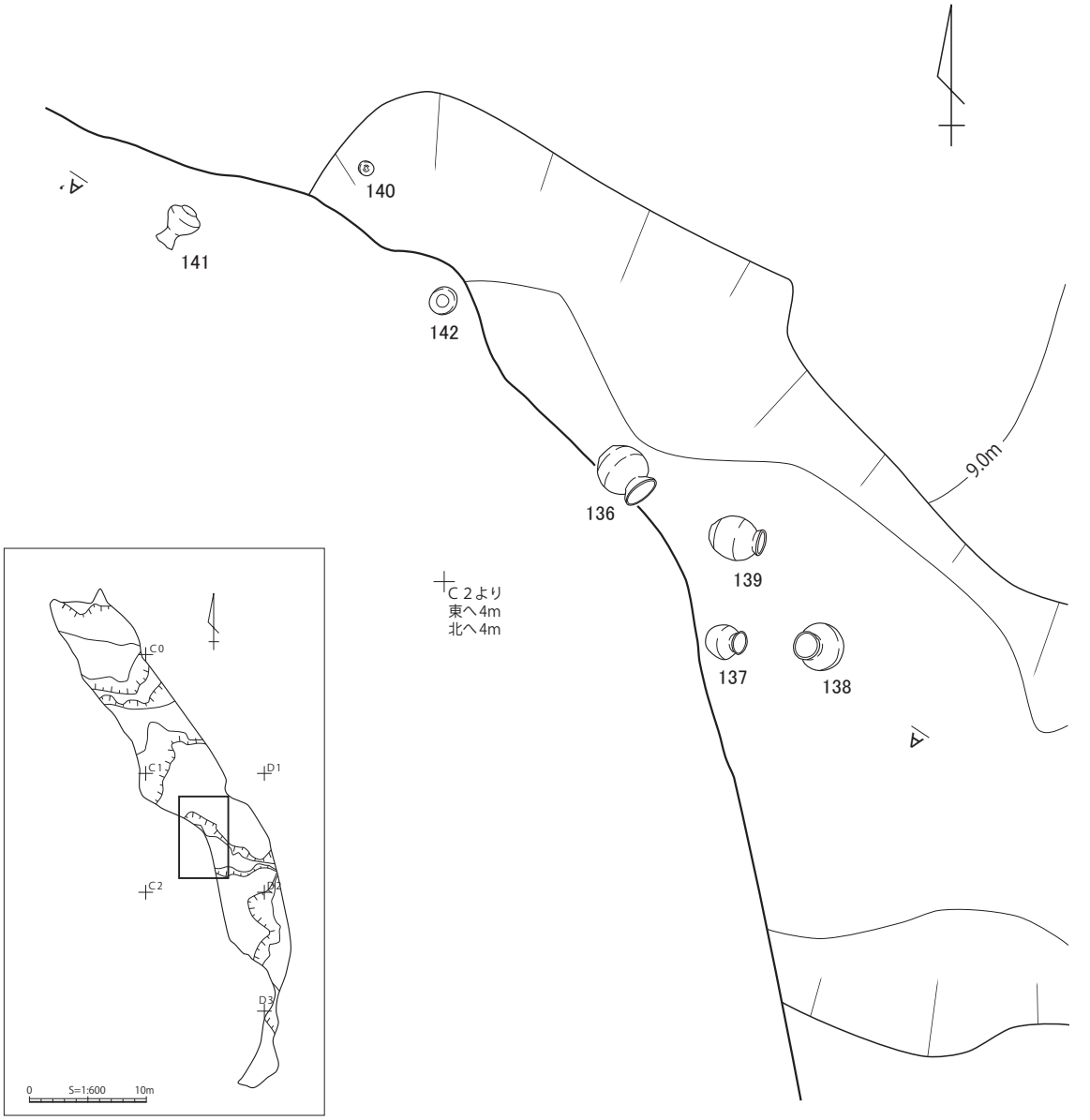


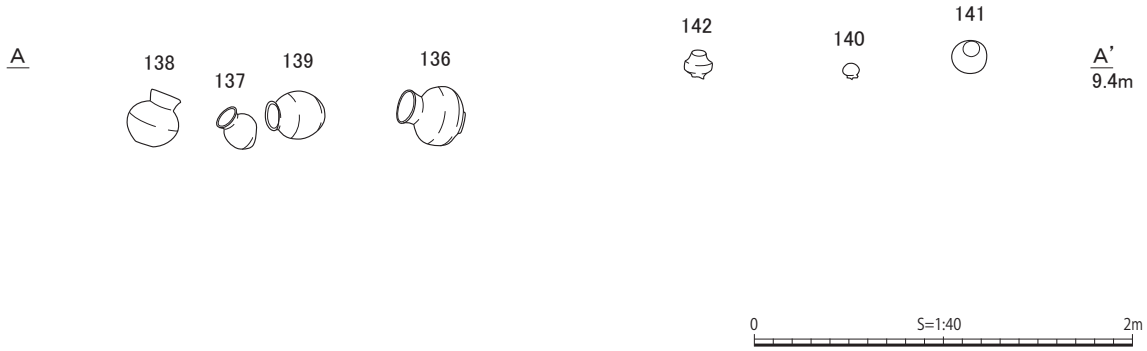
第25図　鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区全体図

第２節　出土遺物

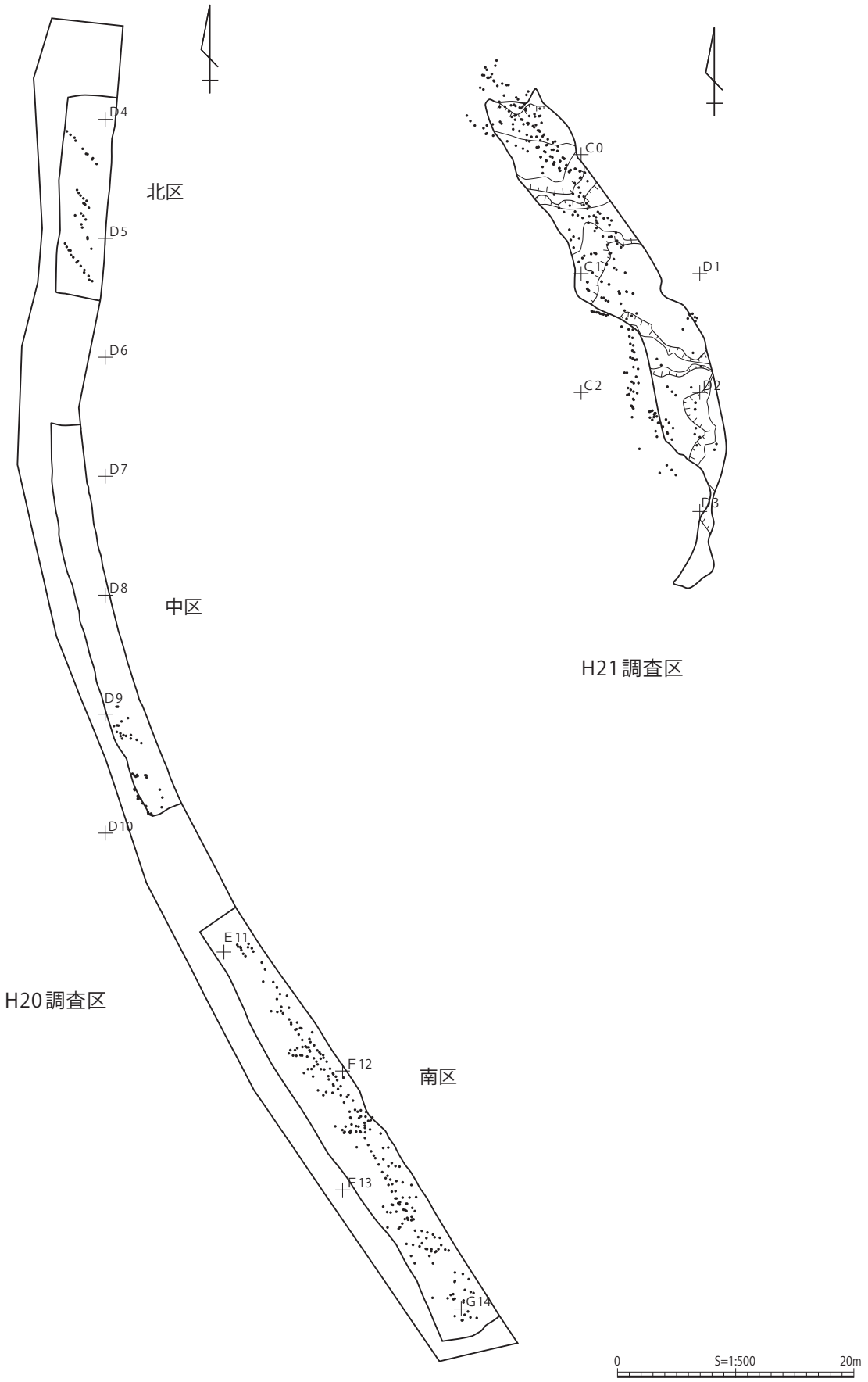
（１）土器・陶磁器（第28～46図）

縄文土器・弥生土器・土師器　１・２は縄文時代晩期～弥生時代前期初頭頃の深鉢である。１は口縁内外面に沈線が巡り、体部上部に穿孔がみられる。３は縄文時代中期前半、藤内式の深鉢とみられる。４～７は弥生中期中～後葉の壺口縁である。８は弥生中期後葉の小型の細頸壺で、肩部には焼成後穿孔がみられる。９～15は弥生後期後半の壺である。９・12は単純口縁壺で、内外面をミガキ調整し、櫛刺突による文様を施す。10・11は複合口縁壺、13は折返し口縁壺である。いずれも口縁外面に棒状浮文を貼付ける。11は口縁下部に３ヵ所の焼成前穿孔がある。16～25は古墳前期の壺口縁部で、16～23は複合口縁壺、24・25は折り返し口縁壺である。17～23は大廓様式とされる大型壺である。いずれも口縁外面下端が突出し、19・21は口縁端部内面に突帯が巡る。内外面はハケ調整が施されるが、22・23は内面をミガキ調整し、23は表面を黒色仕上げとする。22には焼成後穿孔がみられる。26～29は弥生中期中葉の壺底部である。26・27は底部に網代痕が残る。30・31・33～35は弥生後期～古墳前期、32は古墳中期の





第26図　H21調査区土器出土状況図



第27図　鶴喰広田遺跡杭検出状況図

壺底部である。32は体部下半に焼成後穿孔がみられ、34・35の底部には木葉痕が残る。36～41は古墳前期の高坏の坏部で、いずれも内面を丁寧にミガキ調整で仕上げる。36は口縁端部を屈曲させ、37は体部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。42・43は小型器台である。43の底部内面のミガキ調整は放射状となる。44～46は高坏の脚部である。古墳時代前期に位置づけられよう。47～56は弥生後期～古墳前期の台付甕である。いずれも内外面をハケ調整し、口縁端部外面には調整工具による刻みが入れられる。57～60はＳ字甕である。61は受口状口縁の甕である。62～67は台付甕の脚部で、63は弥生中期後葉、他は弥生後期～古墳前期のものであろう。内外面ともにハケ調整がなされるが、62はナデ調整となる。68・69は古墳時代中期の壺である。

71～75・77～84は古墳中～後期の小型壺で、77～84は体部が丸く口縁が開く形状となる古墳中期の小型壺である。71・73は外面全体を丁寧にミガキ調整する。72・75は厚手のつくりで、内外面ともにハケ調整される。74は底部に木葉痕がみられる。77～80の底部付近はヘラ削り調整で仕上げられる。76・85～87は鉢である。76は口縁部が直立し、85～87は外反する形態である。88・89は手捏ねの坏である。88は外面に輪積みが残る粗いつくりで、89は口縁を波状に整形している。90～103は古墳時代中～後期の坏である。90～94・97は駿豆型坏とされる内湾する口縁部、平底の坏である。底部に木葉痕が残り、91は木葉をヘラ描きする。95・96・98～103は須恵器模倣坏である。98～102は蓋の模倣坏で、底部外面はいずれもヘラ削りで仕上げられ、内面はミガキ調整される。99は赤色、101は黒色で内外面が処理されている。95・96・103は坏の模倣坏で、95・103は黒色、96は赤色で内面が処理される。104～116は古墳時代中～後期の高坏である。104～109・111の坏部は体部下半に稜を持ち、口縁は開く形態となる。坏部内面の調整は104がミガキ調整、105・109はハケ調整、他はナデ調整である。110は駿豆型高坏とされるもので、駿豆型坏と調整、胎土が類似する。111・112は坏部が須恵器坏の模倣坏となるものである。117～121は古墳時代中～後期の甕である。122は古墳時代前期の甕で、肩部外面を工具によるタタキで調整する。125～129は律令期の坏で箱形を呈する駿東型坏とされるものである。130は底部が厚い小皿、131は平底の坏である。132は駿東型の球胴型甕の口縁部である。133・134は古墳後期の甕である。133はほぼ球胴、134・135はやや長胴となり、133は体部下半に穿孔がみられる。136～142はＨ21調査区流路２で出土した土器である（第26図）。前節で述べたように近接して出土するが、時期的には隔たりがあり、二次的に集積した遺物を含む可能性が高い。136・137は駿東甕、137は同時期のやや小振りの甕である。136・137の底部には木葉が残り、いずれも体部外面に縦方向のミガキ調整が観察される。139は古墳後期の甕、140は古墳中期の小型壺である。139は体部中央に穿孔がみられる。141・142は弥生後期後半の壺である。141の体部中央及び下半には穿孔がみられる。

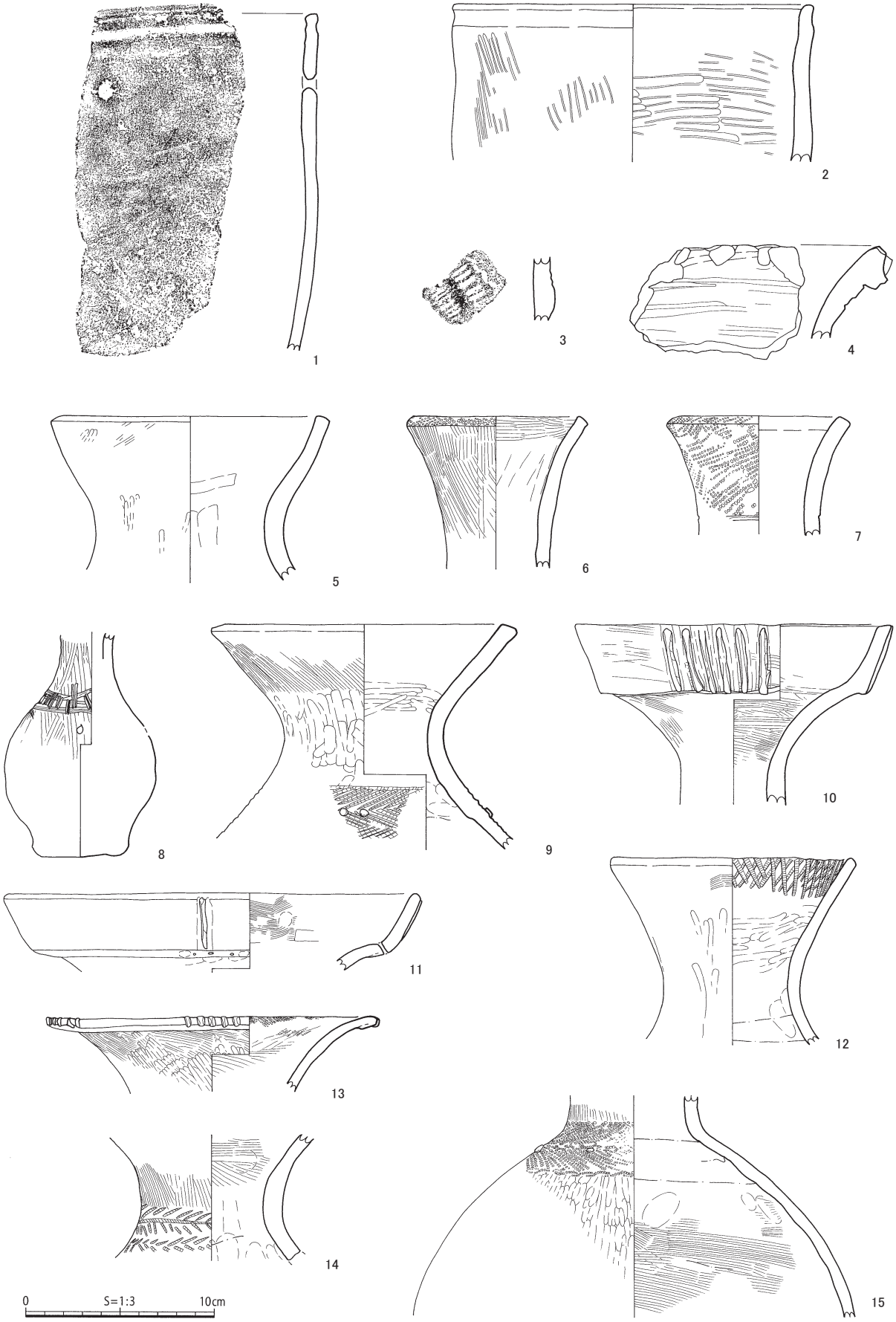
須恵器･灰釉陶器･山茶碗　143～152は蓋である。143はＭＴ15型式並行、147･152はＴＫ10型式並行、148はＴＫ43並行に位置づけられよう。149～151は小型化が顕著となる７世紀前～中葉の製品であろう。かえりのつく153・154の蓋は７世紀後半に位置づけられよう。155～157は８世紀代の製品である。156は口径24.8cmに復原される大型品である。158～164・168は坏身である。158はＴＫ10型式並行、159～161・163はＴＫ43型式並行に位置づけられよう。小型となる164は７世紀前葉のものであろう。168は８世紀の箱坏である。165・167・169は高坏の坏部である。170～176は大型甕の口縁である。170・171・174は波状文、175・176は櫛刺突による文様が口縁外面に施される。178・179は長頸壺の底部で、８世紀の製品であろう。180～189は灰釉陶器で、Ｏ53窯式並行期～百代寺窯式並行期の製品である。いずれも東遠江～西駿河で生産されたものであろう。180・181は高台の高い深碗である。182～185・187・188は碗で、182・185は底部内面に灰釉が漬け掛けされる。Ｏ53窯式並行の製品であろう。186・189は小碗である。高台内には糸切り痕が残り、189は高台に沿ってつけられた爪痕が認められる。190・191は片口鉢、192は小碗である。いずれも12世紀前～中葉に東遠江の山茶碗窯で生産された製品であろう。

陶器・土師質土器・磁器　193～206は貿易陶磁である。193・194は青白磁梅瓶である。195・197は白磁碗で、12世紀後葉頃の端反碗であろう。196は白磁皿底部で、口兀皿である。198～201は青磁碗である。198・199は青磁連弁文碗Ｂ１類である。200は無文の端反碗で青磁碗Ｄ類に分類される。201は体部内面にヘラ描きの劃花文が施される青磁碗Ａ類である。202は線描連弁文が施文される青磁連弁文折縁皿、203は青磁稜花皿である。204は青磁盤である。205・206は染付皿で、206は底部が碁笥底となる染付皿Ｃ群である。207・208・210～212・214・215は瀬戸美濃系施釉陶器である。207は灰釉平碗、208・211は縁釉小皿で、古瀬戸後Ⅳ期の製品であろう。212は大窯第４段階の志戸呂窯産の灰釉丸皿である。214･215は古瀬戸後期の卸皿である。216～223は常滑産の陶器である。216は壺、217～221は甕口縁で、13～14世紀代の製品である。222・223は15世紀代の片口鉢である。224～229はかわらけである。いずれも15世紀代のロクロ成形品で、底部には糸切痕が残る。225は口縁部の対面２ヵ所が打欠かれ、下に224が重ねられた状態で出土した。何らかの祭祀行為に使用された可能性が高い。

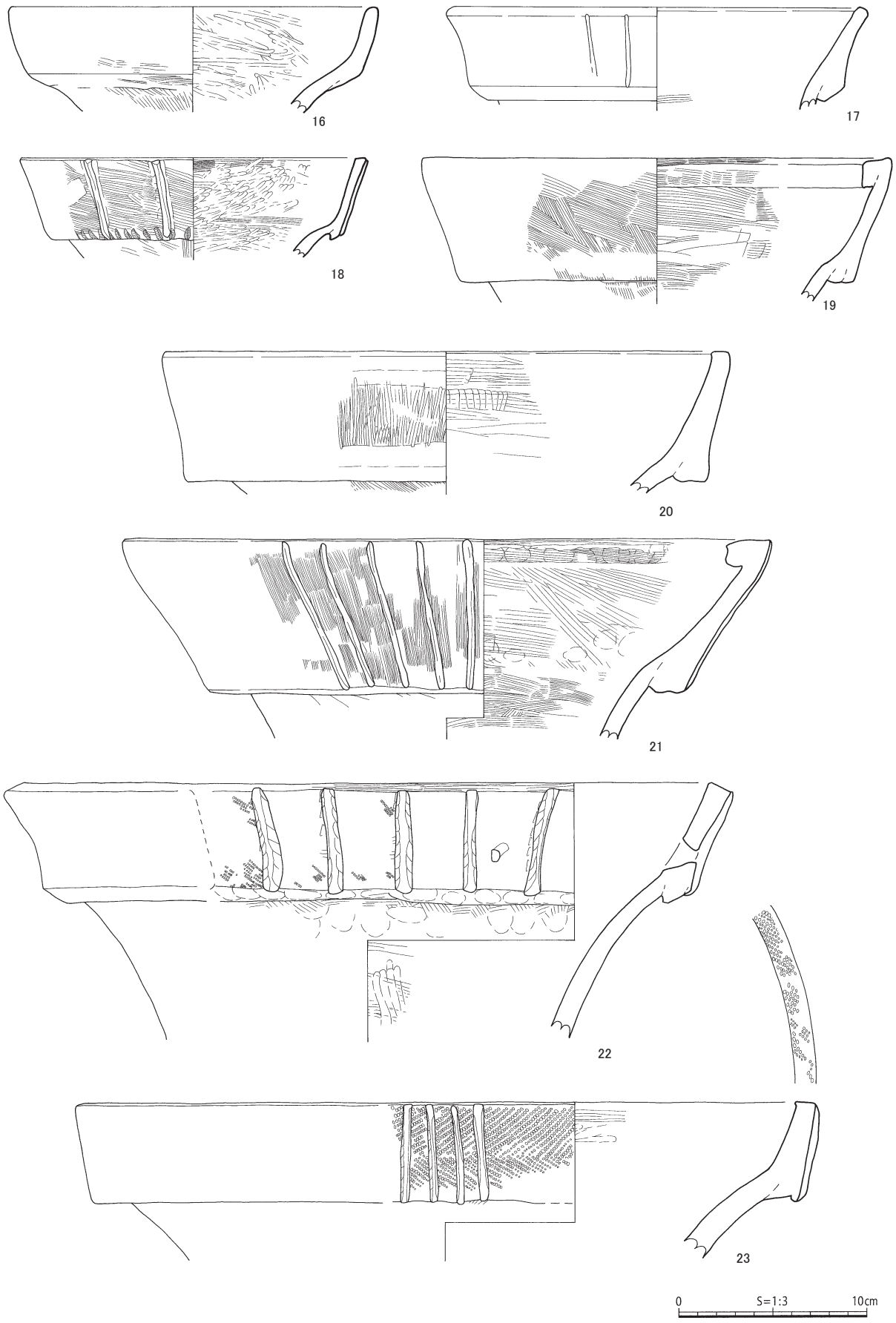
209・213・230～264・266は近世施釉陶器で、瀬戸美濃産の製品である。209・213は17世紀代の鉄釉耳付水注であろう。231･232は筒形碗､233は腰錆茶碗である。234～239は小杯である。240は志野皿で、17世紀前半の製品であろう。241は鉄釉小皿、242・243は灰釉小皿である。244は内面に鉄絵で笹が描かれる笹絵皿である。245・246は片口である。18世紀前半頃の製品であろう。247・248は鉄釉筒形香炉である。18世紀代の製品であろう。249～255は灯明具で、249は鉄釉灯明受皿、250･251は鉄釉の灯明具、252～255は秉燭である。254の外面には油煙が残っている。18世紀後半～19世紀前半の製品であろう。257は灰釉水滴、258は鉄釉壺である。259・260は徳利で、260の底部には「仆」の墨書がある。261は油徳利で、内部には油が入っていた痕跡が残る。18世紀代の製品であろう。264は織部の鉢である。265・266は擂鉢である。265は大窯第４段階の製品、256は19世紀前葉頃の製品であろう。

276～311は肥前産磁器である。276･277は青磁染付碗の蓋で、朝顔形碗とセットになるものであろう。内面にはコンニャク印判がみられる。18世紀後半の製品である。278・280・281は広東碗の蓋である。281はつまみ内に及ぶ文様が描かれる。279は端反碗の蓋で、瓢箪などの図柄が描かれる。282は合子蓋で、福や寿の文様を描いている。18世紀後半のものであろう。283～285は18世紀後半頃の染付丸碗である。283は波佐見窯、285は瀬戸美濃窯の製品とみられる。286・287は筒形染付碗、288・289は筒形の青磁染付碗である。いずれも見込にコンニャク印判が配される。18世紀後半頃の製品である。290・292は染付広東碗である。292の底部には「山形屋？」の朱書がみられる。293・294は染付端反碗である。19世紀前半の製品である。295は蕎麦猪口で、18世紀前半頃のものとみられる。296～299は小杯である。18世紀前半の製品で、296は薄手で胎土も精良であることから、色絵生地の製品と考えられる。300～302は染付皿である。300は17世紀中頃、301・302は18世紀前半頃の製品である。302の見込には五弁花のコンニャク印判がみられる。303・304は染付瓶である。303は網手文が描かれる18世紀前半の製品、302は蛸唐草文が描かれる19世紀前半の製品である。305･306は仏飯器である。305は18世紀後半の製品であろう。307は青磁香炉である。308・309は白磁紅皿である。体部外面に細かい刻みが入り、308はミニチュア品であろう。18世紀代のものとみられる。310は白磁合子の身である。体部外面に型による文様が施される。311は色絵の餌入れである。312は牛乳瓶である。明治時代に花島兵右衛門が三島市で創業した豊牧舎で売り出された牛乳の容器である。

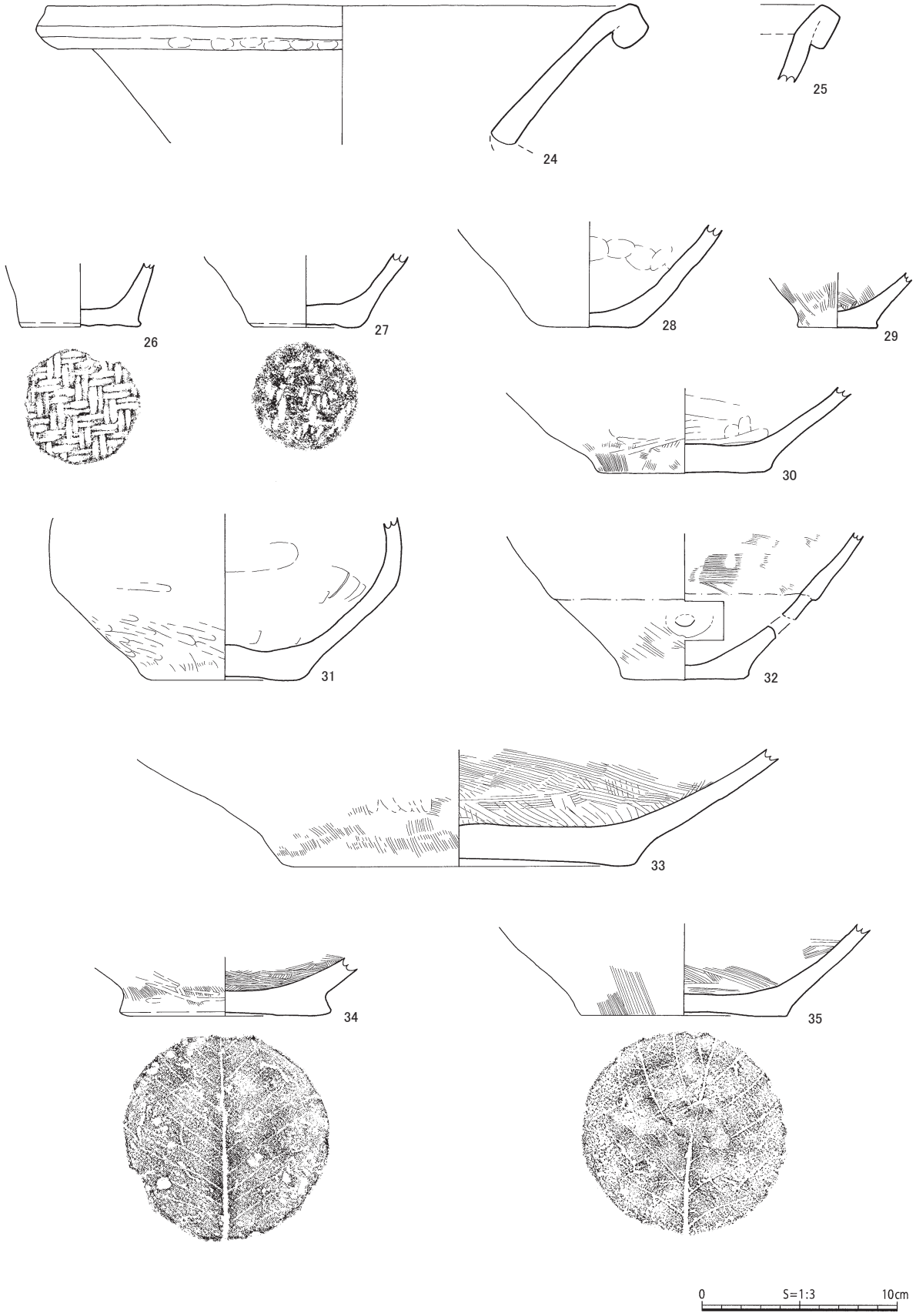
瓦質土器・土製品・瓦　267～270は瓦質火鉢とみられ、外面にスタンプが押印される。271は土製人形の頭部である。272は土錘、273は土製円盤である。274・275は丸瓦で、凹面に布目が観察される。



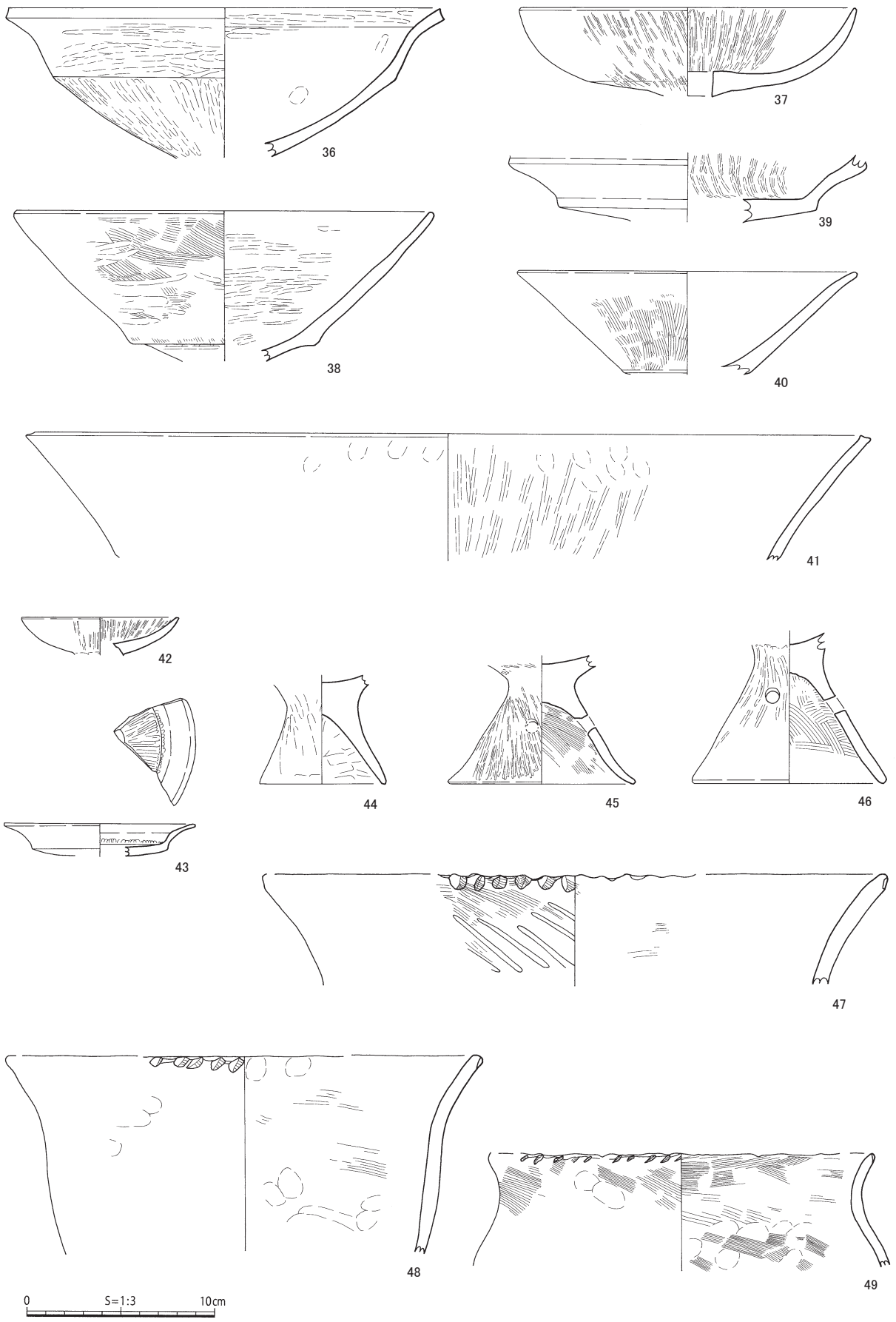
第28図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図１（土器）



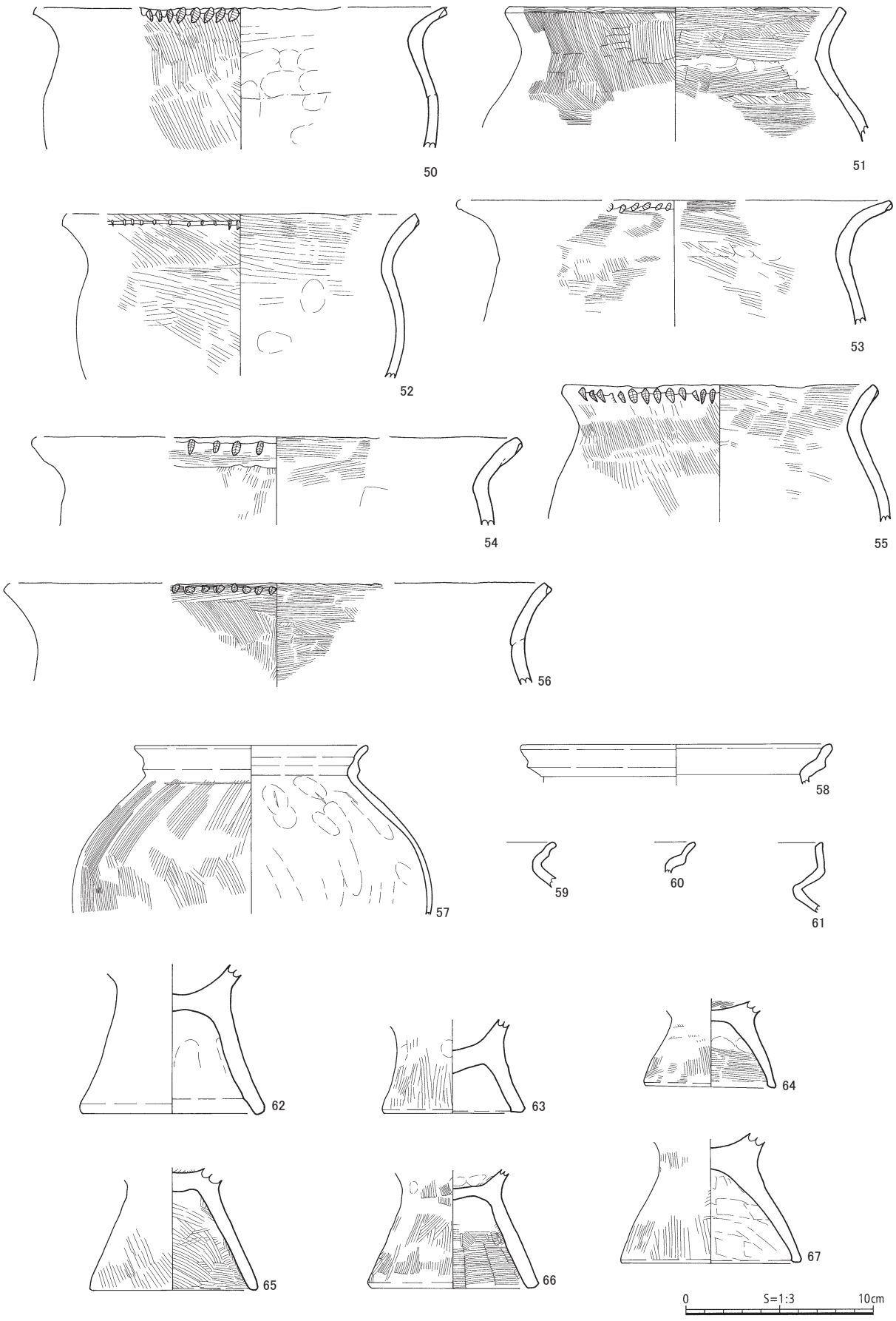
第29図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図２（土器）



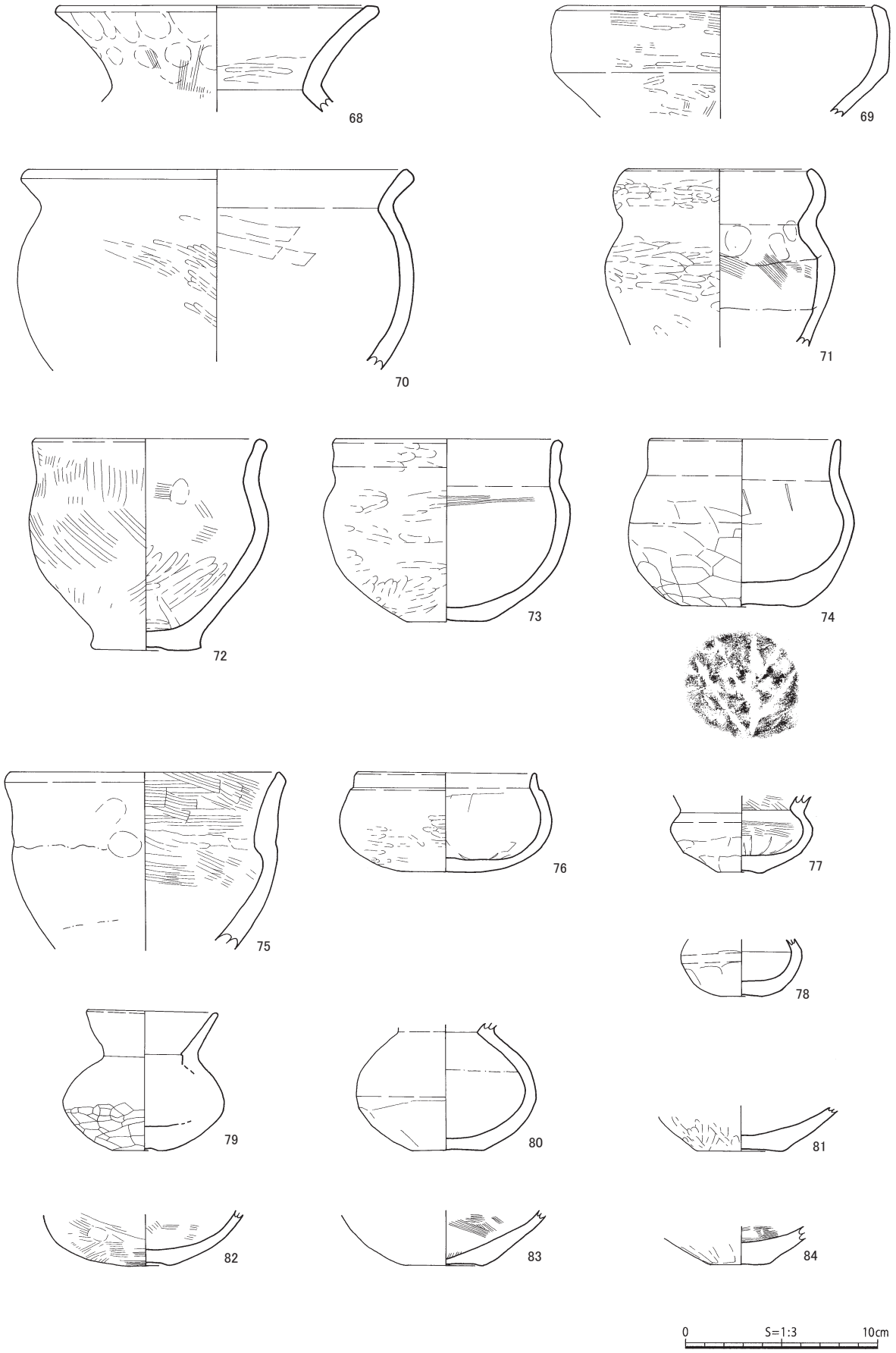
第30図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図３（土器）



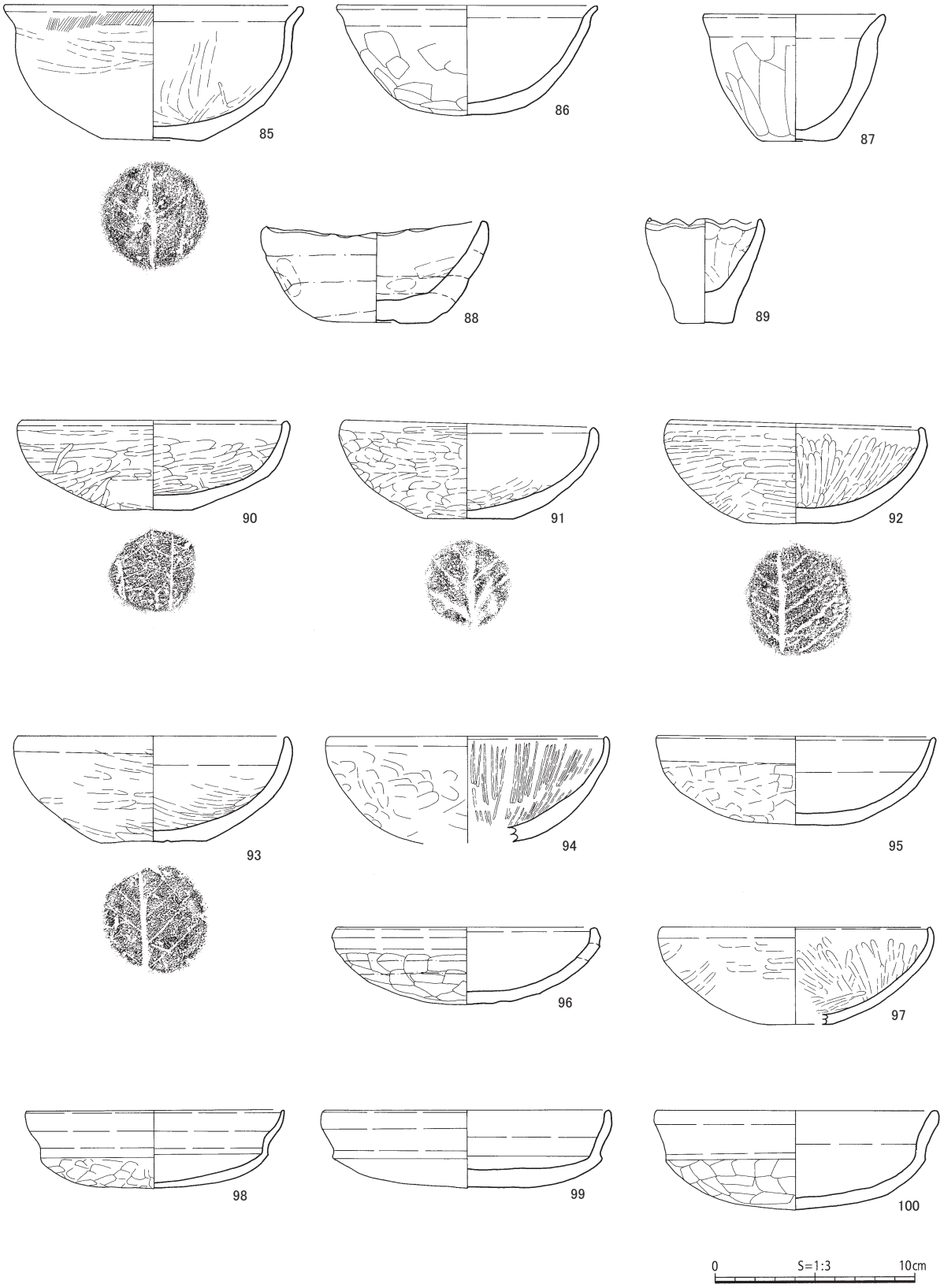
第31図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図４（土器）



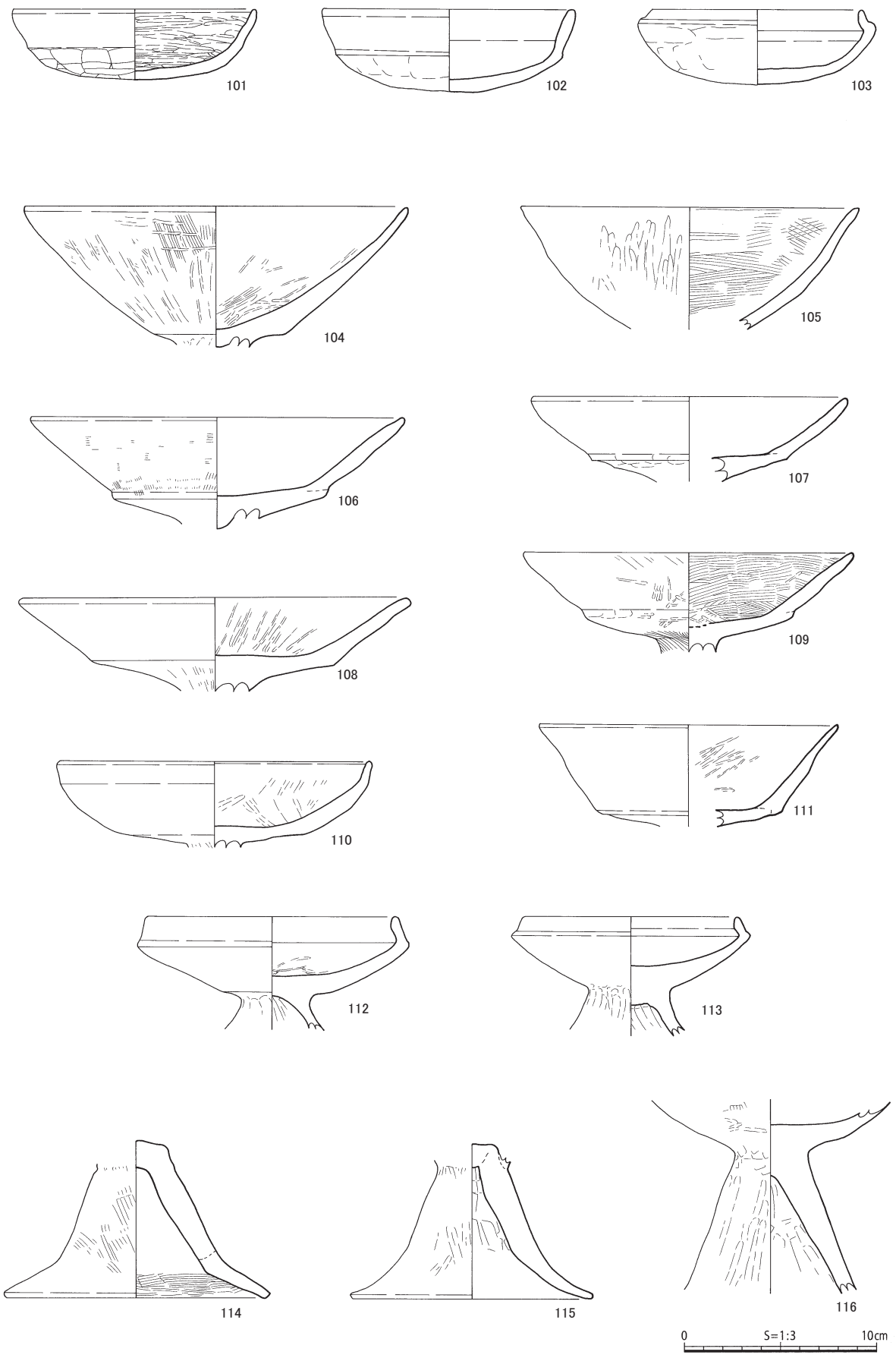
第32図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図５（土器）



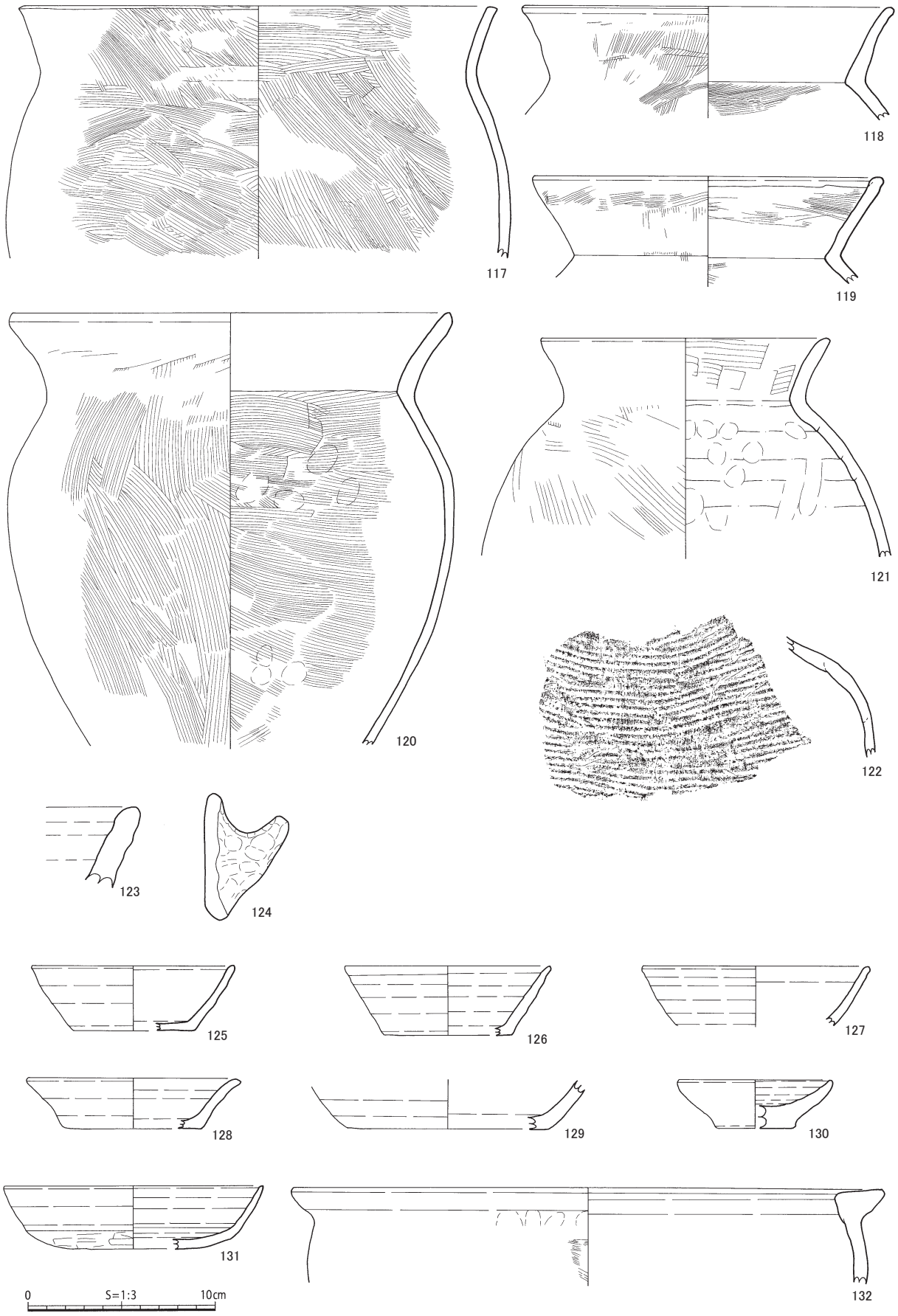
第33図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図６（土器）



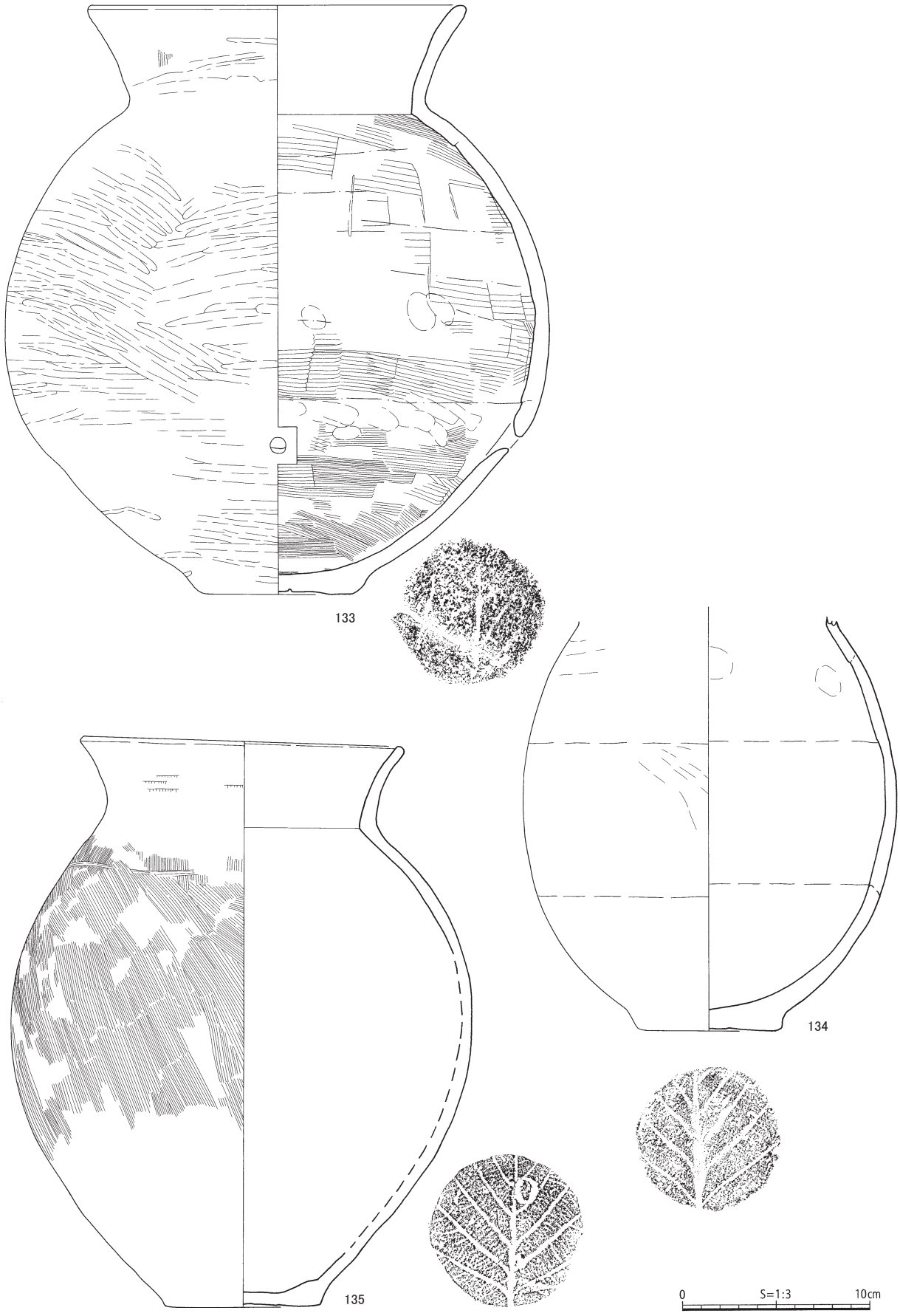
第34図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図７（土器）



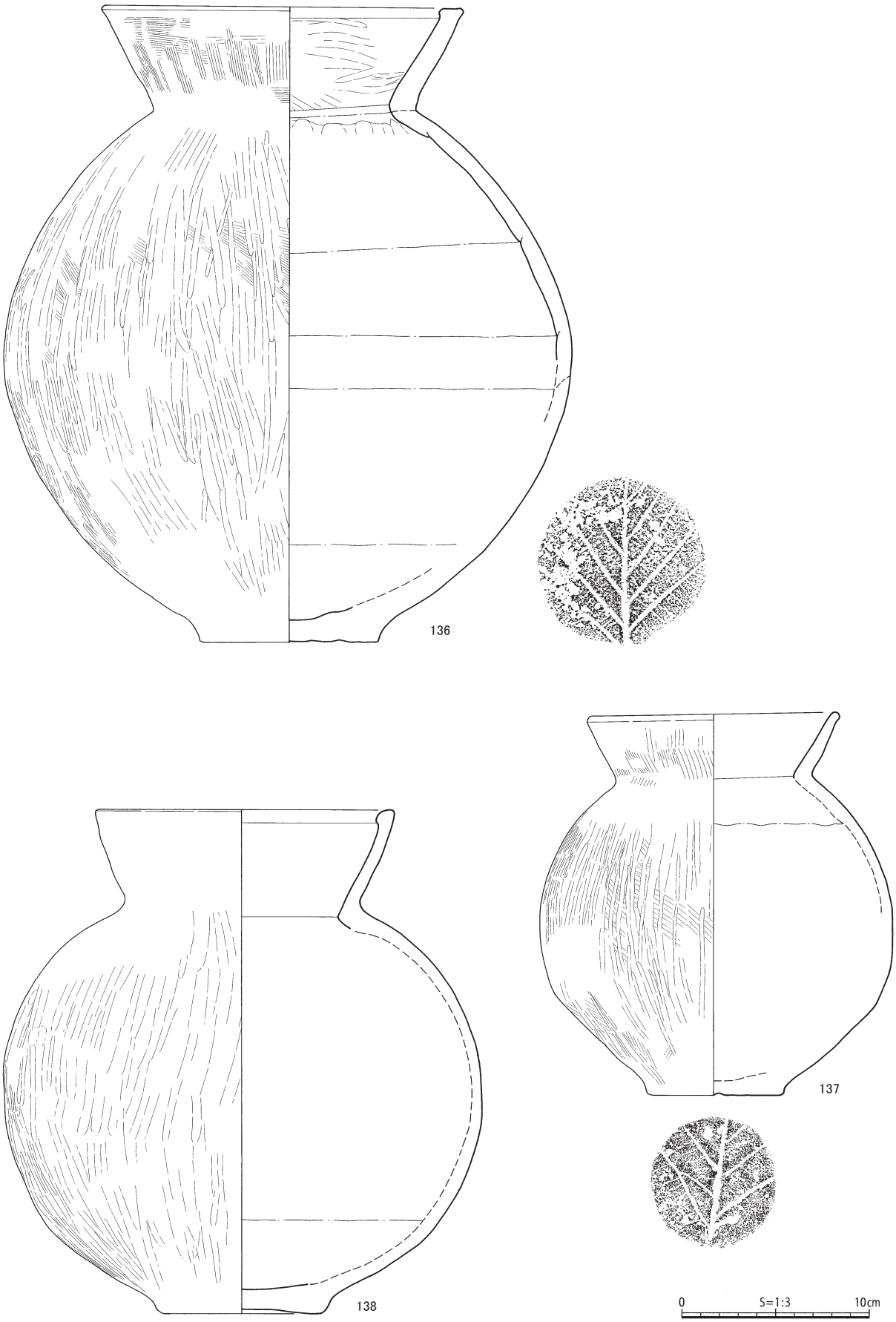
第35図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図８（土器）



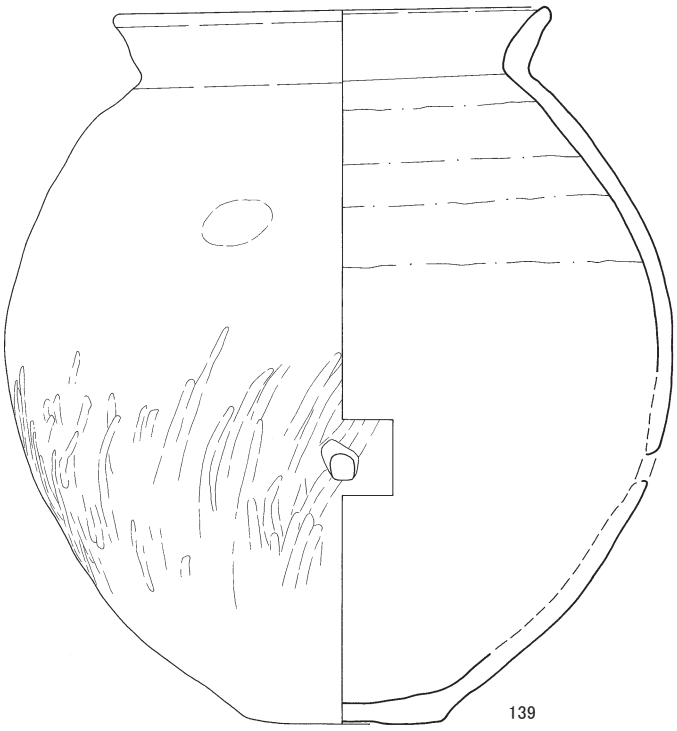
第36図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図９（土器）

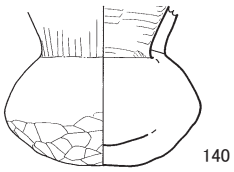


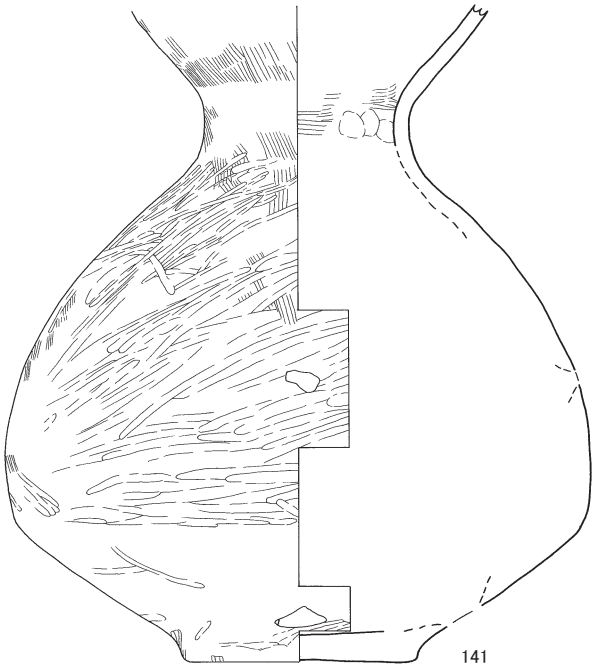
第37図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図10（土器）

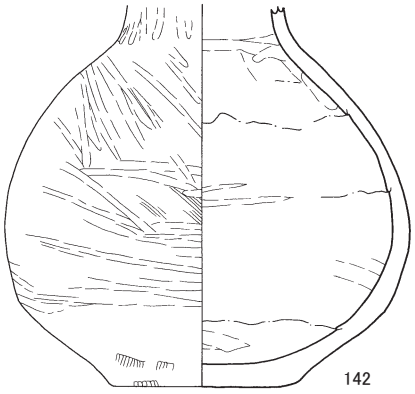


第38図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図11（土器）



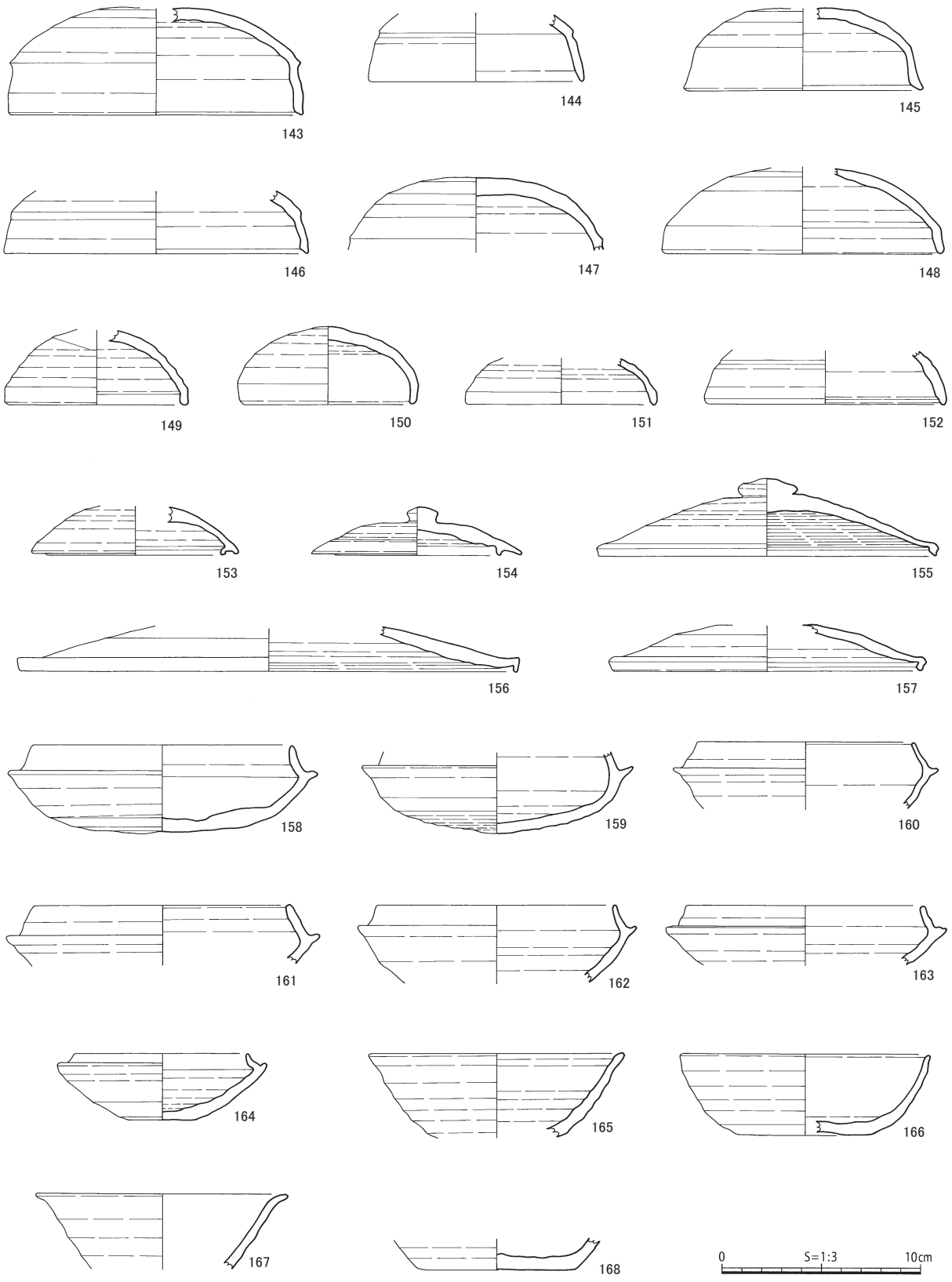




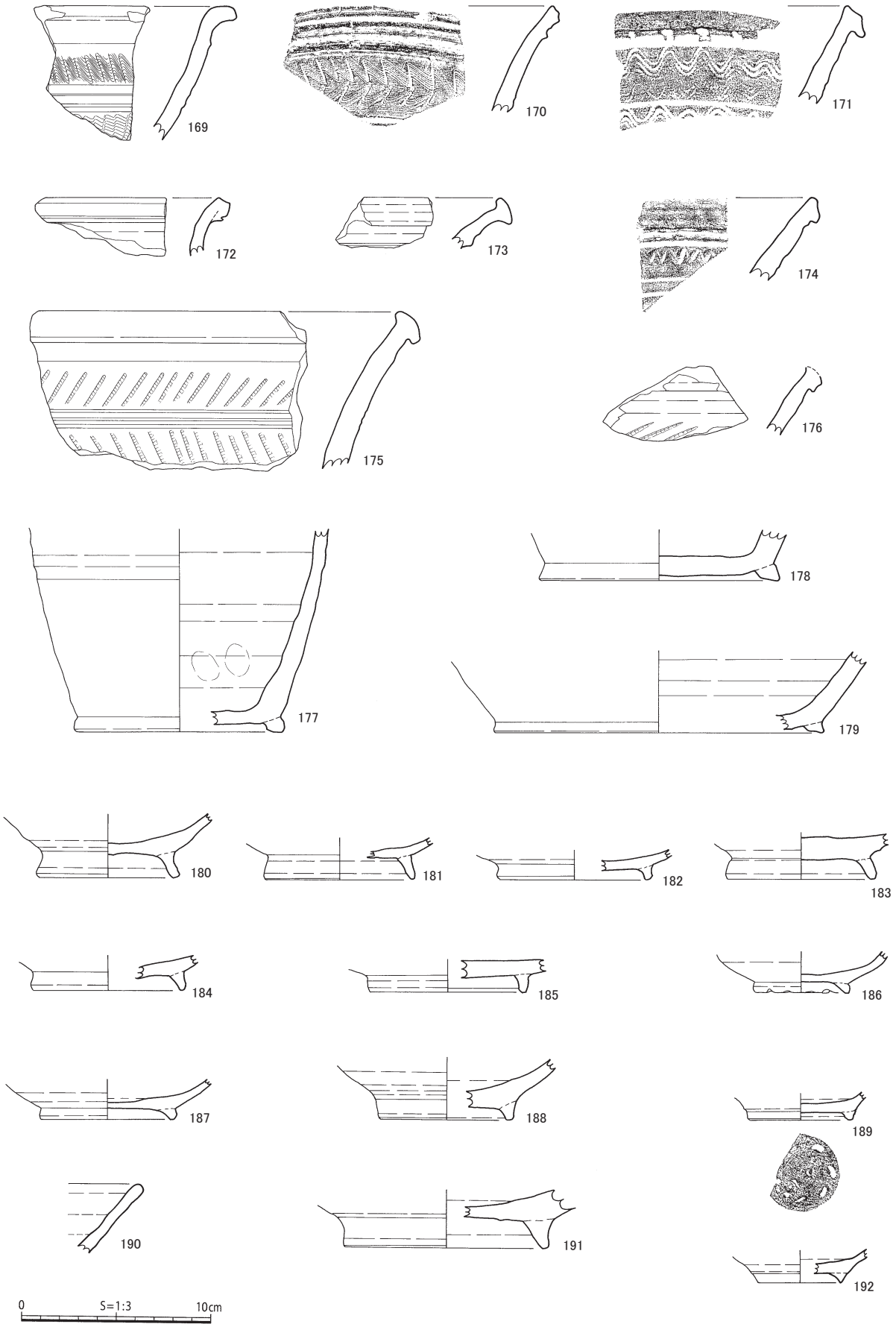


0　S=1:3　10cm

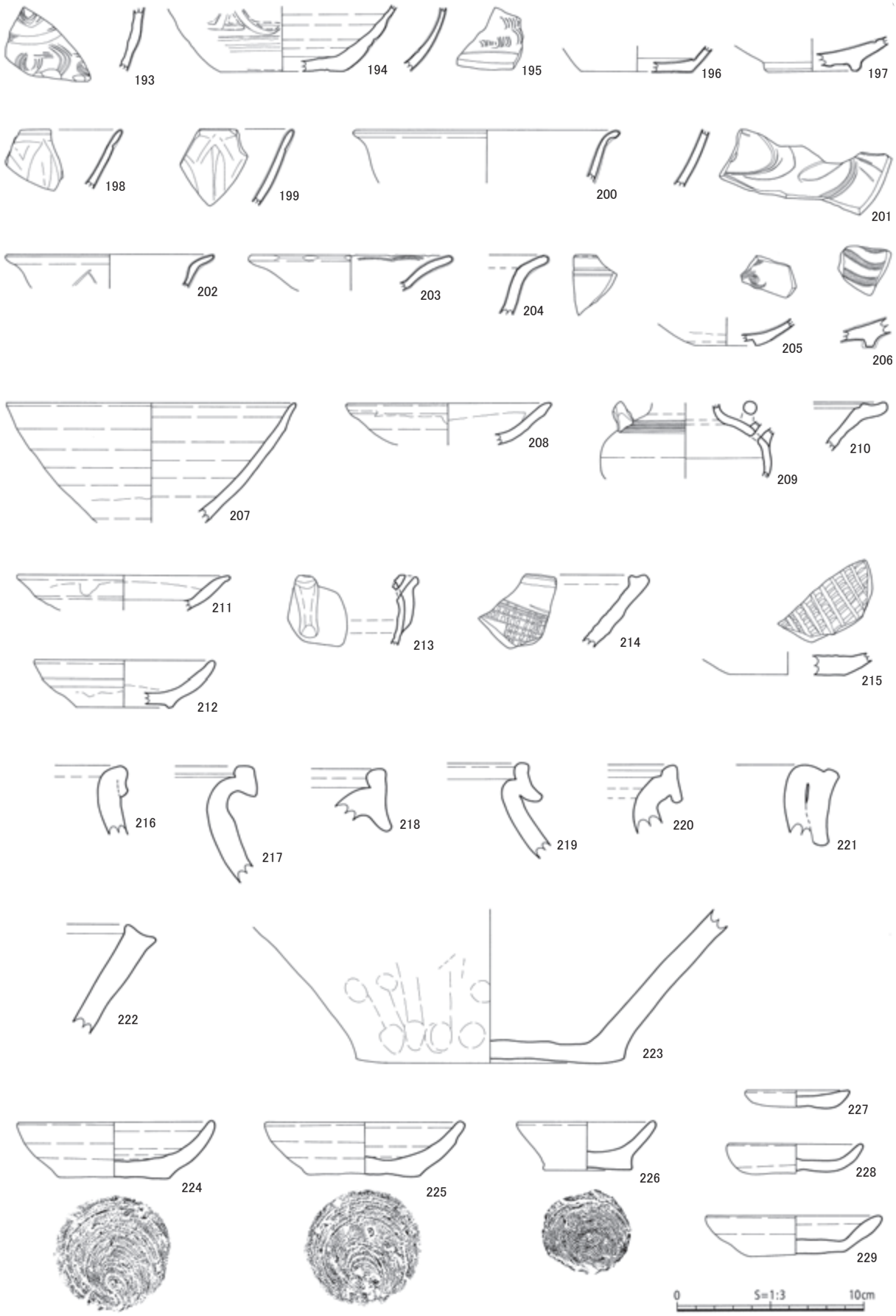
第39図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図12（土器）



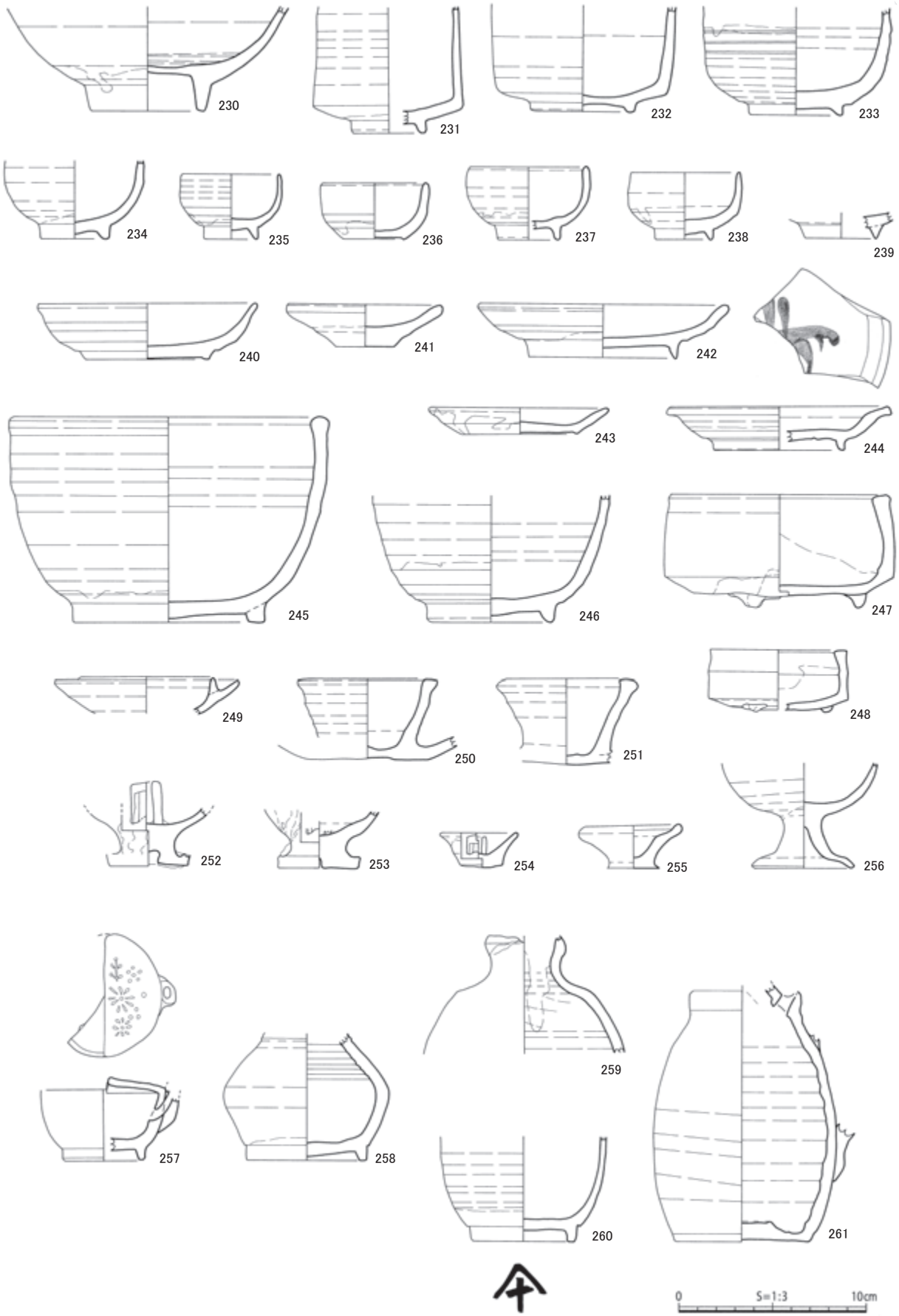
第40図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図13（土器）



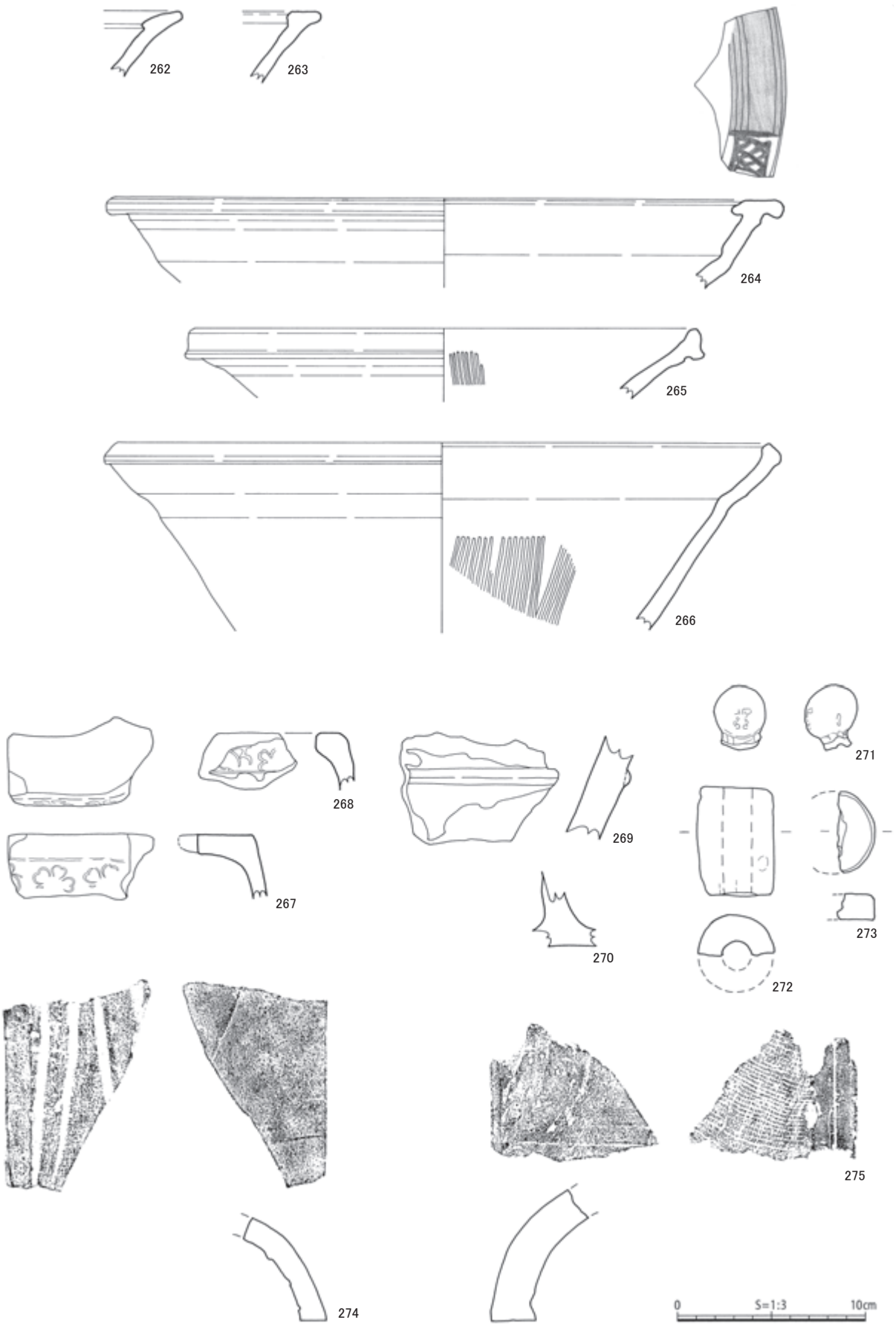
第41図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図14（土器）



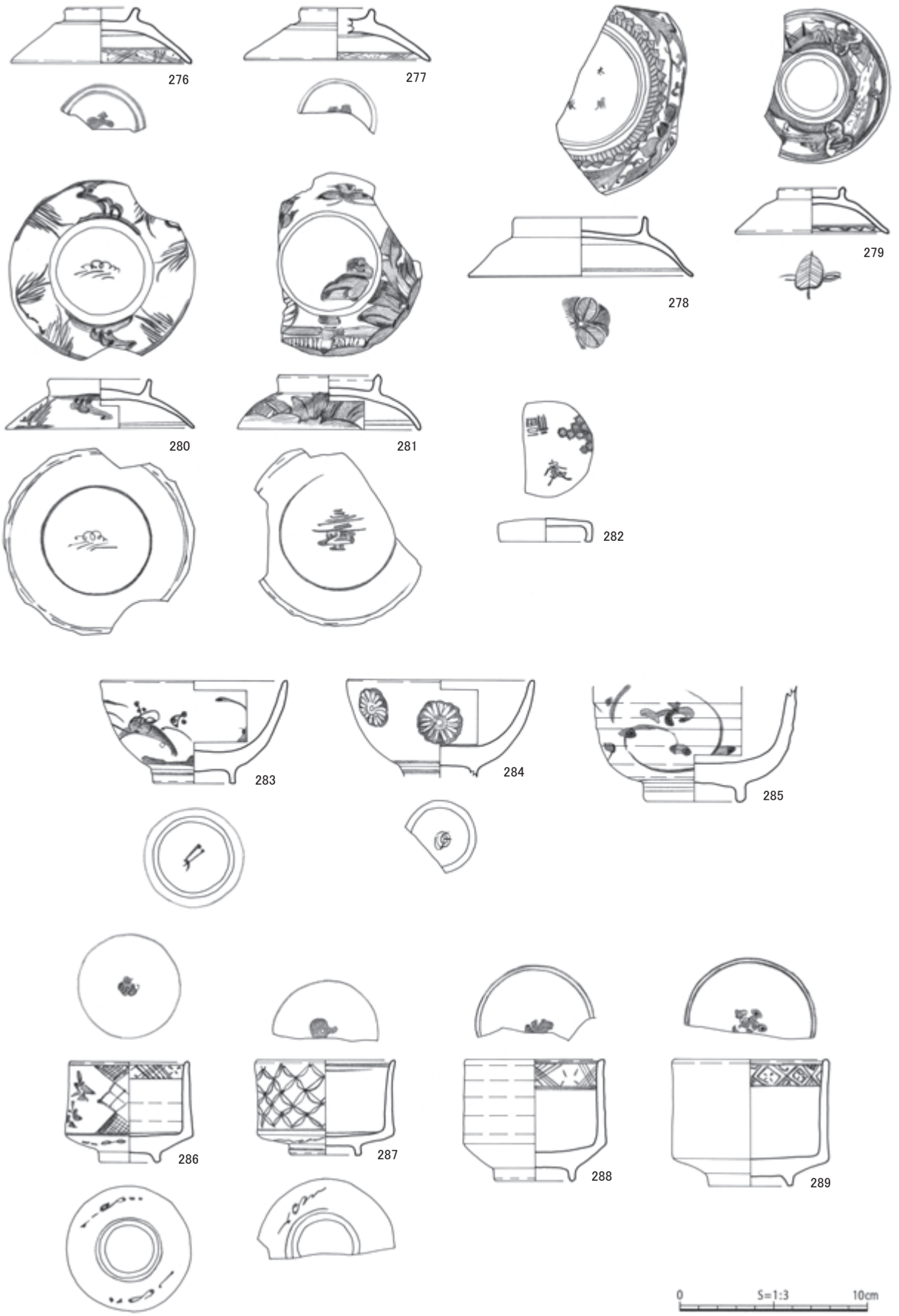
第42図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図15（陶磁器）



第43図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図16（陶磁器）



第44図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図17（陶磁器・土製品・瓦）



第45図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図18（陶磁器）

第46図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図19（陶磁器他）

第６表　鶴喰広田遺跡出土土器・陶磁器一覧表

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
28	1	E13SE	Ⅲ	縄文～弥生土器	深鉢	－	－	－	(18.9)	内:N 3/ 暗灰 外:N 2/ 黒	口縁部～胴部	破片	
	2	C6	－	縄文～弥生土器	深鉢	(18.4)	－	－	(8.4)	内:5YR 6/3 にぶい橙 外:5YR 2/1 黒	口縁部	20%	
	3	B1NE	Ⅲ	縄文土器	深鉢	－	－	－	(3.4)	内:10YR 4/2 灰黄褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	－	破片	
	4	E12	－	弥生土器	壺	－	－	－	(6.0)	内:7.5YR 5/1 褐灰 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁部	破片	
	5	F13	Ⅱ	弥生土器	壺	(1.3)	－	(14.8)	(8.8)	内:N 3/ 灰 外:7.5YR 5/3 にぶい褐	口縁部～胴部	20%	
	6	F14NE	Ⅲ	弥生土器	壺	8.8	－	9.7	(8.1)	内:5YR 5/3 にぶい赤褐 外:5YR 3/2 暗赤褐	口縁部～頸部	100%	
	7	C6	－	弥生土器	壺	(8.6)	－	(9.8)	(6.3)	内:7.5YR 3/1 黒褐 外:7.5YR 3/2 黒褐	口縁部	20%	
	8	C2SW	Ⅲ	弥生土器	小型壺	－	4.2	8.0	(12.0)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:10YR 4/1 褐灰	頸部～底部	100%	
	9	C8SE	Ⅲ	弥生土器	壺	(14.6)	－	(16.2)	(12.0)	内:5YR 3/1 黒褐 外:2.5Y 3/3 暗オリーブ褐	口縁部～頸部	30%	
	10	C2SE	Ⅲ	弥生土器	壺	(16.7)	－	－	(9.6)	内:N 4/ 灰 外:2.5Y 6/1 黄灰	口縁部～頸部	20%	
	11	C1SW	Ⅲ	弥生土器	壺	(21.4)	－	－	(4.1)	内:7.5YR 6/3 にぶい褐 外:10YR 5/2 灰黄褐	口縁部	10%	
	12	C3NW	Ⅲ	弥生土器	壺	(12.4)	－	(13.0)	(10.0)	内:2.5Y 6/3 にぶい黄 外:2.5Y 5/2 暗灰黄	口縁部～頸部	60%	
	13	C3NE	Ⅲ	弥生土器	壺	(17.4)	－	－	(4.1)	内:7.5YR 7/4 にぶい橙 外:7.5YR 7/4 にぶい橙	口縁部	20%	
	14	C5SE	Ⅲ	弥生土器	壺	－	－	－	(6.7)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/6 橙	頸部	90%	
	15	F14SE	Ⅲ	弥生土器	壺	－	－	－	(11.8)	内:10YR 8/2 灰白 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	頸部～胴部	20%	
29	16	C8	－	土師器	壺	(19.5)	－	－	(5.6)	内:5YR 7/6 橙 外:5YR 6/6 橙	口縁部	20%	
	17	F13	－	土師器	壺	(21.5)	－	－	(5.5)	内:2.5YR 7/3 浅黄 外:7.5YR 6/4 にぶい橙	口縁部	10%	
	18	E12SE	Ⅲ	土師器	壺	(18.3)	－	－	(5.3)	内:7.5YR 7/6 橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部	20%	
	19	C3SE	Ⅲ	土師器	壺	(24.8)	－	－	(7.6)	内:10YR 7/3 にぶい黄 外:10YR 7/3 にぶい黄	口縁部	10%	
	20	F15	－	土師器	壺	(30.0)	－	－	(7.5)	内:5YR 7/3 にぶい橙 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	口縁部～頸部	10%	
	21	C3NE	Ⅲ	土師器	壺	(34.2)	－	－	(10.6)	内:10YR 6/4 にぶい黄橙 外:10YR 7/3 にぶい黄橙	口縁部～頸部	20%	
	22	G14SW	Ⅲ	土師器	壺	(36.5)	－	－	(18.7)	内:7.5YR 6/3 にぶい褐 外:2.5Y 7/3 浅黄	口縁部～頸部	30%	
	23	C8NE	Ⅱ	土師器	壺	(37.2)	－	－	(8.4)	内:10YR 7/2 にぶい黄橙 外:10YR 1.7/1 黒	口縁部～頸部	10%	
30	24	D10	－	土師器	壺	(30.1)	－	－	(7.2)	内:10YR 8/3 浅黄橙 外:10YR 8/3 浅黄橙	口縁部	10%	
	25	－	－	土師器	壺	－	－	－	(4.4)	内:7.5YR 3/2 黒褐 外:7.5YR 4/3 褐	口縁部	破片	
	26	C5	Ⅱ	弥生土器	壺	－	6.1	－	(3.3)	内:2.5Y 5/2 暗灰黄 外:2.5Y 4/1 黄灰	底部	100%	
	27	E12NW	Ⅲ	弥生土器	壺	－	5.4	－	(3.7)	内:10YR 6/2 灰黄褐 外:10YR 5/2 灰黄褐	底部	100%	
	28	E13NE	Ⅲ	弥生土器	壺	－	5.4	－	(5.2)	内:5YR 5/3 にぶい赤褐 外:10YR 6/1 褐灰	胴部～底部	20%	
	29	C2NE	Ⅲ	弥生土器	小型壺	－	(4.0)	－	(2.8)	内:7.5YR 6/6 橙 外:10YR 5/8 黄褐	底部	100%	
	30	B1SE	Ⅲ	土師器	壺	－	8.9	－	(4.4)	内:5Y 7/2 灰白 外:5Y 6/2 灰オリーブ	底部	100%	
	31	G15NW	Ⅲ	弥生土器	壺	－	8.3	(18.0)	(8.4)	内:5Y 6/2 オリーブ黄 外:5YR 6/4 にぶい橙	胴部～底部	60%	
	32	G14SW	Ⅲ	土師器	壺	－	(6.4)	－	(7.3)	内:7.5YR 2/1 黒 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	胴部～底部	20%	
	33	C5NE	Ⅲ	土師器	壺	－	18.3	－	(6.0)	内:7.5YR 7/6 橙 外:10YR 7/3 にぶい黄橙	底部	100%	
	34	B0SW	Ⅲ	土師器	壺	－	10.8	－	(3.0)	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:10YR 5/2 灰黄褐	底部	100%	
	35	B1NW	Ⅲ	土師器	壺	－	10.5	－	(4.7)	内:2.5Y 6/2 灰黄 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	底部	100%	
31	36	－	－	土師器	高坏	(23.0)	－	－	(8.0)	内:10YR 3/1 黒褐 外:10YR 3/1 黒褐	口縁～体部	20%	
	37	－	－	土師器	高坏	(17.8)	－	－	(4.7)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部～体部	10%	
	38	C2SE	Ⅲ	土師器	高坏	(22.0)	－	－	(8.0)	内:10YR 4/3 にぶい黄褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁～体部	20%	
	39	C2NW	Ⅲ	土師器	高坏	－	－	－	(3.7)	内:10YR 6/2 灰黄褐 外:10YR 6/2 灰黄褐	体部	10%	
	40	C1SW	Ⅲ	土師器	高坏	(17.9)	－	－	(5.5)	内:2.5YR 5/4 にぶい赤褐 外:2.5YR 5/4 にぶい赤褐	口縁部～体部	10%	
	41	B0SE	Ⅱ	土師器	高坏	(44.0)	－	－	(6.7)	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部～体部	10%	
	42	C3NE	Ⅲ	土師器	小型器台	(8.4)	－	－	(2.0)	内:7.5YR 5/3 にぶい褐 外:7.5YR 5/3 にぶい褐	口縁部～体部	50%	
	43	B1NW	Ⅲ	土師器	小型器台	(10.2)	(3.3)	－	(1.7)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部～体部	20%	
	44	F14NW	Ⅲ	土師器	高坏	－	6.7	－	(5.8)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 6/4 にぶい橙	脚部	100%	
	45	C2NE	2列トレンチ	土師器	高坏	－	(9.7)	－	(6.8)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	脚部	60%	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
31	46	B1SE	Ⅲ	土師器	高坏	－	10.2	－	(8.0)	内:2.5YR 4.5/3 にぶい赤褐 外:2.5YR 4.5/3 にぶい赤褐	脚部	100%	
	47	－	Ⅱ	土師器	台付甕	(32.8)	－	－	(6.0)	内:7.5YR 4/2 灰褐 外:7.5YR 5/2 灰褐	口縁部	10%	
	48	－	－	土師器	台付甕	(24.4)	－	－	(10.6)	内:7.5Y 6/1 灰 外:7.5Y 3/1 オリーブ黒	口縁部～胴部	10%	
	49	C3NE	Ⅲ	土師器	台付甕	(20.2)	－	－	(6.2)	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5YR 5/3 にぶい赤褐	口縁部～胴部	10%	
32	50	C2NW	Ⅲ	土師器	台付甕	(21.8)	－	－	(7.6)	内:7.5Y 4/1 灰 外:7.5Y 4/1 灰	口縁部～胴部	10%	
	51	C6	－	土師器	台付甕	(17.6)	－	(18.3)	(7.2)	内:10YR 6/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部	20%	
	52	－	－	土師器	台付甕	(18.5)	－	－	(8.9)	内:10YR 6/1 褐灰 外:10YR 4/1 褐灰	口縁部～胴部	10%	
	53	－	－	土師器	台付甕	(22.8)	－	－	(6.7)	内:10YR 6/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部～頸部	10%	
	54	－	－	土師器	台付甕	(25.6)	－	－	(4.8)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:10YR 6/1 褐灰	口縁部	10%	
	55	C2NW	Ⅲ	土師器	台付甕	(16.3)	－	－	(7.4)	内:2.5Y 7/2 灰黄 外:N 3/0 暗灰	口縁部～胴部	10%	
	56	－	－	土師器	台付甕	(28.4)	－	－	(5.5)	内:5YR 6/3 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	口縁部	10%	
	57	C2NE	Ⅲ	土師器	S字甕	(12.2)	－	－	(9.0)	内:10YR 5/4 にぶい黄褐 外:10YR 3/2 黒褐	口縁部～胴部	30%	
	58	E12	－	土師器	S字甕	(16.4)	－	－	(2.1)	内:5Y 4/1 灰 外:5Y 4/1 灰	口縁部	30%	
	59	－	Ⅲ	土師器	S字甕	－	－	－	(2.4)	内:2.5Y 7/2 灰黄 外:2.5Y 7/2 灰黄	口縁部	破片	
	60	B1NE	1列 トレンチ	土師器	S字甕	－	－	－	(1.7)	内:2.5Y 7/2 灰黄 外:2.5Y 7/2 灰黄	口縁部	破片	
	61	F13	Ⅱ	土師器	甕	－	－	－	(3.7)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部	破片	
	62	C2SE	Ⅲ	土師器	台付甕	－	9.3	－	(8.0)	内:10YR 3/1 黒褐 外:10YR 3/2 黒褐	台部	100%	
	63	G14SW	Ⅲ	弥生土器	台付甕	－	7.4	－	(5.0)	内:7.5YR 5/3 にぶい褐 外:7.5YR 5/3 にぶい褐	台部	100%	
	64	E12	－	土師器	台付甕	－	6.8	－	(4.7)	内:7.5YR 5/1 褐灰 外:7.5YR 5/1 褐灰	台部	100%	
	65	N14FW	Ⅲ	土師器	台付甕	－	8.9	－	(6.6)	内:5YR 4/3 にぶい赤褐 外:5YR 4/2 灰褐	台部	100%	
	66	C2SE	Ⅲ	土師器	台付甕	－	8.8	－	(6.4)	内:10YR 6/2 灰黄褐 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	台部	100%	
	67	C5NE	Ⅱ	土師器	台付甕	－	9.4	－	(7.4)	内:5YR 6/4 にぶい橙 外:5YR 6/4 にぶい橙	台部	100%	
33	68	E12	－	土師器	壺	(16.7)	－	－	(5.5)	内:2.5Y 8/2 灰白 外:2.5Y 8/3 淡黄	口縁部	30%	
	69	C1SW	Ⅲ	土師器	壺	(16.0)	－	－	(5.8)	内:2.5Y 6/2 灰黄 外:7.5YR 5.5/3 にぶい褐	口縁部	10%	
	70	C5	Ⅲ	土師器	壺	(19.6)	－	(20.5)	(10.5)	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:10YR 7/4 にぶい黄橙	口縁部～胴部	10%	
	71	B1SE	Ⅲ	土師器	小型甕	(9.4)	－	(12.0)	(9.2)	内:10YR 4/1 褐灰 外:10YR 4/1 褐灰	口縁部～胴部	70%	
	72	D10SW	Ⅲ	土師器	小型甕	(11.6)	5.8	－	11.0	内:7.5YR 5/3 にぶい褐 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	口縁部～底部	90%	
	73	C2NW	Ⅲ	土師器	小型甕	(11.6)	(4.2)	(12.8)	9.5	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁部～底部	30%	
	74	C1NW	Ⅲ	土師器	小型甕	9.8	6.0	－	8.7	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁部～底部	90%	
	75	C3NE	Ⅲ	土師器	小型甕	(14.0)	－	－	(9.3)	内:10YR 5/4 にぶい黄褐 外:10YR 5/4 にぶい黄褐	口縁部～体部	20%	
	76	B0SE	Ⅱ	土師器	鉢	(9.3)	－	(11.0)	5.2	内:10YR 5/1 褐灰 外:2.5Y 5/2 暗灰	口縁部～底部	50%	
	77	C1NW	Ⅲ	土師器	小型甕	－	2.3	(7.5)	(4.0)	内:7.5YR 4/3 褐 外:10YR 3/1 黒褐	体部～底部	50%	
	78	－	Ⅲ	土師器	小型甕	－	2.0	6.3	(3.0)	内:10YR 4/2 灰黄褐 外:2.5Y 5/3 黄褐	体部～底部	80%	
	79	C1NW	Ⅲ	土師器	小型甕	6.7	3.0	8.4	7.3	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5YR 5/4 にぶい赤褐		完形	
	80	C3NE	Ⅲ	土師器	小型甕		3.7	9.4	(6.6)	内:7.5YR 6/6 橙 外:10YR 5/8 黄褐	体部～底部	80%	
	81	－	Ⅲ	土師器	小型甕	－	4.6	－	(2.3)	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	底部	100%	
	82	F15	－	土師器	小型甕	－	2.8	－	(2.8)	内:10YR 5/1 褐灰 外:10YR 6/3 灰黄褐	胴部～底部	10%	
	83	B1NE	Ⅲ	土師器	小型甕	－	4.0	－	(2.9)	内:7.5Y 5/1 灰 外:7.5Y 3/1 オリーブ黒	底部	100%	
	84	C7	－	土師器	小型甕	－	3.3	－	(2.0)	内:2.5Y 5/2 暗灰黄 外:5YR 5/2 灰褐	底部	100%	
34	85	G14SW	Ⅲ	土師器	鉢	(14.6)	4.9	－	6.8	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部～底部	60%	
	86	B1SE	Ⅲ	土師器	鉢	(13.0)	－	－	5.5	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部～底部	60%	
	87	B1NE	Ⅲ	土師器	鉢	(9.0)	4.0	－	6.4	内:7.5YR 5/3 にぶい褐 外:7.5YR 5/3 にぶい褐	口縁部～底部	40%	
	88	E13NE	Ⅲ	土師器 (手捏ね)	坏	11.0	5.4	－	5.1	内:10YR 4/2 灰黄褐 外:10YR 4/2 灰黄褐		完形	
	89	B1NE	Ⅲ	土師器 (手捏ね)	坏	(5.6)	(2.7)	－	5.2	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:7.5YR 6/4 にぶい橙	口縁部～底部	90%	
	90	C1SW	Ⅲ	土師器	坏	(13.2)	(4.0)	－	4.5	内:7.5YR 6/2 にぶい橙 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	口縁部～底部	70%	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
34	91	C1SW	Ⅲ	土師器	坏	12.5	4.3	－	5.0	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙		完形	
	92	C1SW	Ⅲ	土師器	坏	12.5	－	－	5.2	内:10YR 6/2 灰黄褐 外:7.5YR 6/4 にぶい橙		完形	
	93	F14SE	Ⅲ	土師器	坏	13.6	5.6	－	5.3	内:10YR 6/4 にぶい黄橙 外:10YR 6/4 にぶい黄橙		完形	
	94	F14SE	Ⅲ	土師器	坏	(13.8)	－	－	(5.3)	内:2.5Y 6/1 黄灰 外:5Y 6/1 灰	口縁部～体部	20%	
	95	－	Ⅲ	土師器	坏	13.8	－	－	4.5	内:10YR 1.7/1 黒 外:7.5YR 5.5/3 にぶい褐	口縁部～底部	90%	黒色
	96	C1SW	Ⅲ	土師器	坏	(12.8)	－	－	3.9	内:2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外:2.5YR 5/3 にぶい赤褐	口縁部～底部	80%	赤色
	97	C1NW	Ⅲ	土師器	坏	(13.3)	(3.6)	－	(4.9)	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	口縁部～底部	20%	
	98	G14SW	Ⅲ	土師器	坏	12.8	－	－	3.9	内:10YR 1.7/1 黒 外:10YR 1.7/1 黒	口縁部～底部	90%	黒色
	99	－	－	土師器	坏	14.2	－	－	3.9	内:10YR 4/6 赤 外:10YR 4/6 赤		完形	赤色
	100	G14SW	Ⅲ	土師器	坏	14.0	－	－	5.0	内:2.5Y 5/2 暗灰黄 外:2.5Y 5/2 暗灰黄		完形	
35	101	G15NW	Ⅲ	土師器	坏	(12.5)	－	－	3.7	内:2.5Y 3/1 黒褐 外:2.5Y 2/1 黒	口縁部～底部	60%	黒色
	102	G14SW	Ⅲ	土師器	坏	12.8	－	－	4.3	内:2.5Y 4/2 暗灰黄 外:2.5Y 3/1 黒褐		完形	
	103	F14NE	Ⅲ	土師器	坏	10.9	－	－	3.9	内:2.5Y 2/1 黒 外:5YR 5/3 赤褐	口縁部～底部	75%	黒色
	104	－	－	土師器	高坏	(19.8)	－	－	(7.3)	内:5YR 4/6 赤褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	口縁部～体部	40%	
	105	C3NE	Ⅲ	土師器	高坏	(17.6)	－	－	(6.3)	内:10YR 5/1 褐灰 外:10YR 5/1 褐灰	口縁部～体部	20%	
	106	F13NW	Ⅲ	土師器	高坏	19.2	－	－	(5.8)	内:2.5YR 5/6 明赤褐 外:5YR 4/4 にぶい赤褐	口縁部～体部	50%	
	107	C1SW	Ⅲ	土師器	高坏	16.2	－	－	(4.4)	内:10YR 5/3 にぶい黄褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁～体部	30%	
	108	F14SE	Ⅲ	土師器	高坏	(19.8)	－	－	(4.9)	内:10YR 3/1 黒褐 外:10YR 3/1 黒褐	口縁部～体部	50%	黒色
	109	B1NE	Ⅲ	土師器	高坏	(17.0)	－	－	(5.2)	内:5YR 5/6 明赤褐 外:5YR 5/6 明赤褐	口縁部～体部	40%	
	110	－	－	土師器	高坏	16.0	－	－	(4.5)	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁～体部	30%	
	111	B1SE	Ⅲ	土師器	高坏	15.4	－	－	(5.3)	内:10YR 3/1 黒褐 外:5YR 5/4 にぶい赤褐	口縁部～体部	20%	
	112	C8NE	Ⅱ	土師器	高坏	(12.9)	－	14.2	(5.5)	内:2.5YR 4/3 にぶい赤褐 外:2.5YR 5/3 にぶい赤褐	口縁部～体部	40%	
	113	－	－	土師器	高坏	(11.0)	－	(12.5)	(6.2)	内:N 3/0 暗灰 外:2.5Y 4/1 黄灰	口縁部～体部	20%	
	114	D10SE	Ⅲ	土師器	高坏	－	(13.4)	－	(8.2)	内:10YR 5/4 にぶい黄褐 外:10YR 5/4 にぶい黄褐	脚部	80%	
	115	F14SE	Ⅲ	土師器	高坏	－	(12.4)	－	(8.1)	内:7.5YR 3/2 黒褐 外:10YR 3/1 黒褐	脚部	40%	
	116	F14SE	Ⅲ	土師器	高坏	－	－	－	(10.0)	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	体部～脚部	50%	
36	117	C2NW	Ⅲ	土師器	甕	(24.6)	－	－	(13.6)	内:10YR 5/2 灰黄褐 外:10YR 6/2 灰黄褐	口縁部～体部	20%	
	118	C2SE	Ⅲ	土師器	甕	(19.6)	－	－	(6.0)	内:5Y 4/1 灰 外:5Y 4/1 灰	口縁部～胴部	20%	
	119	B1NE	Ⅲ	土師器	甕	(18.5)	－	－	(5.7)	内:7.5YR 6/3 にぶい褐 外:7.5YR 6/2 灰褐	口縁部～胴部	20%	
	120	C1SW	Ⅲ	土師器	甕	(23.4)	－	(24.0)	(23.3)	内:10YR 6/1 褐灰 外:10YR 5/2 灰黄褐	口縁部～胴部	30%	
	121	E12SE	Ⅲ	土師器	甕	(15.2)	－	－	(11.8)	内:5YR 4/2 灰褐 外:7.5YR 4/2 灰褐	口縁部～胴部	40%	
	122	D3SW	Ⅲ	土師器	甕	－	－	－	(6.5)	内:10YR 5/1 褐灰 外:7.5YR 6/3 にぶい褐	－	破片	
	123	C3SW	Ⅲ	土師器	壺	－	－	－	(4.3)	内:7.5YR 6/6 橙 外:7.5YR 4/4 褐	口縁部	破片	
	124	D9	Ⅱ	土師器	甑	－	－	－	(6.8)	内:10YR 5.5/2 灰黄褐 外:10YR 5.5/2 灰黄褐	把手	－	
	125	C2NE	Ⅲ	土師器	坏	(10.7)	(6.4)	－	3.5	内:5YR 4/4 にぶい赤褐 外:5YR 4/4 にぶい赤褐	口縁部～底部	20%	
	126	C5	Ⅱ	土師器	坏	(11.0)	(6.8)	－	3.7	内:10YR 3/3 暗褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	口縁部～底部	20%	
	127	B1NE	Ⅲ	土師器	坏	(12.0)	－	－	(3.2)	内:5YR 4/3 にぶい赤褐 外:5YR 4/3 にぶい赤褐	体部	10%	
	128	B1NE	Ⅲ	土師器	坏	(11.0)	(7.2)	－	2.7	内:5YR 3/1 黒褐 外:5YR 3/1 黒褐	口縁部～底部	10%	
	129	C1NW	Ⅲ	土師器	坏	(10.6)	－	－	(2.6)	内:7.5YR 4/4 褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	体部～底部	20%	
	130	B0SE	Ⅲ	土師器	小皿	(8.1)	(4.0)	－	2.6	内:10YR 4/2 灰黄褐 外:10YR 4/2 灰黄褐	口縁部～底部	30%	
	131	C1SE	Ⅲ	土師器	坏	(13.8)	－	－	(3.4)	内:10YR 6/3 にぶい黄橙 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	口縁部～底部	20%	
	132	D9	Ⅱ	土師器	甕	(31.4)	－	－	(5.1)	内:7.5YR 4/3 褐 外:7.5YR 4/3 褐	口縁部	10%	
37	133	C1SW	Ⅲ	土師器	甕	(19.9)	(7.5)	(29.0)	31.6	内:7.5YR 7/3 にぶい橙 外:7.5YR 7/3 にぶい橙	口縁部～底部	90%	
	134	－	－	土師器	甕	－	7.8	－	(22.2)	内:2.5Y 6/1 黄灰 外:5Y 6/1 灰	胴部～底部	70%	
	135	C2SE	Ⅲ	土師器	甕	16.7	8.2	24.5	30.3	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:10YR 6/3 にぶい黄橙		完形	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
38	136	流路2 土器集中	Ⅲ	土師器	甕	19.0	9.5	30.3	33.9	内:10YR 7/4 にぶい黄橙 外:10YR 7/4 にぶい黄橙		完形	
	137	流路2 土器集中	Ⅲ	土師器	甕	13.0	7.1	－	20.3	内:5YR 6/2 灰褐 外:7.5YR 6/2 灰褐		完形	
	138	流路2 土器集中	Ⅲ	土師器	甕	15.8	8.2	25.3	26.9	内:10YR 7/2 にぶい黄橙 外:10YR 7/2 にぶい黄橙		完形	
39	139	流路2 土器集中	Ⅲ	土師器	甕	16.8	7.8	26.3	28.1	内:5YR 5/2 灰褐 外:5YR 5/2 灰褐		完形	
	140	流路2 土器集中	Ⅲ	土師器	小型壺	－	1.9	(7.8)	(6.3)	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:10YR 5/2 灰黄	頸部～底部	80%	
	141	流路2 土器集中	Ⅲ	弥生土器	壺	－	9.2	23.0	(26.0)	内:2.5Y 7/1 灰白 外:2.5Y 6/1 黄灰	口縁部～底部	90%	
	142	流路2 土器集中	Ⅲ	弥生土器	壺	－	7.3	16.0	(15.1)	内:5YR 6/1 褐灰 外:5YR 4/8 赤褐	頸部～底部	100%	
40	143	－	2列トレンチ	須恵器	蓋	(14.6)	－	－	(5.4)	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部～天井部	50%	
	144	B0ＳＥ	Ⅲ	須恵器	蓋	(10.6)	－	－	(3.4)	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部	20%	
	145	C2ＮＥ	2列トレンチ	須恵器	蓋	(11.8)	－	－	(4.1)	内:N 5/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部～天井部	20%	
	146	C2ＮＷ	Ⅲ	須恵器	蓋	(15.1)	－	－	(3.2)	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部	10%	
	147	D2ＳＷ	Ⅲ	須恵器	蓋	－	－	－	(3.6)	内:N 5/ 灰 外:N 6/ 灰	口縁部～天井部	70%	
	148	C3ＮＥ	Ⅲ	須恵器	蓋	(13.9)	－	－	(4.3)	内:7.5Y 5/1 灰 外:7.5Y 5/1 灰	口縁部～天井部	10%	
	149	C6	Ⅱ	須恵器	蓋	(8.7)	－	－	(3.8)	内:7.5Y 4/1 灰 外:N 4/ 灰	口縁部～天井部	25%	
	150	C8	－	須恵器	蓋	(8.4)	－	－	(3.9)	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部～天井部	40%	
	151	E12	－	須恵器	蓋	(9.2)	－	－	(2.3)	内:N 5/ 灰 外:7.5Y 6/1 灰	口縁部～体部	20%	
	152	C1ＮＷ	Ⅲ	須恵器	蓋	(12.0)	－	－	(2.7)	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部	10%	
	153	B0ＳＷ	Ⅲ	須恵器	蓋	(8.7)	－	(10.4)	2.45	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部～体部	20%	
	154	B1ＮＥ	Ⅲ	須恵器	蓋	(8.2)	摘み径 1.6	(10.6)	2.4	内:2.5Y 5/1 黄灰 外:2.5Y 6/1 黄灰	口縁部～体部	30%	
	155	F13ＮＷ	Ⅲ	須恵器	蓋	(16.9)	摘み径 2.9	－	3.9	内:N 4/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部～体部	70%	
	156	E13	－	須恵器	蓋	(24.8)	－	－	2.3	内:5Y 5/1 灰 外:5Y 5/1 灰	口縁部～体部	10%	
	157	－	－	須恵器	蓋	(15.4)	－	(16.0)	2.3	内:7.5Y 6/1 灰 外:7.5Y 6/1 灰	口縁部～体部	10%	
	158	－	－	須恵器	坏身	13.1	－	15.7	4.5	内:N 5/ 灰 外:N 4/ 灰		完形	
	159	F14ＳＥ	Ⅲ	須恵器	坏身	－	－	(13.6)	(4.1)	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	体部～底部	30%	
	160	C2ＮＷ	Ⅲ	須恵器	坏身	(11.0)	－	(13.4)	(3.3)	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部～体部	10%	
	161	G15	－	須恵器	坏身	(12.8)	－	(15.8)	(3.0)	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部～体部	10%	
	162	B1ＳＥ	Ⅲ	須恵器	坏身	(12.0)	－	(14.0)	(3.9)	内:N 5/ 灰 外:N 6/ 灰	口縁部～体部	10%	
	163	－	－	須恵器	坏身	(12.0)	－	(14.1)	(3.0)	内:10Y 5/1 灰 外:10Y 5/1 灰	口縁部～体部	10%	
	164	C2N	2列トレンチ	須恵器	坏身	(8.7)	－	(10.6)	(3.4)	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部～底部	50%	
	165	－	－	須恵器	高坏	(12.7)	－	－	(4.2)	内:5Y 7/1 灰白 外:5Y 7/1 灰白	口縁部～体部	20%	
	166	C2ＳＥ	Ⅲ	須恵器	坏身	(12.4)	(7.0)	－	4.1	内:5Y 8/1 灰白 外:N 4/ 灰	口縁部～底部	20%	
	167	F13	Ⅱ	須恵器	高坏	(12.6)	－	－	(3.8)	内:5Y 7/1 灰白 外:5Y 7/1 灰白	口縁部～体部	10%	
	168	C6	Ⅱ	須恵器	坏	－	(8.0)	－	(1.6)	内:N 4/ 灰 外:N 3/ 暗灰	底部	30%	
41	169	C2ＮＥ	2列トレンチ	須恵器	高坏	－	－	－	(7.1)	内:N 4/ 灰 外:N 4/ 灰	口縁部	破片	
	170	B1ＮＥ	Ⅲ	須恵器	甕	－	－	－	(5.7)	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部	破片	
	171	F13	Ⅱ	須恵器	甕	－	－	－	(5.2)	内:2.5Y 6/1 黄灰 外:2.5Y 6/1 黄灰	口縁部	破片	
	172	B0ＳＥ	Ⅲ	須恵器	甕	－	－	－	(3.1)	内:5Y 5/1 灰 外:5Y 5/1 灰	口縁部	破片	
	173	B1ＮＥ	Ⅲ	須恵器	甕	－	－	－	(2.7)	内:5Y 6/1 灰 外:5Y 5/1 灰	口縁部	破片	
	174	C1ＮＷ	Ⅲ	須恵器	甕	－	－	－	(4.4)	内:7.5Y 4/1 灰 外:7.5Y 4/1 灰	口縁部	破片	
	175	B1ＳＥ	Ⅲ	須恵器	甕	－	－	－	(8.3)	内:5Y 5/1 灰 外:5Y 5/1 灰	口縁部	破片	
	176	－	－	須恵器	甕	－	－	－	(3.7)	内:N 5/ 灰 外:N 5/ 灰	口縁部	破片	
	177	C1ＮＷ	Ⅲ	須恵器	壺	－	(10.9)	(15.8)	(10.8)	内:N 6/ 灰 外:N 6/ 灰	胴部～底部	40%	
	178	C5	Ⅲ	須恵器	壺	－	12.6	－	(2.7)	内:5Y 5/ 灰 外:2.5Y 4/2 暗灰黄	底部	80%	
	179	G15	－	須恵器	壺	－	(17.4)	－	(4.3)	内:N 5/ 灰 外:N 4/ 灰	底部	10%	
	180	D9	Ⅱ	灰釉陶器	碗	－	(7.0)	－	(3.4)	内:2.5Y 8/1 灰白 外:2.5Y 8/1 灰白	底部	50%	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
41	181	C1NW	1列トレンチ	灰釉陶器	碗	－	(7.9)	－	(2.2)	内:2.5Y 7/2 灰黄 外:2.5Y 7/2 灰黄	底部	20%	
	182	B0SW	Ⅲ	灰釉陶器	碗	－	(7.8)	－	(1.6)	内:2.5Y 6/1 黄灰 外:2.5Y 6/1 黄灰	底部	20%	
	183	B1SE	Ⅲ	灰釉陶器	碗	－	(7.8)	－	(2.4)	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	底部	60%	
	184	D10	－	灰釉陶器	碗	－	(7.9)	－	(1.9)	内:2.5Y 7/1 灰白 外:2.5Y 7/1 灰白	底部	40%	
	185	C7	－	灰釉陶器	碗	－	(8.2)	－	(1.8)	内:2.5Y 8/1 灰白 外:2.5Y 8/1 灰白	底部	30%	
	186	－	－	灰釉陶器	小碗	－	(5.0)	－	(2.2)	内:7.5Y 7/1 灰白 外:7.5Y 7/1 灰白	底部	30%	
	187	D10	－	灰釉陶器	碗	－	(6.9)	－	(2.15)	内:7.5Y 7/1 灰白 外:7.5Y 7/1 灰白	底部	60%	
	188	C8	Ⅱ	灰釉陶器	碗	－	(7.0)	－	(3.3)	内:2.5Y 6/1 黄灰 外:2.5Y 6/2 灰黄	底部	40%	
	189	B1NE	Ⅲ	灰釉陶器	小碗	－	(5.4)	－	(1.4)	内:2.5Y 6/2 灰黄 外:2.5Y 6/2 灰黄	底部	70%	
	190	D10	－	中世陶器	片口鉢	－	－	－	(3.7)	内:10Y 5/1 灰 外:10Y 5/1 灰	口縁部	破片	東遠江産
	191	C3SW	Ⅲ	中世陶器	片口鉢	－	(10.7)	－	(3.2)	内:7.5Y 6/1 灰 外:10YR 5/1 褐	底部	20%	東遠江産
	192	C2SE	Ⅲ	山茶碗	小碗	－	(4.4)	－	(1.8)	内:5Y 7/1 灰白 外:7.5Y 6/1 灰	底部	20%	東遠江産
42	193	C5	Ⅲ	貿易陶磁	青白磁 梅瓶	－	－	－	(3.4)	内:10GY 7/1 明緑灰 外:10GY 7/1 明緑灰	体部	破片	
	194	C3NE	Ⅱ	貿易陶磁	青白磁 梅瓶	－	(6.6)	－	(3.5)	内:7.5GY 7/1 明緑灰 外:7.5GY 7/1 明緑灰	底部	10%	
	195	C3NE	Ⅱ	貿易陶磁	白磁 碗	－	－	－	(3.4)	内:10Y 8/1 灰白 外:10Y 8/1 灰白	体部	破片	
	196	C6NE	3列トレンチ	貿易陶磁	白磁 皿	－	(6.0)	－	(1.4)	内:10Y 8/1 灰白 外:10Y 8/1 灰白	体部～底部	10%	
	197	C3NE	Ⅲ	貿易陶磁	白磁 碗	－	(4.8)	－	(1.8)	内:10Y 8/1 灰白 外:10Y 8/1 灰白	底部	30%	
	198	B2SW	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 碗	－	－	－	(3.2)	内:10GY 7/1 明緑灰 外:10GY 7/1 明緑灰	口縁部	破片	
	199	C2NE	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 碗	－	－	－	(4.1)	内:7.5GY 6/1 緑灰 外:7.5GY 6/1 緑灰	口縁部	破片	
	200	B0SW	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 椀	(13.9)	－	－	(2.8)	内:5GY 5/1 緑灰 外:5GY 5/1 緑灰	口縁部～体部	10%	
	201	B1SE	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 碗	－	－	－	(3.1)	内:7.5GY 6/1 緑灰 外:7.5GY 6/1 緑灰	体部	破片	
	202	C1NW	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 折縁皿	(11.0)	－	－	(1.8)	内:5GY 6/1 オリーブ灰 外:5GY 6/1 オリーブ灰	口縁部	破片	
	203	C5	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 稜花皿	(10.6)	－	－	(1.9)	内:7.5GY 6/1 緑灰 外:7.5GY 6/1 緑灰	口縁部～体部	10%	
	204	C3SE	Ⅲ	貿易陶磁	青磁 盤	－	－	－	(3.2)	内:7.5GY 6/1 緑灰 外:7.5GY 6/1 緑灰	口縁部	破片	
	205	B0SE	Ⅲ	貿易陶磁	染付 皿	－	(3.2)	－	(1.2)	内:10Y 8/1 灰白 外:10Y 8/1 灰白	体部～底部	10%	
	206	C1SW	Ⅲ	貿易陶磁	染付 皿	－	－	－	(1.7)	内:7.5Y 8/1 明緑灰 外:7.5Y 8/1 明緑灰	底部	破片	
	207	B0NW	Ⅲ	中世 施釉陶器	灰釉平碗	(15.4)	－	－	(6.4)	内:5Y 6/3 オリーブ黄 外:2.5Y 7/2 灰黄	口縁部～体部	10%	
	208	C2NE	Ⅱ	中世 施釉陶器	緑釉小皿	(10.8)	－	－	(2.3)	内:2.5Y 6/4 にぶい黄 外:5Y 6/3 オリーブ黄	口縁部～底部	20%	
	209	C2SW	Ⅲ	近世 施釉陶器	耳付水注	－	－	(9.1)	(4.1)	内:2.5YR 3/3 暗赤褐 外:2.5YR 3/3 暗赤褐	頸部～体部	20%	
	210	B0NE	Ⅲ	中世 施釉陶器	折縁深皿	－	－	－	(2.6)	内:5Y 6/4 オリーブ黄 外:5Y 6/4 オリーブ黄	口縁部	破片	
	211	―	―	中世 施釉陶器	緑釉小皿	(11.3)	－	－	(1.9)	内:7.5Y 5/3 灰オリーブ 外:7.5Y 5/3 灰オリーブ	口縁部	10%	
	212	D3NW	Ⅲ	中世 施釉陶器	灰釉丸皿	(9.6)	(5.2)	－	2.5	内:7.5Y 4/3 暗オリーブ 外:7.5Y 4/3 暗オリーブ	口縁部～底部	10%	
	213	C1SW	Ⅲ	近世 施釉陶器	耳付水注	－	－	－	(3.8)	内:2.5Y 3/1 黒褐 外:2.5Y 3/1 黒褐	注口部	破片	
	214	C5	Ⅲ	中世 施釉陶器	卸皿	－	－	－	(3.9)	内:2.5Y 7/2 灰黄 外:2.5Y 7/2 灰黄	口縁部	破片	
	215	C2NW	Ⅲ	中世 施釉陶器	卸皿	－	(6.1)	－	(1.2)	内:2.5Y 7/3 浅黄 外:2.5Y 7/3 浅黄	体部～底部	10%	
	216	C2NE	Ⅱ	中世陶器	壺	－	－	－	(3.7)	内:10YR 4/1 褐灰 外:10YR 3/4 暗褐	口縁部	破片	常滑産
	217	C5	Ⅲ	中世陶器	甕	－	－	－	(6.3)	内:10YR 4/1 褐灰 外:5YR 3/2 暗赤褐	口縁部	破片	常滑産
	218	C2SE	Ⅲ	中世陶器	甕	－	－	－	(3.4)	内:7.5YR 3/1 黒褐 外:7.5YR 3/1 黒褐	口縁部	破片	常滑産
	219	C5	Ⅲ	中世陶器	甕	－	－	－	(5.1)	内:10YR 3/2 黒褐 外:10YR 3/2 黒褐	口縁部	破片	常滑産
	220	C3NE	Ⅲ	中世陶器	甕	－	－	－	(3.7)	内:10YR 5/2 灰黄褐 外:2.5Y 4/1 黄灰	口縁部	破片	常滑産
	221	C4SE	Ⅲ	中世陶器	甕	－	－	－	(4.3)	内:10YR 3/4 暗褐 外:10YR 3/4 暗褐	口縁部	破片	常滑産
	222	－	－	中世陶器	片口鉢	－	－	－	(6.3)	内:5YR 6/6 橙 外:5YR 6/6 橙	口縁部	破片	常滑産
	223	B1NE	Ⅲ	中世陶器	片口鉢	－	14.4	－	(8.3)	内:7.5Y 4/6 褐 外:5Y 5/6 明赤褐	体部～底部	30%	常滑産
	224	B0SW	Ⅲ	土師質 土器	かわらけ	10.3	6.0	－	3.1	内:5YR 5/6 明赤褐 外:5YR 5/6 明赤褐		完形	
	225	B0SW	Ⅲ	土師質 土器	かわらけ	10.3	6.0	－	3.0	内:7.5YR 5/4 にぶい褐 外:7.5YR 5/4 にぶい褐	口縁部～底部	80%	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
42	226	B1SE	Ⅲ	土師質土器	かわらけ	(7.3)	4.7	−	2.6	内:7.5YR 6/6 橙 外:7.5YR 6/6 橙	口縁部〜底部	70%	
	227	C3NE	Ⅲ	土師質土器	かわらけ	5.5	4.6	−	1.0	内:7.5YR 6/4 にぶい橙 外:7.5YR 6/4 にぶい橙		完形	
	228	C7	−	土師質土器	かわらけ	6.9	4.1	−	1.6	内:5YR 6/6 橙 外:5YR 6/6 橙		完形	
	229	C3NE	Ⅲ	土師質土器	かわらけ	9.2	5.3	−	2.2	内:5YR 5/4 にぶい赤褐 外:5YR 5/4 にぶい赤褐	口縁部〜底部	80%	
43	230	G15	−	近世施釉陶器	碗	−	(6.0)	−	(5.6)	内:2.5Y 5/4 黄褐 外:2.5Y 7.3 浅黄	体部〜底部	50%	
	231	C9	Ⅱ	近世施釉陶器	筒形碗	−	(3.8)	(8.0)	(6.8)	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	体部〜底部	30%	
	232	C5	Ⅲ	近世施釉陶器	筒形碗	−	(5.2)	−	(5.7)	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	体部〜底部	60%	
	233	−	Ⅲ	近世施釉陶器	腰錆茶碗	−	4.7	10.0	(5.8)	内:5Y 7/2 灰白 外:7.5YR 2/2 黒褐	体部〜底部	100%	
	234	C5	Ⅲ	近世施釉陶器	小杯	−	3.4	−	(4.2)	内:5Y 7/3 浅黄 外:5Y 7/3 浅黄	体部〜底部	80%	
	235	−	−	近世施釉陶器	小杯	(5.1)	2.8	−	3.5	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	口縁部〜底部	60%	
	236	D10	−	近世施釉陶器	小杯	(5.4)	(3.4)	−	3.0	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	口縁部〜底部	30%	
	237	C3NE	Ⅲ	近世施釉陶器	小杯	(6.2)	(3.2)	−	3.9	内:10YR 2/3 黒褐 外:2.5Y 6/4 にぶい黄	口縁部〜底部	50%	
	238	D9	Ⅱ	近世施釉陶器	小杯	5.8	2.9	−	3.6	内:7.5Y 7/2 灰白 外:7.5Y 7/2 灰白		完形	
	239	C2NW	Ⅲ	近世施釉陶器	小杯	−	(3.8)	−	(1.4)	内:5Y 7/2 灰白 外:5Y 6/1 灰	底部	20%	
	240	C2NE	Ⅱ	近世施釉陶器	志野皿	(11.6)	(6.6)	−	3.0	内:5Y 8/2 灰白 外:5Y 8/2 灰白	口縁部〜底部	30%	
	241	D9NW	Ⅱ	近世施釉陶器	鉄釉小皿	8.2	3.1	−	2.3	内:5YR 3/2 暗赤褐 外:5YR 5/6 明赤褐	口縁部〜底部	完形	
	242	C2NE	Ⅱ	近世施釉陶器	灰釉小皿	(13.2)	(7.9)	−	2.9	内:5Y 6/3 オリーブ黄 外:5Y 6/3 オリーブ黄	口縁部〜底部	40%	
	243	C2NE	Ⅱ	近世施釉陶器	灰釉小皿	9.6	6.2	−	1.5	内:5Y 8/3 淡黄 外:5Y 8/3 淡黄	口縁部〜底部	70%	
	244	B0SE	Ⅲ	近世施釉陶器	笹絵皿	(11.6)	(6.8)	−	2.3	内:5Y 6/3 オリーブ黄 外:5Y 6/3 オリーブ黄	口縁部〜底部	20%	
	245	−	Ⅲ	近世施釉陶器	片口	(16.4)	(10.0)	(17.0)	11.0	内:7.5YR 2/1 黒 外:7.5YR 2/1 黒	口縁部〜底部	30%	
	246	C6	Ⅱ	近世施釉陶器	片口	−	(6.3)	−	(6.8)	内:7.5Y 8/2 灰白 外:7.5Y 7/2 灰白	体部〜底部	60%	
	247	H15NW	Ⅱ	近世施釉陶器	筒形香炉	(11.4)	(9.1)	−	6.1	内:2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 外:2.5Y 3/3 暗オリーブ褐	口縁部〜底部	30%	
	248	D9	Ⅱ	近世施釉陶器	筒形香炉	(7.2)	(5.3)	−	3.3	内:2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 外:2.5Y 3/3 暗オリーブ褐	口縁部〜底部	20%	
	249	C1SW	Ⅱ	近世施釉陶器	灯明受皿	(9.8)	−	−	(1.9)	内:10R 2/2 極暗赤褐 外:10R 2/2 極暗赤褐	口縁部	10%	
	250	−	Ⅱ	近世施釉陶器	灯明具	(6.2)	(6.5)	−	4.3	内:2.5Y 4/3 オリーブ褐 外:2.5Y 4/3 オリーブ褐	口縁部	30%	
	251	D9	Ⅱ	近世施釉陶器	灯明具	(6.4)	(4.7)	−	4.6	内:2.5Y 5/6 黄褐 外:2.5Y 5/6 黄褐	口縁部	50%	
	252	C2SE	Ⅲ	近世施釉陶器	秉燭	−	4.1	−	(4.6)	内:2.5Y 3/3 暗オリーブ褐 外:7.5Y 5/3 灰オリーブ	体部〜底部	90%	
	253	C2NE	2列トレンチ	近世施釉陶器	秉燭	−	4.2	−	(3.1)	内:2.5Y 2/1 黒 外:2.5Y 6/3 にぶい黄	体部〜底部	100%	
	254	C2NW	Ⅲ	近世施釉陶器	秉燭	(3.9)	2.3	−	1.9	内:2.5 8/4 淡黄 外:5Y 8/3 淡黄	口縁部〜底部	70%	
	255	D9	Ⅱ	近世施釉陶器	秉燭	5.1	2.8	−	2.4	内:5Y 8/1 灰白 外:7.5Y 7/2 灰白	口縁部〜底部	完形	
	256	C2NE	Ⅱ	近世施釉陶器	仏餉具	−	5.1	−	(5.6)	内:7.5Y 7/1 灰白 外:7.5Y 7/1 灰白	体部〜底部	70%	
	257	C2SE	Ⅱ	近世施釉陶器	灰釉水滴	−	(3.9)	(6.6)	4.5	内:5Y 6/2 灰オリーブ 外:5Y 6/2 灰オリーブ	注口部〜底部	50%	
	258	D9	Ⅱ	近世施釉陶器	鉄釉壺	−	6.4	8.8	(6.8)	内:7.5YR 5/6 明褐 外:10YR 5/3 にぶい黄褐	体部〜底部	80%	
	259	D2SW	Ⅲ	近世施釉陶器	徳利	−	−	(10.7)	(6.3)	内:5Y 6/3 オリーブ黄 外:5Y 6/3 オリーブ黄	口縁部〜体部	20%	
	260	C2NE	Ⅱ	近世施釉陶器	徳利	−	5.4	−	(5.6)	内:2.5Y 8/4 淡黄 外:5Y 6/2 灰オリーブ	体部〜底部	50%	
	261	D10SW	Ⅱ	近世施釉陶器	油徳利	−	7.0	−	(13.7)	内:10YR 4/4 褐 外:10YR 4/4 褐	口縁部〜底部	80%	
44	262	D10	−	近世施釉陶器	擂鉢	−	−	−	(3.5)	内:5YR 3/1 黒褐 外:5YR 3/3 暗赤褐	口縁部	破片	
	263	C8	Ⅱ	近世施釉陶器	擂鉢	−	−	−	(3.9)	内:5YR 4/3 にぶい赤褐 外:5YR 4/3 にぶい赤褐	口縁部	破片	
	264	C3NE	Ⅲ	近世施釉陶器	鉢	(35.0)	−	−	(4.7)	内:2.5Y 7/2 灰黄 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部	10%	
	265	C5	Ⅲ	中世施釉陶器	擂鉢	(26.6)	−	−	(3.7)	内:2.5YR 3/1 暗赤灰 外:10YR 6/3 にぶい黄橙	口縁部	10%	
	266	C2N	2列トレンチ	近世施釉陶器	擂鉢	(34.6)	−	−	(10.0)	内:5YR 4/3 にぶい赤褐 外:2.5Y 8/1 灰白	口縁部	10%	
	267	C3NE	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	−	−	−	(3.4)	内:N 4/0 灰 外:N 4/0 灰	−	破片	
	268	C2SE	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	−	−	−	(3.0)	内:N 4.5/0 灰 外:N 4.5/0 灰	−	破片	
	269	C6	−	瓦質土器	火鉢	−	−	−	(5.9)	内:N 4.5/0 灰 外:N 4.5/0 灰	−	破片	
	270	C4NE	Ⅲ	瓦質土器	火鉢	−	−	−	(4.0)	内:5Y 5/1 灰 外:5Y 5/1 灰	−	破片	

図	報告書番号	遺構グリッド	層位	種別	器種	計測値（cm）				色調	部位	残存率	備考
						口径	底径	最大径	器高				
44	271	－	南区排水路	土製品	人形頭部	－	－	2.8	(3.4)	7.5YR 6/6 橙	頭部	100%	
	272	B1NE	1列トレンチ	土製品	土錘	全長 5.8	径 (4.1)	孔径 (1.5)	質量 57.9g	内:10YR 3/2 黒褐 外:10YR 3/2 黒褐	－	50%	
	273	B1SE	Ⅲ	土製品	円盤	径 4.4	厚さ 1.4			内:10YR 6/1 褐灰 外:10YR 6/1 褐灰	－	40%	
	274	C2N	2列トレンチ	瓦	丸瓦	－	－	－	(5.5)	内:5Y 2/1 黒 外:5Y 2/1 黒	－	破片	
	275	B0SE	Ⅲ	瓦	丸瓦	－	－	－	(7.0)	内:5Y 5.5/1 灰 外:5Y 5.5/1 灰	－	破片	
45	276	D10	－	磁器 染付	蓋	(9.6)	摘み径 (3.8)	－	3.0	内:2.5GY 8/1 灰白 外:10Y 7/2 灰白	口縁部～天井部	30%	
	277	D10	－	磁器 染付	蓋	(9.9)	摘み径 (3.8)	－	2.8	内:2.5GY 7/1 明オリーブ灰 外:7.5GY 7/1 明緑灰	口縁部～天井部	40%	
	278	C2SE	Ⅲ	磁器 染付	蓋	(12.0)	摘み径 (7.0)	－	3.1	内:N 8/0 灰白 外:N 8/0 灰白	天井部～体部	30%	
	279	C6	－	磁器 染付	蓋	(8.2)	摘み径 (3.5)	－	2.4	内:N 8/0 灰白 外:N 8/0 灰白	天井部～体部	80%	
	280	C5	Ⅲ	磁器 染付	蓋	(9.8)	摘み径 5.4	－	2.7	内:7.5GY 8/1 明緑灰 外:7.5GY 8/1 明緑灰	口縁部～天井部	80%	
	281	D10	－	磁器 染付	蓋	(9.6)	摘み径 5.2	－	2.9	内:N 8/0 灰白 外:N 8/0 灰白	口縁部～天井部	60%	
	282	C2SE	Ⅲ	磁器 染付	蓋	5.0	－	－	1.3	内:7.5Y 8/1 灰白 外:7.5Y 8/1 灰白	口縁部～天井部	80%	
	283	D9	Ⅱ	磁器 染付	丸碗	(9.8)	(4.3)	－	5.5	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	40%	波佐見産
	284	C8	Ⅱ	磁器 染付	丸碗	(9.8)	－	－	(5.2)	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	40%	
	285	C2NE	2列トレンチ	磁器 染付	丸碗	－	5.0	－	(6.2)	内:10Y 6/1 灰 外:10Y 6/1 灰	体部～底部	50%	瀬戸美濃産
	286	C2N	2列トレンチ	磁器 染付	筒形碗	6.2	3.2	－	5.4	内:7.5GY 8/1 明緑灰 外:7.5GY 8/1 明緑灰		完形	
	287	C3NE	Ⅱ	磁器 染付	筒形碗	(7.4)	(3.6)	－	5.1	内:2.5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	40%	
	288	D10	－	磁器 染付	筒形碗	(7.4)	(4.2)	－	6.5	内:7.5Y 7/2 灰白 外:5GY 7/1 明オリーブ灰	口縁部～底部	50%	
	289	D10	－	磁器 染付	筒形碗	(8.0)	(4.4)	－	6.8	内:5GY 8/1 灰白 外:10GY 7/1 明緑灰	口縁部～底部	40%	
46	290	C5	Ⅲ	磁器 染付	広東碗	(11.2)	(5.9)	－	6.1	内:2.5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～体部	30%	
	291	D2SW	Ⅲ	磁器 染付	広東碗	(10.8)	(6.4)	－	6.4	内:2.5GY 7/1 明オリーブ灰 外:2.5GY 7/1 明オリーブ灰	口縁部～底部	30%	
	292	C3NE	Ⅱ	磁器 染付	広東碗	－	5.5	－	(3.4)	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	底部	90%	
	293	－	－	磁器 染付	端反碗	(9.4)	(3.8)	－	5.3	内:N 8/0 灰白 外:N 8/0 灰白	口縁部～底部	30%	
	294	C4NE	Ⅲ	磁器 染付	端反碗	(9.2)	(3.6)	－	4.4	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	30%	
	295	C2NE	Ⅱ	磁器 染付	蕎麦猪口	(6.9)	(5.4)	－	6.0	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	30%	
	296	C2NW	Ⅱ	磁器 染付	小杯	(6.5)	(2.3)	－	3.9	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	20%	
	297	D4NW	Ⅲ	磁器 染付	小杯	(7.1)	(3.0)	－	3.9	内:N 8/0 灰白 外:N 8/0 灰白	口縁部～底部	20%	
	298	－	－	磁器 染付	小杯	7.3	2.8	－	3.5	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	80%	
	299	D9	Ⅱ	磁器 染付	小杯	6.6	2.6	－	2.9	内:N 8/0 灰白 外:N 8/0 灰白	口縁部～底部	完形	
	300	－	Ⅱ	磁器 染付	皿	(13.6)	(5.2)	－	2.8	内:7.5GY 8/1 明緑灰 外:7.5GY 8/1 明緑灰	口縁部～底部	20%	
	301	C3NE	Ⅲ	磁器 染付	小皿	(9.8)	(5.2)	－	2.1	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	30%	
	302	D9	Ⅱ	磁器 染付	皿	(11.8)	(5.9)	－	2.6	内:10GY 8/1 明緑灰 外:10GY 8/1 明緑灰	口縁部～底部	30%	
	303	C2SE	Ⅲ	磁器 染付	瓶	(3.4)	－	－	(12.0)	内:10YR 7/3 にぶい黄橙 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～胴部	60%	
	304	C2SE	Ⅲ	磁器 染付	瓶	1.7	－	－	(11.3)	内:5Y 8/1 灰白 外:7.5GY 8/1 明緑灰	口縁部～胴部	70%	
	305	C1SW	Ⅱ	磁器 染付	仏飯器	(7.0)	4.2	－	6.5	内:2.5GY 8/1 灰白 外:10BG 5/1 青灰	口縁部～底部	40%	
	306	C8	Ⅱ	磁器 染付	仏飯器	－	3.5	－	(5.2)	内:2.5GY 7/1 明オリーブ灰 外:2.5GY 7/1 明オリーブ灰	体部～底部	100%	
	307	C5	Ⅲ	青磁	香炉	(12.8)	－	－	(2.9)	内:10GY 7/1 明緑灰 外:5Y 8/1 灰白	口縁部	20%	
	308	C2NE	2列トレンチ	白磁	紅皿	2.4	1.0	－	1.2	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	完形	
	309	C2SW	Ⅲ	白磁	紅皿	3.9	1.6	－	2.3	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	90%	
	310	D3SW	Ⅲ	白磁	合子身	4.0	2.4	4.6	1.6	内:2.5GY 8/1 灰白 外:2.5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	50%	
	311	C2NE	Ⅱ	磁器 色絵	餌入れ	(3.9)	(3.0)	－	2.3	内:5GY 8/1 灰白 外:5GY 8/1 灰白	口縁部～底部	20%	摘み径0.8 摘み幅0.4
	312	－	－	ガラス 製品	牛乳瓶	2.2	4.2	－	11.8	－		完形	容量90ml （5勺瓶）

（２）木製品（第47～71図）

工具　１は鋸の柄であろう。先端に鋸部を装着し、穿孔された孔に釘等で固定したと考えられる。柄は縦に半裁された形で出土しており、先端はやや細くなるよう削られている。

農工土木具　２～４は平鍬の直柄鍬身である。全体的に流磨が激しく、刃部の装着痕などは不明である。３は柄の先端が折れて装着されたままの状態で出土している。

編み具・紡織具　５は糸巻具の糸巻の横木と考えられる。中央に径5.5cmの穿孔を施し、両端を突起状に削りだしている。６・７は糸巻具糸枠を構成する支え木である。６は腕木との接合部に釘孔がみられる。８は紡錘車の紡輪である。

服飾具　９～48は下駄である。９～32・34は一木造りの連歯下駄である。９～16・18は平面形が方形となる角型の下駄で、17・20～32は平面形が小判形となる丸型の下駄である。歯の下面は使用による摩滅が進むものが多く、11は後歯がすり減ったため、切込みを追加した歯を差し込んで補修している。12は長さ14.1cmと小さいため子供用かと思われる。大半の下駄は後緒穴が後歯の前方に穿たれるが、15は後歯の後方となっている。36～39は連歯下駄であるが、歯の部分が別部材で組み合わされる。37・39は歯が残存する。40は台に歯のホゾ穴が露出する露卯下駄の歯であろう。35･41～45･47は無歯の下駄で、いわゆる草履下駄と呼ばれるものである。前壺、後緒穴の位置にはそれぞれ２つの穴が穿たれ、その中には木釘が残存していた。木釘によって鼻緒を固定していたものと思われる。台の表には表地が貼られたとみえ、鋲の痕跡が残る。33・46・48は無歯の下駄で、刳り下駄に属するものであろう。下駄の下面が方形に抉られた木履とされるもので、48は長さ14.4cmと小型であるため子供用と思われる。

49は横櫛で、１cmあたりの歯の本数は７本とかなり密である。50～52は傘の轆轤である。50・52は頭轆轤、51は手元轆轤とみられ、50は54本、51は55本の骨受けの溝が確認される。50には竹製の柄が残存しており、木釘で固定される様子が窺える。

容器　53～55は漆椀の蓋である。上面に蔓や家紋を蒔絵や朱漆によって描いている。56～74は漆椀である。56・58・59・62・64は浅い形態の碗で、器壁は薄くつくられる。57の違い鷹の羽や58の抱き柊といった家紋を描くものが見受けられる。57・60・63は器壁が厚く、深めの椀で、家紋や植物を漆描きする。67は底部が箱形で浅い形態の平椀で植物が描かれる。68・70・72は深い形態で高台も高くなる。70は高台内に文字が書かれるが、判読は困難である。75・76・78・79は挽き物の皿で、漆がかからない木地皿である。77は柄杓の杓とみられる。竹製で、節が底になるように製作され、側面下方には柄の先端が残存する。81は黒漆が塗られ、高台が厚く、体部がほぼ直線的に立ち上がる特異な形態の容器である。

82・83は曲物の側板である。いずれも樺紐によって薄板をとじる。86は箱の底板である。84・85・87～89は桶の側板である。85と86は組み合う同一個体のもので、木釘によって結合される。87は外面に数条のタガの圧痕が残り、88・89は上部に切込みが入る。90～126は曲物の底板（蓋板）である。90～109は蓋板、110～126は底板とみられ、大小様々な大きさがある。中央に穿孔されるものや樺紐が残存するものが多く、97や109のように把手を取り付けた跡が残る場合もある。大型品は部材を木釘によって繋いで製作する。99には中央に判読不明の焼印があり、102の中心部に銅線の両端を差し込んで把手としている。127～130は容器の栓である。131は容器の把手とみられ、木釘が残存する。

食事具　132～143は箸である。調査区内では多量の箸が出土しているが、ここではその一部を図示している。簡素な白木の箸である。144～146は膳で、いずれも漆塗りの製品である。144は組み合う側板で、結合部を木釘で留めている。145は脚部、146は側板であるが、やはり結合面に木釘が残存する。

調度　147は両端を脚状に加工し、上面中央部を削って窪ませている。何らかの調度品の可能性がある。

遊戯具　148は羽子板である。柄の部分は欠損している。表面は丁寧に平滑化され、羽子をついた痕跡は見えない。149～151は独楽である。いずれも芯持材を削り出して製作され、中央には貫通孔がある。

建築部材　152～155は鴨居あるいは敷居の部材であろう。152は上部に溝が入れられ、中央には貫通孔があけられる。155は側面に鋸による加工の痕跡がみられる。156は建築部材同士を組み合わせる際に差し込まれる結合補助材であろう。157は大半が焼けているため形状が明らかではないが、上部の加工状況から、建築部材の一部と考えられる。

土木材　158・159は柵材である。地面に打ち込むため、板の先端を尖らせる。159は４箇所の貫通孔が認められる。160～169は杭である。旧河川の護岸に使用されたもので、丸太の先端を粗く尖らせている。

葬具　170は木製卒塔婆である。下端は地面に刺すため尖らせ、上端は平らに加工する。表面には文字などの痕跡は認められない。171は位牌である。脚部を削りだした台座で、中央に板状の部材が差し込まれるが、これは牌身部と台座の結合材とみられ、牌身は失われている。塗りの痕跡は認められない。

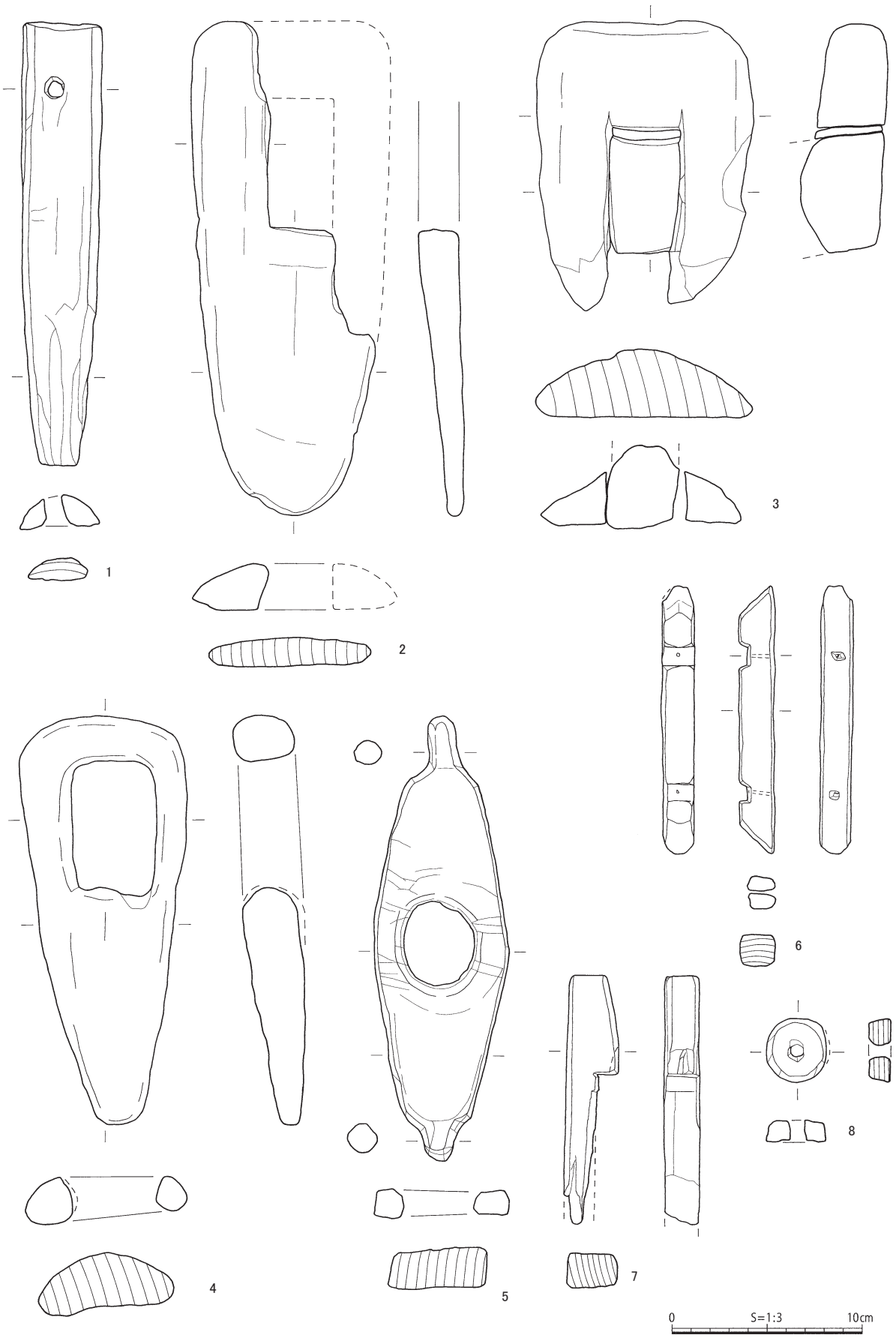
用途不明品　172～217は用途不明品である。172は「会」の墨書があり、札のようなものと思われる。173・174は有孔円盤で紡錘車とみられる。175は有孔板である。180は上部が一部欠損する。何らかの飾り板の一部であろうか。183～185・190は切欠きや木釘、180～189・191～194・197は貫通孔があることから組み合う部材の一部とみられる。195は箱状製品の側板かと思われ、木釘が残る。199は湾曲する方形板の中央に貫通孔が設けられる。200～206は比較的大型の加工材で、ホゾやホゾ孔の加工がみられることから、建築材などの部材の一部かと思われる。207は先端を粗く削って尖らせ、中央に方形の貫通孔を入れる。208は一方を細く削り、その先端を丸くおさめ、一方の幅広部に貫通孔をあける。209～212・214も切欠きがみられるため、組み合う部材の一部とみられる。215・217は棒状の加工材で、215は先端を細くホゾ状に削り出し､217は両端を平らに加工している。216は先端部を中心に一部炭化する。

（３）石器・石製品（第72図）

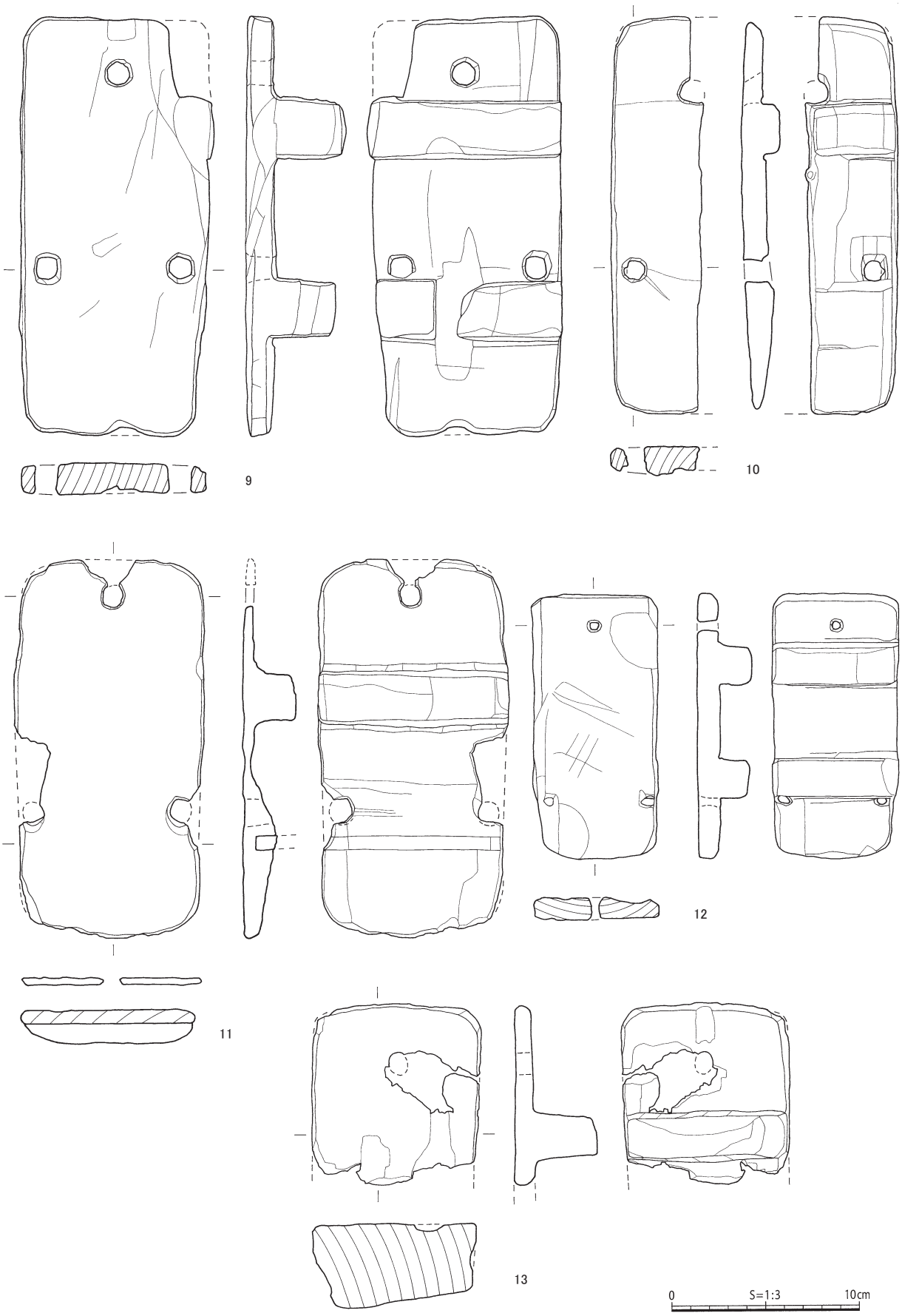
１は閃緑岩製の太型蛤刃の磨製石斧である。刃先を中心に丁寧に磨かれ、柄の装着部付近は細かい敲打痕が残る。２・３は白色凝灰岩製の砥石である。砥面はかなり使い込まれているが、裏面は切り出した工具痕がそのまま残る。４は蛇紋岩製の石製紡錘車、５は流紋岩を使用した用途不明の有孔石製品である。

（４）金属製品（第72図）

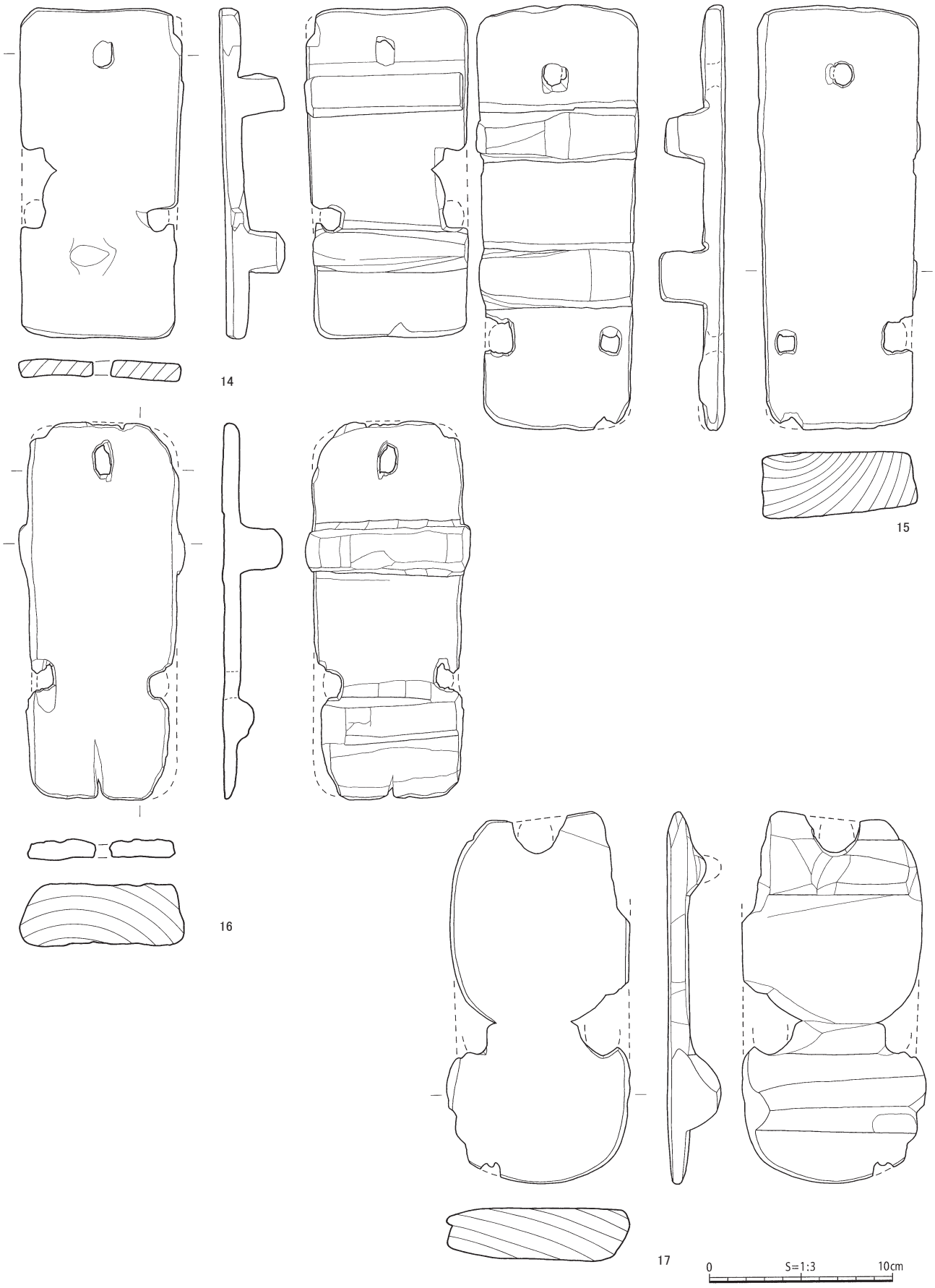
６は銅製の小形仿製鏡で、面径は6.4cmである。鏡背は縁側から幅１cmの平縁、幅0.4cmの直行櫛歯文様帯と３条の円圏によって重圏文が施文される。中央の半球形の鈕には貫通孔２通がそれぞれの一部を重ねながら穿孔される。静岡県下で同様の直行櫛歯文様帯を持つ重圏文鏡は静岡市清水区長崎遺跡、焼津市小深田西１号墳の出土例が知られ、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される。７は袋状鉄斧である。刃先は欠損し、柄との装着部には木質が残存する。８は匙である。円形の匙に細い柄をつけた形状で、薄い板を打ち出して製作する。９はキセルの雁首、10・11は吸口である。９・10には羅宇の木質が残存する。12～14は寛永通寶で、いずれも新寛永である。15は天保通寶である。



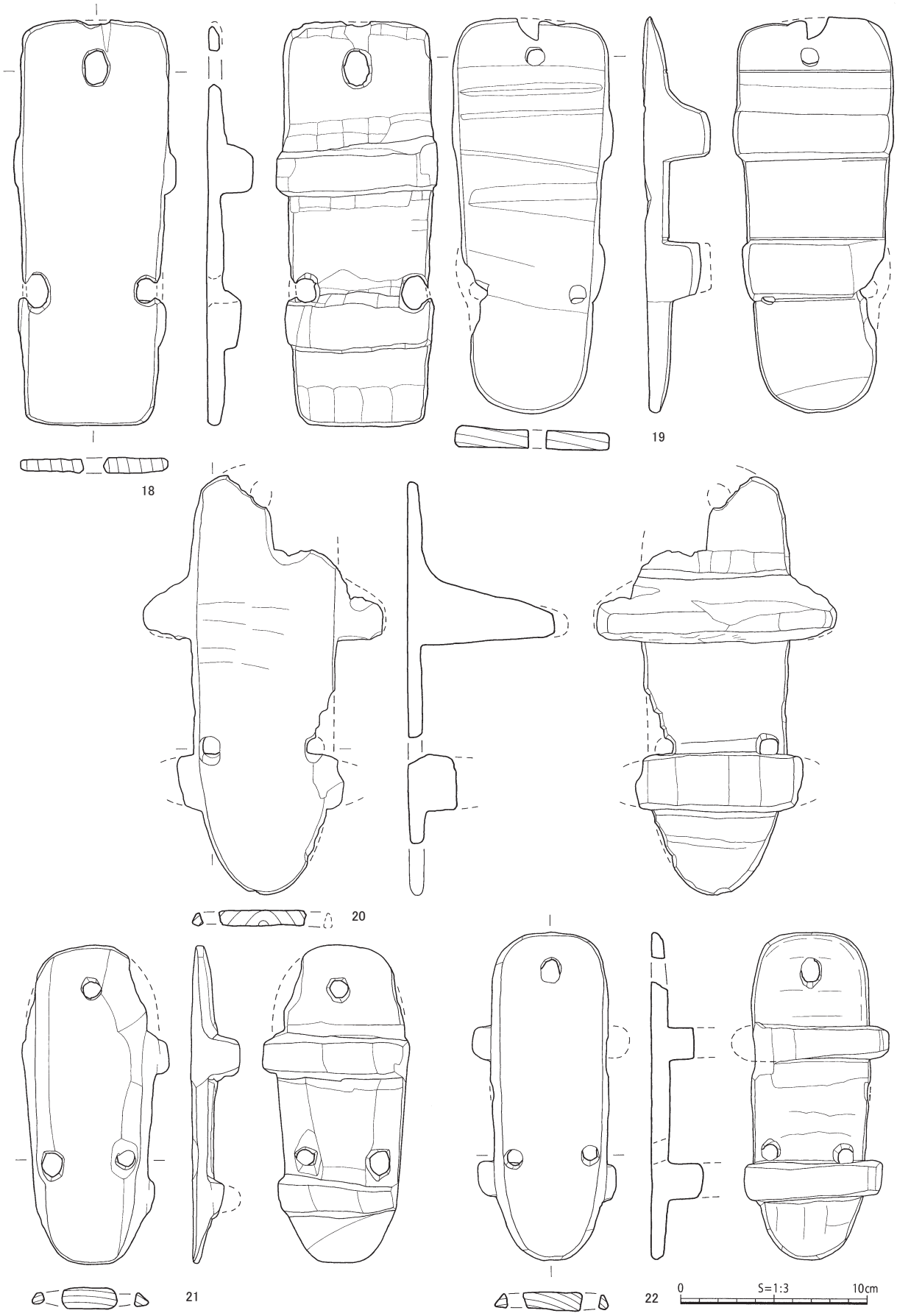
第47図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図20（木製品）



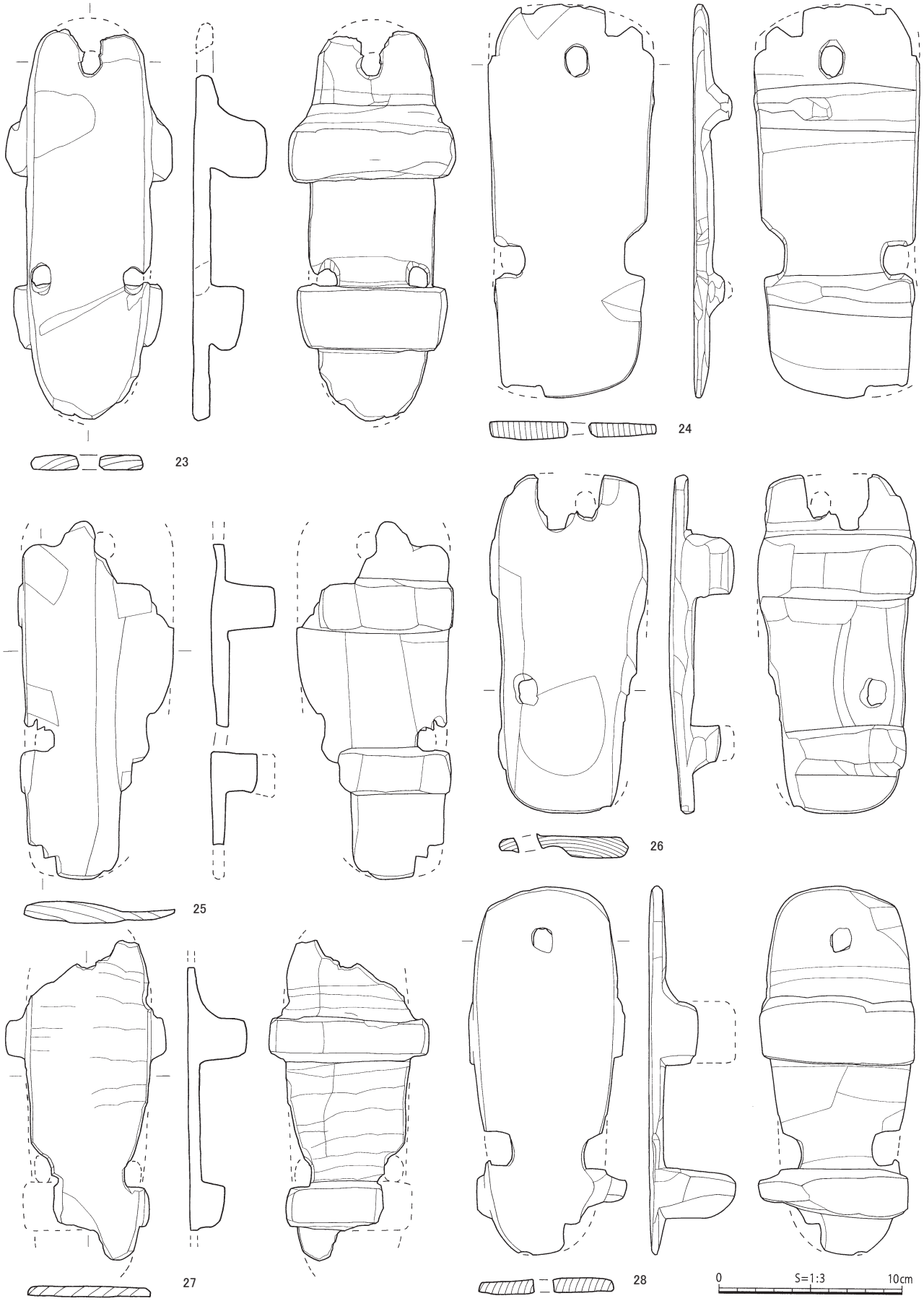
第48図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図21（木製品）



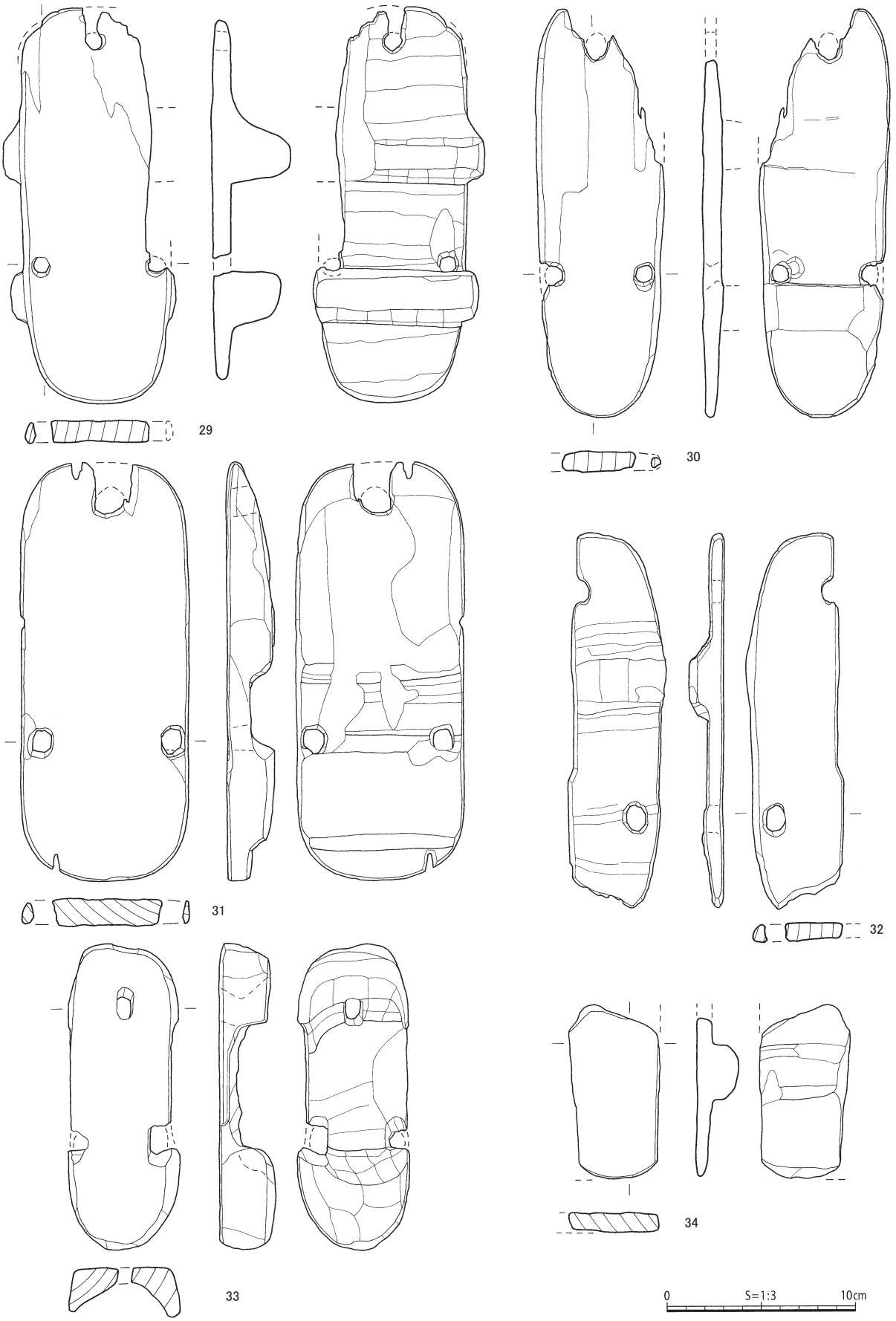
第49図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図22（木製品）



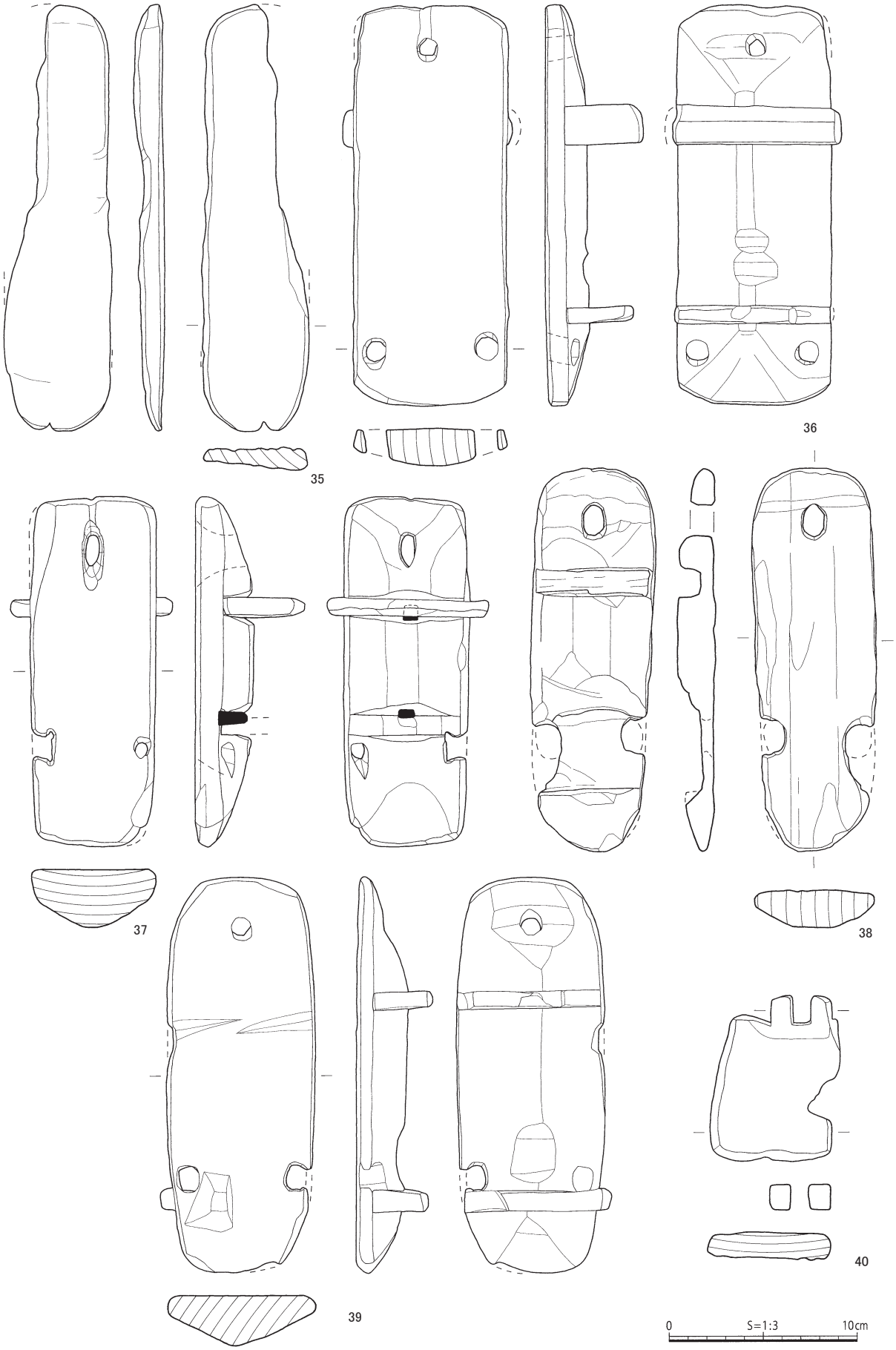
第50図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図23（木製品）



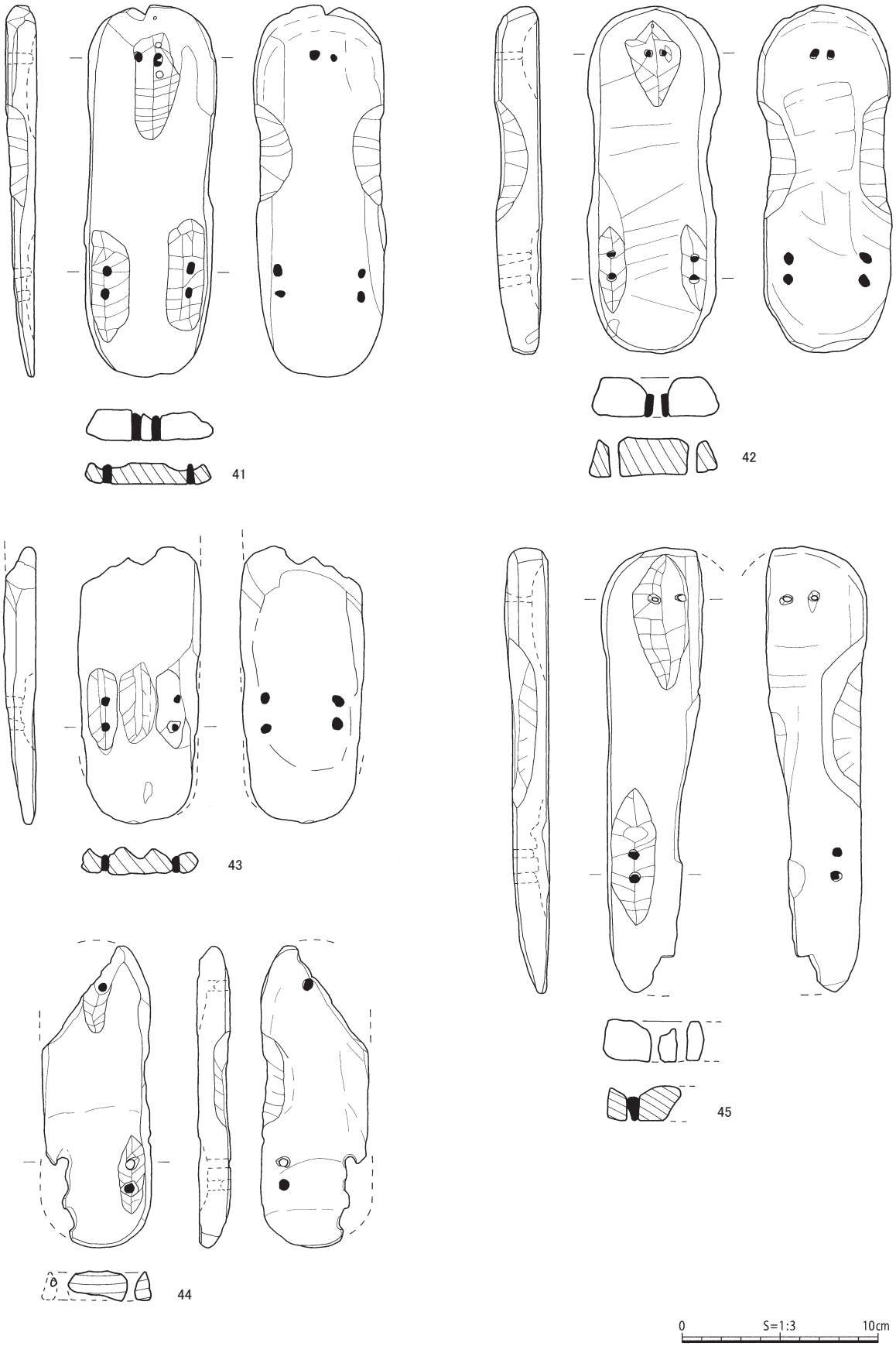
第51図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図24（木製品）



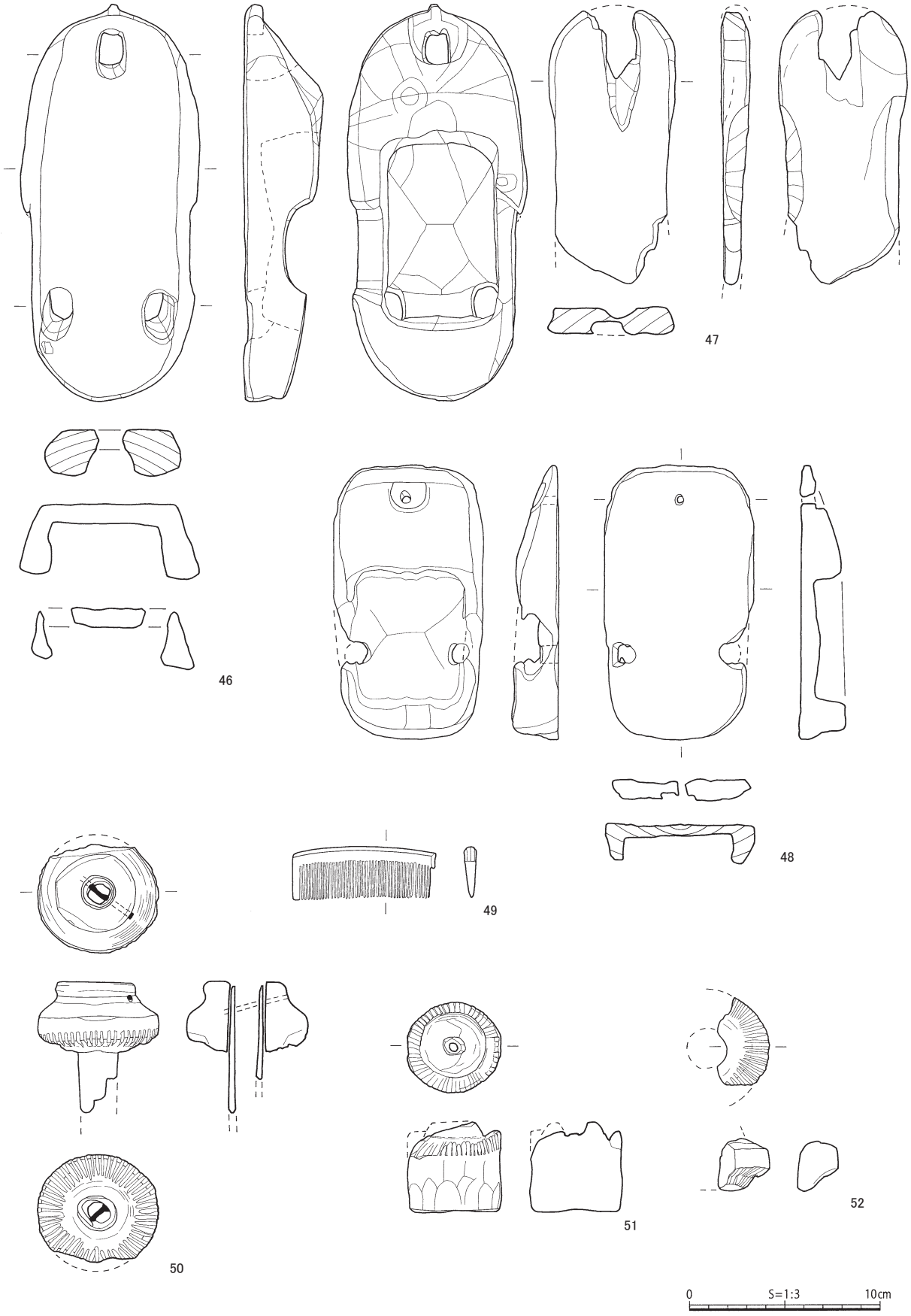
第52図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図25（木製品）



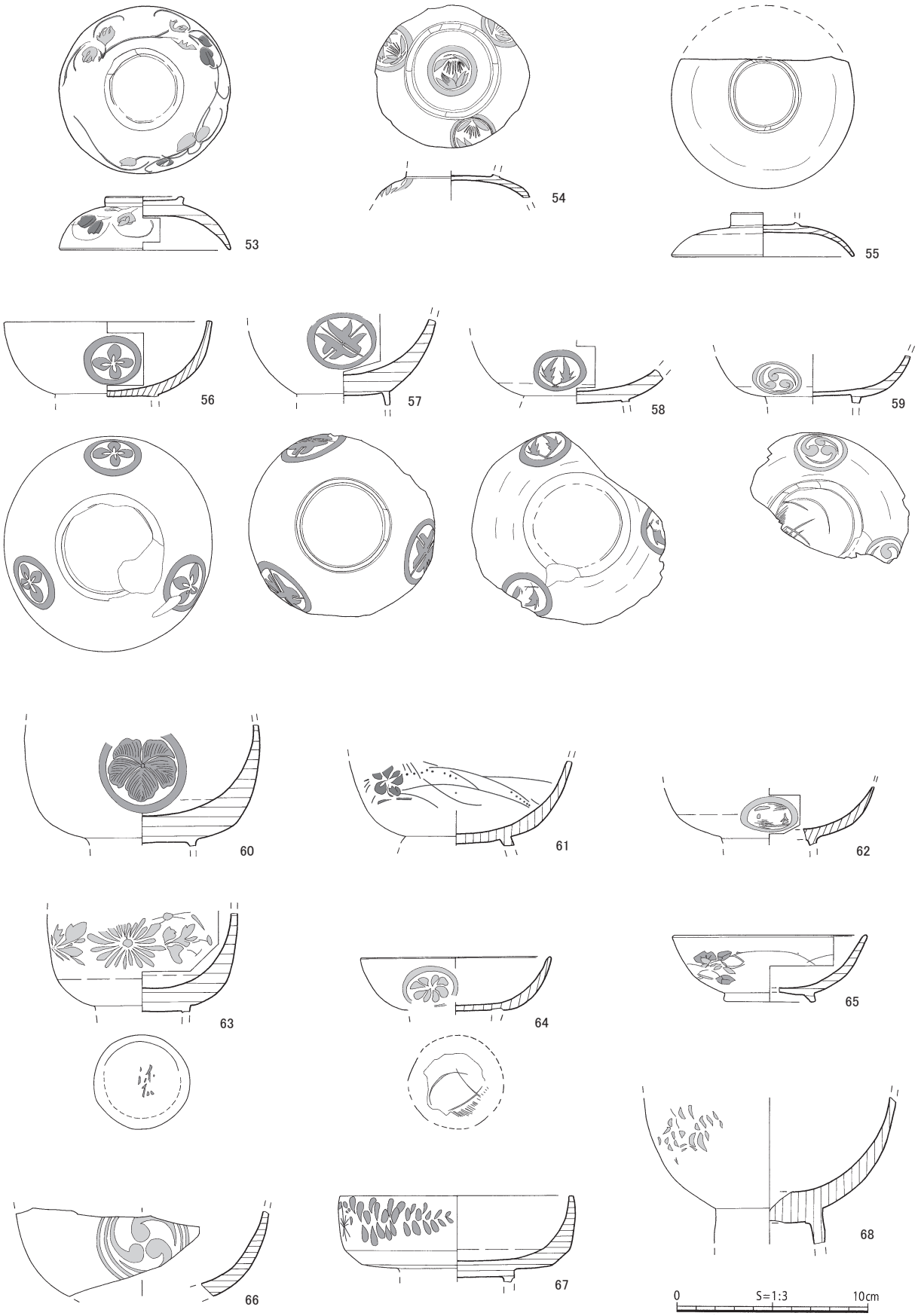
第53図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図26（木製品）



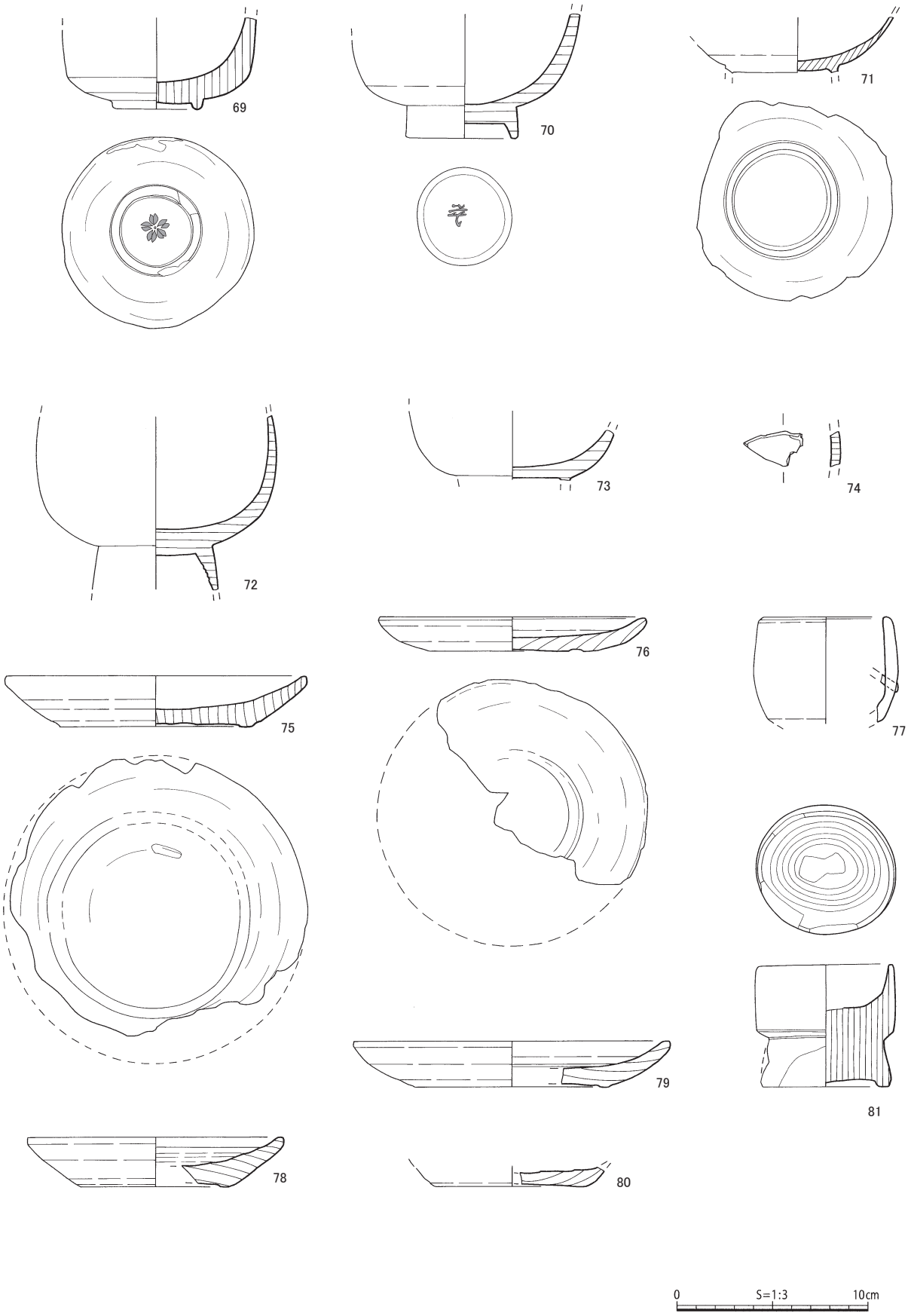
第54図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図27（木製品）



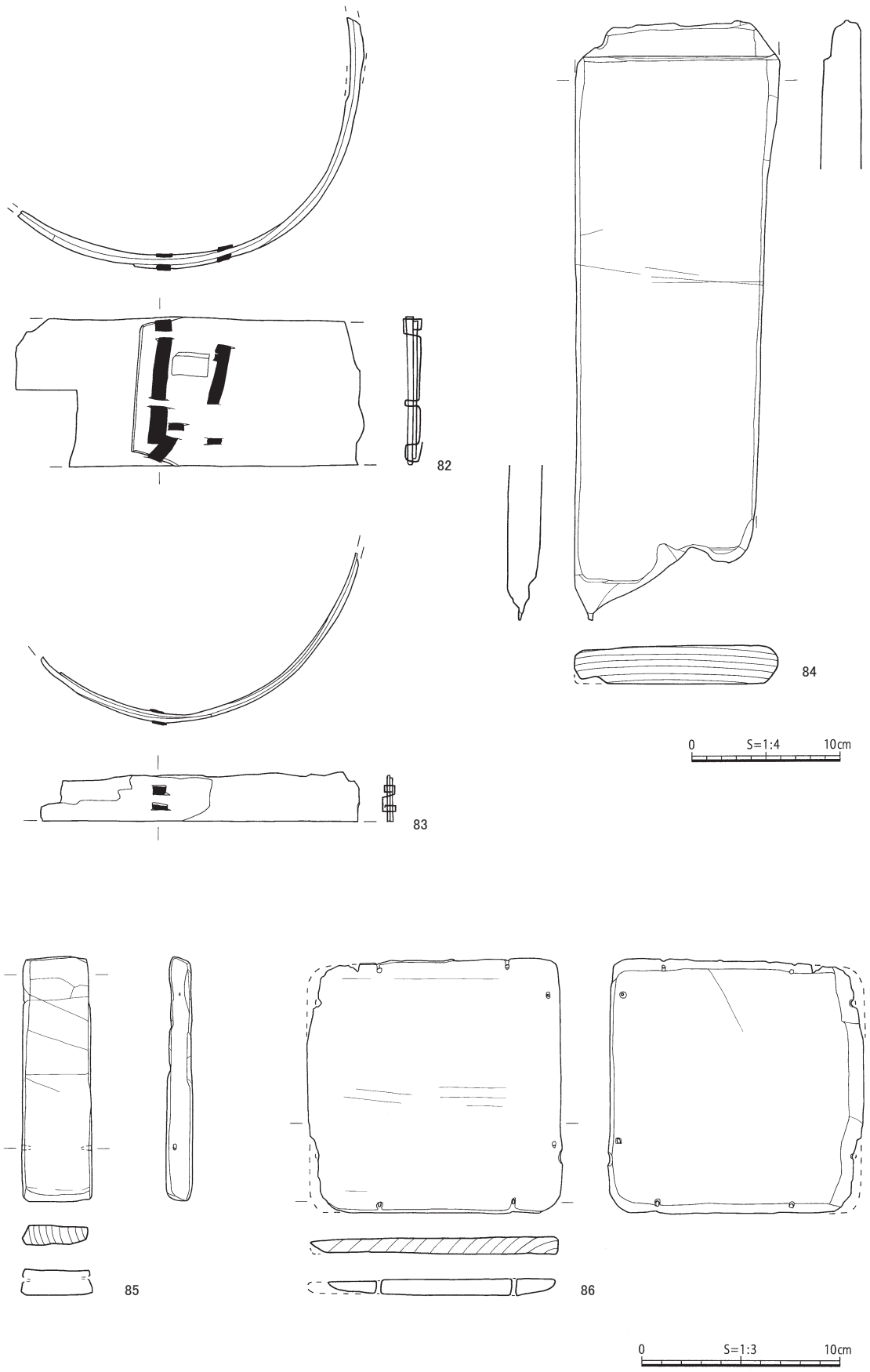
第55図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図28（木製品）



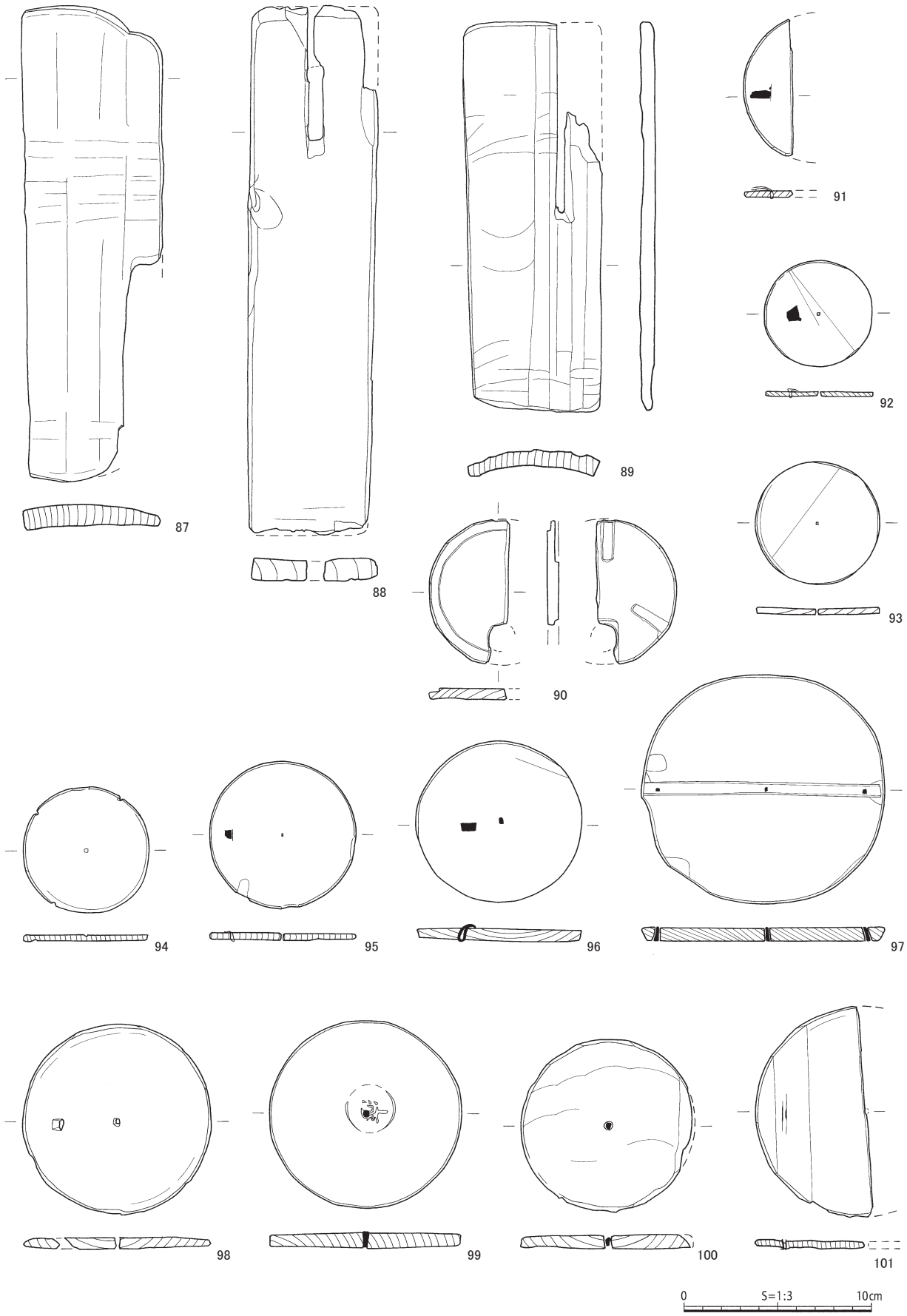
第56図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図29（木製品）



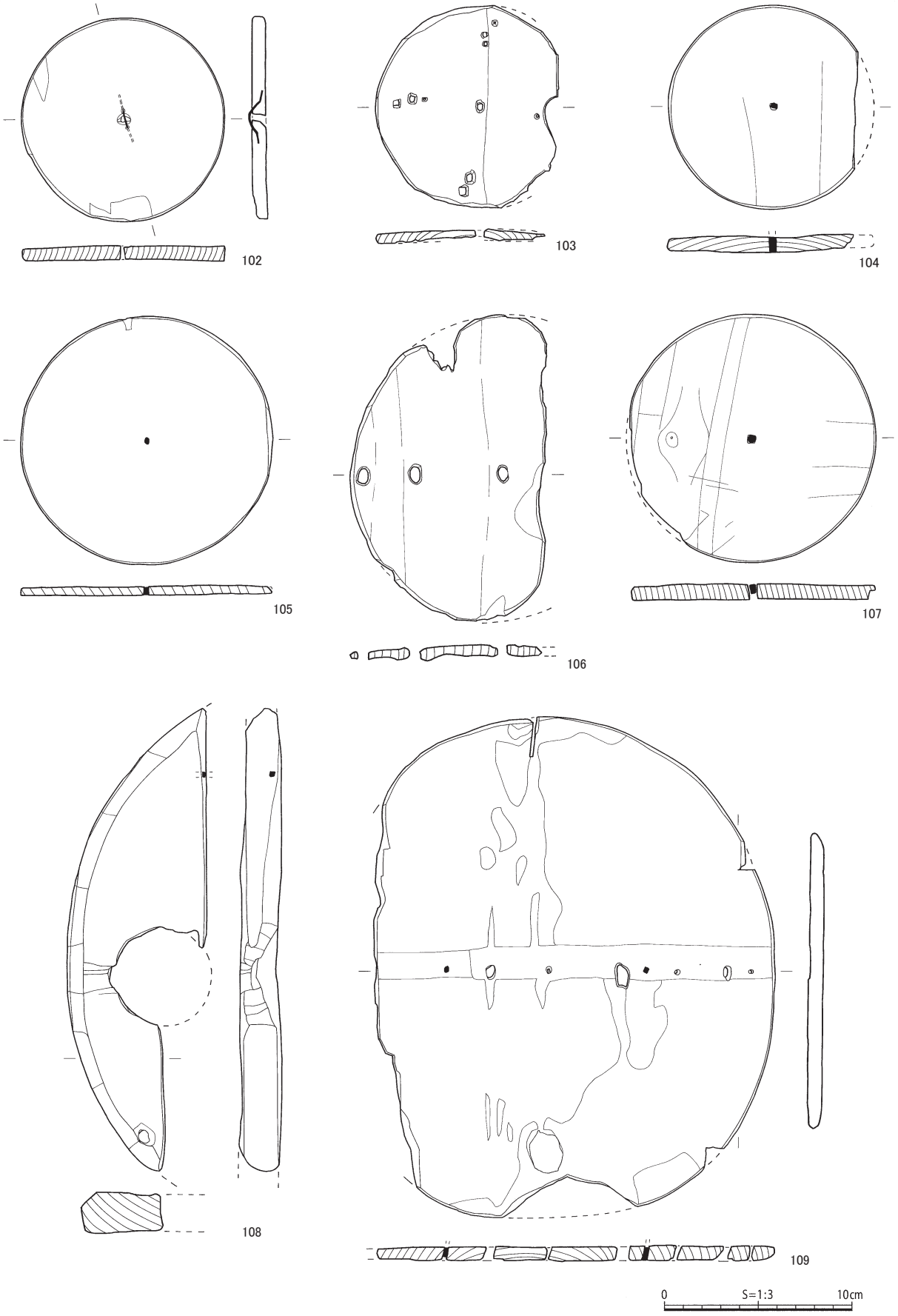
第57図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図30（木製品）



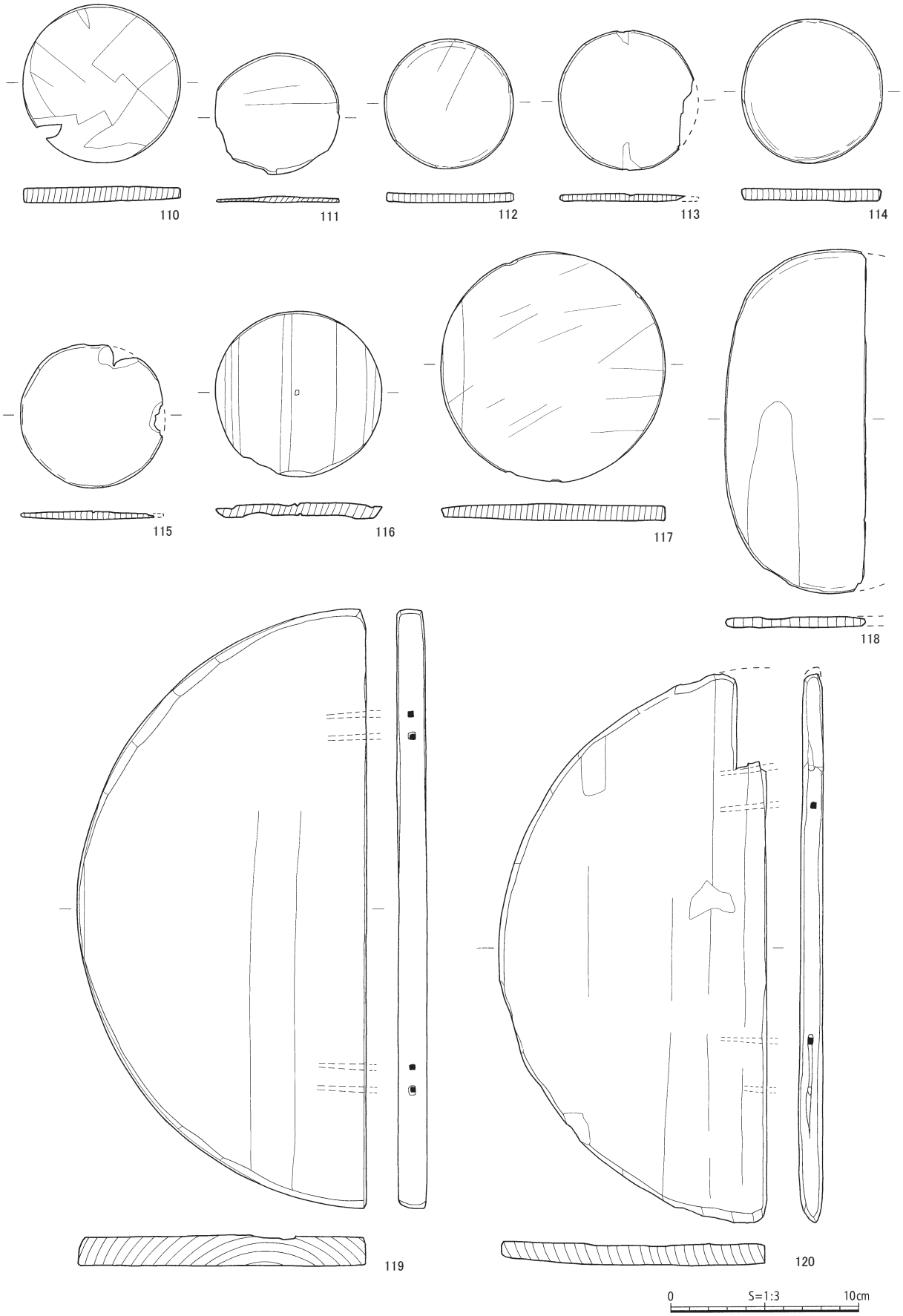
第58図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図31（木製品）



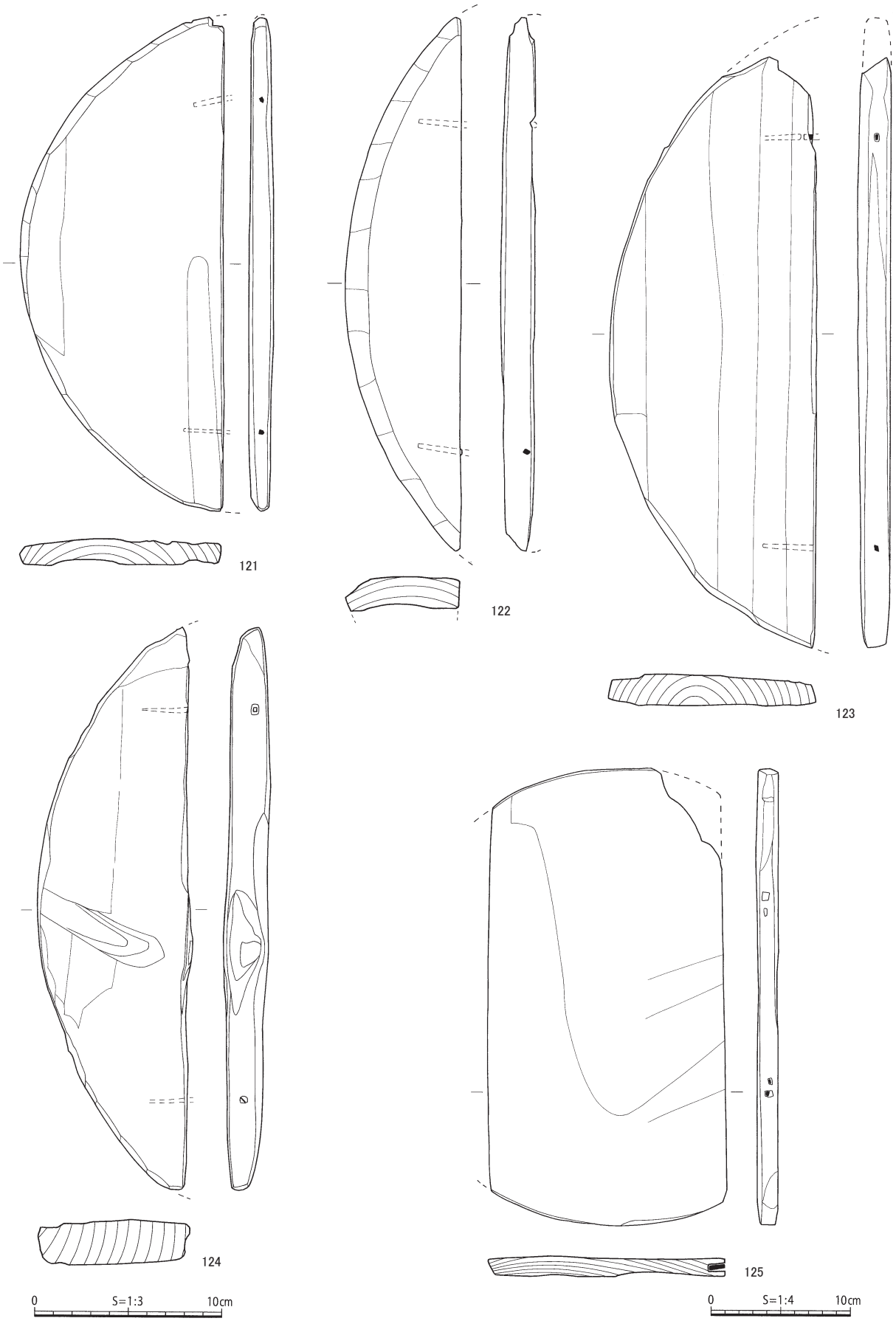
第59図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図32（木製品）



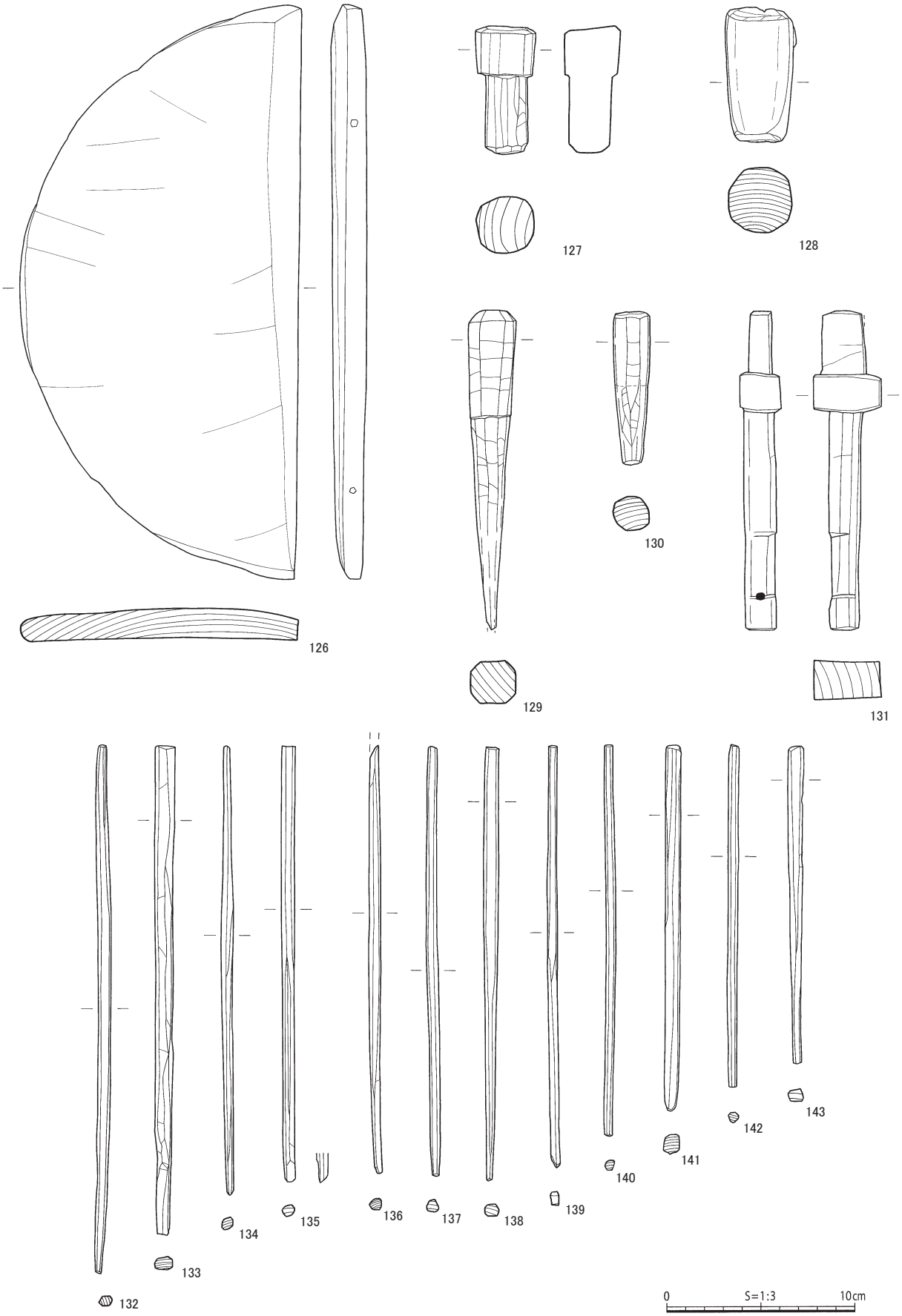
第60図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図33（木製品）



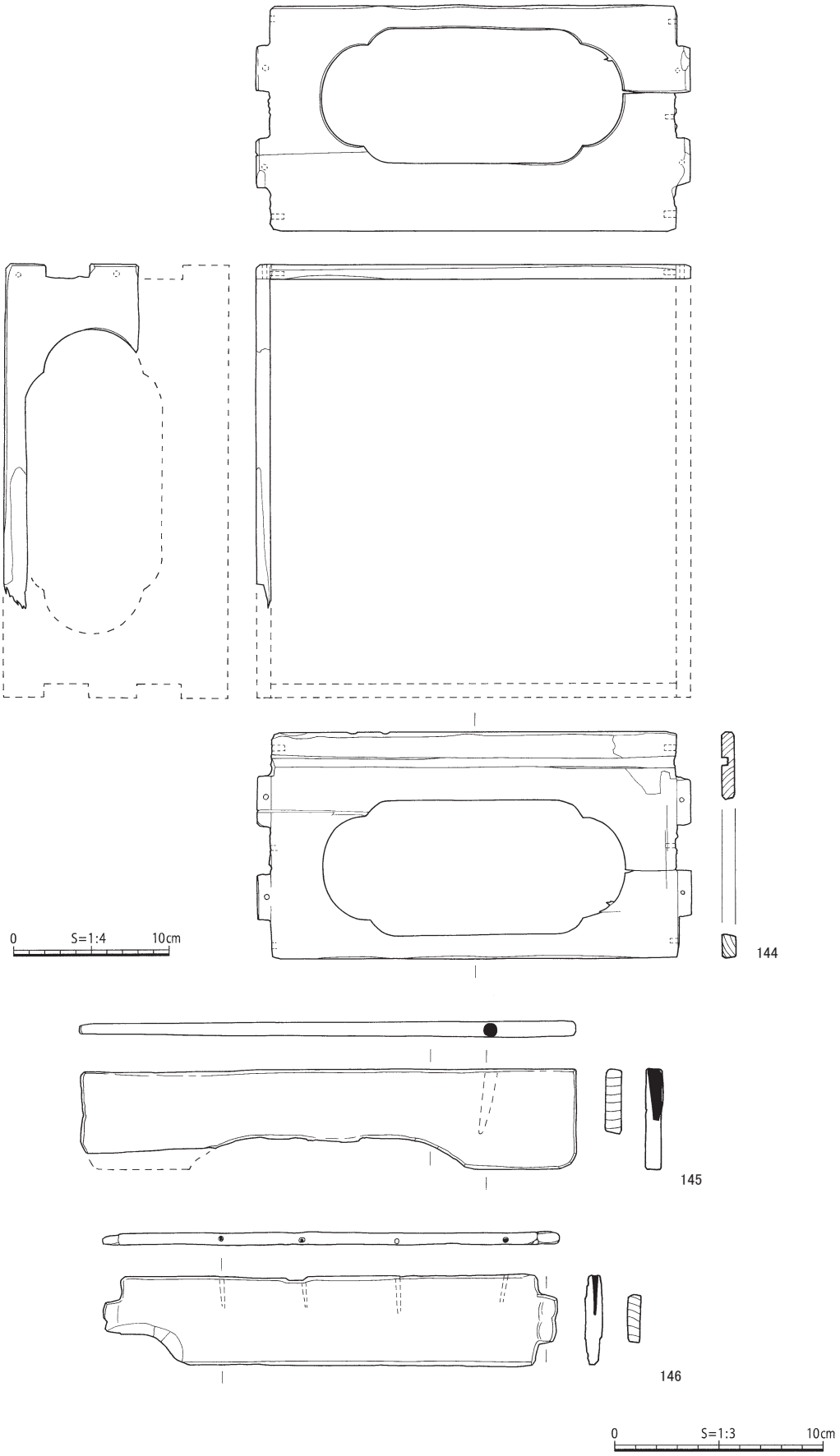
第61図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図34（木製品）



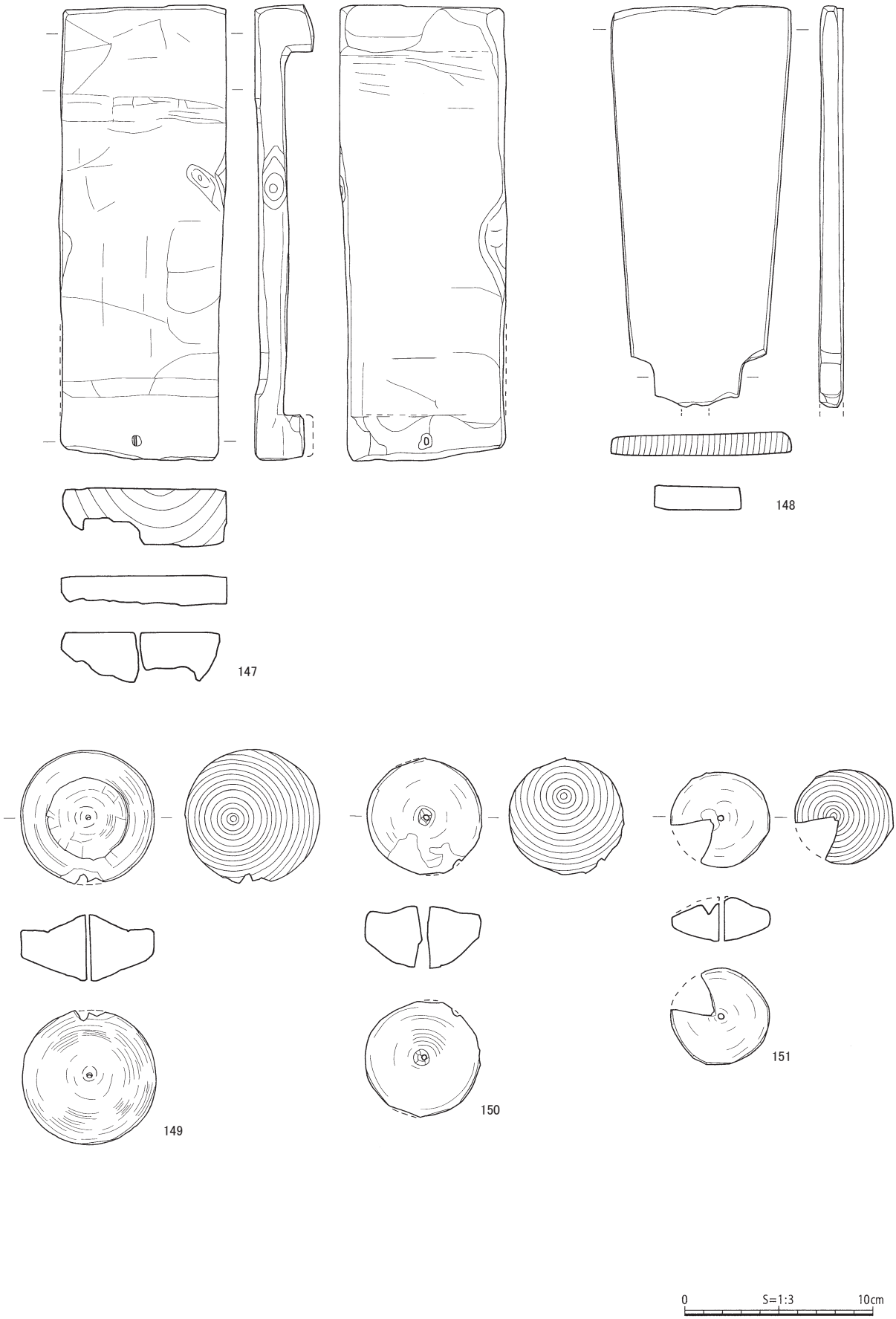
第62図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図35（木製品）



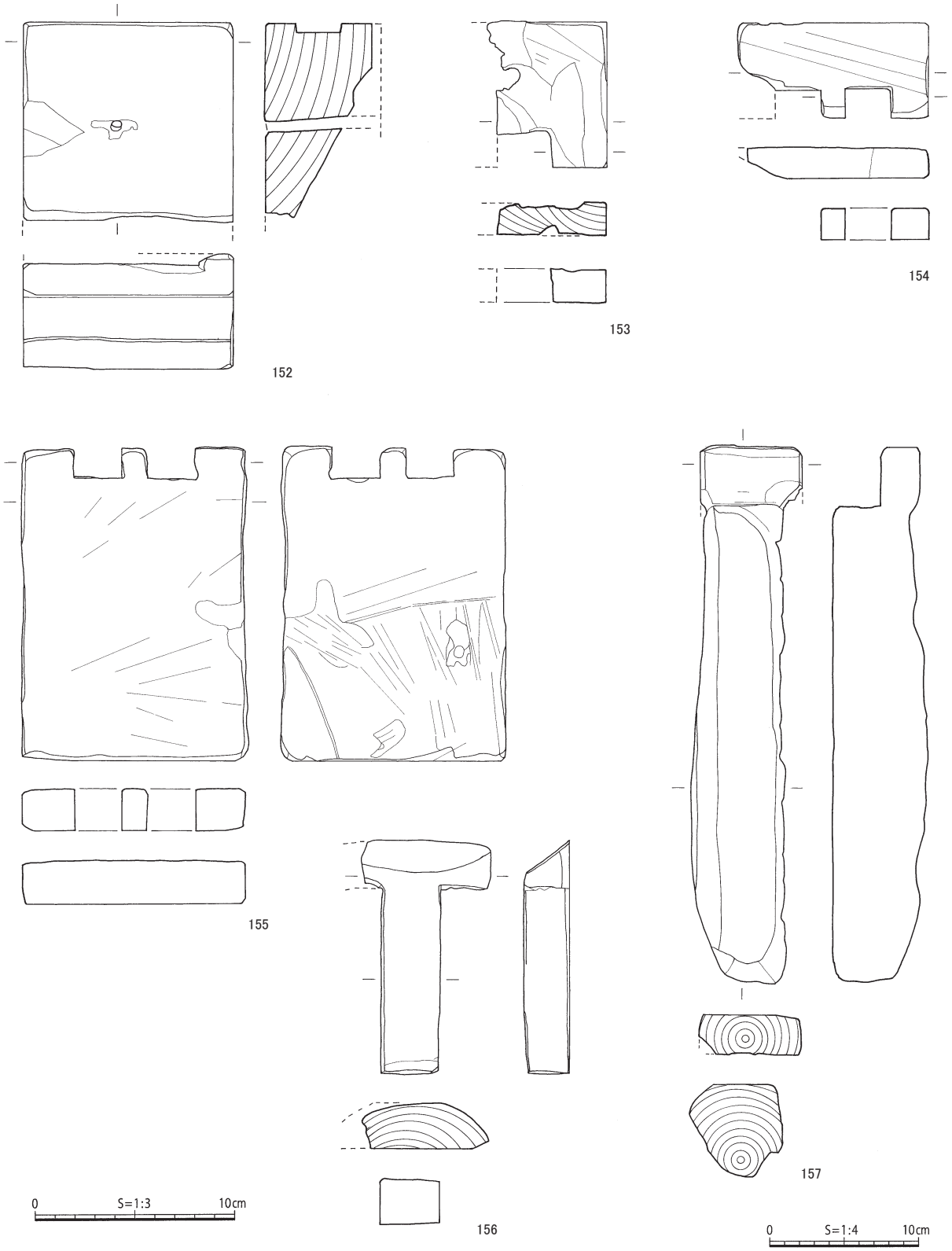
第63図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図36（木製品）



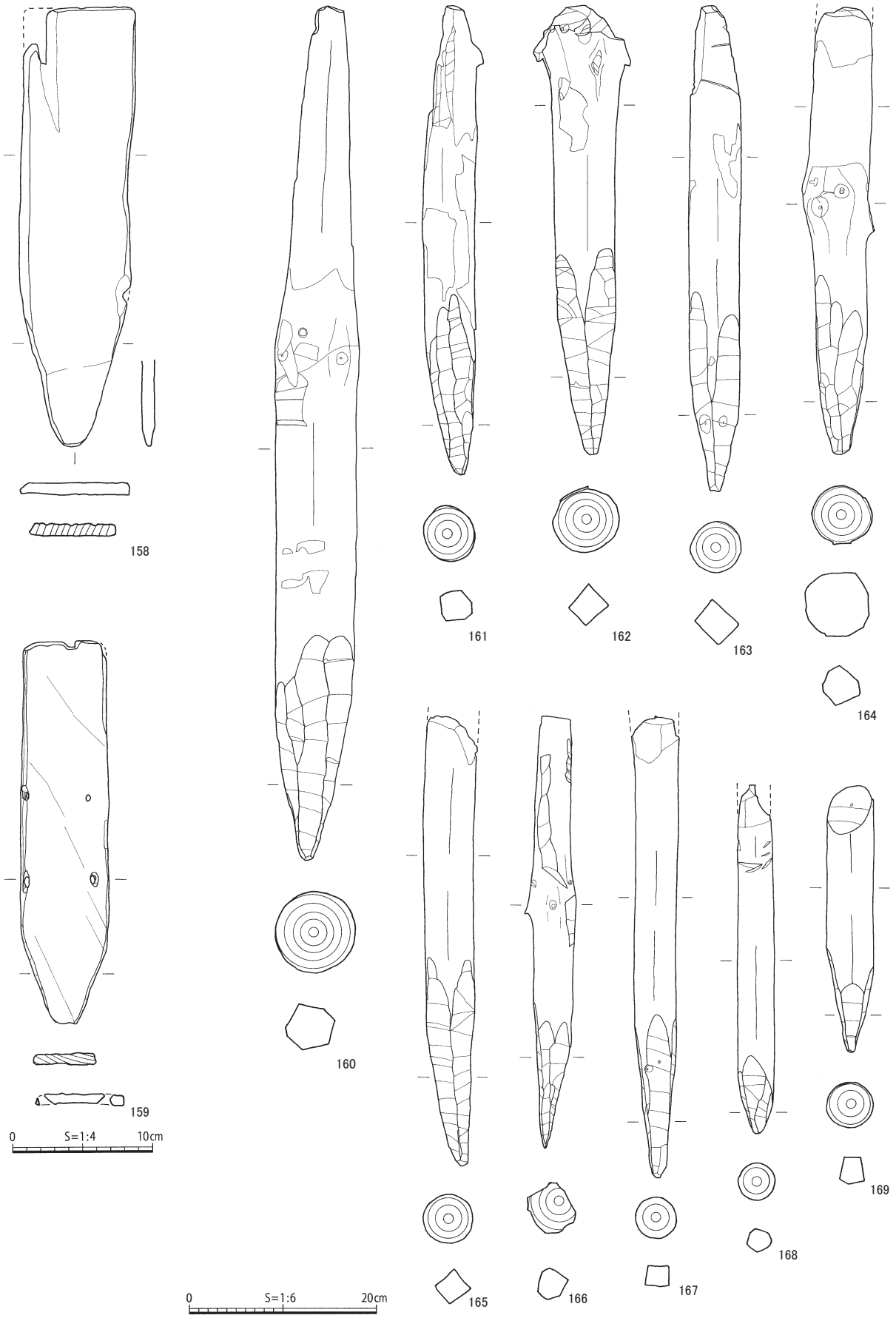
第64図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図37（木製品）



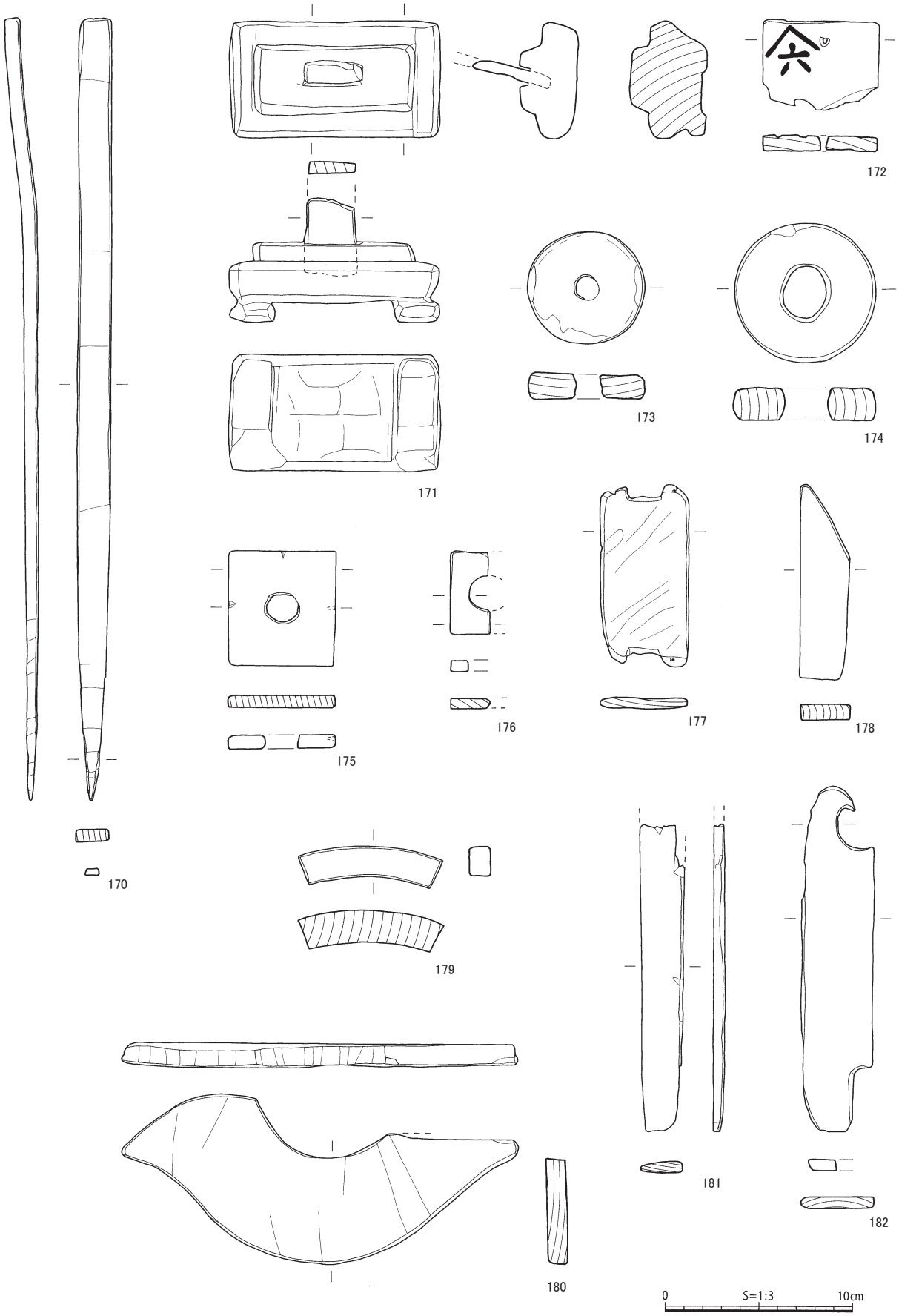
第65図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図38（木製品）



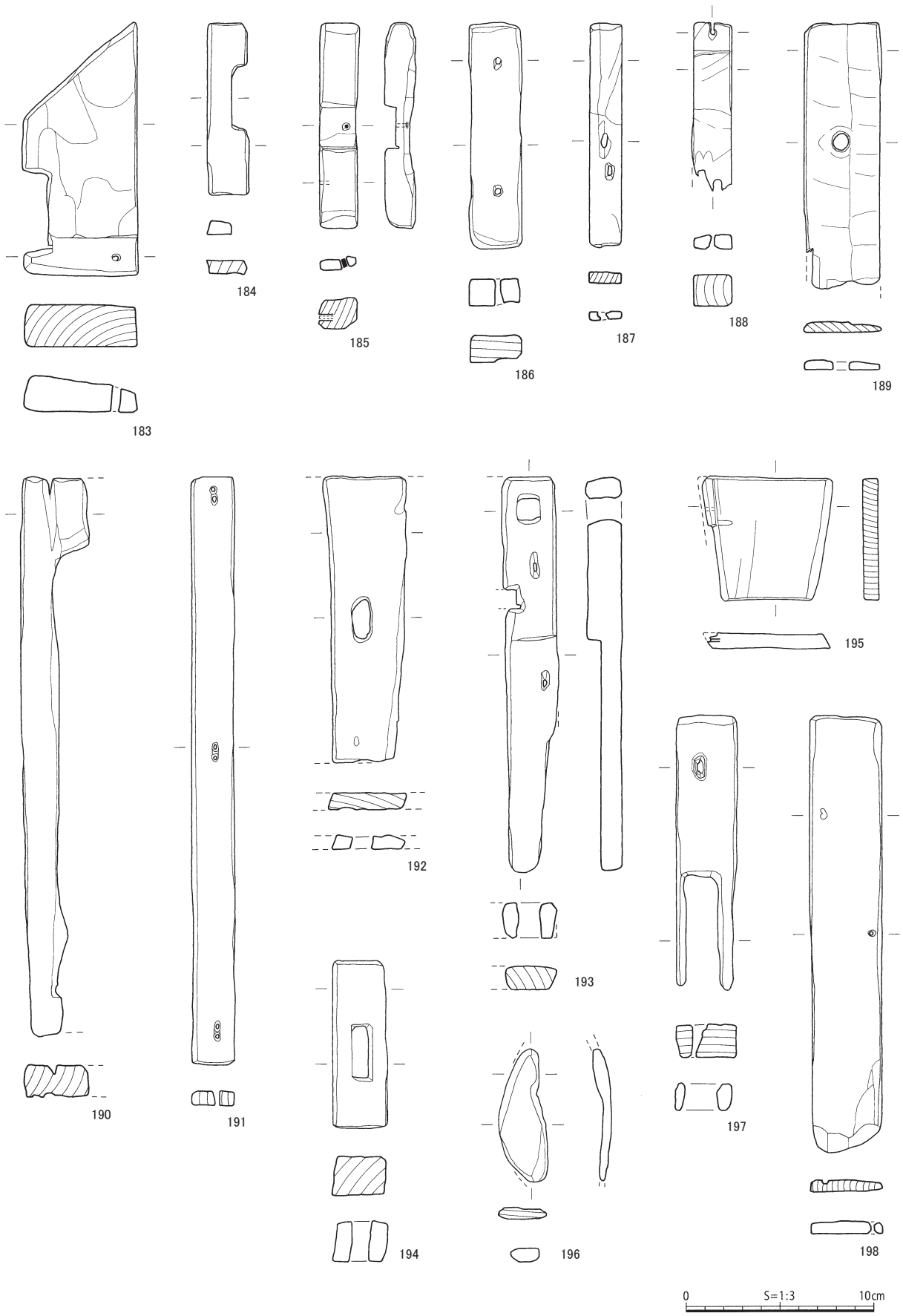
第66図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図39（木製品）



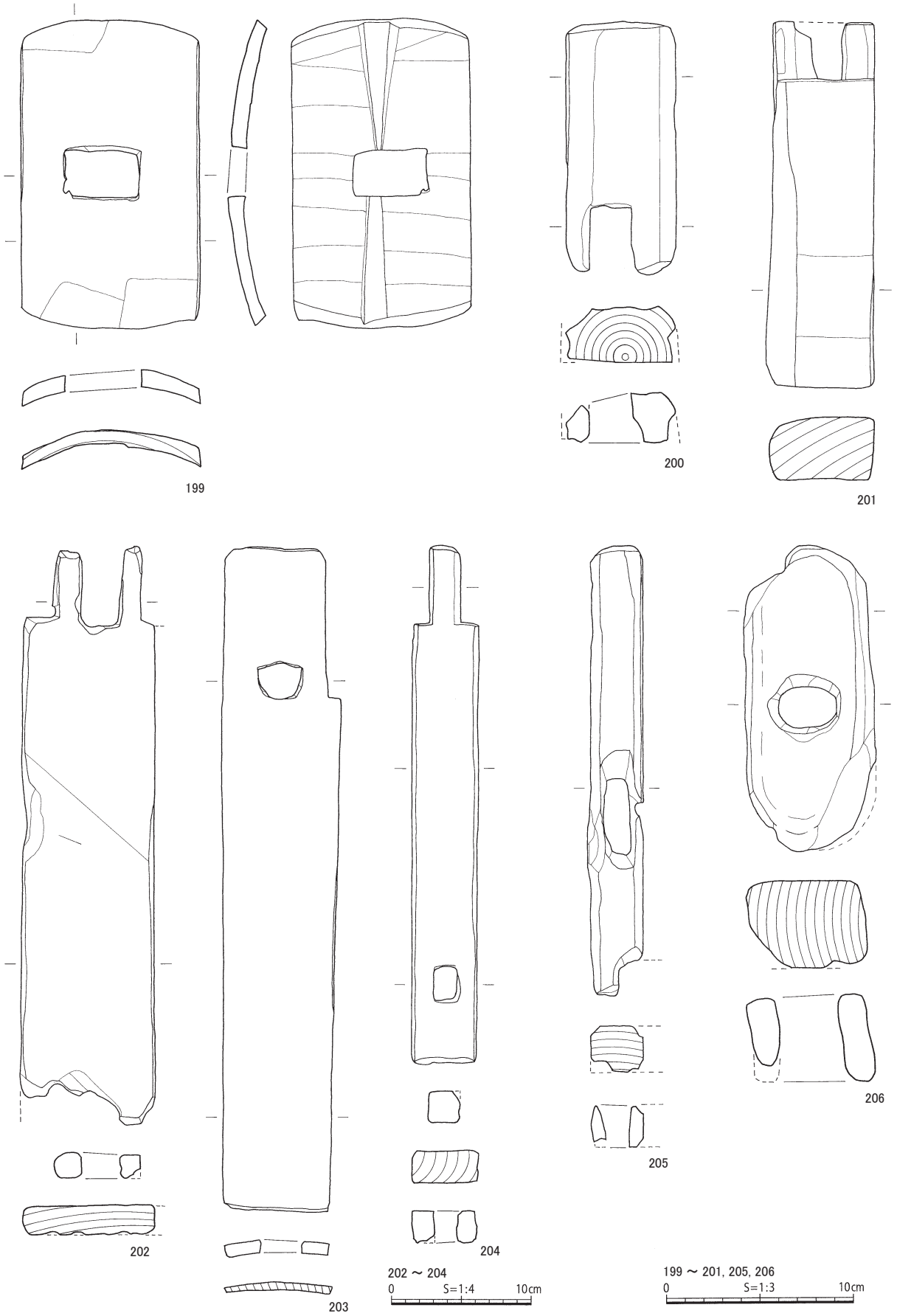
第67図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図40（木製品）



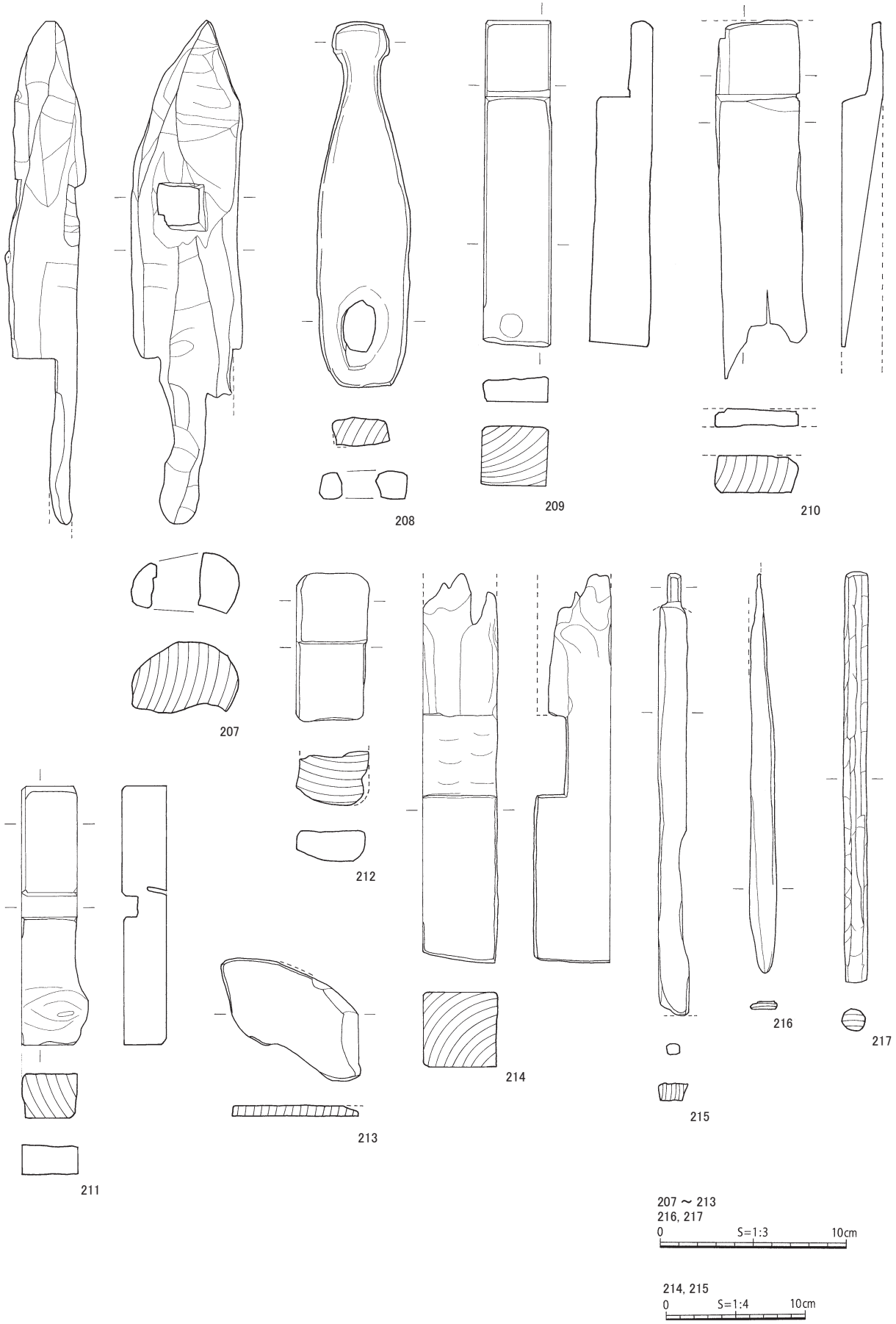
第68図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図41（木製品）



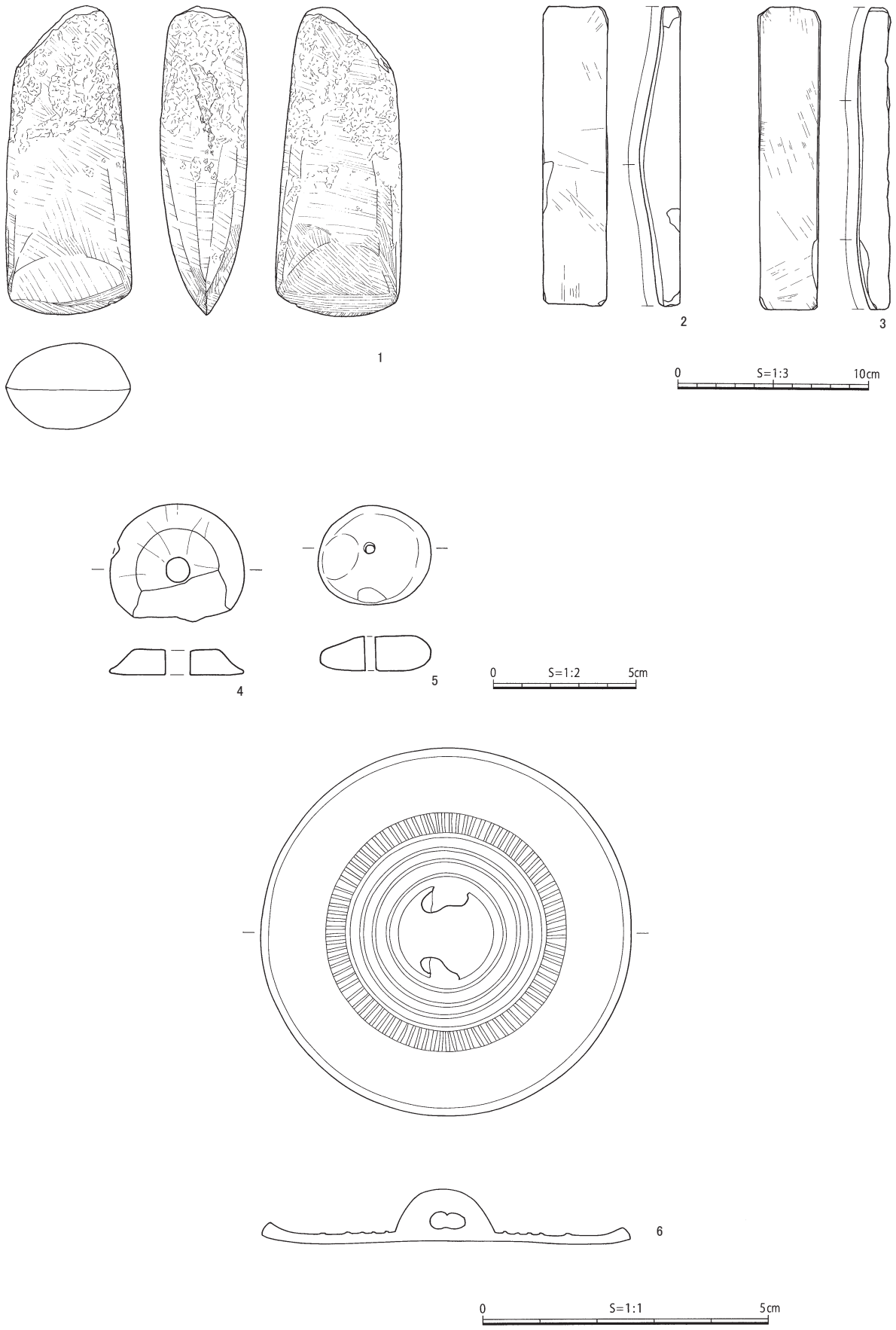
第69図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図42（木製品）



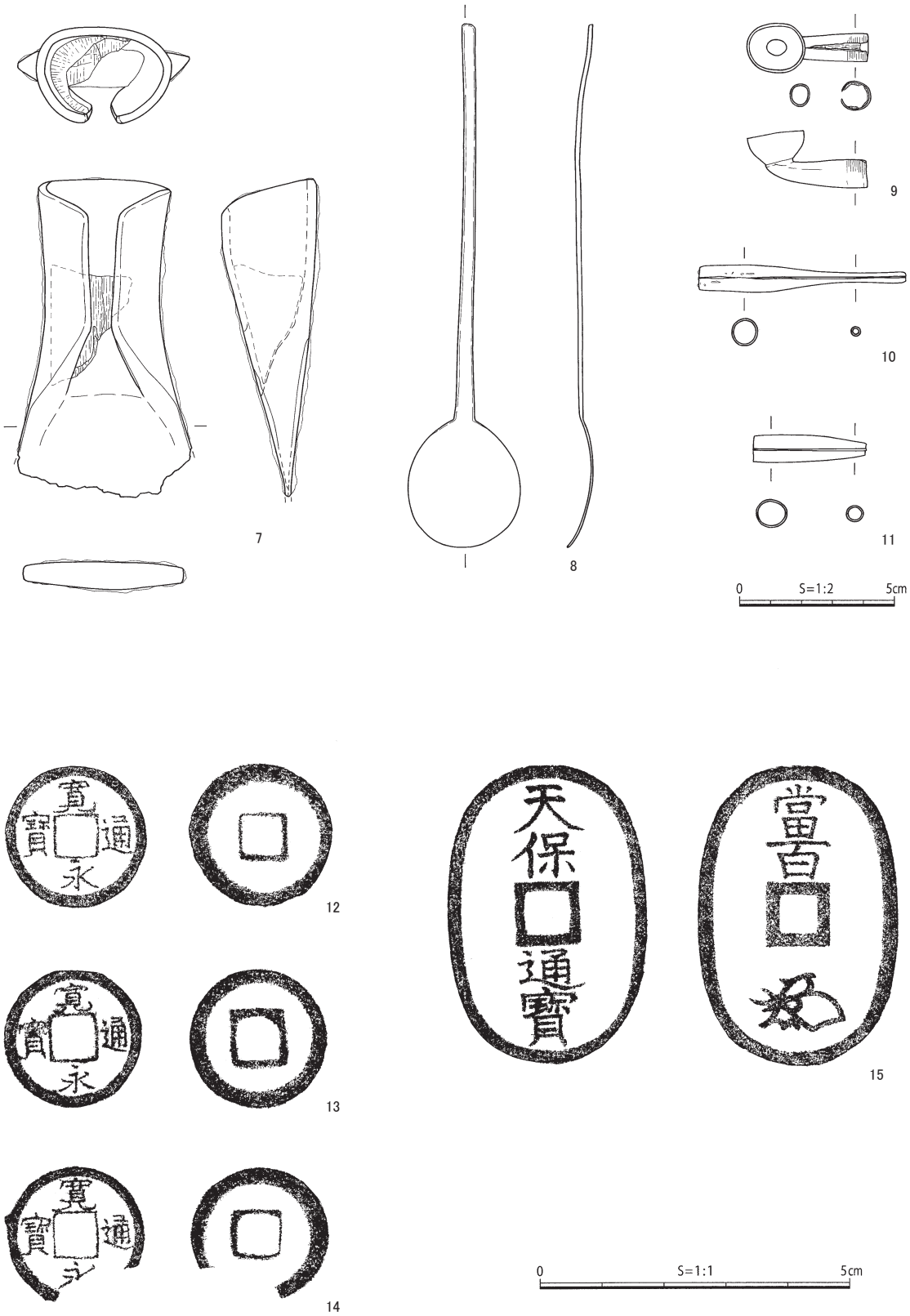
第70図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図43（木製品）



第71図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図44（木製品）



第72図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図45（石器・石製品・金属製品）



第73図　鶴喰広田遺跡出土遺物実測図46（金属製品）

第７表　鶴喰広田遺跡出土木製品一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
47	1	C2	2列トレンチ	工具	鋸柄	柄		23.3	4.2	1.8	スギ	板目	
	2	B0	Ⅱ	農耕土木具	鍬	直柄鍬身	平鍬	26.0	(9.8)	2.4	コナラ属 コナラ節	柾目	
	3	B0	Ⅱ	農耕土木具	鍬	直柄鍬身	平鍬	(15.2)	(11.5)	3.5	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	
	4	C2	Ⅲ	農耕土木具	鍬	直柄鍬身	平鍬	21.5	8.8	3.3	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	
	5	－	－	編み具・ 紡織具	糸巻具	手巻		23.5	7.1	2.2	スギ	柾目	
	6	C3	Ⅲ	編み具・ 紡織具	糸巻具	糸枠	組み合せ （支木）	19.1	1.9	1.7	ヒノキ	板目	
	7	C2	Ⅲ	編み具・ 紡織具	糸巻具	糸枠	組み合せ （支木）	(13.1)	2.8	1.9	ヒノキ	柾目	
	8	C3	Ⅱ	編み具・ 紡織具	紡錘車	紡輪		3.3	(3.1)	1.1	スギ	板目	
48	9	F14	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	22.4	10.4	3.8	ヒノキ	柾目	
	10	B0	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.2	(4.9)	2.0	ヒノキ	柾目	
	11	D3	－	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	20.2	10.1	2.8	①トネリコ属 ②モミ属	追柾目 接合	①台 ②補修後歯（別部材）
	12	B0	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	14.1	6.7	3.0	ハンノキ属 ヤシャブシ節	板目	
	13	E12	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(9.7)	9.0	4.5	ハンノキ属	柾目	
49	14	E12	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	18.1	8.8	3.6	モクレン属	柾目	
	15	B1	1列トレンチ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	23.2	8.9	3.6	モミ属	芯持材	
	16	C2	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.6	9.1	3.3	クスノキ	板目	
	17	F14	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	20.4	10.0	2.9	ケヤキ	板目	
50	18	C2	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.8	8.7	1.5	クリ	柾目	
	19	F13	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.3	8.6	3.6	ブナ属	板目	
	20	C2	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(22.5)	(12.8)	8.6	クリ	芯持材	
	21	D10	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	17.1	7.9	2.6	クリ	板目	
	22	C3	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	17.6	7.7	3.4	クリ	板目	
51	23	C2	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(21.3)	9.2	4.0	クリ	板目	
	24	F15	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.5	9.1	2.1	カツラ	柾目	
	25	E13	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(19.6)	8.5	3.5	カツラ	板目	
	26	C9	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	18.5	8.6	3.5	ヒノキ	板目	
	27	C2	Ⅲ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(17.5)	8.8	3.2	クリ	柾目	
	28	C6	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	20.2	8.6	4.7	クリ	柾目	
52	29	B0	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	21.1	9.1	1.0	サワラ	柾目	
	30	C1	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(21.8)	(6.8)	(1.1)	スギ	柾目	
	31	D3	－	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	22.2	9.0	1.3	コナラ属 コナラ節	板目	
	32	C2	2列トレンチ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(19.9)	(5.2)	1.9	クリ	柾目	
	33	C2	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯	16.3	5.9	2.9	アカマツ	芯持材	
	34	B1	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 （一木）	(9.3)	(4.8)	(2.2)	スギ	柾目	
53	35	C2	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	22.7	5.7	1.6	アカマツ	板目	
	36	C3	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 組合せ	21.3	8.2	2.3	ヒノキ	柾目	
	37	C2	2列トレンチ	服飾具	履物	下駄	連歯 組合せ	18.6	8.6	5.8	クリ	板目	
	38	C3	3列トレンチ	服飾具	履物	下駄	連歯 組合せ	20.4	6.5	2.1	クリ	柾目	
	39	C6	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	連歯 組合せ	21.1	8.3	4.1	ケヤキ	柾目	
	40	C2	2列トレンチ	服飾具	履物	下駄	差歯 （歯）	8.8	(7.0)	1.4	ケヤキ	板目	
54	41	C2	－	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	18.9	6.7	1.6	アカマツ	追柾目	
	42	C3	3列トレンチ	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	17.7	6.9	2.4	アカマツ	柾目	
	43	C3	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	(14.2)	(6.3)	1.6	アカマツ	追柾目	
	44	C2	－	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	(15.4)	(5.6)	1.6	アカマツ	板目	
	45	C3	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	(22.6)	(5.2)	2.3	アカマツ	板目	
55	46	C2	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯 （木履）	20.8	9.4	3.2	スギ	板目	

図	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
55	47	C2	Ⅱ	服飾具	履物	下駄	無歯 （草履下駄）	(14.3)	6.7	1.5	サワグルミ	板目	
	48	C2	2列トレンチ	服飾具	履物	下駄	無歯 （木履）	14.4	7.8	2.4	スギ	板目	
	49	C2	Ⅱ	服飾具	櫛	横櫛	挽出し	(7.5)	2.8	0.7	カヤ	柾目	
	50	D10	Ⅱ	服飾具	傘	傘轆轤		(5.7)	6.3	3.6	エゴノキ属	縦木取り	
	51	C2	2列トレンチ	服飾具	傘	傘轆轤		4.7	4.9	4.7	エゴノキ属	縦木取り 芯持材	
	52	C3	Ⅱ	服飾具	傘	傘轆轤		(4.6)	(2.8)	(2.7)	エゴノキ属	縦木取り 芯持材	
56	53	C2	Ⅲ	容器	蓋	挽物		9.0	4.2	2.8	エゴノキ属	横木取り 板目	外面・赤漆 内面・赤漆
	54	－	Ⅱ	容器	蓋	挽物		(8.1)	(4.8)	(1.6)	サクラ属	横木取り 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	55	E13	Ⅱ	容器	蓋	挽物		9.6	3.6	2.3	ケヤキ	横木取り 板目	外面・赤漆 内面・赤漆
	56	D13	Ⅱ	容器	椀	挽物		10.9	5.8	(4.1)	ブナ属	横木取り 柾目	外面・黒漆 内面・赤漆
	57	C1	Ⅱ	容器	椀	挽物		(9.8)	(4.9)	(4.3)	ブナ属	追柾目	外面・黒漆 内面・黒漆
	58	B0	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.6)	5.5	(3.3)	ブナ属	横木取り 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	59	B1	1列トレンチ	容器	椀	挽物		(6.4)	—	(5.5)	トチノキ	横木取り 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	60	C1	Ⅱ	容器	椀	挽物		(12.2)	6.0	(6.3)	トチノキ	横木取り 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	61	B1	1列トレンチ	容器	椀	挽物		(13.9)	(8.6)	2.6	ブナ属	横木取り 柾目	外面・赤漆 内面・黒漆
	62	E12	Ⅲ	容器	椀	挽物		(11.6)	4.8	3.0	トチノキ	横木取り 柾目	外面・黒漆 内面・赤漆
	63	C2	2列トレンチ	容器	椀	挽物		(10.0)	5.0	(5.1)	ブナ属	横木取り 板目	外面・黒漆褐色漆 内面・赤漆
	64	B1	1列トレンチ	容器	椀	挽物		(10.0)	5.0	(2.8)	ブナ属	横木取り 柾目	外面・黒漆 内面・黒漆
	65	C2	2列トレンチ	容器	椀	挽物		(10.2)	4.8	3.5	ブナ属	横木取り 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	66	－	Ⅲ	容器	椀	挽物		(13.4)	—	(4.6)	ブナ属	横木取り 板目	外面・赤漆 内面・黒漆
	67	F14	Ⅱ	容器	椀	挽物		12.4	(6.0)	4.5	ブナ属	板目	外面・茶漆 内面・赤漆
	68	C2	2列トレンチ	容器	椀	挽物		(13.3)	5.6	(2.5)	ブナ属	横木取り 柾目	外面・赤漆 内面・赤漆
57	69	C3	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.2)	4.8	(4.8)	ブナ属	横木取り 柾目	外面・黒漆 内面・黒漆
	70	C2	Ⅲ	容器	椀	挽物		(12.1)	5.7	(6.5)	トチノキ	横木取り 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	71	E13	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.2)	5.9	(2.9)	ケヤキ	横木取り 柾目	外面・赤漆 内面・赤漆
	72	－	Ⅱ	容器	椀	挽物		(10.2)	6.0	(9.1)	ブナ属	横木取り 板目	外面・赤漆 内面・赤漆
	73	－	－	容器	椀	挽物		(10.7)	6.0	(3.6)	ブナ属	横木取り 追柾目	外面・黒漆 内面・赤漆
	74	E13	Ⅱ	容器	椀	挽物		—	—	1.8	ブナ属	破片 板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	75	C2	Ⅲ	容器	皿	挽物		(15.8)	10.0	2.6	ケヤキ	横木取り 柾目	
	76	C2	Ⅱ	容器	皿	挽物		(14.0)	(9.2)	1.8	ハンノキ属 ハンノキ節	横木取り 柾目	
	77	C3	3列トレンチ	調理加工具	柄杓	側板 柄		(6.4)	—	(5.5)	タケ	—	柄の一部が残存・漆？
	78	C3	3列トレンチ	容器	皿	挽物		(13.9)	(8.6)	2.6	ブナ属	横木取り 板目	
	79	C2	2列トレンチ	容器	皿	挽物		(16.6)	(8.8)	2.4	ケヤキ	横木取り 板目	
	80	C3	3列トレンチ	容器	皿	挽物		(10.8)	(8.0)	(1.0)	トチノキ	横木取り 板目	
	81	E12	Ⅱ	容器	合子?	挽物		7.4	6.8	6.4	ミズキ	柾目	外面・黒漆 内面・黒漆
58	82	C2	Ⅱ	容器	側板	曲物		(28.2)	7.6	0.35	トウヒ属	柾目	曲物
	83	B1	1列トレンチ	容器	側板	曲物		(21.5)	2.5	0.2	サワラ	柾目	曲物
	84	B0	Ⅱ	容器	桶	板組物	側板	(40.5)	13.8	2.7	ケヤキ	板目	
	85	C3	Ⅱ	容器	桶	板組物	側板	12.3	3.3	1.4	スギ	柾目	
	86	C3	3列トレンチ	容器	箱	板組物	底板	13.0	12.9	0.9	スギ	柾目	
59	87	C3	Ⅱ	容器	桶	板組物	側板	25.3	7.6	1.1	ヒノキ	柾目	
	88	C3	Ⅱ	容器	桶	板組物	側板	(28.2)	6.9	1.2	スギ	柾目	
	89	C3	Ⅱ	容器	桶	板組物	側板	20.8	7.4	0.8	ヒノキ	柾目	
	90	B2	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		(7.7)	(4.3)	0.6	マツ属単維管束亜属	板目	
	91	C2	－	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		(7.8)	(2.6)	0.4	ヒノキ	追柾目	
	92	C3	3列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		5.6	5.7	0.3	ヒノキ	追柾目	
	93	C3	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		6.6	6.6	0.4	ヒノキ	板目	

図	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
59	94	C2	－	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		6.7	6.7	0.4	スギ	柾目	
	95	C3	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		7.8	7.8	0.4	モミ属	柾目	
	96	－	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		8.6	8.8	0.9	サワラ	板目	
	97	－	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		12.2	13.0	0.8	ヒノキ	柾目	全体・黒漆
	98	C2	2列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		10.2	10.0	0.6	サワラ	柾目	
	99	C2	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		10.2	10.0	0.8	ヒノキ	柾目	
	100	C2	2列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		9.2	(9.1)	0.8	サワラ	柾目	
	101	C3	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		11.2	(5.3)	0.4	サワラ	柾目	
60	102	C3	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		10.8	10.8	0.8	サワラ	柾目	
	103	C2	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		10.8	(9.7)	0.6	サワラ	板目	
	104	C2	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		10.9	(9.9)	0.9	スギ	板目	
	105	C2	2列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		13.2	13.5	0.5	モミ属	追柾目	
	106	C2	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		16.3	(10.5)	(0.7)	モミ属	柾目	
	107	D10	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		13.2	13.1	0.9	スギ	柾目	
	108	C2	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		24.6	7.4	2.2	スギ	板目	
	109	B1	1列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物蓋板		26.7	21.3	0.8	アカマツ	柾目	
61	110	E13	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		8.4	8.3	0.9	ヒノキ	柾目	全体・黒漆
	111	－	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		6.4	6.5	0.3	トウヒ属	柾目	
	112	C3	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		6.9	6.9	0.5	ヒノキ	柾目	
	113	B0	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		7.4	(7.2)	0.4	ヒノキ	柾目	
	114	C2	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		7.6	7.5	0.7	モミ属	柾目	
	115	C3	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		7.6	(7.5)	0.4	モミ属	柾目	
	116	G15	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		8.7	8.8	0.8	サワラ	柾目	
	117	G15	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		12.2	11.9	0.9	トウヒ属	柾目	
	118	C3	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		18.3	(7.5)	0.6	スギ	柾目	
	119	－	－	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		31.8	15.4	1.6	スギ	柾目	
	120	B0	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		29.0	14.3	1.3	サワラ	柾目	
62	121	C2	2列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		26.4	10.8	1.3	スギ	板目	
	122	C2	－	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		28.5	6.2	1.8	スギ	板目	
	123	B1	1列トレンチ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		31.6	11.1	1.8	スギ	柾目	
	124	C2	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		30.1	8.3	2.5	スギ	柾目	
	125	E13	Ⅲ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		32.7	17.1	0.6	モミ属	板目	
63	126	D10	Ⅱ	容器	底板 （蓋板）	曲物底板		41.0	20.0	2.5	スギ	板目	
	127	C2	2列トレンチ	容器	その他不明	栓		6.8	3.2	3.1	スギ	柾目	
	128	C2	2列トレンチ	容器	その他不明	栓		7.2	3.4	3.5	スギ	板目	
	129	C3	3列トレンチ	容器	その他不明	栓		17.0	2.5	2.3	サワラ	追柾目	
	130	C3	3列トレンチ	容器	その他不明	栓		8.2	1.9	1.8	サワラ	板目	
	131	C2	－	容器	その他不明	把手？		17.0	3.6	2.2	スギ	柾目	
	132	E12	Ⅱ	食事具	箸			28.1	0.9	0.6	トウヒ属	柾目	
	133	E12	Ⅱ	食事具	箸			26.1	1.1	0.8	ツガ属	板目	
	134	F14	Ⅱ	食事具	箸			24.0	0.6	0.6	スギ	板目	
	135	－	Ⅱ	食事具	箸			23.3	0.7	0.7	スギ	板目	
	136	F14	Ⅱ	食事具	箸			(22.8)	0.6	0.6	ツガ属	板目	
	137	C5	Ⅱ	食事具	箸			23.0	0.6	0.6	スギ	板目	
	138	E12	Ⅱ	食事具	箸			23.1	0.8	0.7	ヒノキ	板目	
	139	C5	Ⅱ	食事具	箸			22.4	0.6	0.7	スギ	板目	
	140	F14	Ⅱ	食事具	箸			20.8	0.6	0.5	ヒノキ	板目	

図	番号	遺構グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
64	141	－	Ⅱ	食事具	箸			19.6	0.8	1.0	スギ	板目	
	142	C5	Ⅱ	食事具	箸			18.3	0.6	0.5	スギ	板目	
	143	－	Ⅲ	食事具	箸			16.9	0.9	0.6	スギ	板目	
64	144	－	－	食事具	膳	脚		27.9	14.6	0.9	ヒノキ	板目	外面・黒漆 内面・赤黒漆
	145	C2	Ⅱ	食事具	膳	側板		23.8	4.8	0.8	ヒノキ	柾目	全面・赤漆
	146	－	－	食事具	膳	側板		21.9	4.4	0.8	ヒノキ	柾目	全面・赤漆
65	147	C1	Ⅱ	調度	その他不明			24.2	8.8	3.1	クリ	芯持材	
	148	E13	Ⅱ	遊戯具・日用品	羽子板			(21.4)	9.5	1.3	ヒノキ	柾目	
	149	D10	Ⅱ	遊戯具・日用品	独楽			(7.1)	7.1	3.5	ヤマボウシ	芯持材	
	150	D10	Ⅱ	遊戯具・日用品	独楽			(6.2)	6.1	3.25	サワフタギ	芯持材	
	151	C3	Ⅲ	遊戯具・日用品	独楽			5.1	5.2	2.3	ヤマボウシ	芯持材	
66	152	C3	Ⅱ	建築部材	鴨居・敷居	敷居		(10.1)	10.5	5.8	アカマツ	柾目	
	153	C3	Ⅱ	建築部材	鴨居・敷居	鴨居		7.4	(6.0)	1.9	スギ	板目	
	154	C3	Ⅲ	建築部材	鴨居・敷居	鴨居？		4.8	9.1	1.6	アカマツ	芯持材	
	155	B1	1列トレンチ	建築部材	鴨居・敷居	鴨居		15.8	11.4	2.2	アカマツ	板目	外面・黒漆 内面・赤漆
	156	C2	Ⅱ	建築部材	結合補助材	栓		11.7	(6.6)	2.3	アスナロ	板目	
	157	C2	Ⅱ	建築部材	その他不明			(36.3)	(7.5)	6.5	サワラ	芯持材	表面の一部炭化
67	158	C3	Ⅱ	施設材・器具材	柵			31.5	8.3	1.0	アカマツ	柾目	
	159	C2	－	施設材・器具材	柵			27.5	6.5	0.9	サワラ	板目	
	160	－	－	土木材	杭			(92.7)	9.1	8.9	クロマツ	芯持材	
	161	－	－	土木材	杭			(50.9)	6.7	6.1	クロマツ	芯持材	
	162	－	－	土木材	杭			48.8	10.5	7.2	アカマツ	芯持材	
	163	－	－	土木材	杭			52.7	5.7	5.6	アカマツ	芯持材	
	164	－	－	土木材	杭			(48.5)	7.9	7.0	クロマツ	芯持材	
	165	－	－	土木材	杭			(48.7)	5.9	5.4	クロマツ	芯持材	
	166	－	－	土木材	杭			46.9	5.6	5.6	クロマツ	芯持材	
	167	－	－	土木材	杭			(50.1)	5.2	4.6	アカマツ	芯持材	
	168	－	－	土木材	杭			(37.8)	4.1	4.1	アカマツ	芯持材	
	169	－	－	土木材	杭			29.0	5.1	5.0	アカマツ	芯持材	
68	170	E13	Ⅱ	埋葬具・葬具	卒塔婆			55.8	2.4	1.1	ヒノキ	柾目	
	171	C3	Ⅲ	埋葬具・葬具	位牌	台座		11.2	6.2	(6.6)	①アカマツ ②クロマツ	追柾目	①台座　②結合材
	172	C3	3列トレンチ	用途不明品		札？		(4.8)	6.1	0.8	アカマツ	板目	
	173	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明	紡錘車棒輪?		6.3	5.9	1.4	コナラ属 アカガシ亜属	板目	
	174	C3	Ⅲ	用途不明品	その他不明	紡錘車棒輪?		7.5	7.4	1.7	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	外面・赤漆 内面・赤漆
	175	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			6.1	5.7	0.7	スギ	柾目	
	176	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			4.4	(2.1)	0.6	スギ	板目	
	177	B0	Ⅱ	用途不明品	その他不明	板組物？		9.8	4.7	0.6	ヒノキ	板目	
	178	D3	－	用途不明品	その他不明			10.4	2.6	0.8	アカマツ	柾目	
	179	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明	調度品?		(7.6)	2.3	1.1	スギ	柾目	
	180	F14	Ⅱ	用途不明品	その他不明			9.1	21.1	1.3	クロマツ	柾目	
	181	F14	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(16.3)	2.4	0.6	ヒノキ	板目	表裏面・赤漆 側面・黒漆
	182	C1	Ⅱ	用途不明品	その他不明			18.4	3.9	10.6	スギ	板目	
69	183	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			13.4	6.1	2.2	スギ	柾目	外面・黒漆褐色漆 内面・赤漆
	184	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			9.1	(2.2)	0.7	スギ	柾目	
	185	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明	調度品?		10.9	2.1	1.6	スギ	柾目	外面・赤漆 内面・赤漆
	186	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			12.0	2.8	1.4	スギ	板目	
	187	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			11.9	1.7	0.6	サワラ	柾目	外面・黒漆 内面・赤漆

図	番号	遺構 グリッド	層位	分類	器種	器種細分1	器種細分2	計測値（cm）			樹種	木取り	備考
								長さ	幅	厚さ			
69	188	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(8.9)	2.1	1.6	スギ	柾目	
	189	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			(14.1)	4.1	0.5	ツガ属	追柾目	
	190	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			29.7	(3.5)	1.7	スギ	柾目	外面・赤漆 内面・赤漆
	191	C1	Ⅲ	用途不明品	その他不明			31.2	2.4	0.8	スギ	柾目	
	192	B2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			15.2	(4.4)	0.9	スギ	板目	
	193	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			21.0	(2.9)	1.9	スギ	柾目	
	194	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			8.9	2.9	2.1	スギ	柾目	外面・黒漆 内面・赤漆
	195	－	－	用途不明品	その他不明	装飾部材？		6.5	(6.9)	0.7	ヒノキ	柾目	上面・黒漆 側面・黒漆
	196	B1	Ⅲ	用途不明品	その他不明			(7.0)	(2.6)	2.7	ケヤキ	板目	
	197	B1	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(14.6)	3.2	1.8	サワラ	板目	
	198	－	－	用途不明品	その他不明			23.2	3.8	0.6	ヒノキ	柾目	外面・黒漆 内面・黒漆
70	199	F14	Ⅱ	用途不明品	その他不明			16.6	9.6	2.2	ヤマグワ	板目	
	200	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明	建築部材？		13.6	5.9	3.0	スギ	芯持材	
	201	E12	Ⅱ	用途不明品	その他不明			19.7	5.9	3.5	モミ属	追柾目	
	202	B0	Ⅱ	用途不明品	その他不明	井戸枠?		41.6	9.7	2.2	カツラ	板目	
	203	F14	Ⅱ	用途不明品	その他不明			47.9	8.6	1.3	ヒノキ	柾目	
	204	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			37.2	4.8	2.4	スギ	柾目	外面・黒漆 内面・赤漆
	205	C2	Ⅱ	用途不明品	その他不明			24.1	3.0	2.9	サワラ	板目	
	206	B0	Ⅱ	用途不明品	その他不明			16.4	7.1	4.7	クスノキ	柾目	
71	207	B1	1列トレンチ	用途不明品	その他不明			(27.0)	6.0	3.8	ヒノキ科	柾目	外面・黒漆 内面・黒漆
	208	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			19.7	5.1	1.6	スギ	柾目	
	209	C2	－	用途不明品	その他不明			17.5	3.6	3.3	アカマツ	板目	
	210	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(19.3)	(4.9)	2.2	スギ	柾目	
	211	C3	3列トレンチ	用途不明品	その他不明			13.9	3.6	2.4	スギ	柾目	
	212	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			8.0	3.9	2.9	サワラ	板目	
	213	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			(6.7)	(7.5)	0.6	コナラ属 アカガシ亜属	柾目	
	214	C2	2列トレンチ	用途不明品	その他不明			(28.0)	5.4	5.5	ヒノキ	割材?	外面・赤漆 内面・赤漆
	215	C3	Ⅱ	用途不明品	その他不明			31.8	(2.2)	1.3	クリ	柾目	
	216	B0	Ⅲ	用途不明品	その他不明			(21.4)	1.5	0.4	ヒノキ	板目	
	217	C2	－	用途不明品	その他不明	紡錘車軸？		22.1	1.4	1.2	ヒノキ	板目	

第８表　鶴喰広田遺跡出土石器・石製品一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	種別	計測値（cm）				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重量(g)		
72	1	C2ＳＥ	Ⅲ	磨製石斧	16.2	6.5	4.5	800.0	閃緑岩	
	2	G15	－	砥石	15.7	3.4	2.1	160.0	凝灰岩	
	3	D10NW	Ⅱ	砥石	15.9	3.2	1.7	140.0	凝灰岩	
	4	－	－	紡錘車	(4.1)	4.7	0.9	24.3	蛇紋岩	暗緑色
	5	C2ＳＥ	Ⅲ	紡錘車	3.5	3.9	1.2	12.4	流紋岩	灰色（やや黄味）

第９表　鶴喰広田遺跡出土金属製品一覧表

図	番号	遺構 グリッド	層位	器種	計測値（cm）	重量(g)	備考
72	6	F13NW	Ⅲ	小型鏡	径6.45、高さ1.0、鈕幅1.7、鈕高0.8、縁高0.3	63.7	
73	7	－	－	袋状鉄斧	長さ（10.3）、幅（5.6）、厚3.1	231.4	
	8	－	－	匙	全長16.9、最大幅3.7、厚0.15	11.73	
	9	－	－	雁首	全長3.9、雁首高1.8	3.58	
	10	F13	Ⅱ	吸口	全長6.7	4.07	鉄製
	11	－	－	吸口	全長3.7	3.93	
	12	D10ＳＥ	Ⅱ	銭貨	銭径2.2	2.34	寛永通寶
	13	D9ＳW	Ⅱ	銭貨	銭径2.3	2.21	寛永通寶
	14	－	－	銭貨	横2.2、縦（2.15）	1.82	寛永通寶
	15	－	－	銭貨	縦4.3、横3.2	21.5	天保通寶

第６章　まとめ

第１節　遺構について

今回の手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡における調査では、これまで御殿川流域遺跡群で実施された調査状況と同様に、調査区の大半が流路にあたり、新旧の河川堆積層で覆われていたことが確認された。基本土層Ⅱ層及びⅢ層がこれにあたり、土層中には弥生時代～近世の遺物が多数包含されていた。第３章で述べたように、Ⅱ層～Ⅲ層中位までは弥生時代～近世までの遺物が混在し、度重なる流路の変更によって古い堆積層が削平され、再堆積が繰り返されたものと考えられる。Ⅲ層の砂礫層下層は弥生時代後期～古墳時代後期を中心とした時期の土器類が比較的まとまって出土することから、古墳時代後期を下限とした時期の堆積層が残っている可能性があり、基盤層であるⅣ層を削り込む形で検出された手乱遺跡流路１・２、鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区流路１～３といった流路堆積層がそれにあたると考えられるが、遺物の出土状況や堆積層から明確にそれがどの時期に流れたものかを特定するのは困難であった。

調査区内では多数の杭列が検出され、その多くはⅡ層堆積後に設置されたもので、Ⅱ層を削平する旧河川に伴って、近世よりも新しい時期に、蛇行する御殿川の護岸、あるいは整流のために設けられたと考えられる。各調査区における杭列の方向が当該期の河川の流路を反映しているものであろう。

第２節　出土遺物について

調査区で認められた河川堆積層から弥生時代～近世にわたる多種多様な遺物が出土している。これら遺物群は流磨が少ないものが多く含まれることから、御殿川流域に広がる各時代の近隣集落域からもたらされたものと考えられる。縄文時代に遡る土器も出土しているが、遺物が増加するのは弥生中期以降であり、遺跡周辺での本格的な集落域の形成はこの頃からであろうと推察され、以後近世に至るまで断続的に出土遺物がみられることから、集落域であり続けたことが想定される。

弥生中期中葉～後葉にかけての土器類は壺を中心とした土器群が出土するが、比較的少量である。今回調査区西側の鶴喰遺跡では集落域に伴う土坑から中期後葉頃の土器群がまとまって出土しており（三島市1984）、周辺に当該期の集落域の広がりが想定される。弥生後期の土器群については、前半期よりは中～後葉の壺・甕類の出土量が増加する傾向があり、形態や文様のあり方から東遠江様式の影響がみられるものもある。若干の盛衰はあるものの、御殿川周辺では弥生後期段階においても継続して集落域が営まれていたと考えられる。

弥生末～古墳前期の土器群は壺・台付甕・高坏・器台など、集落域で出土する器種がほぼ揃う。Ｓ字甕や大廓様式の大型甕など、広域に移動する土器を含み、地域間での交流を窺うことはできるものの、古墳時代中～後期にかけての土器群と比較した場合、出土量としてはやや低調となるようである。古墳時代中～後期には遺物量が増加するとともに、完形品に近い土器の出土が目立つようになる。特に中期後葉～後期にかけては駿東型坏や須恵器模倣坏、駿東甕といった当地域の土器様相を特徴づける遺物群が多量に出土するようになる。御殿川流域では手乱遺跡北東に所在する金沢遺跡（三島市1993）、また手乱・鶴喰広田遺跡よりも下流に位置する中島下舞台遺跡（中島Ｂ遺跡）で古墳後期の住居跡群が検出され（三島市1983）、当該期における集落が大きなまとまりをもって営まれたことが明らかとなってい

る。出土した土器類の中には祭祀行為に使用されたものが多数見受けられ、御殿川の旧流路がこうした周辺集落域の生活の場の一部となっていたことが想定されるのである。

古代の出土遺物は少数の土師器、須恵器、灰釉陶器などがあるのみで、それらの背景となる集落などの様相を窺えるほどの資料は得られておらず、遺跡周辺における人々の活動は低調であったとみられる。

中世に位置づけられる遺物としては、瀬戸美濃産施釉陶器や貿易陶磁、かわらけなどの出土がある。貿易陶磁の中には青白磁梅瓶などの高級品も認められるが、碗皿類が大半を占める。瀬戸美濃産施釉陶器は古瀬戸後期～大窯期の碗皿や擂鉢などが出土している。中世を通じてこのような陶磁器類の出土はあるものの少量であり、ここから集落域の様相を窺うのは困難である。ただ、鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区で出土した42-224・225のように祭祀行為に使用されたとみられるかわらけもあることから、中世後期においても御殿川の旧流路が周辺集落の祭祀的な場であったことが窺われる。

近世の出土遺物は陶磁器、木製品、土製品など多岐にわたっている。陶磁器は瀬戸美濃産の施釉陶器、肥前産磁器がその多くを占める。瀬戸美濃産施釉陶器は碗・皿・小杯などの供膳具、片口・擂鉢などの調理具、壺・徳利などの貯蔵具の他、灯明具や神仏具といった日常生活に関わる道具類がみられる。肥前産磁器については青磁染付碗、染付の丸碗・筒形碗・広東碗・端反碗、染付皿などの供膳具がほとんどで、瓶や仏飯器などの製品は少量出土しているにとどまる。これら陶磁器類については18世紀以降の製品が多く出土する傾向があり、それ以前の製品は比較的少量である。特に肥前産磁器については最も多く出土する碗皿類の出土傾向から、18世紀後半～19世紀前半頃までの製品が多いことが窺われ、近世集落域の変遷をある程度反映している可能性がある。また出土した肥前産磁器は有田外山で生産された量産品が多くを占めている可能性があり（註１）、近世三島宿の周辺部にあたる当遺跡周辺の近世村落に居住した人々の生活水準を窺うことも可能かと思われる。

御殿川流域遺跡群では木製品が多量に出土しており、今回調査区においても同様の状況であった。木製品は一部が前代に遡る可能性はあるが、ほとんどは近世集落に伴うものと考えられる。鍬などの農具、下駄・櫛・傘といった服飾具、漆椀・底板や蓋板・桶などの容器類、箸や膳などの食事具、羽子板や独楽などの遊戯具、敷居や鴨居などの建築材、杭や柵などの土木材、塔婆や位牌といった葬具、その他多くの用途不明品を含む多種多様な木製遺物が出土している。使用木材の傾向については付編１で詳述されるように、種別によって特徴が表れていることが指摘される。これら多様な木製生活遺物は御殿川流域周辺の近世集落における生活様式のあり方を推測できる資料群であるといえる。

今回の調査で出土した遺物群から、御殿川流域周辺に広がる弥生時代～近世に至る集落域の特徴と変遷を概観した。しかし、各時代における遺構・遺物については未だ資料が少なく、集落景観の復原については課題が残ることも事実である。今後、近隣地域における新たな発掘調査成果を得ながら検討していく必要がある。

註１）佐賀県有田町歴史民俗資料館村上伸之氏のご教示による。

参考文献

渡井英誉　1996 「東駿河における布留式並行期の様相（前）－土器編年の設定－」『静岡県考古学研究№28』静岡県考古学会

山本惠一　1999 「駿河の古墳時代中期の土器－東駿河を中心にして－」『東国土器研究第５号』東国土器研究会

原廣志　1999「横地氏関連遺跡群と周辺遺跡の特徴について」『横地城総合調査報告書』菊川町教育委員会

池谷初恵　1999「駿河伊豆型平底坏について」『東国土器研究第５号』東国土器研究会

九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』

木ノ内義昭　2002 「須恵器流入以降～律令時代の土師器の様相－主として富士郡推定地の出土遺物から－」『東平遺跡　第16地区（三日市廃寺跡）　第27地区発掘調査報告書』富士市教育委員会

佐藤由紀男・荻野谷正宏・篠原和大　2002 「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社

菊川シンポジウム実行委員会　2005 『陶磁器から見る静岡県の中世社会』

伊東隆夫・山田昌久編　2012 『木の考古学　出土木製品用材データベース』 海青社

三島市教育委員会　1983『中島下舞台遺跡』

三島市教育委員会　1984『鶴喰遺跡』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1993『御殿川流域遺跡群Ⅰ』

三島市教育委員会　1993『金沢遺跡』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994『御殿川流域遺跡群Ⅱ』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995『御殿川流域遺跡群Ⅲ』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998『御殿川流域遺跡群Ⅳ』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2005『来光川遺跡群Ⅰ』・『来光川遺跡群Ⅱ』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007『青木原遺跡』

有田町教育委員会　2009『広瀬向窯跡』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2011『青木原遺跡Ⅱ』

付編１
手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木製品の樹種

小林和貴・小川とみ・鈴木三男（東北大学植物園）

静岡県三島市鶴喰の鶴喰広田遺跡及び手乱遺跡から出土した、主に近世の木製品の樹種を調べた。両遺跡は三島駅南の富士山の湧水池を水源とし、南に流れて大場川、狩野川へと合流する御殿川の両岸にあり、同時期の一連の遺跡と看做される。近世の主な遺構は御殿川の護岸の杭列と河道で遺構の杭群に加えて様々な生活木器等が出土した。ここでは鶴喰広田遺跡からは404点、手乱遺跡からは100点、合計504点の木製品を抽出してその樹種を調べた。これらの遺物から作成されたプレパラートを検鏡観察した結果、表１にある48の分類群が識別された。以下に識別された分類群についてその同定の根拠等を記載し、当該遺跡における植物利用について検討した。なお、作成されたプレパラートは静岡県埋蔵文化財センターに保管されている。

１　同定された植物種

1.　モミ属　*Abies*　マツ科　写真図版 I-1a-c.（14558）

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかからやや急である。樹脂細胞は基本的にない。放射組織は柔細胞のみからなり、その垂直、水平壁には多数の単壁孔（モミ型壁孔）がある。これらの形質からモミ属の材と同定した。

モミ属には全国の暖温帯に広く分布するモミ*Abies firma Siebold et Zucc.*のほか、本州、四国の太平洋側地域の冷温帯に多いウラジロモミ*Abies homolepis Siebold et Zucc.*、そして富士山をはじめとする亜高山帯にはシラベ（シラビソ）*Abies veitchii Lindley*とオオシラビソ（アオモリトドマツ）*Abies mariesii Mast.*があり、その材構造での区別は困難である。

資源量から言って木材としてよく利用されるのはモミとウラジロモミで、モミは東北地方中部以南の本州、四国、九州の暖温帯から冷温帯下部にかけて普通に生える針葉樹で、幹径1.5m、樹高30mになる大高木である。ウラジロモミは静岡県地方では山地帯上部にあって、やはり樹高30m以上の大高木となる。いずれも材は木理通直で割裂性がよく、加工は容易だが、肌目が粗く、軽軟で、狂いやすい等の欠点がある。各種建築材、箱ものなどの器具材、小細工もの、棺桶、卒塔婆などの用途がある。当遺跡からは40点が出土し、その大部分は容器の底板（蓋板）であり、その他には折敷や組み物の蓋板、箸などがある。

2.　トウヒ属　*Picea*　マツ科　写真図版 I-2a-c.（14548）

水平および垂直の樹脂道を持つ針葉樹材で、垂直樹脂道は早材の終わりから晩材に散在し、放射組織には水平樹脂道がある。晩材は量多く明瞭．早材の仮道管径は小型で、晩材とは壁厚の変化によって区別される。放射組織は単列で、放射仮道管と柔細胞からなる。柔細胞の垂直、水平壁はモミ属同様、厚く肥厚し、多数の単壁孔（モミ型壁孔）がある。放射仮道管の有縁壁孔は孔口が狭く、しばしば孔口縁には突起があることからカラマツと区別される。分野壁孔はヒノキ型で小さく、１分野に２-５個ある。これらの形質からトウヒ属の材と同定した。

本州中部に分布するトウヒ属の樹木はトウヒ *Picea jezoensis (Siebold et Zucc.) Carr. var. hondoensis*

(Mayr) Rehder, イラモミ *Picea alcoquiana (Veitch ex Lindl.) Carrière,* ハリモミ *Picea torano (Siebold ex K.Koch) Koehne* など幾つかの種が冷温帯から亜高山帯にかけて分布するが、量的にやや多いのはトウヒである。これらは奥地林に生育することから、木材が商品として流通するようになってから利用されだしたと考えられる。当遺跡からは10点が出土し、曲物が２点、曲物など容器の底板及び蓋板が７点、箸が１点である。

3.　アカマツ　*Pinus densiflora Siebold et Zucc.*　マツ科　写真図版 I-3a-c.（14483）

垂直・水平の樹脂道を持つ針葉樹材で、早材、晩材とも幅広く、早材から晩材への移行は緩やかである。垂直樹脂道は多くは晩材中に散在する。放射組織は単列と紡錘状の２形があり、後者には水平樹脂道がある。放射組織は放射仮道管、柔細胞、分泌細胞からなり、放射仮道管の内壁は顕著に肥厚し、その先端は鋭い歯牙状となる。分野壁孔は大型の窓状で通常１分野に１個ある。これらの形質からアカマツの材と同定した。

アカマツは本州、四国、九州の冷温帯から暖温帯にかけてもっとも普通に生える針葉樹で、特に痩せ地や二次林に多い。静岡県地方では平野部から山地丘陵にかけてどこにでもアカマツがある。成長は早く、幹径１ｍ、樹高30ｍになり、材は木理通直で重硬、樹脂分が多く、保存性がよい。アカマツはクロマツとともに一つの短枝に２本の針葉が束生し（二葉松類）、１本の針葉にある維管束が二つの部分からなる複維管束亜属に属して、材質が堅いのに対して、ヒメコマツなどは、２本の短枝に5本の針葉が束生し（五葉松類）、維管束が1本のみからなる単維管束亜属に属し、材は柔らかい。アカマツの材は建築材、各種器具材、土木用材、製鉄用の炭材、薄く剥いで経木や縄にするなど、広い用途がある。当遺跡出土材は31点あり、丸木杭が15点、下駄が７点、容器の底板（蓋板）１点、用途不明の木材が８点である。マツ材の下駄は「庶民的」である。

4.　クロマツ　*Pinus thunbergii Parl.*　マツ科　写真図版 II-4a-c.（13663）

材の基本構造はアカマツに良く一致するが、放射仮道管の内壁の肥厚が未発達で、鋭い鋸歯状にはとがらないことで区別される。

クロマツは青森県以南の本州、四国、九州の沿岸部に広く分布するが、それに比べ海岸部に限定される。静岡県地方でも近世になり海岸砂丘の飛砂防止、緑化に積極的に植林された結果、海岸部はどこにもクロマツ林があるようになった。成長は早く、アカマツ同様、幹径１ｍ、樹高30ｍになり、材質、用途もアカマツ同様である。当遺跡出土材は丸木杭が８点、用途不明の材２点である。杭材にはアカマツ同様にクロマツも多用されており、鶴喰広田遺跡と手乱遺跡双方ともこの両者が存在することから、当時はこの２種を区別して用いてはいなかったことが窺われる。

4'.　マツ属複維管束亜属　*Pinus subgen. Diploxylon*　マツ科

上に述べたとおり、アカマツとクロマツは放射仮道管の内壁の歯牙状肥厚の顕著さで区別されるが、材の保存が悪く、細胞壁が劣化しているためそのいずれとも判定できなかったものを「複維管束亜属」とした。単維管束亜属からは放射仮道管の内壁の肥厚が顕著であることで区別される。

当遺跡出土材は杭が１点である。

5.　単維管束亜属　*Pinus subgen. Haploxylon*　マツ科　写真図版 II-5a-c.（14546）

アカマツ、クロマツよりは年輪幅がやや狭い針葉樹材で、垂直、水平の樹脂道がある。早材から晩材への移行は緩やか、晩材部は一般に幅が狭い。放射組織は単列と水平樹脂道を含む紡錘形があり、柔細

胞、放射仮道管、分泌細胞からなる。分野壁孔は大型の楕円～窓形で１分野１個、仮道管の内壁は厚くならず、平滑である。これらの形質からマツ科マツ属のうち、ヒメコマツ *Pinus parviflora Siebold et Zucc.* などの単維管束亜属（五葉松類）の材と同定した。

ヒメコマツは北海道から九州の暖温帯上部から冷温帯に分布し、樹高25m、幹径60㎝ほどになる。材は木理通直、緻密で柔らかく加工性がよい。建築材、組み物、指物、各種器具材など幅広く用いられる。

当遺跡出土材は容器の底板（蓋板）１点である。

6.　ツガ　*Tsuga*　マツ科　写真図版 II-6a-c.（14596）

年輪の明瞭な針葉樹材で、早材から晩材への移行は急である。垂直、水平の樹脂道をともに欠き、放射組織は単列で、放射仮道管と柔細胞からなる。柔細胞の垂直、水平壁はモミ属同様、厚く肥厚し、多数の単壁孔（モミ型壁孔）がある。これらの形質からツガ属の材と同定した。

ツガ属には関東以西の本州、四国、九州の暖温帯上部から冷温帯下部にかけて広く分布するツガ *Tsuga sieboldii Carr.* と、亜高山帯に分布するコメツガ *Tsuga diversifolia (Maxim.) Masters* があり、静岡県内ではこの両者ともに比較的多く、特に富士山の３-５合目にはコメツガ林が発達している。

ツガは幹径80㎝、樹高30ｍくらいの大高木になる、コメツガは一回り小さい。両者とも材は木理通直で、重硬で、保存性は中位である。建築材、箱ものなどの各種器具材等に用いる。当遺跡出土材は箸２点である。

7.　スギ　*Cryptomeria japonica (Linn.f.) D.Don*　スギ科　写真図版 III-7a-c.（14624）

年輪の明瞭な針葉樹材で、遺跡出土材は黒褐色となることが多い。年輪幅は通常広く、広い早材部と晩材部を持ち、早材から晩材への移行は緩やか～かなり急なものまで変異がある。老齢樹に由来する部分は年輪幅が大変狭く、晩材部もわずかで、早材から晩材への移行は急であり、ヒノキ材に似てくる。樹脂道はない。樹脂細胞は主に晩材部にやや接線方向に連なって散在する。樹脂細胞中には黒褐色の物質があり、細胞の水平壁は平滑で薄いか、やや厚く、多少数珠状に肥厚する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、垂直、水平壁は平滑、分野壁孔は大型の楕円形で開孔部は厚いレンズ状となり、スギ型で、１分野通常２個ある。以上の形質からスギの材と同定した。スギの遺跡出土材は年輪幅が広いこと、黒褐色の色調、際だった早晩材などでモミ材によく似るので、肉眼での識別は難しい。

スギは青森県から九州屋久島までの冷温帯から暖温帯に広く分布する針葉樹だが、日本海側に多い。幹径２ｍ、樹高35ｍを超える大高木となり、材は木理通直で割裂性がよく、軽軟で強靭、加工性がよく仕上げは中位であるが大材が多量に得られるので、建築材を始め、ありとあらゆる用途がある。本州日本海側と東海地方の太平洋側に多く分布し、これらの地域では縄文時代からスギ材が多量に利用されてきている。当遺跡出土材で最も多い96点、全体の約19％が同定されたが、これは選択したサンプルについての結果であって、出土材全体ではもっと大きい比率を占めることが容易に推察される。容器の底板（蓋板）が29点、箸が24点、栓が10点、下駄が４点、漆器が２点、用途不明の木材が24点である。

8.　コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata (Thunb.) Siebold et Zucc.*　コウヤマキ科　写真図版 III-8a-c.（14081）

材質が大変均質な針葉樹材で、晩材部は幅狭く、早材から晩材への移行はやや緩やか、年輪はあまり明瞭でない。樹脂細胞を欠き、放射組織は柔細胞のみからなる。分野壁孔大型で楕円～菱形を丸く膨らました窓状で１分野あたり通常１個ある。これらの形質からコウヤマキの材と同定した。

コウヤマキは福島県と本州中部以西、四国、九州の暖温帯上部～冷温帯下部に生える針葉樹で、幹径

１m、樹高30mの大高木となる。静岡県西部には分布しない。材は比較的軽いが堅く強靭で、木理通直で、年輪が目立たなく均質であり、加工性よく、仕上がりが美しい。耐朽性、耐湿性に特に優れ、日本産の針葉樹でもっとも材質がよいと言える。材質がよいから建築材を始めありとあらゆる用途に用いることができるが、資源量が少ないため、特にコウヤマキを必要とする桶類に用いられるが、弥生時代～古墳時代の木棺にはコウヤマキが特に使われていた歴史がある。当遺跡出土材は漆椀１点で、コウヤマキの漆椀というのは非常に珍しい。

9.　ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Siebold et Zucc.*　　ヒノキ科　写真図版 III-9a-c.（14553）

年輪のあまり目立たない針葉樹材で、垂直・水平の樹脂道を持たない。遺跡出土材はスギの葉に黒ずまず、明るい褐色を呈する。年輪幅が通常狭く、均等で、木目が美しい。晩材部は幅狭く早材から晩材への移行は急である。樹脂細胞は晩材部付近に散在する。樹脂細胞はスギ同様黒褐色部物質で充填されるが、水平壁は通常厚く肥厚し、結節状となる。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔はやや大きめの円形で開孔部は幅の狭いレンズ状で斜めに位置し、トウヒ型～ヒノキ型で1分野あたり通常１～２個ある。以上の形質からヒノキの材と同定した。

ヒノキは関東地方以西の冷温帯から暖温帯上部に分布する針葉樹で、幹径１m、樹高35m以上になる。材は木理通直で割裂性が大変よく、軽軟で、加工性が大変良い。材は緻密、強靭で、耐朽性に特に優れ、光沢美しく、芳香がある。日本産の針葉樹ではコウヤマキに次いで優秀な木材で、大型建築物から個人住宅までのあらゆる建築材、様々な器具材、仏像、彫刻物、曲物、組み物、指物など実に広い用途がある。当遺跡出土材は85点とスギに次いで多く、曲物、折敷などの漆塗りでないもの合わせて45点、箸が13点、栓と下駄が７点ずつなど、様々である。

10.　サワラ　*Chamaecyparis pisifera Siebold et Zucc.*　ヒノキ科　写真図版 IV-10a-c.（14528）

ヒノキによく似た材で、一般に年輪幅はヒノキより広いことが多い。幅広い早材と狭い晩材からなり移行はヒノキより緩やかである。樹脂細胞がやや接線方向にまとまる傾向を見せて散在し、細胞内に茶褐色の物質を含み、細胞の水平壁は厚くなって単壁孔を持つことが多い。放射組織は単列で柔細胞のみからなり分野壁孔はヒノキ型～スギ型で２個ある。これらの形質からヒノキ科ヒノキ属のサワラの材と同定した。

サワラは東北南部から中部地方の内陸部の暖温帯上部～冷温帯に分布し、樹高30m、幹径１mの大高木となり、静岡県の北部の山岳地帯ではヒノキと同所的に存在する。材はヒノキより軽軟で材質がやや劣るが特に水湿に強く、風呂桶、桶類などの特用があるが、基本的にはヒノキと同様に用いられる。当遺跡出土材は33点で、容器の底板（蓋板）が14点、曲物が１点、栓８点、箸３点などである。

10'.　ヒノキ属　*Chamaecyparis*　ヒノキ科

基本構造はヒノキ、サワラと同様だが、保存が悪いため分野壁孔が十分に観察できずそのいずれであるかが識別できなかったものである。出土材は２点で、用途はヒノキ、サワラと同じである。

11.　アスナロ　*Thujopsis dolabrata (Lin. Fil.) Siebold et Zucc.*　ヒノキ科　写真図版 IV-11a-c.（14610）

垂直、水平の樹脂道を持たない針葉樹材で、年輪は一般に幅広く、晩材部は比較的多く、早材から晩材への移行は緩やかである。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞は緩く集まって接線状に配列する。樹脂細胞の水平壁は通常厚く肥厚して数珠状になる。細胞内に黒褐色の物質を含む。放射組織は単列で柔細胞からなる。分野壁孔は小型で輪郭が丸く、開孔部が狭いトウヒ型、１分野に２－４個ある。

これらの形質からヒノキ科のアスナロの材と同定した。

アスナロ（変種のヒノキアスナロを含む）は北海道南部から九州にかけての冷温帯から亜高山帯下部に分布する針葉樹で、樹高20m以上、幹径80cmに達する。木理通直でやや軽軟だが芳香があり、保存性に特に優れる。建築材、家具材、器具材等、ヒノキ同様の用途がある。当遺跡出土材は用途不明の材１点である。

11'. ヒノキ科 *Cupressaceae*

年輪の明瞭な針葉樹材で、樹脂細胞が晩材部付近に散在し、樹脂細胞は黒褐色の物質で充填され、水平壁が結節状になることからヒノキ科であることは分かるが、保存が悪く分野壁孔等、詳細な形質が十分観察できないため、ヒノキ科のいずれの樹種であるかが不明なものである。当遺跡出土材は用途不明の材２点である。

12. イヌマキ属 *Podocarpus* マキ科 写真図版 IV-12a-c.（11935）

年輪の全く目立たない針葉樹材で、垂直・水平の樹脂道はない。仮道管内壁にらせん肥厚はない。樹脂細胞が年輪内に均一に分布している。樹脂細胞が黒褐色の物質で充填されることはなく、また水平壁は大変薄く平滑である。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は開孔部が広いスギ～ヒノキ型である。以上の形質からマキ科のイヌマキ属の材と同定した。

イヌマキ属には房総半島南部以南西の暖地に生えるイヌマキ *Podocarpus macrophyllus (Thunb.) Lambert* とさらに南方の紀伊半島以南に生えるナギ *Podocarpus nagi (Thunb.) Zoll. et Moritzi* があるが、材構造での両者の区別は難しい。

イヌマキは樹高15m、幹径80cmくらいになる常緑高木で、静岡県地方では生垣などに良く植えられる。地際からしばしば萠芽枝を出し、その萠芽枝は通直で成長がよい。材は木理通直で堅く粘りがあり、樹脂が多くて耐湿性、耐朽性に優れる。枝材は粘りがあって曲げに強い。カヤ同様に建築材、器具材などに使われるが、水湿に特に強いので琉球地方では土台、柱材に重用している。静岡県地方の弥生時代の遺跡からはイヌマキ属属性の丸木弓が多数出土するが、それ以降は多く出土しない。当遺跡出土材は杭材１点である。

13. カヤ *Torreya nucifera (L.) Siebold et Zucc.* イチイ科 写真図版 V-13a-c.（13949）

出土材の保存性が極めてよい黄褐色の針葉樹材で、材は淡黄褐色、年輪は目立たず、樹脂細胞はなく、仮道管と放射組織からなる。早材部には方形の仮道管が整然と並び、晩材部ではやや細く厚壁となる。仮道管内壁には顕著ならせん肥厚があり、２-３本ずつまとまって走る。放射組織は柔細胞のみからなり背が低く、分野壁孔は小さい。これらの形質からイチイ科のカヤの材と同定した。

カヤは東北地方南部以南の暖温帯に広く生える常緑針葉樹で、幹径１m、樹高25mの大高木となる。幹は通直で材の木理も通直、堅く粘りがあり、緻密で弾性が強く、切削加工が容易で木肌美しく、保存性も高くて、極めて優秀な針葉樹材である。建築材、各種器具材など実に多様な用途があるが、碁盤、将棋盤などの特用がある。特に、古来、一木の木彫仏に重用されている。当遺跡出土材は栓が１点である。

14. サワグルミ *Pterocarya rhoifolia Siebold et Zucc.* クルミ科 写真図版 V-14a-c.（14479）

中型楕円形の単独道管が緩く集まって斜め放射方向に配列する放射孔材～散孔材で、道管密度は低く、年輪界は目立たない。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状。放射組織は１-２細胞幅で背の低

い同性である。これらの形質からクルミ科のサワグルミの材と同定した。

サワグルミは樹高25m、幹径60㎝ほどの幹が直立する落葉高木で、北海道南部から九州熊本県にかけての冷温帯の沢沿いに生える。実は食糧とならない。材は軽軟で加工性は良く、指物、箱物、火鉢の胴、下駄など用途がある。当遺跡出土材は下駄が２点である。

15.　ハンノキ属ハンノキ節　*Alnus sect. Gymnothursus*　カバノキ科　写真図版 V-15a-c.（14521）

薄壁で多角形～楕円形の小道管が単独、あるいは２-４個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪内での道管径の変化はあまりない。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状で、側壁の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在する。放射組織は単列同性と集合放射組織の両方がある。以上の形質からブナ科ハンノキ属のうち、ハンノキ節の材と同定した。

ハンノキ属には低湿地に多いハンノキ *Alnus japonica (Thunb.) Steud.*、山地斜面に多いヤマハンノキ *Alnus hirsute Turcz. var. sibirica C.K.Schn.*を始め幾つかの種類があるが、材構造で個々の種を識別するのは困難である。

ハンノキは北海道～九州の暖温帯～亜寒帯の低湿地、湿原などに多く分布する落葉高木で、樹高15m、幹径50㎝ほどになる。ヤマハンノキは母種のケヤマハンノキと共にハンノキと同じく北海道～九州の暖温帯～亜寒帯に広く分布するが、生育地は山地斜面で異なっている。樹高20m、幹径50㎝になる。ヤマハンノキの材はやや堅硬で、ハンノキの材は柔軟という違いはあるが、安価で手に入りやすく、床柱や梁、板などの建築材始め各種器具材等に広く用いられる。ただし、腐朽しやすい欠点がある。当遺跡出土材は漆器椀と挽物の皿が１点ずつである。

16.　ハンノキ属ヤシャブシ節　*Alnus sect. Bifurcatus*　カバノキ科　写真図版 VI-16a-c.（14493）

薄壁で多角形～楕円形の小道管が均一に分布する散孔材で、年輪は不明瞭である。道管は単独あるいは放射方向に２～多数が複合する。道管の穿孔は横棒が20本くらいからなる階段状、側壁の壁孔は微少な小孔紋で交互状に密に分布し、道管内壁にはらせん肥厚はない。木部柔組織は散在する。放射組織は単列同性で、集合放射組織は殆どでない。以上の形質からブナ科ハンノキ属のヤシャブシ節の材と同定した。

東海地方に分布するヤシャブシ節の樹木には，山地の温帯上部から冷温帯に広く分布する落葉高木のヤシャブシ *Alnus firma Siebold et Zucc.*、沿岸部に普通に生育する落葉中高木のオオバヤシャブシ *Alnus sieboldiana Matsumura* がある。前者の材は軽軟、割裂自由で木目が美しく、まな板、下駄などの用途がある。後者の材はやや堅硬だが幹が太くならないことから材の用途はあまりない。当遺跡出土材は下駄２点であり、ヤシャブシである可能性が高い。

16'.　ハンノキ属　*Alnus*　カバノキ科

ハンノキ節とヤシャブシ節は材の基本構造が同じで、集合放射組織の出現頻度で区別されるが、当該プレパラートの材の保存性が大変悪く、また木口と板目の切片が小さくてその出現の有無を判断できなかったものである。出土材の下駄１点はヤシャブシである可能性が考えられる。

17.　クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus sect. Eucarpinus*　カバノキ科　写真図版 VI-17a-c.（14472）

小型（直径約30～60μm）で丸い管孔が、単独あるいは放射方向に数個複合し、それが緩く放射方向に集まって配列する散孔材～放射孔材。道管の穿孔は単一で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。

木部柔組織は接線状～短接線状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は同性で、１-３細胞幅のものと、大型の集合状のものからなる。これらの形質からカバノキ科クマシデ属のイヌシデ節の材と同定した。

イヌシデ属にはイヌシデ *Carpinus tschonoskii Maxim.*、アカシデ *Carpinus laxifolia (Sieb. et Zucc.) Blume* などがあり、いずれも暖帯～温帯に広く分布する落葉中高木で、特に二次林に多い。いずれの材もやや硬く緻密で弾力があり、柄物などに用いられる。当遺跡出土材は容器の底板（蓋板）１点である。

18.　クリ　*Castanea crenata Siebold et Zucc.*　ブナ科　写真図版 VI-18a-c.（14478）

年輪の始めに楕円形の大道管が１-３層並び、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって火炎状の紋をなす環孔材で、心材部はタンニン様物質が変質したもので漆黒となり、材は堅くなって保存性が大変良い。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は丸い小孔紋で交互状、道管内壁には薄壁のチローシスが発達する。木部柔組織は散在状あるいは単接線状で、晩材部で目立つ。放射組織は単列同性、道管-放射組織間の壁孔はサイズが不揃いな楕円形で、その長軸の向きは様々である。これらの形質からクリの材と同定した。

クリは北海道南部以南の全国の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹径１m、樹高20mに達する。陽光の地に生え、成長が早く、材はやや堅硬で割裂容易、耐朽性、特に耐湿性に優れる優秀な木材である。大材が得られるので大型建築物の柱材や土台、各種器具材を始め、ありとあらゆる用途がある。また特に耐湿性と耐朽性に優れているので土木用材、木造の橋、鉄道枕木などの特用がある。材質の優秀さと人里近くに多く生えることから、古くから多用されてきている。当遺跡出土材は下駄16点に漆椀１点、用途不明品が１点である。

19.　ブナ属　*Fagus*　ブナ科　写真図版 VII-19a-c.（14071）

丸みを帯びた小道管が密に分布する散孔材で、道管は単独あるいは２-数個が様々な方向に複合する。道管の穿孔はほとんどが単一だが、横棒が10本以下の階段状穿孔がわずかに混じる。放射組織はほぼ同性で１-10細胞幅ほどになり、大きいものは肉眼で認められ、接線面での形状は綺麗な紡錘形となる。これらの形質からブナ科のブナ属の材と同定した。

ブナ属には全国の温帯林にあるブナ *Fagus crenata Blume* と、本州太平洋岸の温帯にあるイヌブナ *Fagus japonica Maxim.* とがあるが、材構造での区別は困難である。いずれも樹高30m、幹径１mを越える大高木となり、静岡県地方では両者とも分布する。ブナの材は堅硬、緻密で割裂自在で加工性はよく、木目が美しいが、腐りやすい欠点がある。机、椅子を始めとする各種家具、挽物、刳物、漆器木地、玩具、運動具など実にさまざまな用途があり、国内の資源量が多いことから安価であり、「庶民的」な木材と言える。イヌブナの材はブナに似るが、質は劣る。当遺跡出土材は漆器椀42点、皿３点、椀１点、下駄２点である。

20.　コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　写真図版 VII-20a-c.（14618）

出土材はしばしば暗赤褐色をして、中～大型の丸い道管が単独で、放射方向に配列する放射孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は１-３細胞幅の独立帯状、放射組織には単列同性と大きな複合状の２種があり、道管-放射組織間壁孔は縦長の楕円形で柵状に配列する。これらの形質からブナ科コナラ属のうち、常緑性のカシ類、すなわちアカガシ亜属の材と同定した。なお、同定された８点はいずれも道管径が200μmを超えないことから、この中にイチイガシが混じっている可能性はない。

カシ類は照葉樹林を特徴づける種群で、東北地方南部以南に沢山の種類があり、多くは高木となる。静岡県地方ではアカガシ *Quercus acuta Thunb.*、アラカシ *Quercus glauca Thunb.*、シラカシ *Quercus*

myrsinaefolia Blume、ウラジロガシ *Quercus salicina Blume* などがある。なお、海岸によく生えるウバメガシ *Quercus phillyraeoides A. Gray* はこのグループには含まれない。カシ類の材は堅硬で木理通直、緻密で割裂性よく、弾性があって強靭であり、建築材を始め各種農具類、柄物、木刀など多くの用途がある。本遺跡出土材は鍬３点と用途不明の材５点である。

21.　コナラ属コナラ節　*Quercus sect. Prinus*　ブナ科　写真図版 VII-21a-c.（13969）

年輪の始めに丸い大道管が１-数層並び、そこから順次径を減じて晩材部ではクリ同様、薄壁多角形の小道管が多数集まって火炎状となる環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は２-３細胞幅の独立帯状をなし、晩材部でよく目立つ。放射組織は単列同性と複合状があり、道管-放射組織間の壁孔はカシ類と異なり、いびつな楕円形で縦に長くならない。以上の形質からコナラ属コナラ亜属のうち、コナラ節の材と同定した。

コナラ節には全国の山野に普通で、特に二次林に多いコナラ *Quercus serrata Thunb.*、暖温帯から冷温帯にやや希に産するナラガシワ *Quercus aliena Blume*、冷温帯に多いミズナラ *Quercus mongolica Fish. var. grosseserata Rhed.*、冷温帯から亜寒帯にあるカシワ *Quercus dentata Thunb.* などがあり、静岡県地方ではコナラが普通であり、山地上部に行くとミズナラが出現し、カシワが希にあるがナラガシワはあまり見かけない。コナラは幹径60㎝、樹高15ｍくらいになる落葉高木で、材はやや堅硬で肌目は粗く、割裂容易で、建築材、各種器具材、柄物、細工物など、特に薪炭材に用いる。ミズナラは幹径１ｍ、樹高20ｍを超える大木となり、材質もコナラより優れていて、特に家具材に重用される。当遺跡出土材は鍬と下駄が１点ずつである。

22.　ムクノキ　*Aphananthe aspera Thunb.*　ニレ科　写真図版 VIII-22a-c.（13963）

中～小型で丸～楕円形の道管が、年輪内に単独あるいは２-３個放射方向に複合して均一に散在する散孔材だが、年輪界に向けて道管径はやや小さくなり、半環孔材的にもなる。道管の壁はやや厚く、穿孔は単一、道管相互の壁孔は微細な小孔紋で密に交互状にある。木部柔組織は早材部で周囲状、晩材部では周囲状及び数細胞幅の帯状で著しい。放射組織は異性で１-５細胞幅くらい、１-４細胞高の単列部には小型の結晶がしばしば見られる。これらの形質からムクノキの材と同定した。

ムクノキは関東地方以西の暖温帯に生える落葉高木で、直径60㎝、高さ20ｍくらいになる。成長の早い木で集落周辺および二次林に特に多い。材はやや堅く緻密で強靭であり、割裂は困難で、さまざまな農工具の柄、天秤棒等の用途がある。本遺跡出土材は下駄１点である。

23.　ケヤキ　*Zelkova serrata Thunb.*　ニレ科　写真図版 VIII-2　a-c.（14480）

年輪始めに丸い大道管が１（-２）層に並び、孔圏外では薄壁多角形の小道管が多数集まって塊状となったものが分布する環孔材で、年輪がよく目立つ。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状に密に並ぶ。小道管には顕著ならせん肥厚がある。木部柔組織は周囲状、ストランドは１-４細胞で層階状に並ぶ。放射組織は背があまり高くない紡錘形で、鞘細胞はなく、上下端に大きな結晶細胞を持つ。これらの形質からケヤキの材と同定した。

ケヤキは青森県から鹿児島県までの暖温帯から冷温帯にかけて広く分布する落葉広葉樹で、幹径1.5ｍ、樹高25ｍを超える大木となる。材は堅硬、強靭で美しい杰が出て、保存性、耐朽性は高く、切削加工は容易である。材質に優れ、大材が得られることもあって、大きな建造物の柱、梁、扉などの建築材に、木目が美しく加工が容易であることもあって、各種家具内装や大型彫刻物を始め各種器具材、家具、漆器木地等として実に多様な用途がある。当遺跡出土材は漆椀17点、皿など４点、下駄５点、用途不明

品２点である。

24.　ヤマグワ　*Morus bombycis Koidz.*　クワ科　写真図版 VIII-24a-c.（13653）

年輪始めに大きな楕円形の道管が１-３層に並び、順次径を減じて、晩材部では薄壁多角形の小道管が集まって塊となったものが斜め接線方向に連なる傾向を以て散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は多少大きめの小孔紋で交互状、小道管の内壁には顕著ならせん肥厚がある。放射組織は３-７細胞幅の紡錘形で、単列の翼部が発達し、異性である。以上の形質からヤマグワの材と同定した。

ヤマグワは広く全国の山野に分布する落葉高木で、幹径40㎝、樹高15ｍくらいになり、特に沢沿いに多い。材はやや堅硬で靭性にとみ、木理は粗いが光沢があって美しく、特に保存性に優れている。和風建築の内装材や家具材、強さを必要とする各種器具材、彫刻材などに用いる。当遺跡出土材は農具１点である。

25.　クスノキ　*Cinnamomum camphora (Linn.) Siebold et Zucc.*　クスノキ科　写真図版 IX-25a-c.（14511）

丸くやや厚壁の中型の道管が単独あるいは２個放射方向に複合して比較的まばらに分布する散孔材で、年輪界に向けて道管径はかなり小さくなる。道管の穿孔は単一、希に１横棒の少ない階段状で、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、道管内にはチローシスが発達し、横断面でもよく見える。柔組織は周囲状でときどき大型の油細胞が混じり、横断面で道管のように見えることがある。放射組織は２-３細胞幅の異性で、背の低い紡錘形であり、直立細胞に大きく膨らんだ油細胞が混じる。遺跡出土材でも芳香を保持している。以上の形質からクスノキの材と同定した。

クスノキは関東南部以南の暖温帯に生える常緑高木で、成長が早く幹径１ｍ、樹高20ｍを超える大木となる。社寺等には直径２ｍを越える大木があり、しばしば天然記念物等に指定される。古くから良く植栽されてきたので、現在の分布域は本来の自生域よりかなり広まっていると考えられる。材は堅硬で耐久力、保存性にすぐれ、光沢があって芳香を持ち、建築材、和洋家具、箱物、木魚などの各種器具材に良く用いられる。当遺跡出土材は下駄１点である。

26.　クスノキ科　*Lauraceae*　写真図版 IX-26 a-c.（14603）

丸く壁がやや厚い小道管が単独あるいは放射方向に２-３個複合してまばらに均一に分布する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は横棒の少ない階段状あるいは単一である。柔組織は周囲状でときどきやや大型になって精油を含んだ油細胞が混じる。放射組織は背が低く、２-３細胞幅の紡錘形で、異性、上下端にある直立細胞にわずかに膨らんだ油細胞が混じる。以上の形質からクスノキ科のクスノキ以外の材と同定した。

クスノキ科には多くの属、種があるが材の基本構造は共通である。中でも、照葉樹林の主要素であるタブノキ *Machilus thunbergii Sieb. et Zucc.*、シロダモ *Neolitsea sericea (Blume) Koidz.*、ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum Sieb. ex Nakai*、カゴノキ *Actinodaphne lancifolia (Sieb. et Zucc.) Meisn.* などは互いによく似ていて区別が困難である。タブノキは照葉樹林を特徴づける常緑高木で、幹径１ｍ、樹高15ｍくらいになり、しばしば横に広がった樹形となり海岸部に多い。シロダモは幹径50㎝、樹高15ｍほどの常緑高木で、東北地方南部以南に広く分布する。いずれも材はやや堅く、きめは粗く、割裂困難で加工性はあまり良くない。精油成分を持つので芳香があり、保存性はよいがクスノキほどではない。建築材、家具、器具材、細工物などに使われる。当遺跡出土材は用途不明の材１点である。

27.　モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　写真図版 IX-27a-c.（13650）

暗赤褐色を帯びた出土材で、薄壁で多角形の小道管が複合したものが密に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は階段状で、道管内には薄壁のチローシスがたくさんある。放射組織は多くは２細胞幅で背がやや高く、道管-放射組織間の壁孔は楕円形で、交互状で密にある。以上の形質からモクレン属の材と同定した。

モクレン属には北海道から九州の冷温帯から暖温帯上部に広く分布するホオノキ *Magnolia obovata Thunb.*、同様な分布をするがやや暖温帯に多く、特に二次林に普通に生えるコブシ *Magnolia kobus DC.* の他数種があり、出土材はこのいずれかと考えられる。ホオノキは幹径50㎝、樹高20ｍになる落葉高木で、成長が早く、幹が通直に成長する性質がある。材は軽軟で年輪が目立たず均質であり、切削加工が容易で、建具、箱物、版木、下駄などによく用いられる。コブシも材質は軽軟、均一で加工性がよく、ホオノキと同様に用いられるが、幹がしばしば大きく枝分かれして通直な材が得にくいのと、材質が劣るのであまり利用されない。当遺跡出土材は漆器椀３点と下駄１点である。

28.　カツラ　*Cercidiphyllum japonicum Siebold et Zucc.*　カツラ科　写真図版 X-28a-c.（14605）

薄壁多角形の小道管が単独で密度高く均一に分布する散孔材で、晩材部では道管径は小さくなり、繊維組織が目立つようになる。道管の穿孔は横棒が20本くらいの階段状である。放射組織は異性で２列、単列部は直立細胞、多列部は平伏細胞からなり、接線断面ではスマートな紡錘形である。これらの形質からカツラ科のカツラの材と同定した。

カツラは北海道から九州の冷温帯に広く分布する落葉高木で、特に沢沿いなど水湿地に多い。成長は早く、幹径１ｍ、樹高20ｍ以上になり、幹は通直でしばしば萠芽枝が出て「千本桂」となる。材は軽軟で木理通直、加工が容易で、和洋家具、指物、組み物、様々な器具材に用いられる。当遺跡出土材は漆椀２点、下駄２点、用途不明品１点である。

29.　ヤブツバキ　*Camellia japonica Linn.*　ツバキ科　写真図版 X-29a-c.（11766）

微細な薄壁多角形の道管がほとんど単独で均一に分布する散孔材で、年輪始めに一回り大きい道管が並ぶ。道管の穿孔は横棒が10本くらいの階段状で、側壁の壁孔も階段状である。木部柔組織は散在状、放射組織は２-４細胞幅で異性、直立細胞がときどき大きく膨らんで中に大きな結晶を一つ持つ。以上の形質からヤブツバキの材と同定した。

ヤブツバキは照葉樹林を特徴づける常緑小高木で、東北地方以南の沿岸部から、関東以西では内陸部まで広く分布し、幹径30㎝、樹高10ｍくらいになる。材質は堅硬強靭で粘りがあり、割裂、加工は困難だが、柄物、滑り台、滑車、轆轤部品など強度を必要とする部分によく用いられる。遺跡出土材では容器の蓋１点である。

30.　イスノキ　*Distylium racemosum Siebold et Zucc.*　マンサク科　写真図版 X-30a-c.（14114）

多角形の小道管が単独で密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たず、道管径は年輪内で殆ど変化しない。道管の穿孔は横棒が10本以下の階段状、内壁にらせん肥厚は見られない。木部柔組織は接線状で細胞内にしばしば黒褐色の物質を持つことからよく目立つ。放射組織は２細胞幅程度、典型的な異性である。これらの形質からイスノキの材と同定した。

イスノキは伊豆半島以西南の暖地に生える常緑高木で、幹径50㎝、樹高15ｍになる。しばしば葉に大きな虫瘤ができて容易に見分けられる。材は極めて堅硬、強靭で重たく、美しい光沢があり、保存性に優れるが、割裂、加工は極めて困難である。床柱等の建築造作、柄物、家具、各種器具、箸、櫛、三弦

の棹、琵琶のバチ等、材質に応じた用途がある。当遺跡出土材は簪１点である。

31.　サクラ属　*Prunus*　バラ科　写真図版 XI-31a-c.（14054）

丸い小道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合して密度高く均一に分布する散孔材で、道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は大振りの小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がある。木部柔組織は散在状で、放射組織は１-５細胞幅くらいの同性にやや近い異性、構成細胞は大振りである。これらの形質からバラ科のサクラ属の材と同定した。

サクラ属には多数の種があるが、特徴的な形質が見られない限り、種の特定は困難である。もっとも普遍的なヤマザクラ *Prunus jamasakura Siebold ex Koidz.* は本州から九州の冷温帯から暖温帯に広く分布する落葉高木で、幹径60㎝、樹高10ｍ以上になる。材はやや堅く緻密で保存性、耐朽性がよく、加工も容易で優れた広葉樹材である。当遺跡出土材は漆椀２点である。

32.　カエデ属　*Acer*　カエデ科　写真図版 XI-32a-c.（14577）

丸みを帯びた多角形の小道管が単独あるいは２-数個放射方向に複合して密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。繊維組織は薄壁でやや直径の太い繊維の集まりと、壁がやや厚く直径わずかに小さい繊維の集まった部分とがモザイク状になって雲紋状の文様を作る。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は小孔紋で交互状に密にあり、らせん肥厚がある。木部柔組織は目立たないが年輪界にあるものはしばしば結晶を持つ。放射組織は１-４細胞幅くらいの同性である。これらの形質からカエデ属の材と同定した。

カエデ属には全国の暖温帯～亜高山、亜寒帯にかけて多数の種があるが、それぞれ互いに材構造が似ていて種の識別は困難である。静岡県地方にはイロハモミジ *Acer palmatum Thunb.*、イタヤカエデ *Acer mono Maxim.*、ウリハダカエデ *Acer rufinerve Sieb. et Zucc.* など多数ある。いずれも幹径50㎝、樹高10ｍほどの落葉高木で、山地に生える。イロハモミジの材は堅硬強靭緻密で光沢があり、時に美しい杢がでる。切削加工は難しいが、建築の装飾的部分、各種家具、器具材、楽器材などに用いられる。当遺跡出土材は栓が１点である。

33.　トチノキ　*Aesculus trubinata Blume*　トチノキ科　写真図版 XI-33a-c.（14078）

単独あるいは数個が放射方向に複合した薄壁楕円形の小道管が均一に散在する散孔材で、年輪は目立たない。道管の穿孔は単一、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状、内壁にらせん肥厚がかすかに見えることがある。放射組織は単列同性で層階状に配列する。道管-放射組織間壁孔はやや大きめの小孔紋で交互状、密に並ぶ。これらの形質からトチノキ科のトチノキの材と同定した。

トチノキは北海道南部から九州にかけての温帯に広く分布する落葉高木で、成長が早く、幹径を１ｍ、樹高20ｍ以上の巨木となる。種子は多量のデンプンを含むが、有毒のサポニンを含むのであく抜きが必要である。材は柔らかく、肌理細かく光沢があって美しく、加工性に優れるが狂いが出やすく、また保存性も低い。大材が得られるので建築の大きな板を必要とする部分に使われることがあるが、主に刳物、挽物、漆器木地などに縄文時代前期から非常によく利用されてきている。本遺跡出土材は漆椀31点と挽物の皿１点である。

34.　シナノキ属　*Tilia*　シナノキ科　写真図版 XII-34a-c.（13953）

小型で薄壁の丸みを帯びた道管が単独あるいは主に放射方向に数個複合したものが均一に分布する散孔材で、短接線状の木部柔組織が目立つ。道管の穿孔は単一で、道管相互の壁孔は小孔紋で交互状に密

にあり、道管内壁に繊細ならせん肥厚をもつ。放射組織は１-４細胞幅程度の同性である。これらの形質からシナノキ属の材と同定した。

シナノキ属には北海道から九州までの冷温帯に分布するシナノキ *Tilia japonica (Miq.) Simonkai*、北海道から本州中部までの冷温帯に分布するオオバボダイジュ *Tilia maximowicziana Shirasawa*、西日本の暖温帯に分布するヘラノキ *Tilia kiusiana Makino et Shiras.* があり、静岡県地方にはシナノキのみが分布する。シナノキは樹高20m、幹径50cmになる落葉高木で、材は軽軟緻密で加工性はよいが耐朽性、保存性に劣る。箱ものなどの器具類、下駄、マッチ軸木などの用途がある。当遺跡出土材は下駄１点である。

35.　ヤマボウシ　*Benthamidia japonica (Siebold et Zucc.) Hara*　ミズキ科　写真図版 XII-35a-c.（13942）

丸い小道管が単独で比較的まばらに均一に散在する散孔材で、年輪界は不明瞭である。木部柔組織は散在状で量は少ない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。放射組織は７細胞幅位になり背も比較的高く、木口面でも目立つ。典型的な異性で上下に単列の翼部がある。これらの形質からミズキ科のヤマボウシの材と同定した。よく似た材にクマノミズキ *Swida macrophylla (Wall.) Sojak* があるが、放射組織が大きいことで区別される。

ヤマボウシはおおむね樹高10m以下、幹径20cm程度の落葉小高木で、本州、四国、九州の温帯上部～冷温帯の山地丘陵に広く生え、４枚の白い苞を持つ花が咲いてよく目立つ。材質は堅硬強靭緻密で粘りがあり、折れにくく、切削加工は難しい。材質を活かして各種柄物、下駄、機械材などに重用される。当遺跡出土材は独楽と紡織具が１点ずつである。

36.　ミズキ　*Swida controversa (Hemsl.) Sojak*　ミズキ科　写真図版 XII-36a-c.（14110）

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合して均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。木部柔組織は散在するが目立たない。道管の穿孔は横棒の多い階段状、側壁の壁孔は小孔紋で交互状、らせん肥厚はない。放射組織は１-５細胞幅くらいの典型的な異性で、単列の翼部は時に高くなる。これらの形質よりミズキの材と同定した。

ミズキは北海道から九州の暖温帯～亜寒帯の山地、丘陵、平野に広く分布する落葉高木で、成長が早く、樹高15m、幹径40cm以上になる。材はやや軽軟だが肌目は緻密、切削加工が容易で材の白さもあって各種器具材、特にこけしなどの彫刻材の特用がある。本遺跡出土材は漆椀２点と容器２点である。

37.　エゴノキ属　Styrax　エゴノキ科　写真図版 XIII-37a-c.（13950）

丸みを帯びた薄壁多角形の小道管が放射方向に２-６個複合したものが散在する散孔材で、道管径は晩材部ではかなり小さくなる。道管の穿孔は横棒の少ない階段状、木部柔組織は１細胞幅の独立帯状で、晩材部でよく目立つ。放射組織は２-３細胞幅の異性で、単列の翼部が高い。以上の形質からエゴノキ属の材と同定した。

エゴノキ属には全国の山野にごく普通なエゴノキ *Styrax japonica Siebold. et Zucc.*、それより山間部に多いハクウンボク *Styrax obassia Siebold. et Zucc.* などがあるが、当遺跡出土材は分布からエゴノキの可能性が高い。エゴノキは幹径20cm、樹高８mほどの落葉小高木で、材はやや堅硬で弾性高く、均質なので切削加工は容易である。木が身近にあることもあって床柱、柄物、独楽、駒、各種玩具、各種器具、小細工ものなどの用途がある。当遺跡出土材は唐傘の轆轤３点と漆椀１点である。

38.　サワフタギ　*Symplocos chinensis (Lour.) Druce var. leucocarpa (Nakai) Ohwi*　ハイノキ科　写真図版 XIII-38a-c.（14129）

丸～やや角張った小道管が単独で均一に分布する散孔材で、道管径は年輪内で殆ど変化しない。道管お線香は横棒が20本ほどの階段状、らせん肥厚は見えない。木部柔組織は短接線状。放射組織は１-３細胞幅で典型的な異性である。これらの液質からハイノキ科のサワフタギの材と同定した。

サワフタギは全国の山野に自生する落葉低木で、通常、樹高２-３ｍ、幹の根元径は10㎝以下である。材は硬く強靱で木理細かいので、算盤の球、将棋の駒、洋傘の柄、把手類などの特用がある。当遺跡出土材は独楽１点である。

39.　トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科　写真図版 XIII-39a-c.（14487）

年輪のはじめに単独あるいは２個放射方向に複合した楕円形の大道管が１-２層並び、順次径を減じて晩材部では厚壁で外形多角形、内腔円形の小道管が単独あるいは数個放射方向に複合したものがまばらに散在する環孔材。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は微細孔紋で交互状に密に配列する。木部柔組織は周囲状、晩材部では量が多くなり翼状、時に連合翼状となる。放射組織は１-２細胞幅の同性で、背は低く、サイズがほとんど揃う。これらの形質からトネリコ属の材と同定した。

トネリコ属には多数の種があるが、材構造は互いに似ていて種の識別は困難である。静岡県地方にはトネリコ *Fraxinus japonica Blume*、アオダモ *Fraxinus lanuginose Koidz. f. serrate (Nak.) Mura.*、ヤマトアオダモ *Fraxinus longicuspis Sieb. et Zucc.*、マルバアオダモ *Fraxinus sieboldiana Blume*、シオジ *Fraxinus platypoda Oliv.* などがある。落葉の小高木～大高木で、大きなものは幹径60㎝、樹高20ｍ以上となる。材はやや柔らかく弾力があり、木理通直で美しく、保存性が高く加工も容易な優秀な広葉樹材で、建築材、各種器具材、特に家具、運動具の用途がある。当遺跡出土材は下駄１点である。

40.　散孔材　*Diffuse-porous wood*

小道管が散在する散孔材だが、プレパラートの切片の保存性が悪く詳細な同定ができなかったものである。当遺跡出土材は漆塗りの容器の底か蓋１点である。

41.　竹笹類　*Bamboosoideae*　イネ科

桿の中心側に原生木部腔、左右に丸くて大きな一対の後生木部道管、外側に篩部があって、それを厚壁で緻密な繊維組織が覆って1本の維管束をなしていることから、イネ科のタケ亜科の材と同定した。

タケ亜科には桿径が大きく、桿が伸びた後、葉鞘が脱落するいわゆる竹類と、桿が細く、葉鞘が永続する笹類に便宜上区別することができる。今回の出土品のうち、桿径が明らかに太いものに由来するものを「竹類」と、明らかに細いものを「笹類」とし、いずれとも判断が付かないものを「竹笹類」とした。竹笹類としたのは漆塗り箸１点と編み籠１点である。

（a）竹類　*Take group*　写真図版 XIV-40a-c.（14112）

竹類としたものは図版にあるように、太い桿を割り裂いて削って箸に使用しているもので茎組織の一部を観察することができる。我が国にはマダケ *Phyllostachys bambusoides Siebold. et Zucc.*、モウソウチク *Phyllostachys heterocycla (Carr.) Mitford*、ハチク *Phyllostachys nigra Munro var. henonis Stapf ex Rendle* などがあるが、いずれも古代以降に大陸から渡来したものである。

当遺跡出土の竹類としたものは漆塗り箸２点、竹筒を利用したコップ状の容器１点である。

（b）笹類　*Sasa group*　写真図版 XIV-41a-c.（14113）

桿が細く、図版にあるように切片が作られる大きさの範囲で髄腔、表皮などを持つか、維管束が明らかに弧状に配列し、桿の直径が細いものに由来することが分かることから、笹類と見なした。笹類にはスズタケ *Sasa borealis (Hack.) Makino et Shibata*、チマキザサ *Sasa palmata (Lat.-Marl. ex Burb.) E.G.Camus*、

ネザサ *Pleioblastus argenteostriatus (Regel) Nakai f. glaber (Makino) Murata* など、日本自生の種類と、ヤダケ *Pseudosasa japonica (Siebold. et Zucc. Steud.) Makino* やメダケ *Pleioblastus simonii (Carrière) Nakai* など、大陸から渡来したと思われるものがあるが、それらの区別はもちろんできない。笹類としたものは漆塗りの箸とされるもの２点であるが、これは黒色化した桿表面が漆塗装と見誤ったものかも知れない。

42.　ウラジロ　*Gleichenia japonica Spr.*　ウラジロ科　写真図版 XIV-42a-c.（14117）

試料の断面はゆがんだ楕円形で、表皮細胞は下表皮層の細胞と顕著な形態の違いがない。下表皮組織の外側は表皮同様に径が小さく細胞壁も厚く、内側に向かって順次細胞径が大きくなり、細胞壁が薄くなって行き、内側の薄壁で径の大きい皮層の基本組織へと移って行く。試料の維管束は内皮に縁取られ、原生木部が多数ある中原型である。試料の中心に上面が開いた弧状の大きな維管束が１本ある。維管束は原生木部が多数ある中原型である。以上の形質からシダ類ウラジロ科のウラジロの「葉柄」と同定した。葉柄は断面が真円でないものの硬く平滑な表皮で覆われて光沢があり、硬度がある。当遺跡出土試料は「漆塗り箸」とされるもの１点であるが、観察した所見では漆の塗装はなされていない。また、出土した遺物の範囲には切削等の加工痕は認められない。これらのことから、ウラジロの葉柄を箸と見誤った可能性が強いが、手近に生えていたウラジロの葉柄を折り取って箸として使った可能性を否定するものではない。

２　鶴喰広田遺跡および手乱遺跡における木材利用

冒頭に述べたように，本報告では鶴喰広田遺跡からは404点、手乱遺跡からは100点、合計504点の木製品を抽出してその樹種を調べ、48の植物種を識別した。二つの遺跡は御殿川の両岸に位置しており、一連の遺跡と看做されているが、表１にあるように、樹種組成から見ても多くの樹種が両遺跡に共通であり、木材組成からも矛盾はない。また、同時代の他の遺跡から判明したことや当遺跡の他の遺物の状況から、これらは農村部の遺跡と考えられている。ここではこのことを前提に木材利用について検討を行う。

出土した木製品の用材傾向を見るため、大きく漆器、容器、箸、栓、下駄、農具、杭、その他、用途不明、の９群に便宜的に分け，それぞれについて用材の傾向を検討した。

【漆器】表３にあるように出土した漆塗のある物を漆器とし、130点の樹種を調べた。もっとも多いのは漆椀で100点あり、その樹種を見ると、ブナ属が41点ともっとも多く、次いでトチノキ（31点）、ケヤキ（17点）で、この３樹種で８割を占める。挽物の漆器椀に使われる木地の大部分をこの３樹種が占めるのは、全国的に古代末以降現代まで続く用材傾向である。近世における漆椀の木地の樹種と加飾とそれを使用した人びとの社会階層との間には密接な関係があり、それは漆器の「価額」と連動していることが知られている。即ち、ケヤキ、トチノキ、ブナの順に「安く」なり、それだけ塗りも簡便化し、加飾も少ないものになっている。上に述べたように鶴喰広田、手乱両遺跡は「農村部」の遺跡であると考えられており、ブナ（属）がもっとも多く出土したことはうなずけるが、それより「高価」とされるトチノキ、ケヤキの椀がかなり多く出土していることは驚きに値する。庄屋等、農村部の中でも「家格」が上の人びとの生活物が多く入っていることを反映しているのかも知れない。

一方、漆器椀にはこれら３樹種以外にも出土数は多くないものの沢山の樹種の木地が見られた。挙げると、カツラ、サクラ（属）、ミズキ、モクレン属（ホオノキ？）、クリ、コウヤマキ、ハンノキ（節）である。この多くは確かに漆器木地に使われないことはないもののその生産量は多くなく、こうして遺物として出土する機会はあまりないものと考えられる。特にコウヤマキの漆器椀というのは、恐らくは遺物としての出土は初めてのことだろう。このような多様な樹種の漆椀の存在は近世における活発な商

品流通の反映と考えることができよう。

椀以外の漆器は曲物や箱物、折敷などの部材、底板、蓋板などで、こちらは一般的に針葉樹材が使われる。出土数は少ないものの、ヒノキが12点、スギ２点とモミ属が１点あり、それにブナ属、エゴノキ属、散孔材が混じっている。

この遺跡からは大量の箸が出土した。その大部分は塗りはないが、漆が塗ってあると判断されたのは７点で、竹笹類が５点、イスノキが１点ある。竹笹類のうち、竹材を削って漆が塗ってある物は３点で、残り２点は笹の丸い桿で、遺物化の過程で黒色となり表皮が光沢を持つことから漆塗りと間違えられた物であることは樹種の記載の項に述べたとおりである。また、ウラジロは漆の塗りはないことは同様に植物種記載の項に述べたとおりである。なお、イスノキの塗り箸というものは高級なものと言え、これの出土は漆椀の項で述べたように「家格の高い」人びとの生活具が混じっているとの考えに良く符合する。さらにイスノキの漆塗りのバチ形が１点あるが、これはイスノキの用材として十分うなずけるものであり、漆が塗ってあることも「高級さ」を示唆する。この他漆の塗りのある物は、ヒノキ材で「用途不明」のものが４点あった。

【容器】曲物、折敷、箱物の部材、蓋底板などのうち、漆の塗りのない物を「容器」として表２に集計した。133点あり針葉樹が８樹種117点、広葉樹が８樹種15点である。針葉樹はスギ、ヒノキ、サワラ、モミ（属）など、これらの良く使われる樹種だがトウヒ属の９点というのはちょっと特異である。曲物が２点と容器の底板（蓋板）が７点で、奥地林に生育するトウヒ属の何れかの樹種が曲物製品として流通していたことが分かる。一方、広葉樹の方は、ブナ（属）、ケヤキ、トチノキ、ミズキなどすべて漆器と同じ樹種であり、用材は基本的に塗りのあるなしにかかわらず同じであったと考えられる。

【箸】ここに箸として集計されたのは塗りのないもので44点が調べられた。既に述べたように当遺跡群からは箸は数百点に上る数が出土しており、これはそのごく一部を抽出して樹種を調べたものである。44点は全て針葉樹で、スギ（24点）とヒノキ（13点）で大部分を占め、その他、サワラ（３点）、ツガ属（２点）、モミ属、トウヒ属（各１点）となっている。ツガ属、トウヒ属の箸への利用はちょっとうなずけないものがある。

【栓】この遺跡では面白いことに桶樽などの「栓」が27点も出土した。その樹種はスギ（10点）、サワラ（８点），ヒノキ（７点）に集中し、広葉樹はカエデ属が１点のみであった。針葉樹の用材は桶樽等の本体の用材とほぼ一致していたものと考えられる。

【下駄】当遺跡では大量の下駄の出土により、その用材をよく調べることができた。59点の下駄の樹種は、針葉樹ではヒノキとアカマツが７点、スギとモミ属が４点、それにサワラが１点で樹種が比較的限定されている。木材の「価額」という視点で見ると、ヒノキはやや高価な方に入るがその他は廉価と言える。ただ、これらはいずれも漆塗りではなく、その意味ではいずれも廉価な下駄の部類に入る。一方、広葉樹ではクリが16点ともっとも多く、次いでケヤキ（５点）がある他は、ブナ属、カツラ、ヤシャブシ節、サワグルミ（以上各２点）、コナラ節、モクレン属、クスノキ、シナノキ属、トネリコ属、ムクノキ（以上各２点）と実に多様である。キリ下駄は全く無い。これらはいずれも針葉樹同様「廉価」なものと言える。

【農具】農具として集計した物は５点のみで、アカガシ亜属が３点、コナラ節とヤマグワが１点である。カシとナラは全て鍬である。静岡県内の弥生～古墳時代の木製農具の鍬にはイチイガシが多く使われていることが知られているが、ここではこれとは異なり、イチイガシ以外の樹種が使われていることになる。

【その他】その他としたものは出土点数が少ないものを集めたもので、様々な木器がある（表４）。樹種記載の項で述べたように簪のイスノキ、唐傘轆轤のエゴノキ（属）はまさに材質と現代の用材に良く

一致する。その意味でヤマボウシ、サワフタギの独楽もうなずけるのである。また、鶴喰広田遺跡から編み籠が１点出土したがこれは竹笹類であった。

【杭】御殿川の流路を制する護岸に丸木杭が多数打ち込まれていたが、その樹種はイヌマキ（属）の１点を除いては全てマツ類であった。前項に述べてあるように、ここではアカマツ、クロマツの区別をせずに両樹種が使われていたことが分かる。

【用途不明】出土遺物の形状から用途が推察できなかった物がここに全てまとめられている。「用途不明品」の樹種組成を見ると、全体の用材と基本的に同じ傾向を示す物が多い。

以上、鶴喰広田遺跡及び手乱遺跡から出土した近世を中心とした木製品504点の用材傾向を見てきたが、御殿川両岸の護岸に由来する物（杭等）と旧流路に埋積した生活具等からなり、後者からは三島付近の農村域の人びとの暮らしを垣間見ることができた。

表1.　手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木材の樹種同定結果

樹種名	鶴喰広田遺跡	手乱遺跡	合　　計
モミ属	36	4	40
トウヒ属	9	1	10
アカマツ	21	10	31
クロマツ	7	3	10
マツ属複維管束亜属		1	1
マツ属単維管束亜属	1		1
ツガ属	3		3
スギ	91	5	96
コウヤマキ	1		1
ヒノキ	71	14	85
サワラ	33		33
ヒノキ属		2	2
アスナロ	1		1
ヒノキ科	1	1	2
イヌマキ属		1	1
カヤ	1		1
サワグルミ	2		2
ハンノキ属ヤシャブシ節	2		2
ハンノキ属ハンノキ節	2		2
ハンノキ属	1		1
クマシデ属イヌシデ節	1		1
クリ	13	5	18
ブナ属	36	12	48
コナラ属アカガシ亜属	6	2	8
コナラ属コナラ節	2		2
ムクノキ	1		1
ケヤキ	13	15	28
ヤマグワ	1		1
クスノキ	1		1
クスノキ科	1		1
モクレン属	2	2	4
カツラ	5		5
ヤブツバキ		1	1
イスノキ	2	1	3
サクラ属	2		2
カエデ属	1		1
トチノキ	16	16	32
シナノキ属	1		1
ヤマボウシ	2		2
ミズキ	3	1	4
エゴノキ属	4		4
サワフタギ	1		1
トネリコ属	1		1
散孔材		1	1
竹笹類	5	2	7
ウラジロ	1		1
合　　計	404	100	504

表2.　手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木材の用途別樹種組成

樹　　種	漆器	容器*	箸*	栓	下駄	農具	その他	杭	用途不明	合計
スギ	2	29	24	10	4		3		24	96
ヒノキ	16	29	13	7	7		2		11	85
サワラ		15	3	8	1				6	33
ヒノキ属		1					1			2
アスナロ									1	1
ヒノキ科									2	2
モミ属	1	32	1		4		1		1	40
アカマツ		1			7			15	8	31
クロマツ							1	8	1	10
マツ属複維管束亜属								1		1
マツ属単維管束亜属		1								1
トウヒ属		9	1							10
ツガ属			2						1	3
コウヤマキ	1									1
カヤ				1						1
イヌマキ属								1		1
ブナ属	42	4			2					48
トチノキ	31	1								32
ケヤキ	17	4			5				2	28
クリ	1				16				1	18
コナラ属アカガシ亜属						3			5	8
コナラ属コナラ節					1	1				2
カツラ	2				2				1	5
ミズキ	2	2								4
モクレン属	2	1			1					4
エゴノキ属	1						3			4
イスノキ	2						1			3
サクラ属	2									2
ハンノキ属ハンノキ節	1	1								2
ハンノキ属ヤシャブシ節					2					2
ハンノキ属					1					1
サワグルミ					2					2
ヤマボウシ							2			2
ヤブツバキ		1								1
カエデ属				1						1
クスノキ					1					1
クスノキ科									1	1
シナノキ属					1					1
トネリコ属					1					1
ムクノキ					1					1
ヤマグワ						1				1
サワフタギ							1			1
クマシデ属イヌシデ節		1								1
散孔材	1									1
竹笹類	5	1					1			7
ウラジロ	1									1
総計	130	133	44	27	59	5	16	25	65	504

＊これらはいずれも漆器（漆塗製品）を除いた数

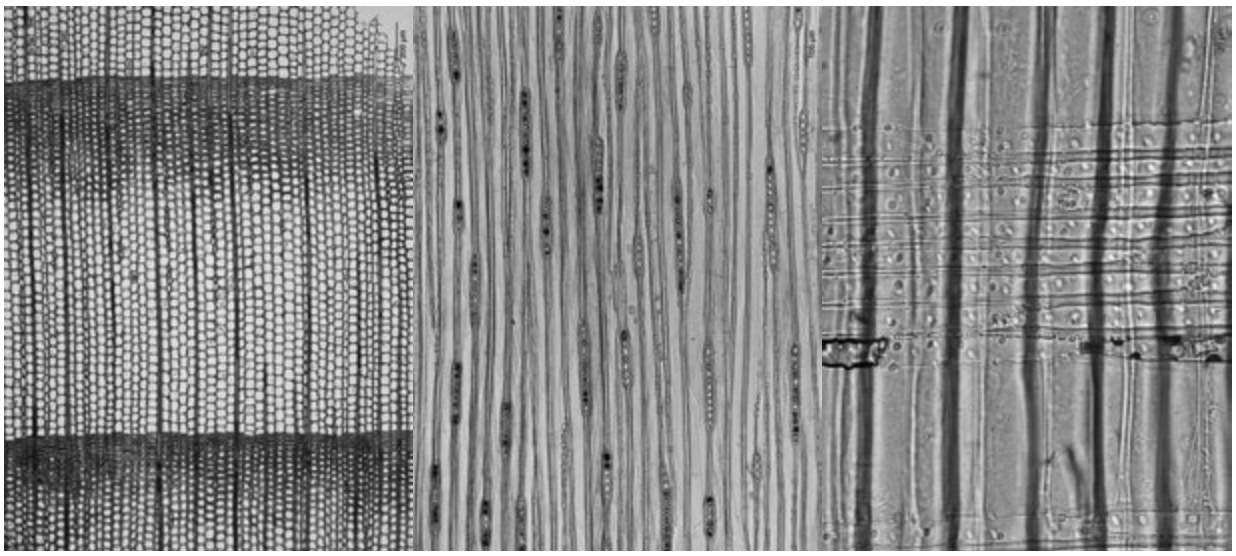
表3.　手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土漆塗製品の木地の樹種

樹　　種	椀	容器蓋底板	箱・膳等の部材	板材（箱・膳等の部材か？）	箸	簪	不明	合　計
ブナ属	41	1						42
トチノキ	31							31
ケヤキ	17							17
ヒノキ		3	4	5			4	16
竹笹類					5			5
カツラ	2							2
サクラ属	2							2
ミズキ	2							2
モクレン属	2							2
スギ		1		1				2
イスノキ					1	1		2
クリ	1							1
コウヤマキ	1							1
ハンノキ属ハンノキ節	1							1
エゴノキ属		1						1
モミ属		1						1
散孔材		1						1
ウラジロ					1			1
合　　計	100	8	4	6	7	1	4	130

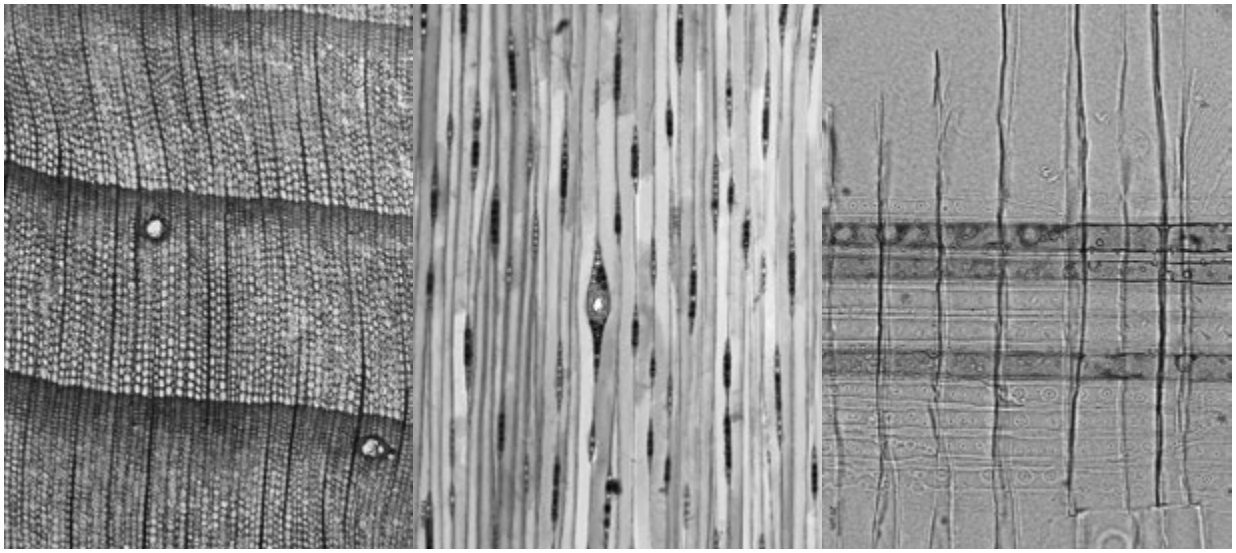
表4.　手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡出土木製品「その他」の木製品

プレパラートNo.	遺跡名	挿図番号	製品名	樹種	備考
11974	手乱遺跡	第16図－９	簪	イスノキ	
11765	手乱遺跡	－	編みカゴ	竹笹類	
11953	手乱遺跡	－	はし状木製品	スギ	
13950	鶴喰広田遺跡	第55図－51	傘轆轤	エゴノキ属	
13951	鶴喰広田遺跡	第55図－52	傘轆轤	エゴノキ属	
14130	鶴喰広田遺跡	第55図－50	傘轆轤	エゴノキ属	
14128	鶴喰広田遺跡	第65図－149	独楽	ヤマボウシ	
14129	鶴喰広田遺跡	第65図－150	独楽	サワフタギ	
13942	鶴喰広田遺跡	第65図－151	独楽	ヤマボウシ	
13641	鶴喰広田遺跡	第68図－170	塔婆	ヒノキ	

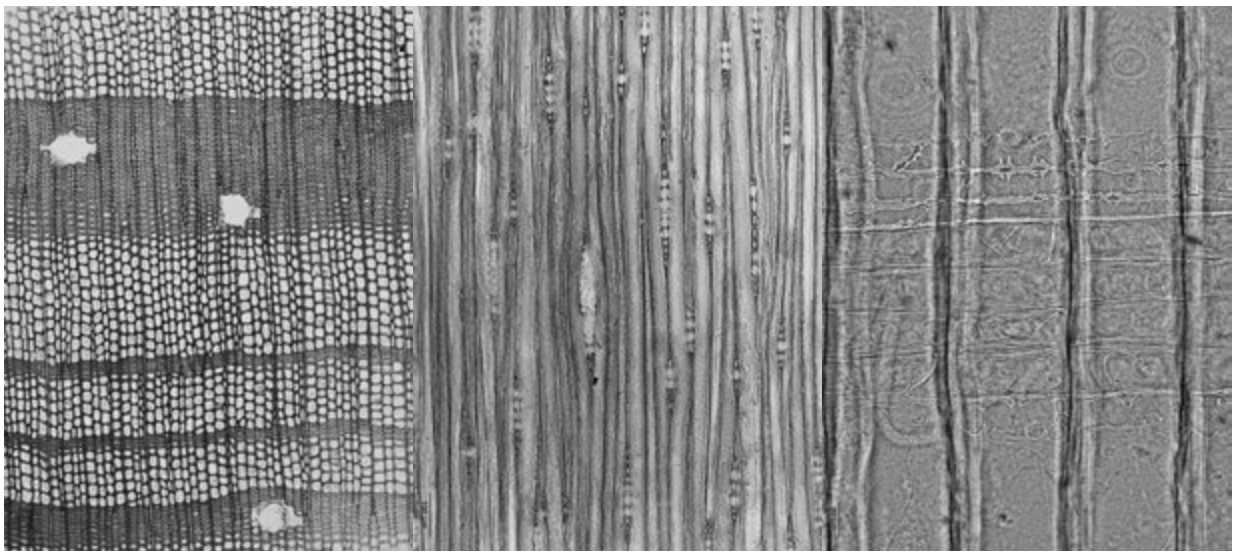
写真図版Ⅰ



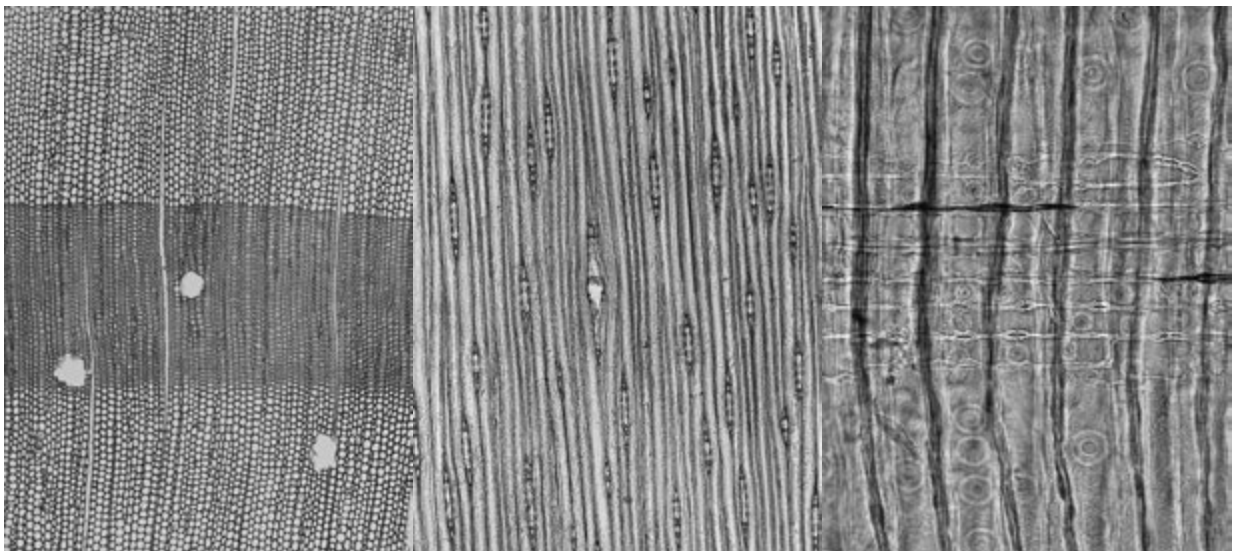
1a.　モミ属　14558 木口×30.　　1b.　同　板目×60.　　1c.　同　柾目×240.



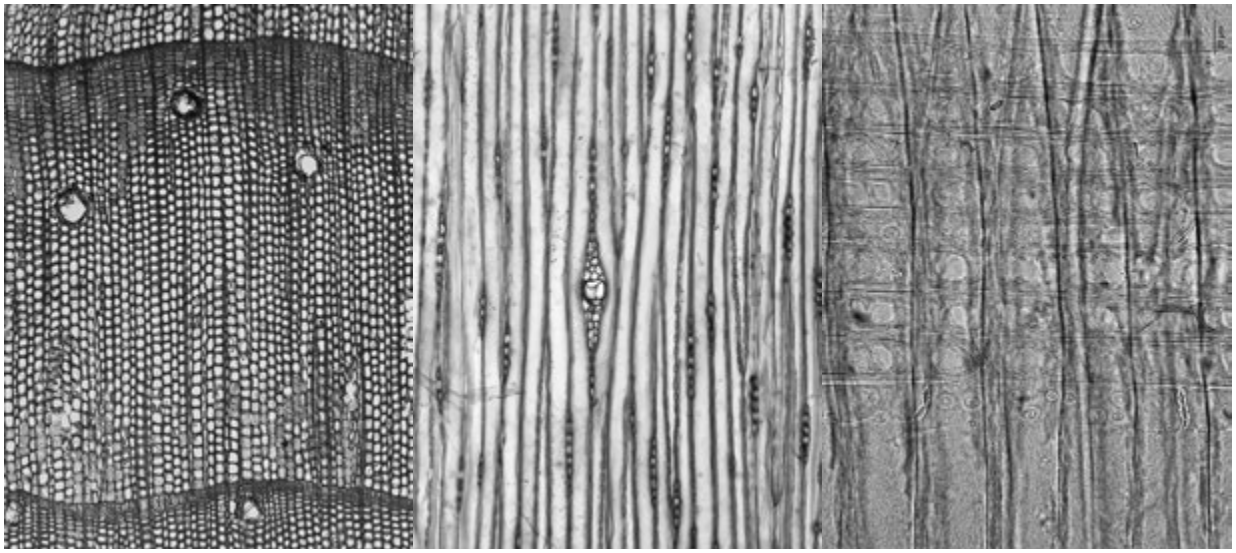
2a.　トウヒ属 14548 木口×30.　　2b.　同　板目×60.　　2c.　同　柾目×240.



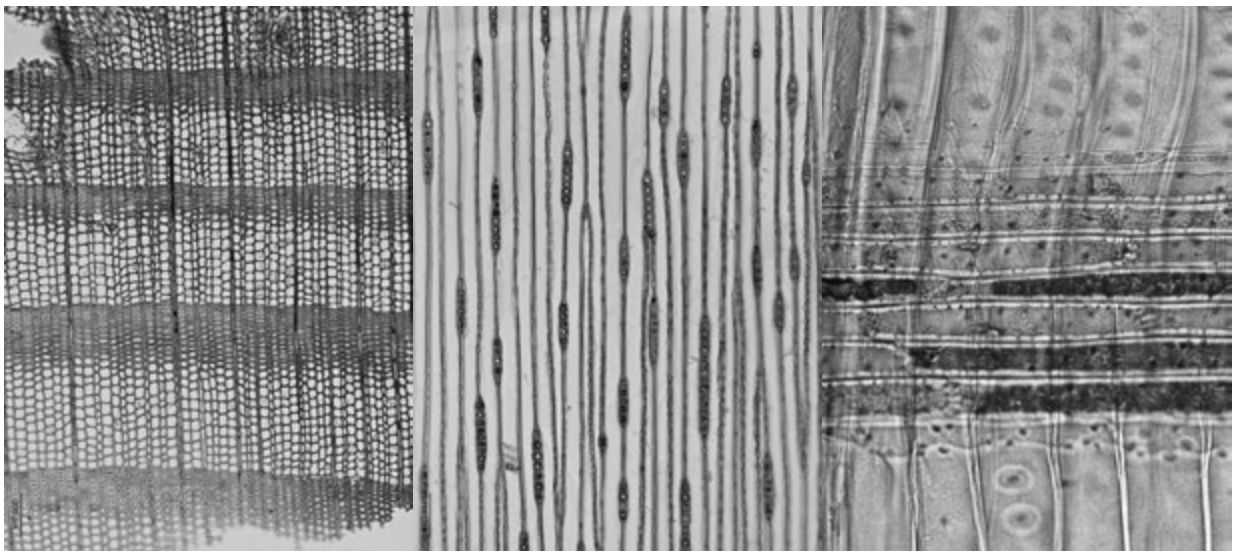
3a.　アカマツ　14483 木口×30.　　3b.　同　板目×60.　　3c.　同　柾目×240.



4a. クロマツ13663 木口×30.　4b. 同　板目×60.　4c. 同　柾目×240.

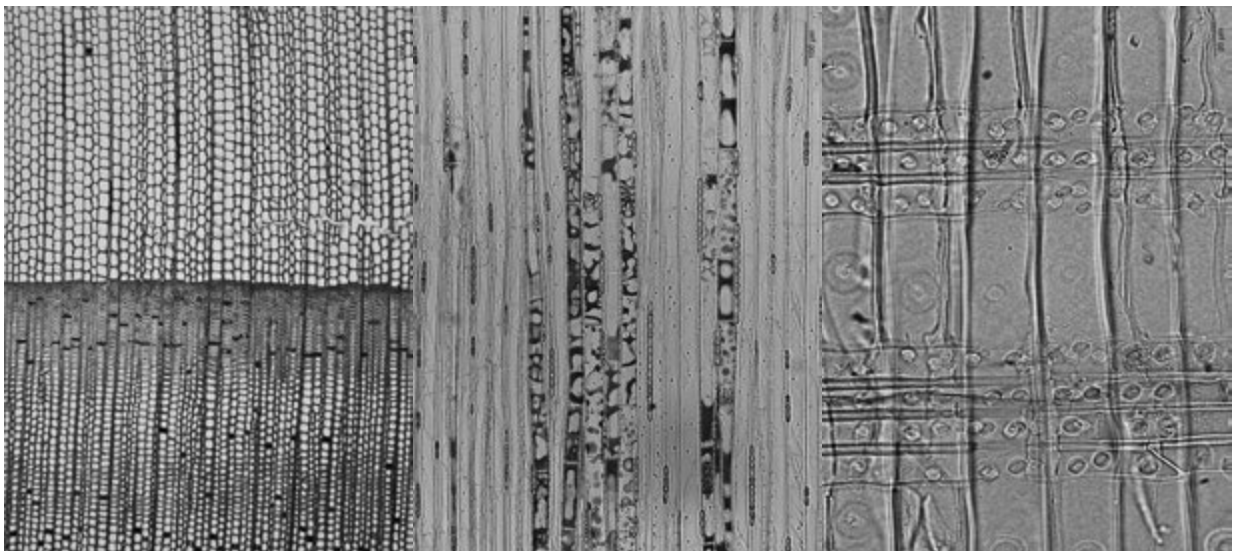


5a. 単維管束亜属14546 木口×30.　5b. 同　板目×60.　5c. 同　柾目×240.



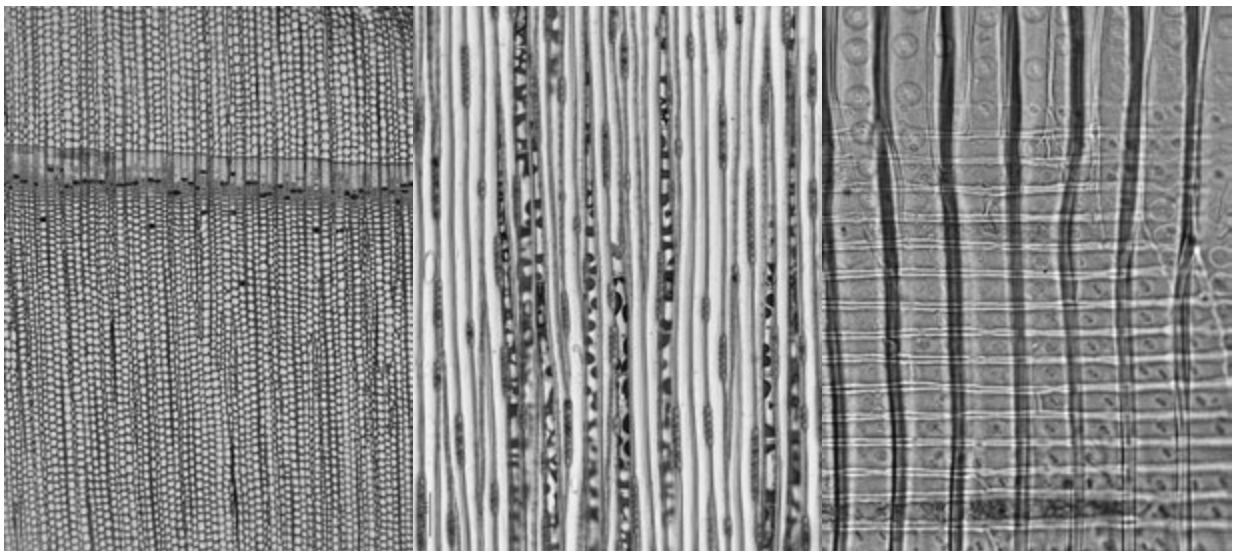
6a. ツガ属 14596 木口×30.　6b. 同　板目×60.　6c. 同　柾目×240.

写真図版 III



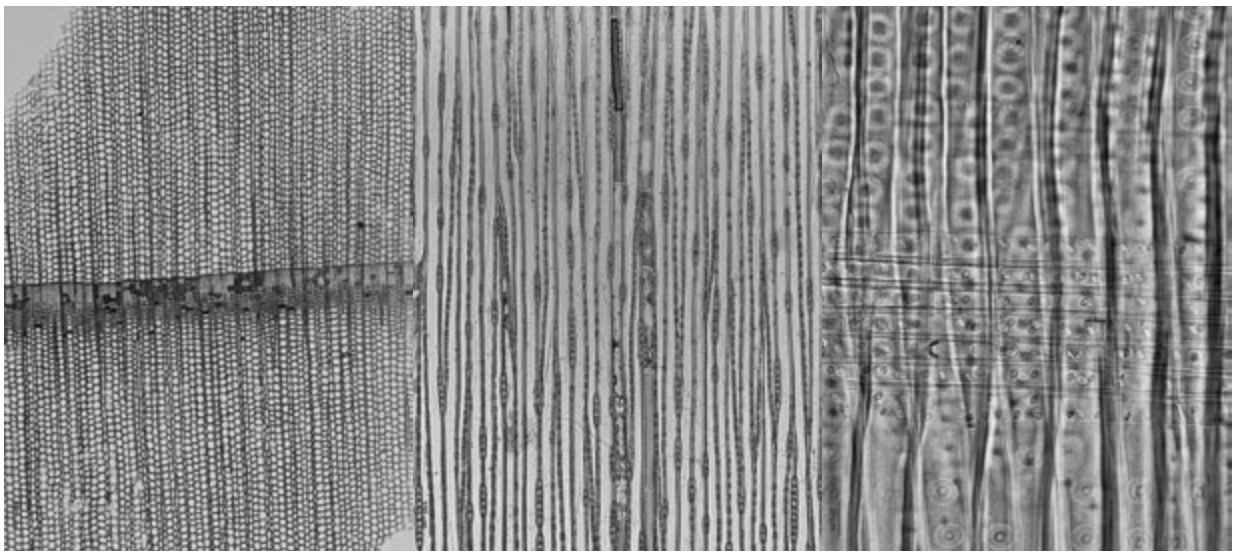
7a.　スギ　14624 木口×30.　　7b.　同　板目×60.　　7c.　同　柾目×240.

8a.　コウヤマキ　14081 木口×30. 8b.　同　板目×60.　　8c.　同　柾目×240.

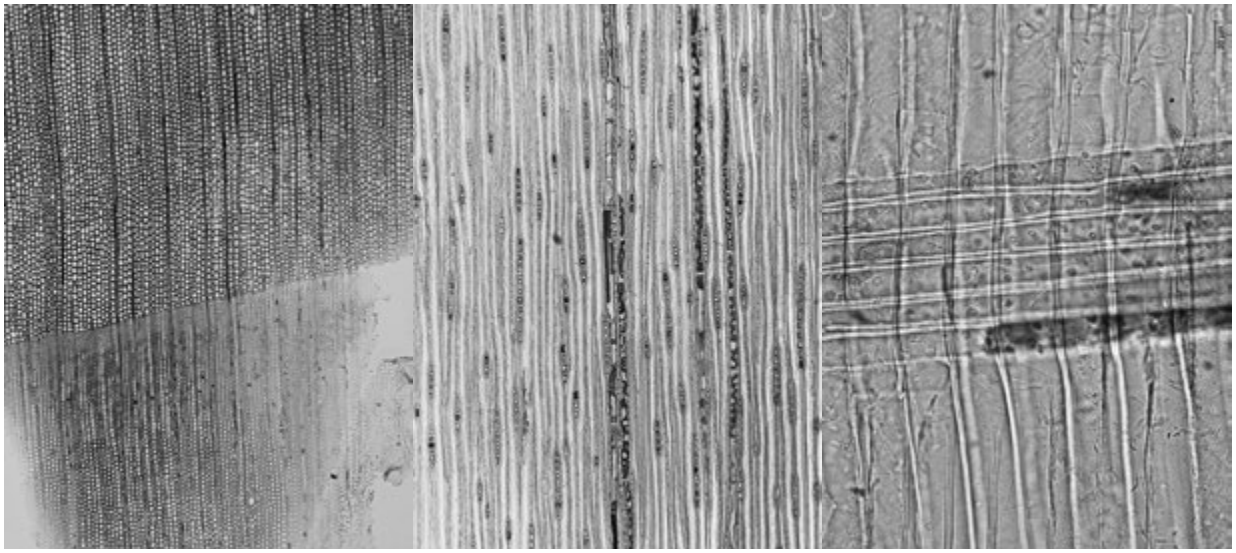


9a.　ヒノキ　14553 木口×30.　　9b.　同　板目×60.　　9c.　同　柾目×240.

写真図版 IV



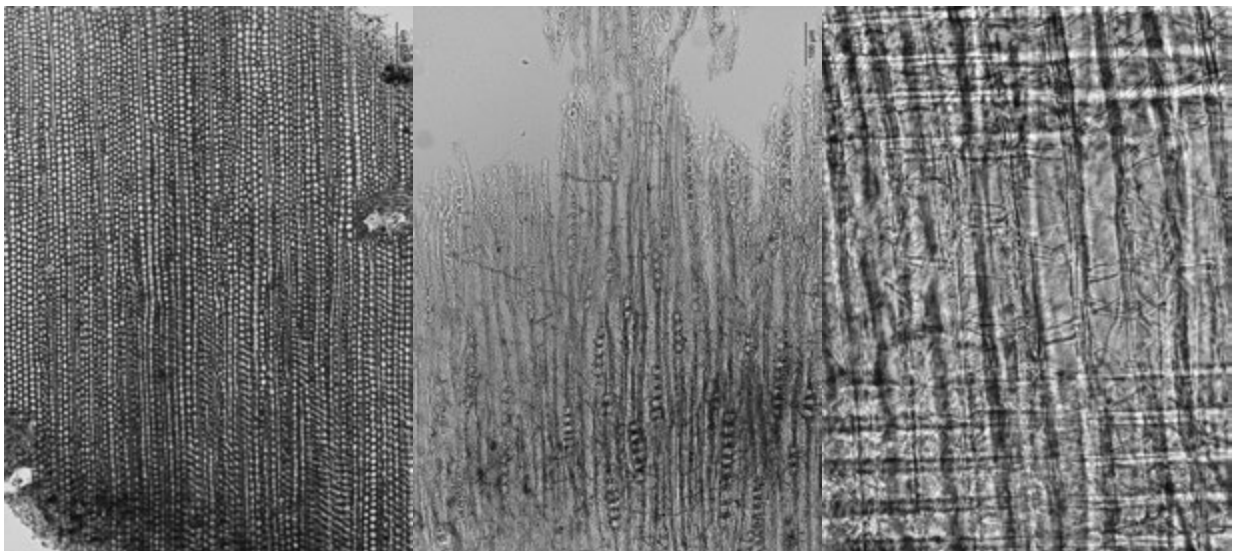
10a. サワラ　14528 木口×30.　10b. 同　板目×60.　10c. 同　柾目×240.



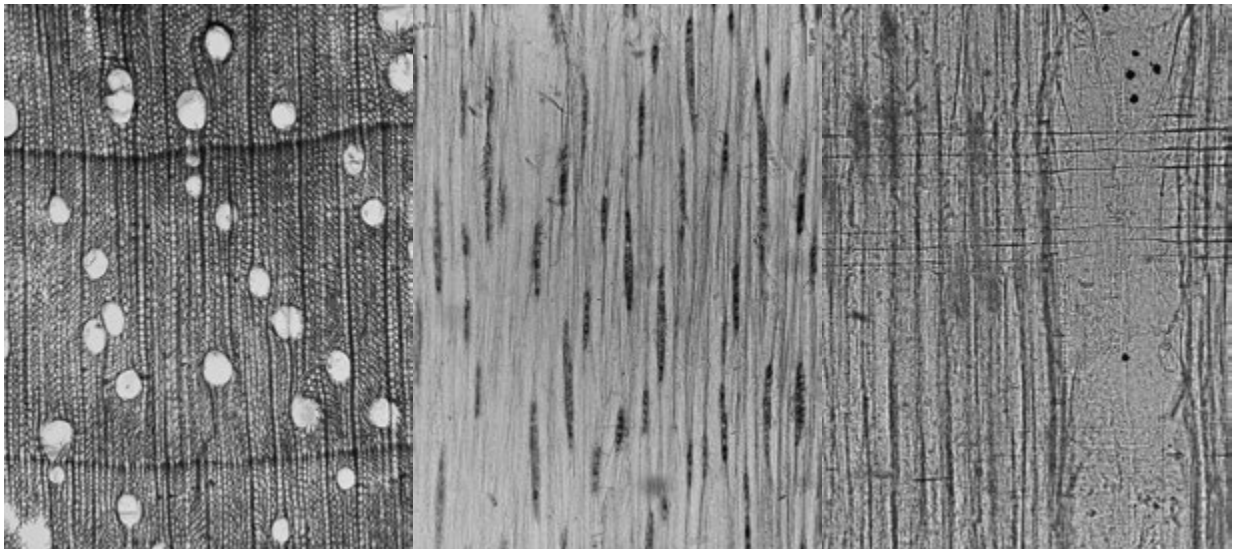
11a. アスナロ　14610 木口×30.　11b. 同　板目×60.　11c. 同　柾目×240.

12a. イヌマキ属11935木口×30.　12b. 同　板目×60.　12c. 同　柾目×240.

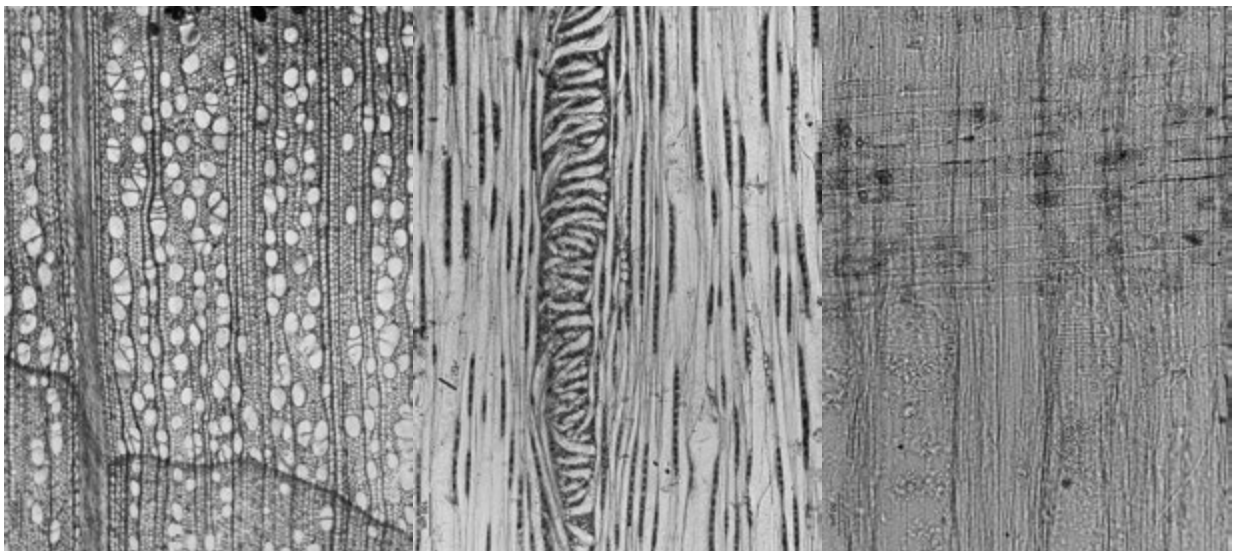
写真図版Ⅴ



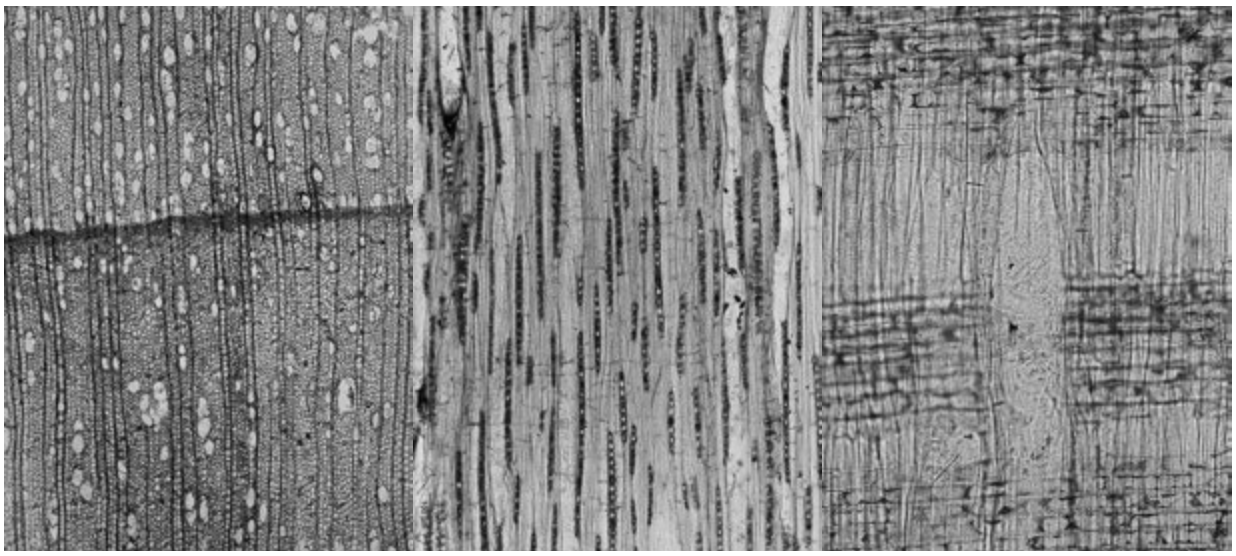
13a.　カヤ　13949 木口×30.　　13b.　同　板目×60.　　13c.　同　柾目×240.



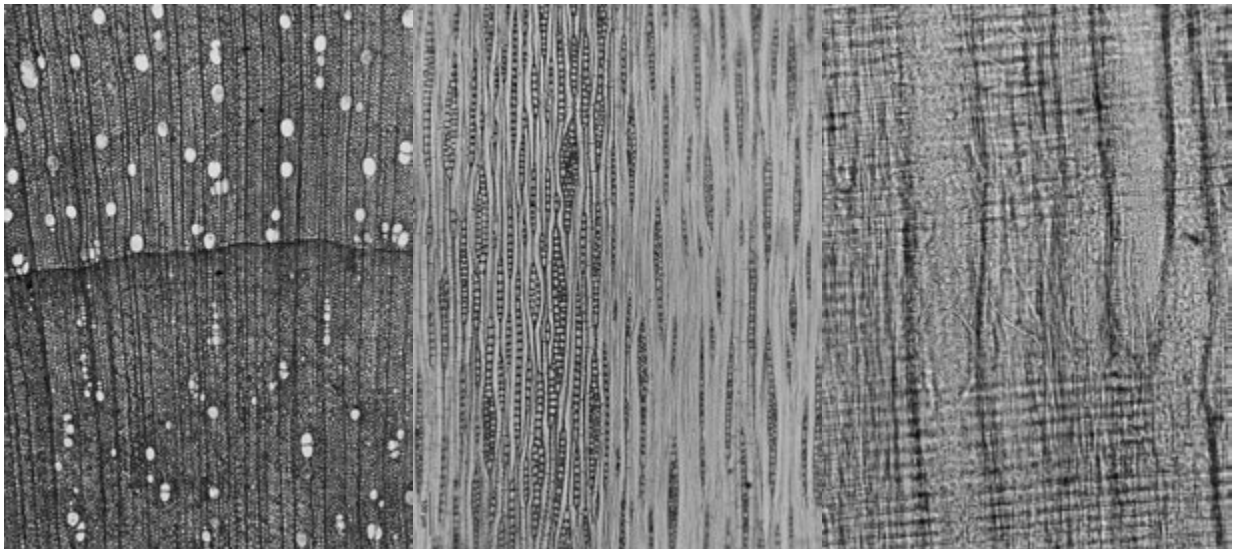
14a.　サワグルミ　14479 木口×30.　　14b.　同　板目×60.　　14c.　同　柾目×120.



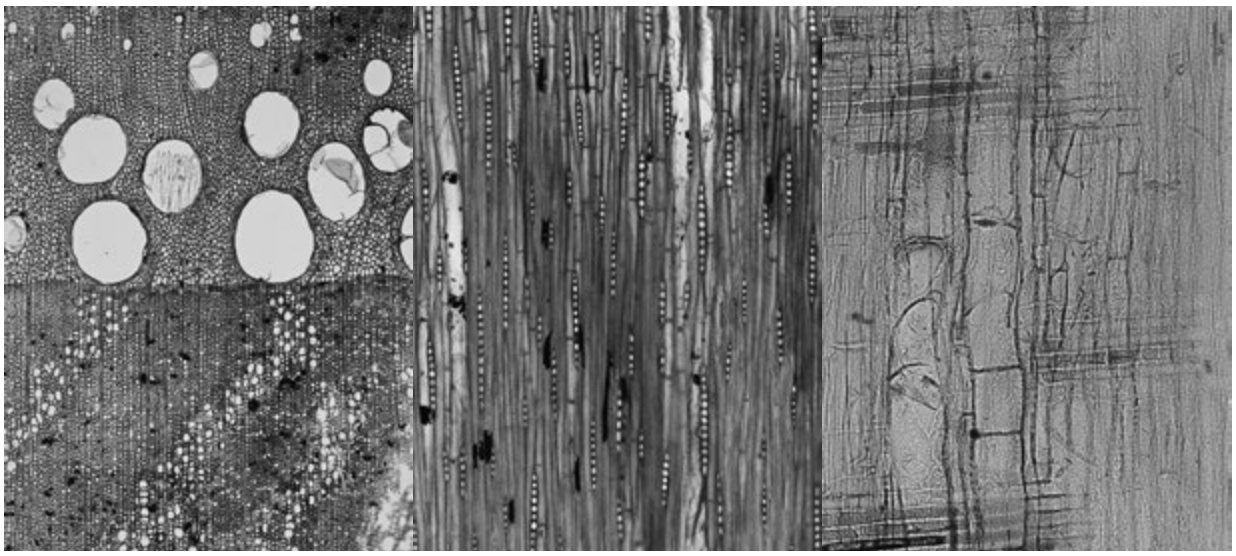
15a.　ハンノキ節14521 木口×30.　　15b.　同　板目×60.　　15c.　同　柾目×120.



16a. ヤシャブシ節14493木口×30.　16b. 同　板目×60.　16c. 同　柾目×120.



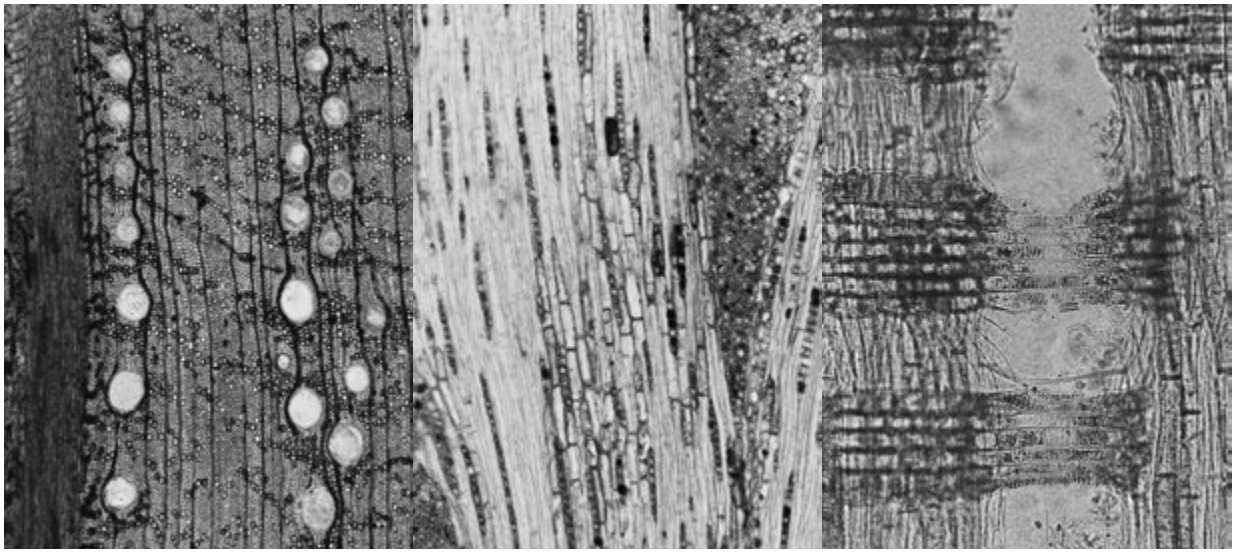
17a. イヌシデ節14472木口×30.　17b. 同　板目×60.　17c. 同　柾目×120.



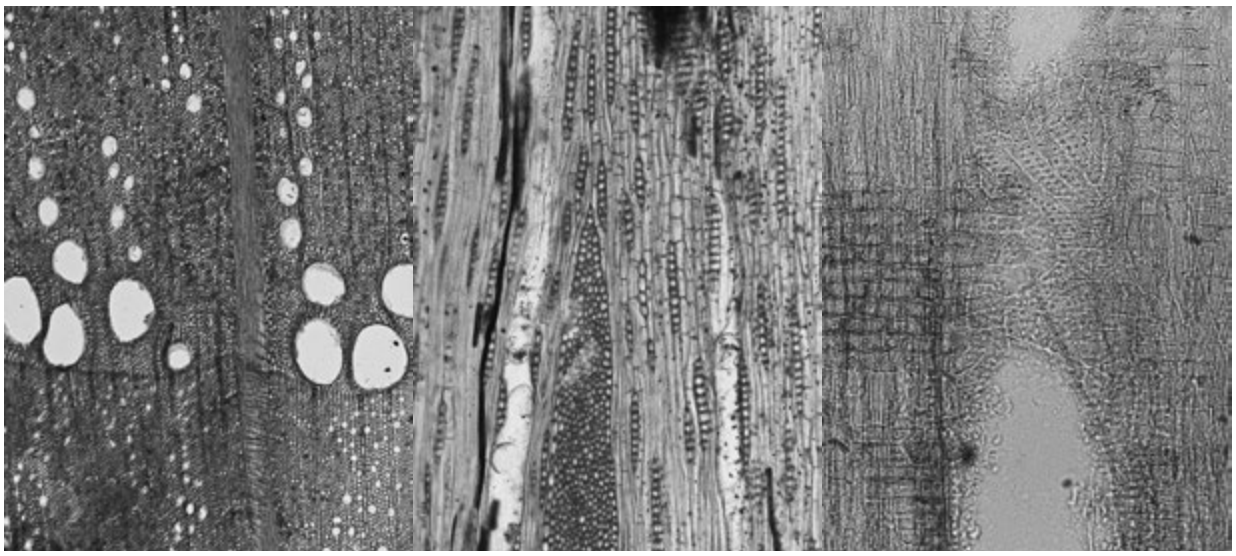
18a. クリ　14478木口×30.　18b. 同　板目×60.　18c. 同　柾目×120.

写真図版 VII

19a.　ブナ属　14071 木口×30.　　19b.　同　板目×60.　　19c.　同　柾目×120.



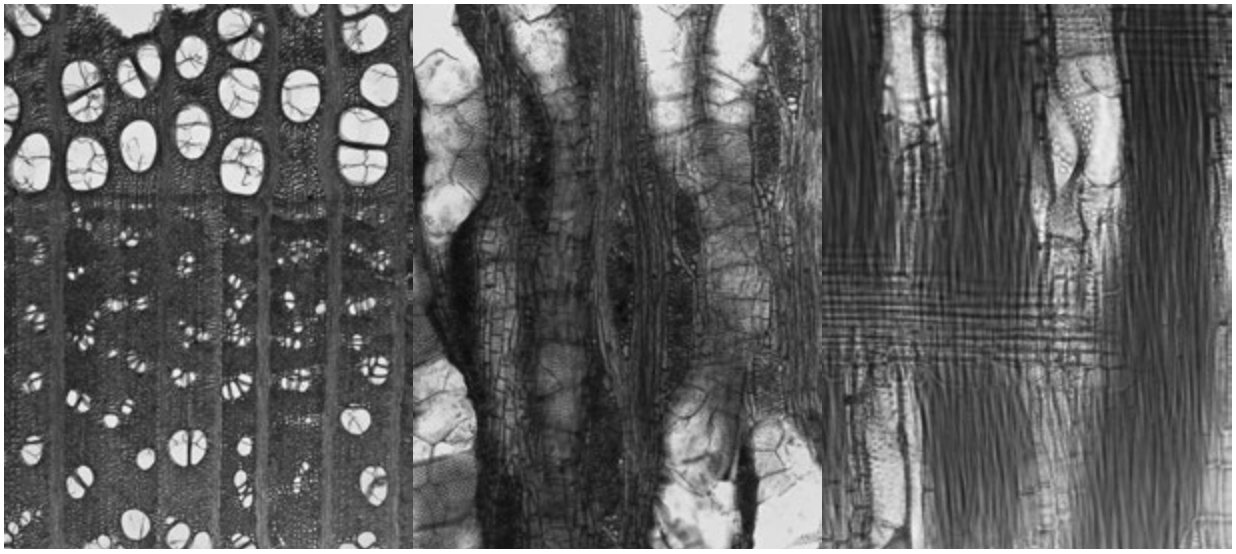
20a.　アカガシ亜属14618木口×30.　　20b.　同　板目×60.　　20c.　同　柾目×120.



21a.　コナラ節　13969 木口×30.　　21b.　同　板目×60.　　21c.　同　柾目×120.

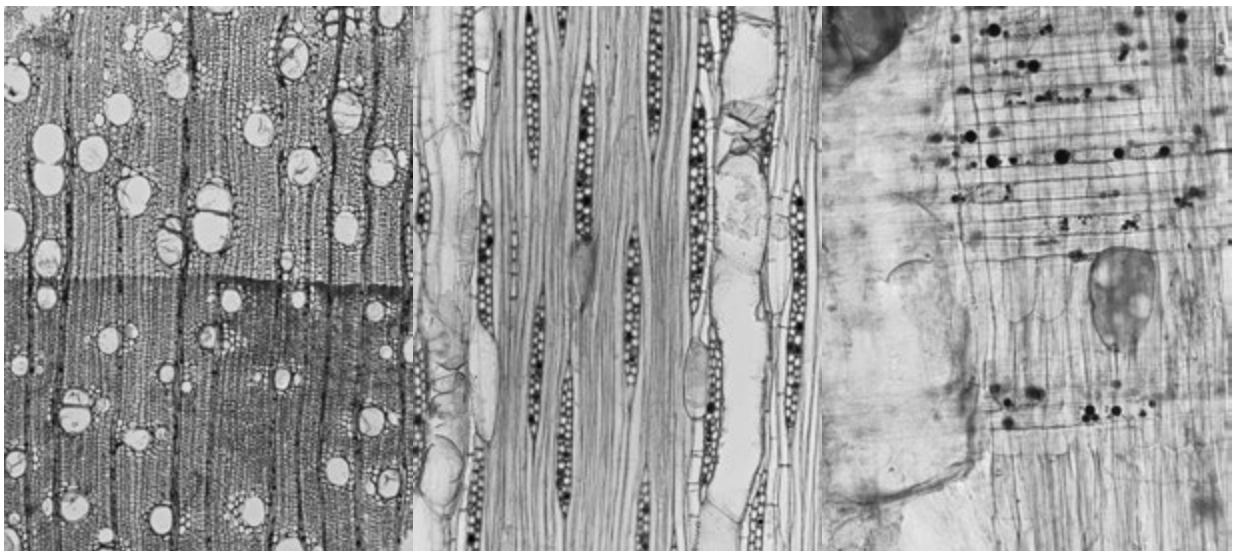
22a. ムクノキ　13963木口×30.　22b. 同　板目×60.　22c. 同　柾目×120.

23a. ケヤキ　14480 木口×30.　23b. 同　板目×60.　23c. 同　柾目×120.

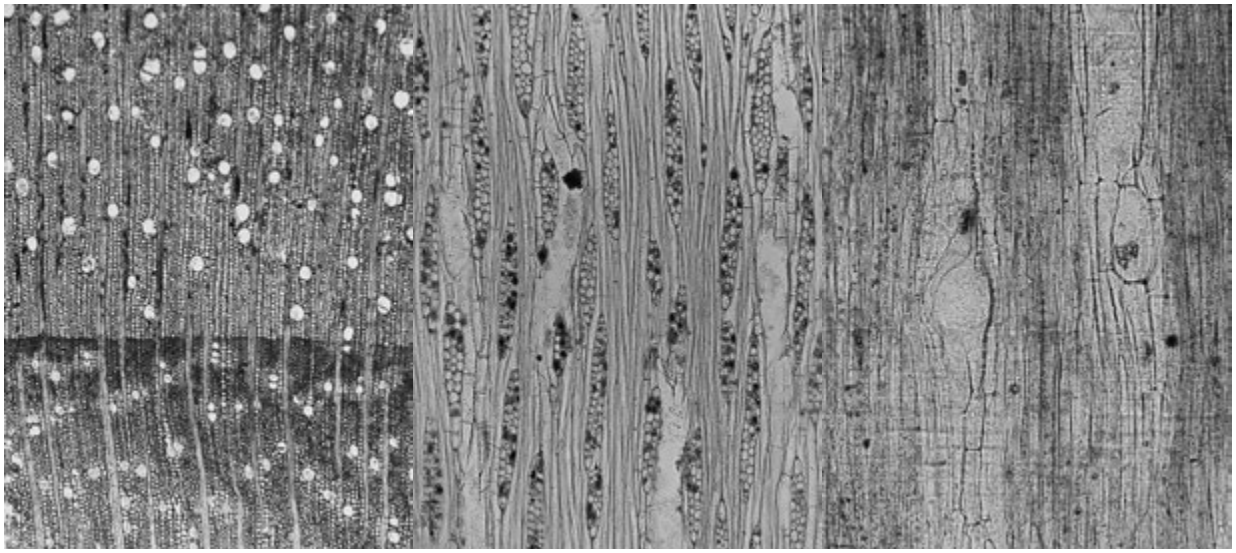


24a. ヤマグワ13653 木口×30.　24b. 同　板目×60.　24c. 同　柾目×120.

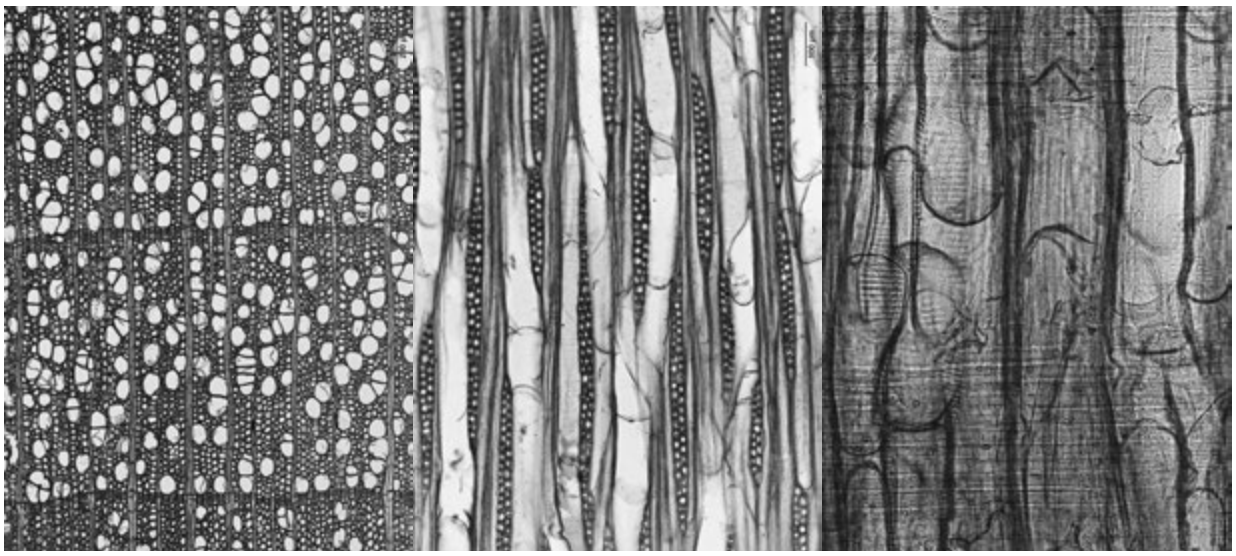
写真図版 IX



25a.　クスノキ　14511木口×30.　　25b.　同　板目×60.　　25c.　同　柾目×120.

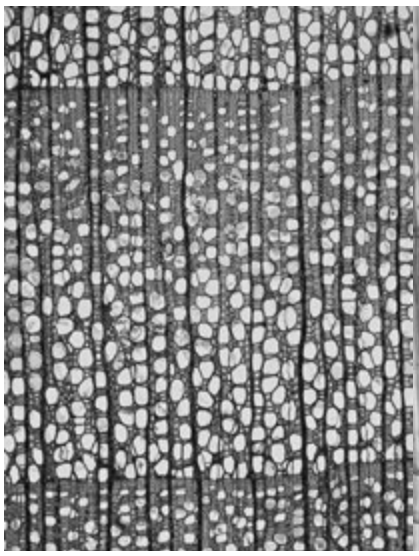


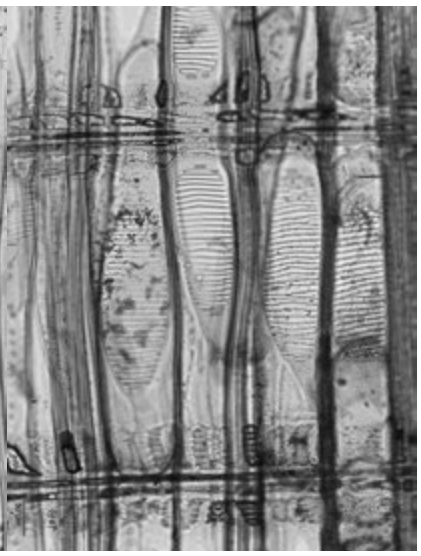
26a.　クスノキ科13127木口×30.　　26b.　同　板目×60.　　26c.　同　柾目×120.



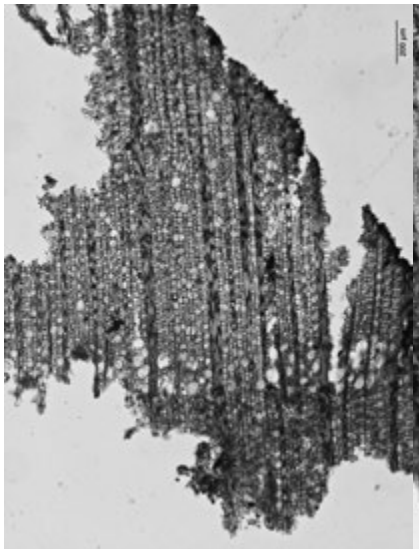
27a.　モクレン属13650 木口×30.　　27b.　同　板目×60.　　27c.　同　柾目×120.

写真図版 X

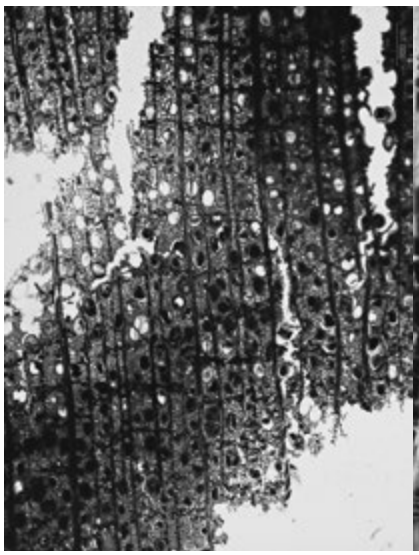


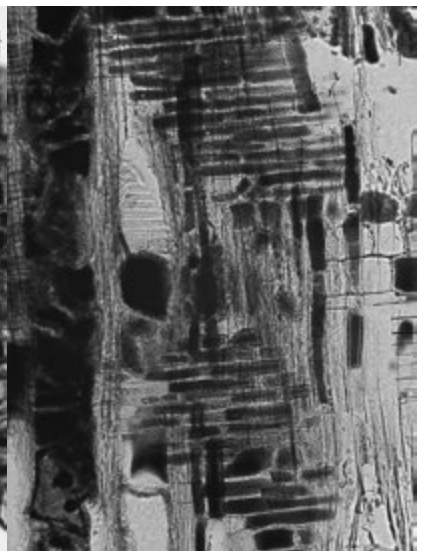


28a. カツラ　14605木口×30.　28b. 同　板目×60.　28c. 同　柾目×120.



29a. ヤブツバキ11766 木口×30.　29b. 同　板目×60.　29c. 同　柾目×120.

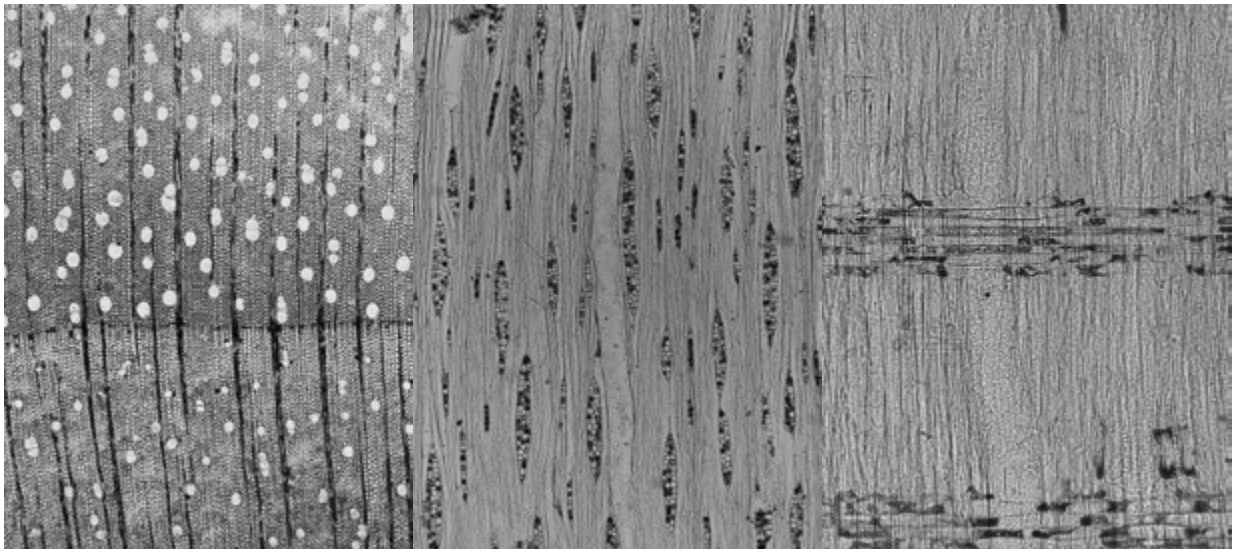




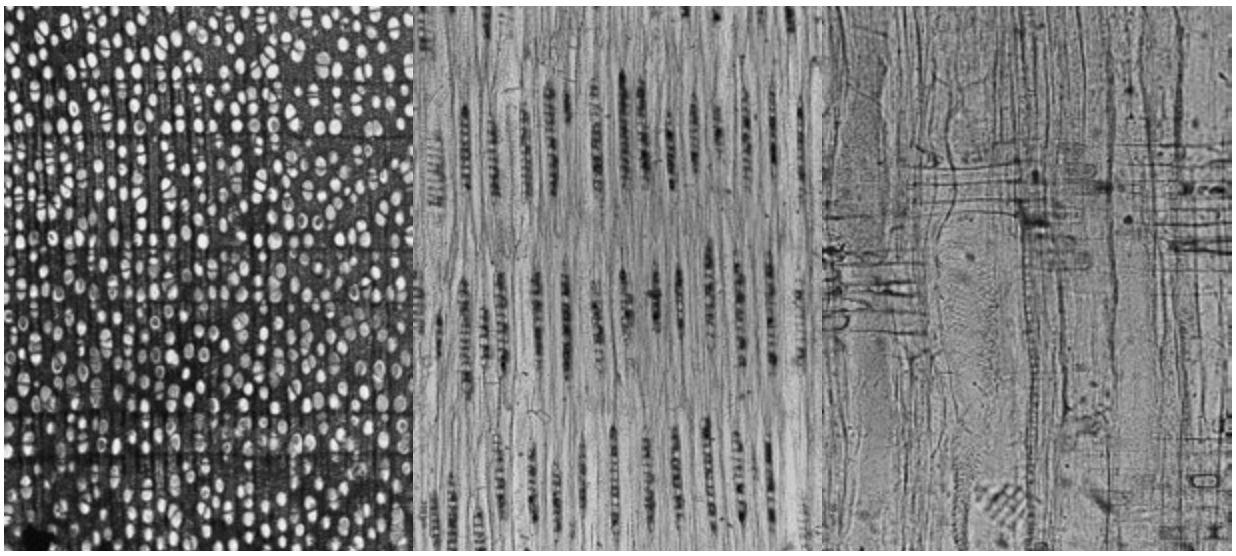
30a. イスノキ14114 木口×30.　30b. 同　板目×60.　3030c. 同　柾目×120.

写真図版 XI

31a.　サクラ属　14054木口×30.　31b.　同　板目×60.　31c.　同　柾目×120.

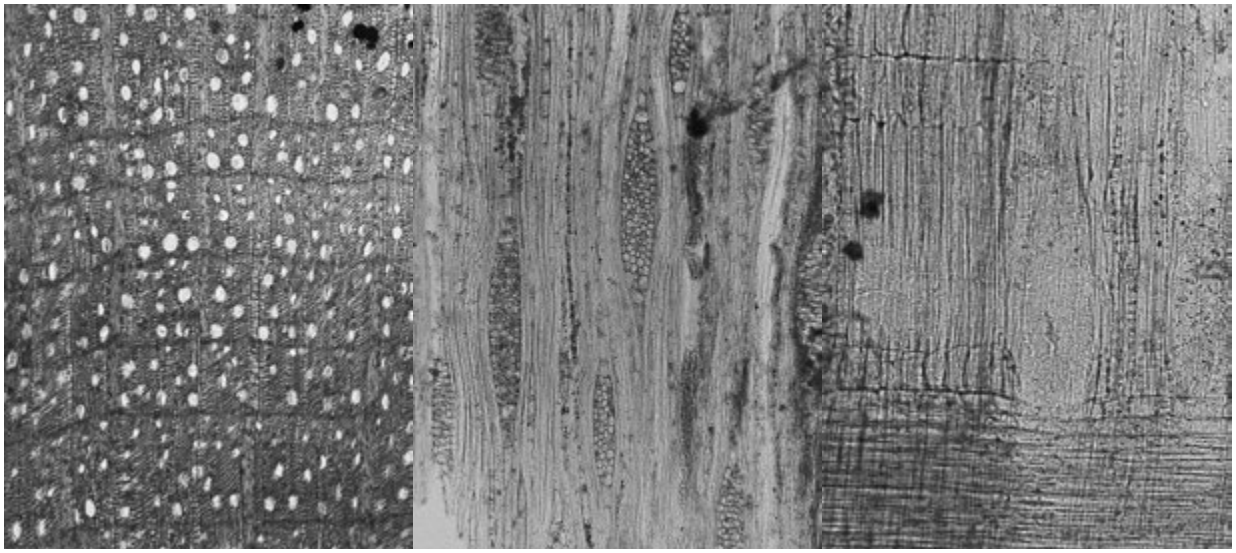


32a.　カエデ属　14577 木口×30.　32b.　同　板目×60.　32c.　同　柾目×120.

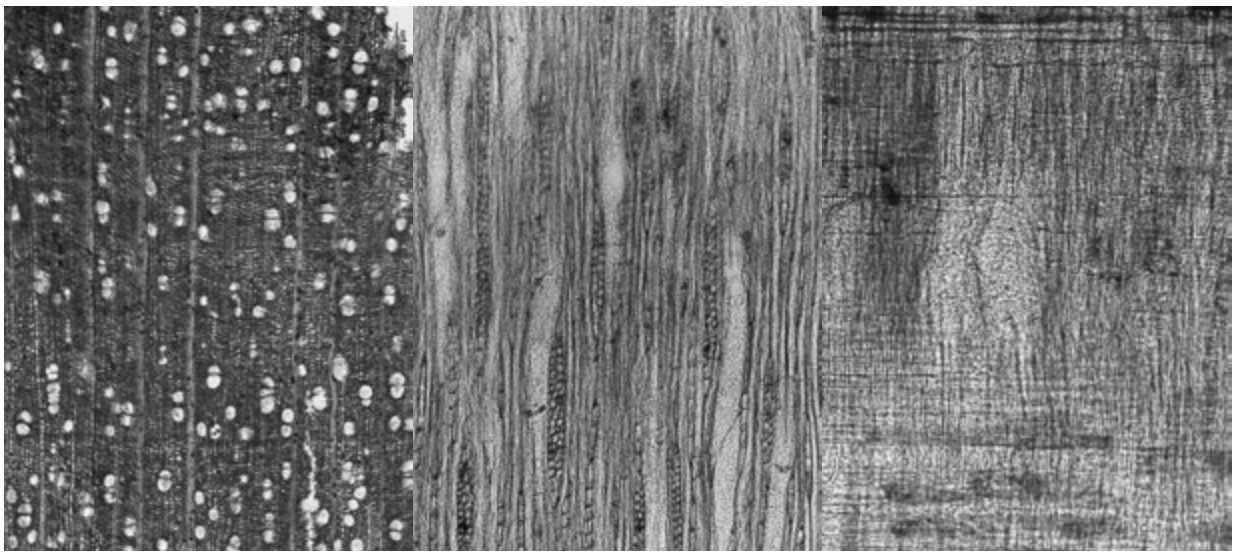


33a.　トチノキ14078 木口×30.　33b.　同　板目×60.　33c.　同　柾目×120.

34a. シナノキ属13953木口×30.　34b. 同　板目×60.　34c. 同　柾目×120.

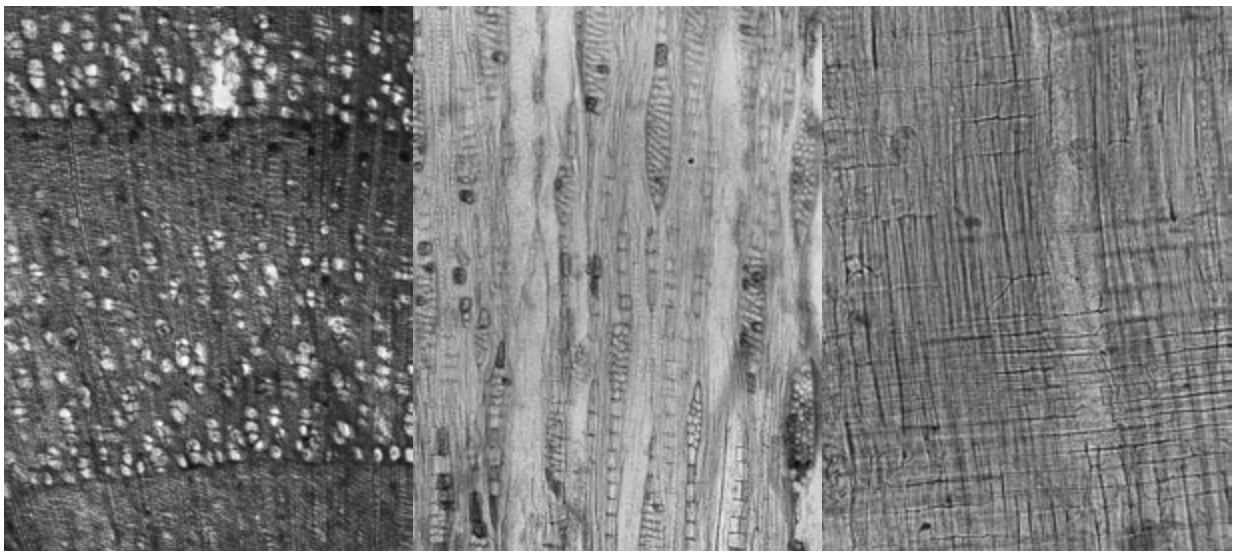


35a. ヤマボウシ13942 木口×30.　35b. 同　板目×60.　35c. 同　柾目×120.

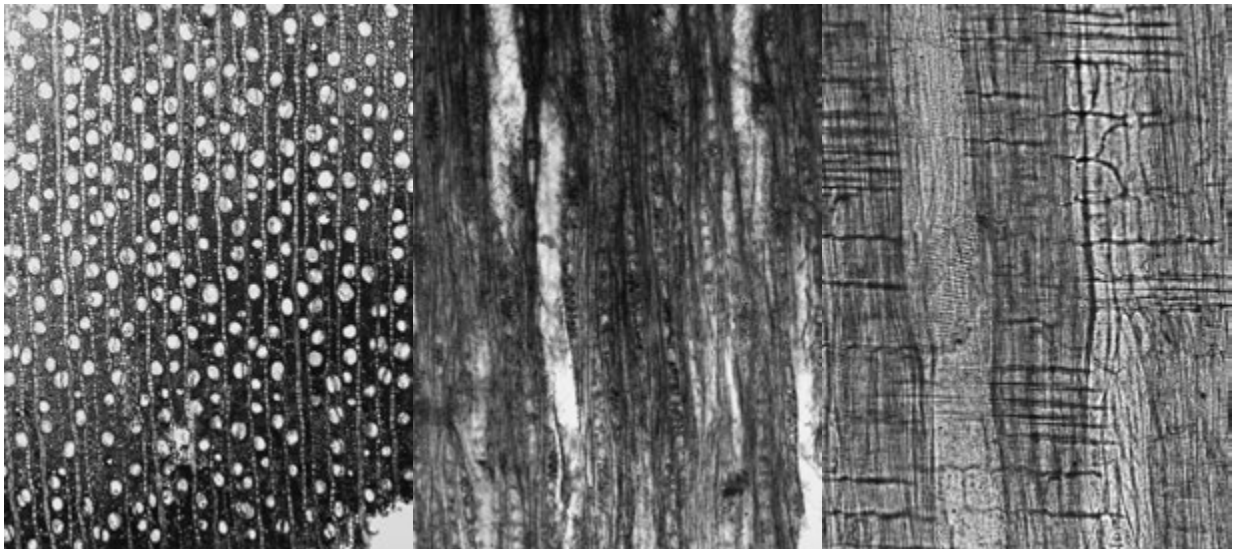


36a. ミズキ14110 木口×30.　36b. 同　板目×60.　36c. 同　柾目×120.

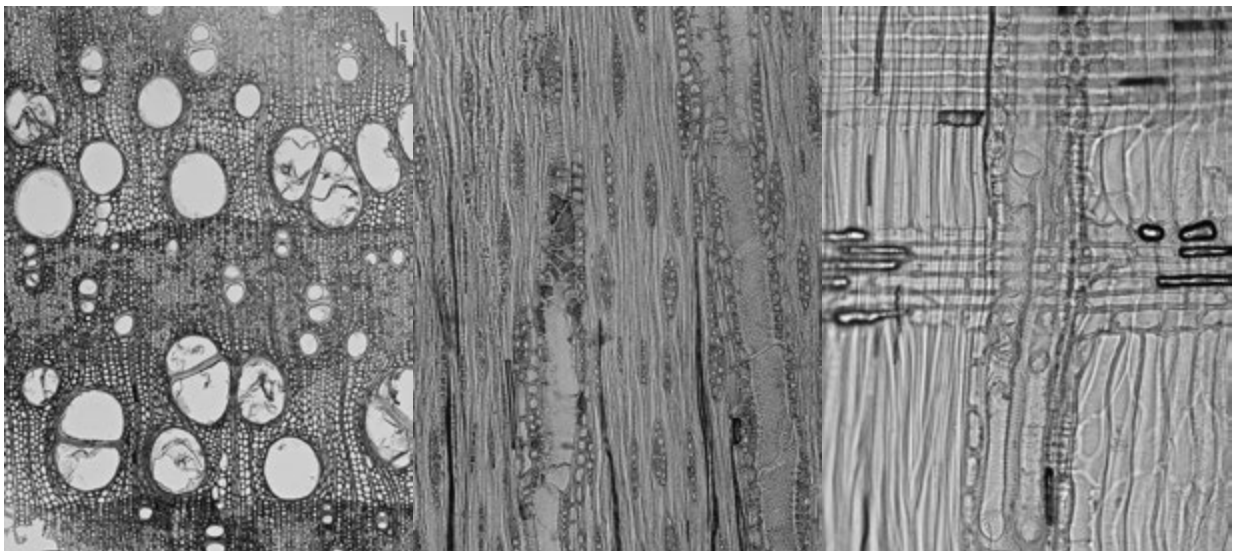
写真図版 XIII



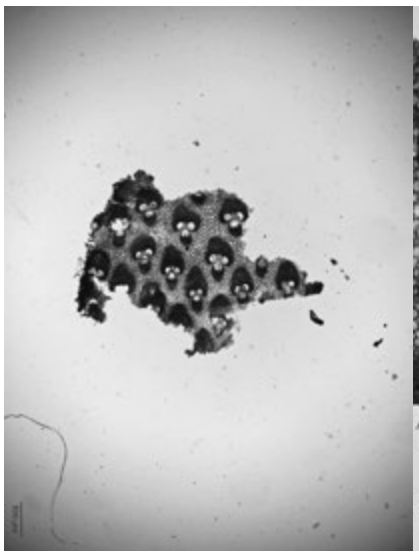
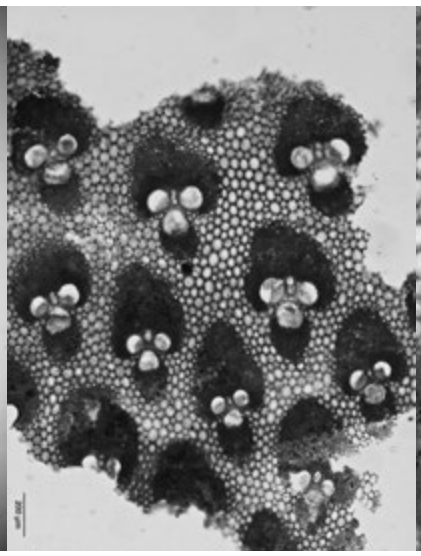
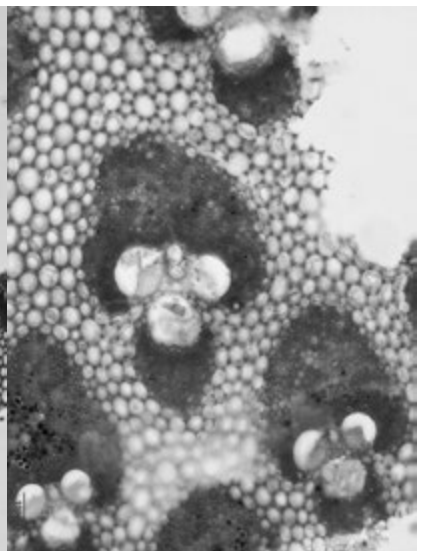
37a.　エゴノキ属13950木口×30.　37b.　同　板目×60.　37c.　同　柾目×120.



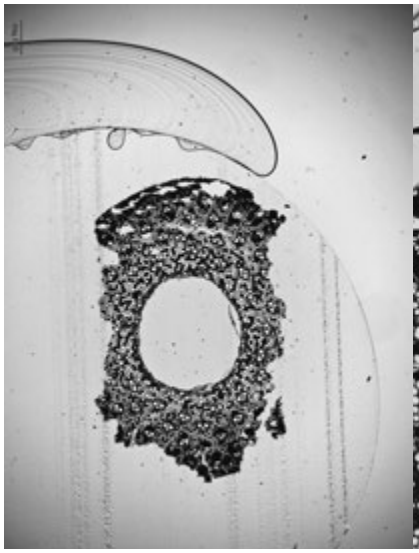
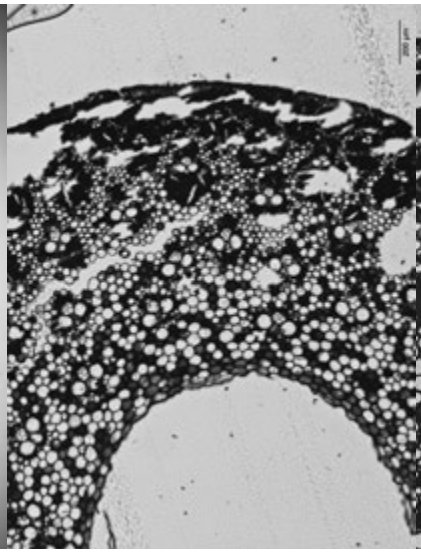
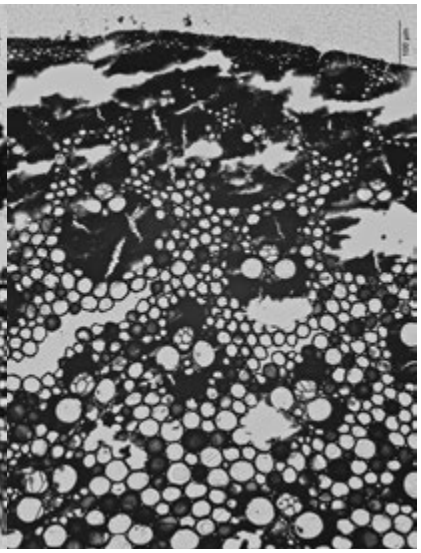
38a.　サワフタギ14129木口×30.　38b.　同　板目×60.　38c.　同　柾目×120.



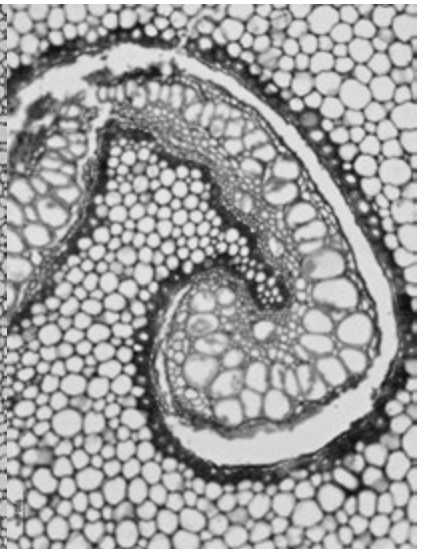
39a.　トネリコ属14487 木口×30.　39b.　同　板目×60.　39c.　同　柾目×120.

40a. 竹類　14112木口×10.　40b. 同　木口×30.　40c. 同　木口×60.

41a. 笹類　14113木口×10.　41b. 同　木口×30.　41c. 同　木口×60.



42a. ウラジロ　14117木口×10.　42b. 同　木口×30.　42c. 同　木口×60.

付編２　手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土の動物遺体

中村賢太郎（パレオ･ラボ）

1. はじめに

手乱遺跡と鶴喰広田遺跡は、いずれも静岡県三島市南部に所在する御殿川河岸の遺跡である。両遺跡の発掘調査では、旧河道が検出され、その中から弥生時代～近世・近代の遺物が出土した。ここでは手乱遺跡と鶴喰広田遺跡の旧河道から出土した動物遺体について報告する。

2. 試料と方法

試料は発掘調査現場において目視で取り上げられた動物遺体118点である。試料は１点ずつ袋や容器に収められていた。同定は肉眼で現生標本との比較により行った。計測が必要な部位については、ノギスを用いてDriesh（1976）に従い、計測を行った。また、ウシの下顎臼歯については、Grant（1982）に従い咬耗指数を記した。

以下、遺跡ごとに試料の詳細を述べる。

⑴手乱遺跡

手乱遺跡の試料は35点である。動物遺体は乾燥状態で保管されていた。動物遺体は、Ⅲ層と旧河川堆積層から出土した。Ⅲ層は、基盤層の上位に堆積した砂礫層で、下部から弥生時代や古墳時代の遺物、上部から近世の陶磁器などが出土しており、複数時期の遺物が混在している。旧河川堆積層は、砂層で、近世よりも新しい時期の堆積物と考えられる。

⑵鶴喰広田遺跡

鶴喰広田遺跡の試料は83点である。動物遺体のほとんどは水漬けで保管されていた。動物遺体は、Ⅲ層とⅡ層から出土した。その他、トレンチや排水溝から出土したもの、一括取上げ、排土中から発見されたものがある。Ⅲ層は、手乱遺跡と同じく、基盤層の上位に堆積した砂礫層で、下部から弥生時代や古墳時代の遺物、上部から近世の陶磁器などが出土しており、複数時期の遺物が混在している。Ⅱ層は、近世以降の砂層と考えられる。

3. 結果と考察

⑴手乱遺跡

弥生～近世のⅢ層では、貝類はイシガイ科、哺乳類はイヌ、イノシシ、ニホンジカ、ウマ、ウシ？あるいはウマ？、その他不明哺乳類が見られた。

イシガイ科は、左殻３点、右殻２点が見られた。イシガイ科は、イシガイ、カタハガイなどを含み、淡水に生息する二枚貝である。イシガイ科は、食用可能であるが、河川に生息していた貝が死んで埋没したのか、人により食用された後に廃棄されたのかは不明である。

哺乳類について述べる。イヌは左橈骨と左右の尺骨が見られた。イノシシは左肩甲骨、右大腿骨、右脛骨が見られた。ニホンジカは左寛骨と基節骨が見られた。ウマは遊離歯が５点の他、右橈骨・尺骨、右脛骨、左基節骨（後肢）、中手骨あるいは中足骨が見られた。ウマは、遊離歯がH-14～16、それ以外の部位がK-19とそれぞれまとまった位置から出土している。ニホンジカは野生、イヌとウマは飼育されていたと考えられる。イノシシは野生の可能性と飼育されていたブタの可能性と両方ある。Ⅲ層は弥生時代～近世の遺物が混在していることから、同定された動物遺体も複数時期のものが混在している可

能性を考慮しなければならない。

近世・近代より新しい旧河川堆積層では、ウシの遊離歯１点とウマの遊離歯３点が見られた。旧河川堆積層が堆積した時期に近隣で家畜として牛馬が飼育されていたことが考えられる。

⑵鶴喰広田遺跡

弥生時代～近世のⅢ層では、貝類はイシガイ科、哺乳類はヒト、ウシ、ウシ？あるいはウマ？、ウマ、ウマ？、その他不明哺乳類が見られた。

イシガイ科は、右殻１点が見られた。イシガイ科は、イシガイ、カタハガイなどを含み、淡水に生息する二枚貝である。イシガイ科は、食用可能であるが、河川に生息していた貝が死んで埋没したのか、人により食用された後に廃棄されたのかは不明である。

ヒトは、右上顎骨～頬骨、左右頭頂骨、大腿骨が見られた。なお、左頭頂骨は２列トレンチ出土の右頭頂骨（29）と同一個体の可能性がある。傷の有無を観察したが、確認されなかった。また、焼けてはいなかった。

ウシは遊離歯のみが見られ、少なくとも頭部があったと考えられる。

ウマは動物遺体の中で最も多かった。特に遊離歯が多く、40点が見られた。ウマの遊離歯は、左下顎第２前臼歯と右下顎第３後臼歯が各２点見られ、ウマは少なくとも２個体存在したことを示している。年齢は、左下顎第２前臼歯と右下顎第３後臼歯の歯冠高計測値から、６～７歳程度と11～13歳程度だったと考えられる。遊離歯の他、左大腿骨、左距骨、左中足骨が見られた。頭部と後肢が存在したと考えられる。

Ⅲ層が堆積した時期に、近隣で家畜として牛馬が飼育されていたことが考えられる。ただし、Ⅲ層は弥生時代～近世の遺物が混在していることから、同定された動物遺体も複数時期のものが混在している可能性を考慮しなければならない。

近世・近代のⅡ層では、ヒト、イヌ、ニホンジカ、ウシ、ウマ、ウマ？、その他不明哺乳類が見られた。ヒトは左大腿骨が見られ、骨幹中央に傷が多く見られた。長軸に直交方向に走る幅数㎜の浅い溝が多数平行しており、齧歯類の咬み痕の可能性がある。イヌは右上腕骨、ニホンジカは右下顎骨が見られた。ウシは中足骨の破片のみ、ウマは遊離歯のみが見られた。近世･近代において、近隣でイヌ、ウシ、ウマが飼育されていたと考えられる。また、ニホンジカは野生と考えられる。

引用・参考文献

Driesch, Angela von den（1976）A guide to measurement of animal bones from archaeological sites. 137p, Peabody museum.

Grant, A.（1982）The Use of Tooth Wear as a Guide to the Age of Domestic Ungulates. Ageing and Sexing Animal Bones from Archaeological Sites, edited by Wilson, B., Grigson, C. and Payne, S., 91-108.

久保和士･松井　章（1999）家畜その2－ウマ･ウシ．西本豊弘･松井　章編「考古学と動物学」:169-208，同成社.

松井　章（2008）動物考古学．312p，京都大学学術出版会.

表1　手乱遺跡出土の動物遺体

分類群		部位	左右	数量
斧足綱 Bivalvia	イシガイ科 Unionidae　spp.	殻	左	3
			右	2
哺乳綱 Mammalia	哺乳綱 Mammalia spp.	各部位	―	3
	イヌ *Canis lupus familiaris*	橈骨	左	1
		尺骨	左	1
			右	1
	イノシシ *Sus scrofa*	肩甲骨	左	1
		大腿骨	右	1
		脛骨	右	1
	ニホンジカ *Cervus nippon*	寛骨	右	1
		脛骨	右	1
		基節骨	?	1
	ウシ *Bos taurus*	遊離歯	右	1
	ウマ *Equus caballus*	遊離歯	左右	8
		橈骨, 尺骨	右	1
		脛骨	右	1
		中手/中足骨	?	1
		基節骨	左	1
	ウシ？ウマ？ Bos taurus? Equus caballus?	側頭骨	右	1
		上腕骨	右	1
		橈骨	?	1
		肋骨	左右	2
合計				35

表2　鶴喰広田遺跡出土の動物遺体

分類群		部位	左右	数量
斧足綱 Bivalvia	イシガイ科 Unionidae　sp.	殻	右	1
哺乳綱 Mammalia	哺乳綱 Mammalia spp.	各部位	―	9
	ヒト Homo sapiens	頭頂骨	左	1
		頭頂骨	右	1
		上顎骨, 頬骨	右	1
		大腿骨	左	1
	イヌ *Canis lupus familiaris*	上腕骨	右	1
	ニホンジカ *Cervus nippon*	下顎骨	右	1
	ウシ *Bos taurus*	遊離歯	左右	5
		中足骨	?	1
	ウマ *Equus caballus*	遊離歯	左右	50
		大腿骨	左	1
			右	1
		中足骨	左	1
		距骨	左	1
	ウマ？ *Equus caballus*?	遊離歯	?	5
	ウシ？ウマ？ Bos taurus?/Equus caballus?	腰椎	―	1
		仙骨	―	1
合計				83

表3　動物遺体観察表

全体通し番号	遺跡名	調査年度通し番号	グリッド	層位	分類群	部位	部分	左右	数量	備考
1	手乱遺跡	H19手乱-骨01	H-15 SW	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	上腕骨	骨幹	右	1	
2	手乱遺跡	H19手乱-骨02	H-15 SE	Ⅲ層	哺乳類	肩甲骨？寛骨？	破片	?	1	
3	手乱遺跡	H19手乱-骨03	H-14 SW	Ⅲ層	哺乳類	脛骨	骨幹	?	1	
4	手乱遺跡	H19手乱-骨04	I-17 SE	Ⅲ層	哺乳類	頭蓋骨	破片	?	1	
5	手乱遺跡	H19手乱-骨05	K-19 SW	Ⅲ層	イノシシ	肩甲骨	関節	左	1	GLP:33.3mm
6	手乱遺跡	H19手乱-骨06	J-19 SE	Ⅲ層	イノシシ	大腿骨	近位端	右	1	Bp:59.5mm
7	手乱遺跡	H19手乱-骨07	J-19 SE	Ⅲ層	ニホンジカ	寛骨	寛骨臼	右	1	LA:38.5mm
8	手乱遺跡	H19手乱-骨08	K-19 SW	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	側頭骨	破片	右	1	
9	手乱遺跡	H19手乱-骨09	J-19 SE	Ⅲ層	ニホンジカ	基節骨	完存	?	1	
10	手乱遺跡	H19手乱-骨10	K-19 SW	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	肋骨	ほぼ完存	左	1	
11	手乱遺跡	H19手乱-骨11	K-20 NW	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	橈骨	骨幹	?	1	
12	手乱遺跡	H19手乱-骨12	K-19 NW	Ⅲ層	イノシシ	脛骨	遠位端	右	1	Bd:>24.3mm
13	手乱遺跡	H19手乱-骨13	K-19 SE	Ⅲ層	ウマ	中手骨/中足骨	骨幹	?	1	SD:25.5mm
14	手乱遺跡	H19手乱-骨14	K-19 SE	Ⅲ層	イヌ	尺骨	完存	左	1	GL:178mm
15	手乱遺跡	H19手乱-骨15	K-19 SE	Ⅲ層	イヌ	橈骨	完存	左	1	GL:150.9mm
16	手乱遺跡	H19手乱-骨16	K-19 SE	Ⅲ層	ウマ	基節骨(後肢)	完存	左	1	GL:81.6mm
17	手乱遺跡	H19手乱-骨17	K-19 SE	Ⅲ層	イヌ	尺骨	完存	右	1	GL:179mm
18	手乱遺跡	H19手乱-骨18	K-19	Ⅲ層	ウマ	脛骨	骨幹	右	1	SD:29.0mm
19	手乱遺跡	H19手乱-骨19	I-18	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	肋骨	肋骨体	?	1	
20	手乱遺跡	H19手乱-骨20	K-19	Ⅲ層	ウマ	橈骨,尺骨	骨幹	右	1	SD:35.3mm
21	手乱遺跡	H19手乱-骨21	不明	不明	ニホンジカ	脛骨	ほぼ完存	右	1	GL:297mm
22	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-01	C-8 NE	Ⅱ層	ニホンジカ	下顎骨	ほぼ完存	右	1	P2-M3
23	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-02	D-9 NW	Ⅱ層	イヌ	上腕骨	ほぼ完存	右	1	GL:151.0mm
24	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-03	C-8 SE	Ⅲ層	ヒト	頭蓋骨	頭頂骨	左	1	
25	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-04	F-14 SE	Ⅱ層	ヒト	大腿骨	骨幹	左	1	GL:>311mm,骨幹中央に傷多数
26	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-05	E-12 NW	Ⅱ層	ウシ	中足骨	骨幹破片	?	1	
27	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-06	E-12 NW	Ⅱ層	哺乳類	肋骨	肋骨体	?	1	
28	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-骨-07	G-15 NW	Ⅱ層	哺乳類	肋骨	肋骨体	?	1	
29	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-01	C-2 N	2列トレンチ	ヒト	頭蓋骨	頭頂骨	右	1	
30	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-02	B-0 NW	Ⅲ層	哺乳類	頭蓋骨？	破片	?	1	
31	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-03	B-0 NW	Ⅲ層	ウマ	大腿骨	骨幹	左	1	SD:35.0mm
32	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-04	B-0 SW	Ⅲ層	ヒト	頭蓋骨	上顎骨,頬骨	右	1	
33	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-05	B-0 SW	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	腰椎	ほぼ完存	—	1	
34	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-06	B-0 SE	Ⅲ層	哺乳類	肩甲骨？寛骨？	破片	?	1	
35	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-07	B-1 NW	Ⅲ層	ウマ	中足骨	近位端	左	1	GL:>213mm
36	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-08	B-1 SE	Ⅲ層	ウマ	距骨	完存	左	1	GB:52.8mm
37	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-09	B-1 SE	Ⅲ層	哺乳類	長骨	骨幹破片	?	1	
38	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-10	C-1 SW	Ⅲ層	哺乳類	後頭骨	破片	?	1	
39	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-11	D-4 NW	Ⅲ層	ウシ？ウマ？	仙骨	半欠	—	1	
40	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-12	－	排土	ウマ	大腿骨	骨幹	右	1	GL:>267mm,SD:34.5mm
41	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-13	－	一括	哺乳類	脛骨	ほぼ完存	左	1	
42	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-14	B-0 SW	Ⅲ層	哺乳類	長骨	骨幹破片	?	1	焼,ヒト？
43	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-骨-15	C-3 NE	Ⅲ層	哺乳類	長骨	骨幹破片	?	1	焼,ヒト？
44	手乱遺跡	H19-手乱-歯-01	H-15 NW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	左	1	
45	手乱遺跡	H19-手乱-歯-02	H-15 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎臼歯	左	1	歯冠高:44.7mm
46	手乱遺跡	H19-手乱-歯-03	H-16 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:65.3mm
47	手乱遺跡	H19-手乱-歯-04	H-16 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	
48	手乱遺跡	H19-手乱-歯-05	H-14 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	左	1	P3orP4,歯冠高:24.4mm
49	手乱遺跡	H19-手乱-歯-06	－	旧河川堆積層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:66.5mm
50	手乱遺跡	H19-手乱-歯-07	－	旧河川堆積層	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:43.7mm
51	手乱遺跡	H19-手乱-歯-08	－	旧河川堆積層	ウシ	遊離歯	上顎第3後臼歯	右	1	歯冠高:33.7mm
52	手乱遺跡	H19-手乱-歯-09	－	旧河川堆積層	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:57.4mm
53	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-01	C-5 SE	Ⅱ層	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:71.2mm
54	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-02	F-14 NW	Ⅱ層	ウマ？	遊離歯	切歯？	?	1	
55	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-03	E-12 NW	Ⅱ層	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	右	1	P2M3以外,歯冠高:78.4mm
56	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-04	E-12 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:56.3mm
57	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-05	F-14 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	左	1	P3orP4,歯冠高:63.9mm
58	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-06	F-14 NW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	切歯	?	1	
59	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-07	E-12 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:29.6mm
60	鶴喰広田遺跡	H19鶴喰広田-歯-08	E-13	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	切歯	?	1	
61	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-01	B-1 N	1列トレンチ	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:60.0mm
62	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-02	C-2 N	2列トレンチ	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	左	1	P3orP4,歯冠高:42.7mm
63	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-03	C-2 N	2列トレンチ	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
64	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-04	C-3 N	3列トレンチ	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
65	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-05	C-1	排水溝	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:41.6mm
66	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-06	C-1	排水溝	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
67	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-07	C-1	排水溝	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	左	1	P2M3以外,歯冠高:44.9mm
68	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-08	B-0	(Ⅱ層)SR-1	ウマ	遊離歯	下顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:41.4mm
69	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-09	B-0 NW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	M1orM2,歯冠高:41.5mm
70	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-10	B-0 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎第2前臼歯	左	1	歯冠高:36.1mm
71	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-11	B-0 SW	Ⅲ層	ウシ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	
72	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-12	B-0 SW	Ⅲ層	ウマ？	遊離歯	臼歯破片	?	1	
73	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-13	B-0 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	M1orM2,歯冠高:36.5mm
74	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-14	B-0 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
75	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-15	B-0 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎第3後臼歯	右	1	歯冠高:60.1mm
76	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-16	B-0 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎第3後臼歯	右	1	歯冠高:27.0mm
77	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-17	B-1 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:41.8mm
78	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-18	B-1 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎第2前臼歯	右	1	歯冠高:38.6mm
79	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-19	B-1 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:32.0mm
80	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-20	B-1 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	P3？,歯冠高:29.6mm
81	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-21	B-1 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:55.1mm
82	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-22	B-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:29.1mm
83	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-23	C-1 NW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	左	1	P2orM3以外,歯冠高:50.3mm
84	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-24	C-1 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	M1orM2,歯冠高:46.0mm
85	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-25	C-1 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	左	1	P2以外,歯冠高:35.6mm
86	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-26	C-1 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
87	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-27	C-2 NW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:47.4mm
88	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-28	C-2 NW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2,歯冠高:24.8mm
89	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-29	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	P3orP4,歯冠高:36.4mm
90	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-30	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
91	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-31	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ？	遊離歯	臼歯破片	?	1	
92	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-32	C-2 NE	Ⅲ層	ウシ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
93	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-33	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎第2前臼歯	左	1	歯冠高:25.0mm
94	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-34	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	臼歯	?	1	歯冠高:44.2mm

95	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-35	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ？	遊離歯	臼歯破片	?	1	
96	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-36	C-2 NE	Ⅲ層	ウマ？	遊離歯	歯破片	?	1	
97	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-37	C-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	M1orM2, 歯冠高:33.2mm
98	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-38	C-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎臼歯	右	1	歯冠高:22.9mm
99	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-39	C-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	右	1	P3orP4, 歯冠高:63.8mm
100	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-40	C-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	下顎前臼歯	右	1	P3orP4, 歯冠高:20.9mm
101	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-41	C-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2, 歯冠高:30.3mm
102	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-42	C-2 SE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
103	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-43	C-2 SW	Ⅲ層	ウシ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	
104	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-44	C-2 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎臼歯破片	?	1	
105	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-45	C-3 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	臼歯破片	?	1	
106	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-46	C-3 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	M1orM2, 歯冠高:51.4mm
107	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-47	C-3 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	右	1	M1orM2, 歯冠高:49.1mm
108	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-48	C-3 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	切歯	?	1	
109	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-49	C-4 NE	Ⅲ層	ウシ	遊離歯	下顎第3後臼歯	左	1	咬耗指数:c
110	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-50	C-4 NE	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎後臼歯	左	1	M1orM2, 歯冠高:47.5mm
111	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-51	D-2 SW	Ⅲ層	ウマ	遊離歯	上顎前臼歯	右	1	歯冠高:43.6mm
112	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-歯-52	D-2 SW	Ⅲ層	ウシ	遊離歯	下顎第2後臼歯	左	1	咬耗指数:h-j
113	手乱遺跡	H19手乱-貝-01	H-14 SW	Ⅲ層	イシガイ科	ほぼ完存	—	右	1	殻皮付, 殻長:72.1mm, 殻高:39.6mm
114	手乱遺跡	H19手乱-貝-02	H-14 SW	Ⅲ層	イシガイ科	ほぼ完存	—	右	1	殻皮付, 殻長:80.7mm, 殻高:46.0mm
115	手乱遺跡	H19手乱-貝-03	K-19 SW	Ⅲ層	イシガイ科	ほぼ完存	—	左	1	殻皮付, 殻長:105.5mm, 殻高:51.1mm
116	手乱遺跡	H19手乱-貝-04	K-19 SW	Ⅲ層	イシガイ科	ほぼ完存	—	左	1	殻皮付, 殻長:96.5mm, 殻高:51.2mm
117	手乱遺跡	H19手乱-貝-05	H-14	Ⅲ層	イシガイ科	破片	—	左	1	殻皮付
118	鶴喰広田遺跡	H21鶴喰広田-貝-01	C-1 NW	Ⅲ層	イシガイ科	破片	—	右	1	殻皮付

図版1　手乱遺跡出土の動物遺体

1. イヌ左橈骨(15)　2. イヌ左尺骨(14)　3. イノシシ左肩甲骨(5)　4. イノシシ右大腿骨(6)
5. ニホンジカ右寛骨(7)　6. ニホンジカ右脛骨(21)　7. ウシ右上顎第3後臼歯(51)
8. ウマ右橈骨, 尺骨(20)　9. ウマ左基節骨(後肢)(16)　10. イシガイ科左殻(116)　11. イシガイ科右殻(114)

図版2　鶴喰広田遺跡出土の動物遺体

1. ヒト右頭頂骨(29)　2. ヒト左頭頂骨(24)　3. ヒト右上顎骨, 頬骨(32)　4. ヒト左大腿骨(25)
5. イヌ右上腕骨(23)　6. ウシ左下顎第2後臼歯(112)　7. ウシ左下顎第3後臼歯(109)　8. ウシ中足骨(26)
9. ウマ右上顎第2前臼歯(78)　10. ウマ左下顎第2前臼歯(70)　11. ウマ左下顎第2前臼歯(93)
12. ウマ右下顎第3後臼歯(75)　13. ウマ右下顎第3後臼歯(76)　14. ウマ右大腿骨(40)　15. ウマ左距骨(36)
16. ウマ左中足骨(35)　17. イシガイ科右殻(118)

写　真　図　版

1．手乱遺跡遠景（南より）

2．手乱遺跡杭検出状況

3．弥生土器出土状況

4．須恵器出土状況

5．木製品出土状況

図版２

１．手乱遺跡全景（北より）

２．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区全景（北より）

１．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区全景（南より）

２．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区北区全景（北より）

３．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区中区全景（北より）

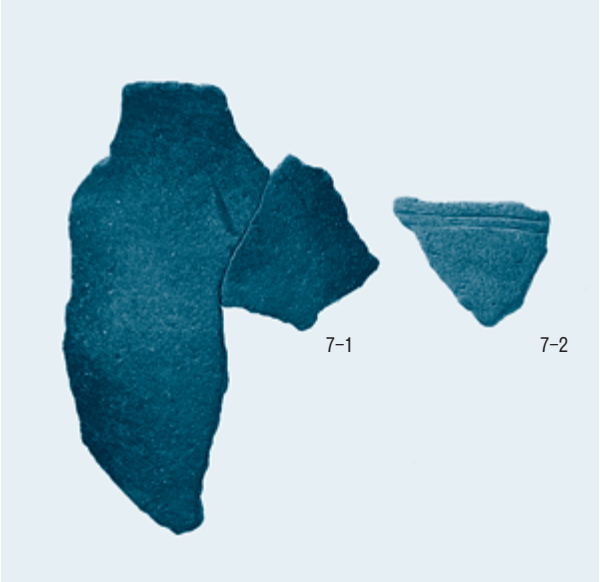
４．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区南区全景（北より）

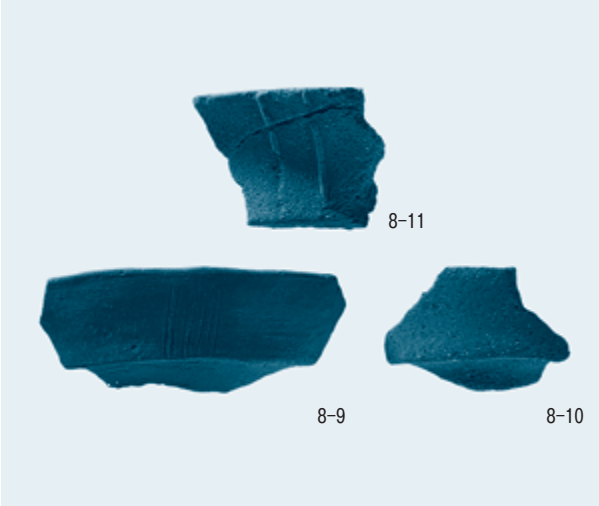
５．鶴喰広田遺跡Ｈ20調査区杭検出状況

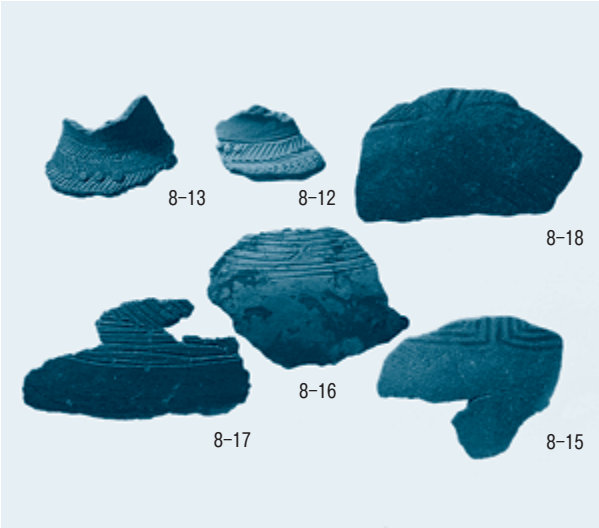
図版４

１．鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区全景（南より）

２．鶴喰広田遺跡Ｈ21調査区流路２遺物出土状況（北東より）





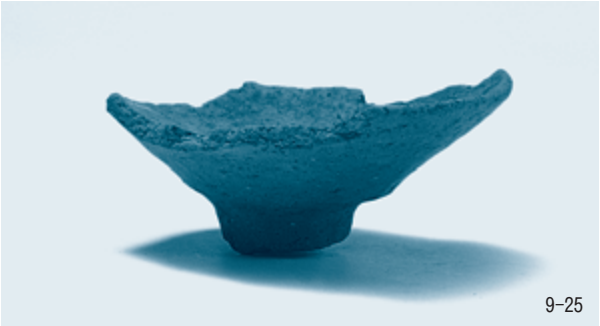


手乱遺跡出土遺物１（土器）

図版６

9-19

9-22


9-25

9-30

10-37

9-31

10-38

10-39

10-40

手乱遺跡出土遺物２（土器）

10-41

10-42

10-44

10-45

10-47

10-50

10-52

10-53

10-56

11-58

手乱遺跡出土遺物３（土器）

図版８

11-68

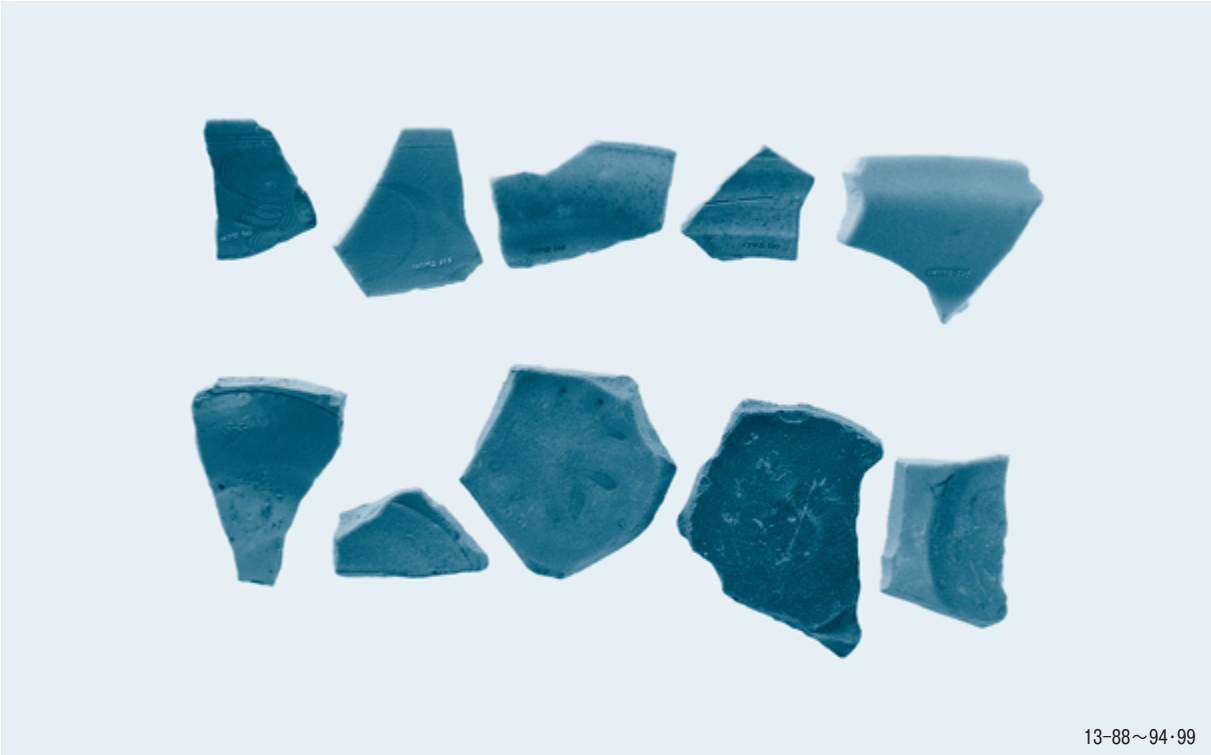
12-79

12-75

12-81

12-76

12-83

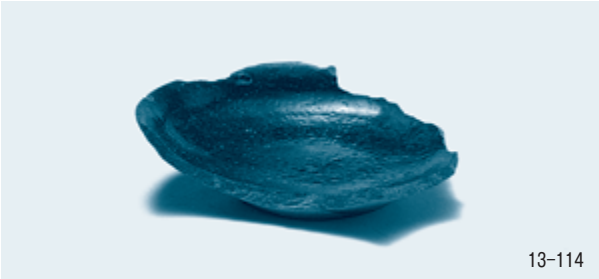

13-88～94･99

手乱遺跡出土遺物４（土器・陶磁器）

13-102

13-113

13-105


13-114

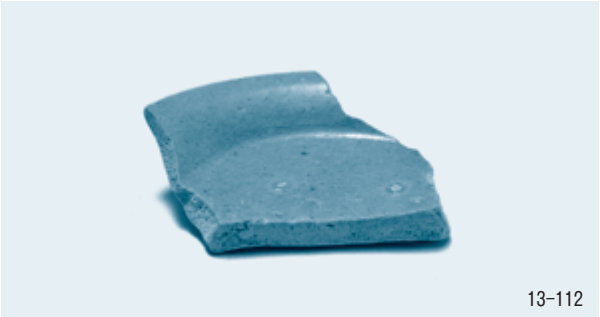
13-108

13-115

13-110

13-117

13-111

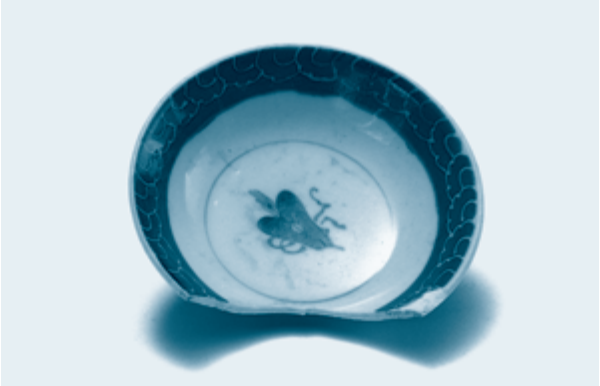

13-112

13-118

手乱遺跡出土遺物５（陶磁器）

図版10

14-119



14-120

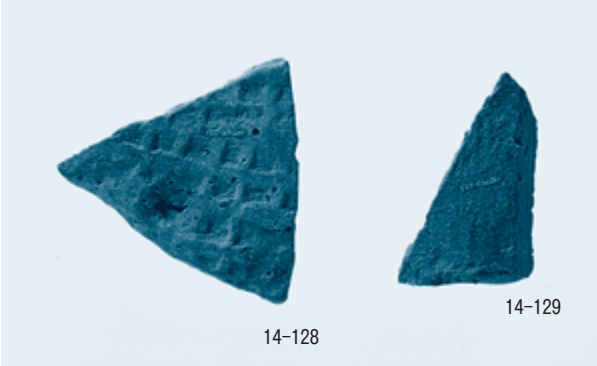
14-121

14-123

14-124

14-125

14-127


14-128
14-129

14-130

手乱遺跡出土遺物６（陶磁器他）

15-1

15-2

15-3

16-4

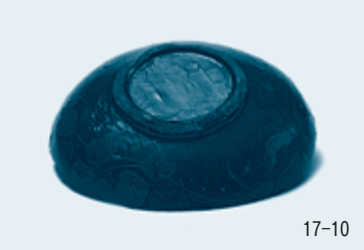
16-5

16-7

16-9

手乱遺跡出土遺物７（木製品）

図版12


17-10

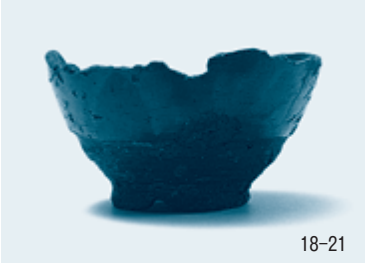
17-11

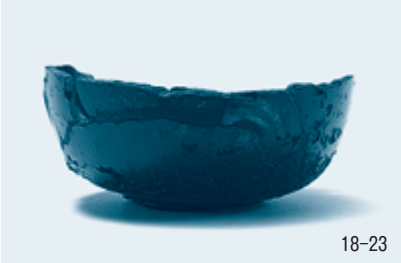
17-14

17-18

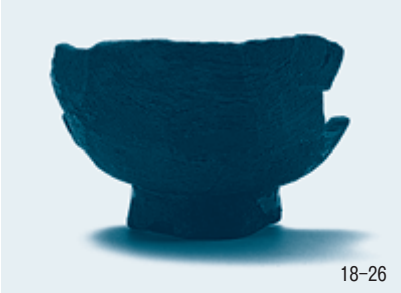
17-19

17-20


18-21


18-23

18-24


18-26

18-27

18-30

18-35

18-37

18-39

19-47

20-52

手乱遺跡出土遺物８（木製品）

21-55

21-58

21-59

22-67

21-56

22-68

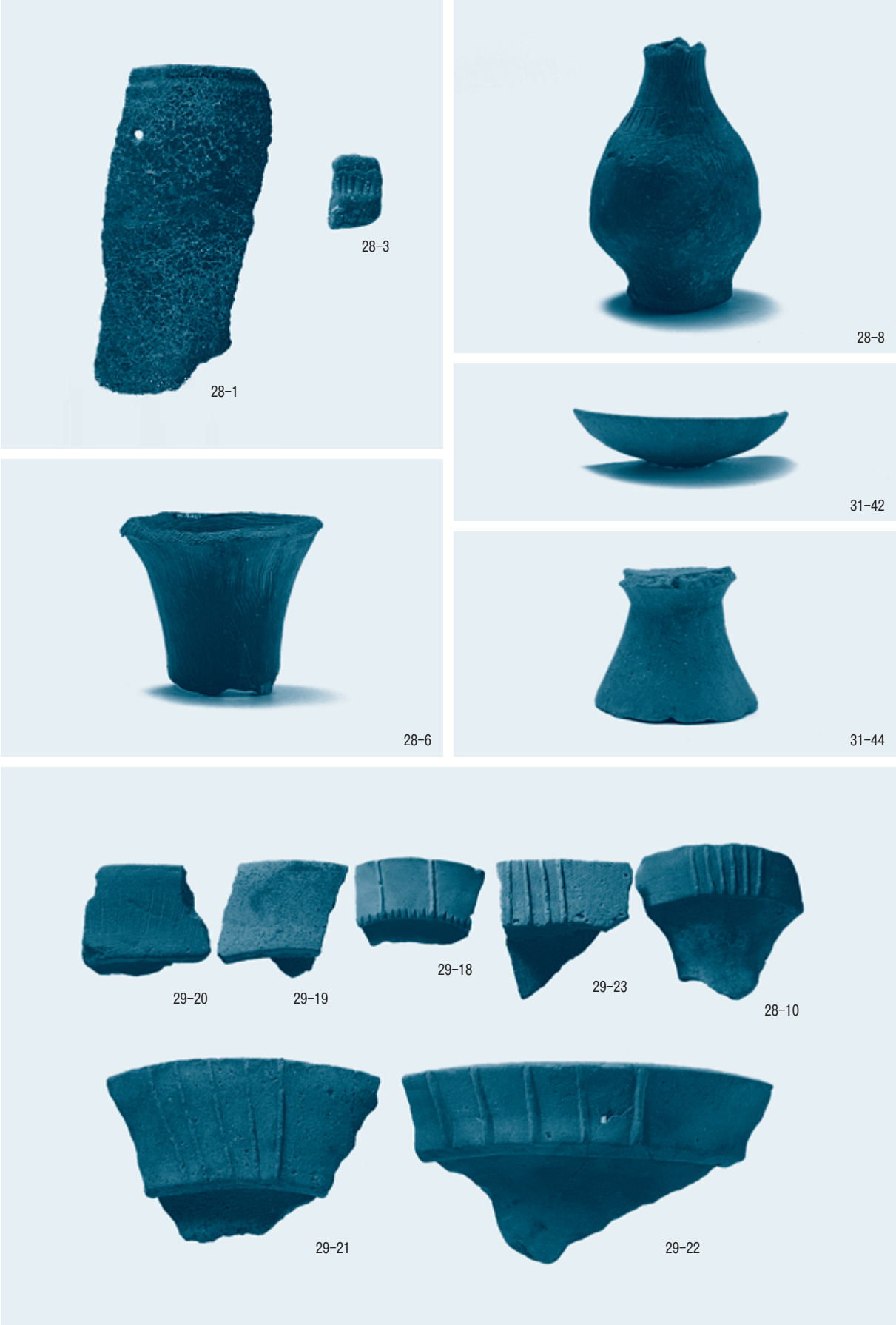
22-69

22-70

22-71

手乱遺跡出土遺物９（木製品）

図版14



鶴喰広田遺跡出土遺物１（土器）

31-46

32-65

32-57

32-66

32-62

32-67

32-63

32-64

33-71

鶴喰広田遺跡出土遺物２（土器）

図版16

33-72

33-74

33-76

33-77

33-78

33-79

33-80

34-85

34-87

34-88

鶴喰広田遺跡出土遺物３（土器）

34-90

34-91

34-92

34-93

34-95

34-96

34-98

34-99

34-100

35-101

35-102

35-103

鶴喰広田遺跡出土遺物４（土器）

図版18

35-104

35-108

35-109

35-112

35-113

35-114

36-121

37-133

37-134

38-137

37-135

38-138

38-136

39-139

鶴喰広田遺跡出土遺物６（土器）

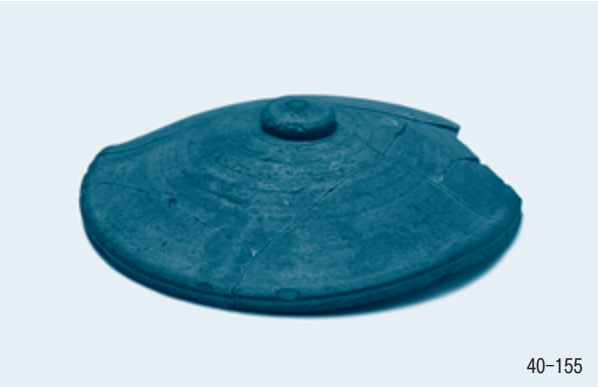
図版20

39-140

39-141

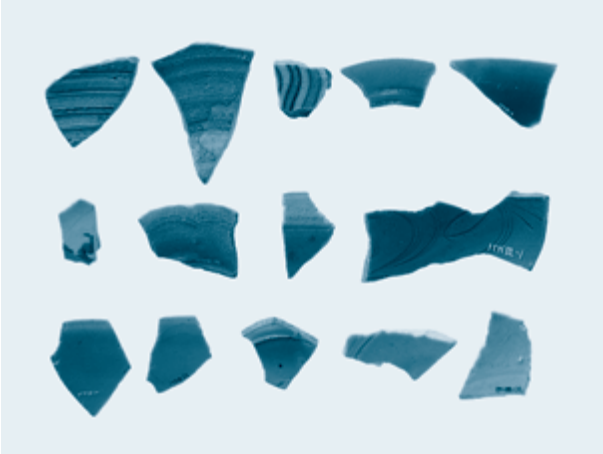
39-142

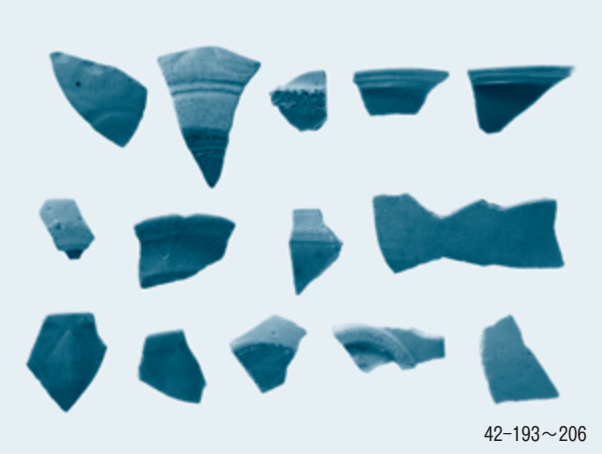
40-143


40-155

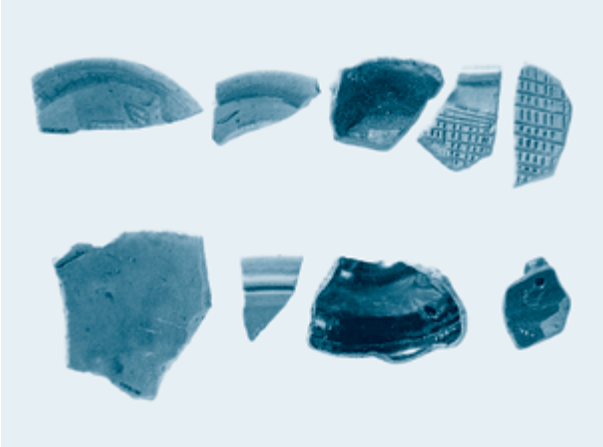
40-158

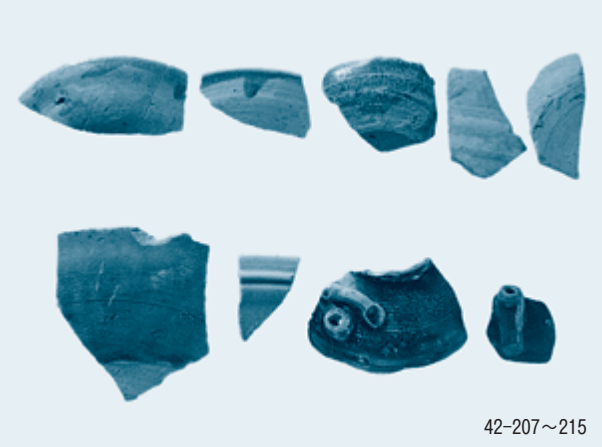
40-164





42-193～206

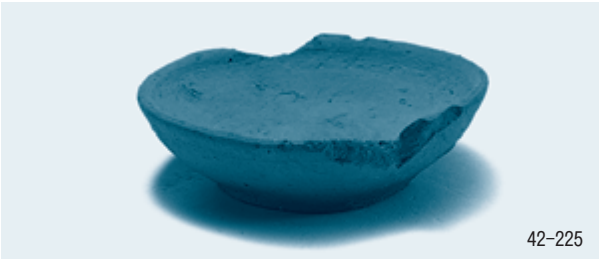




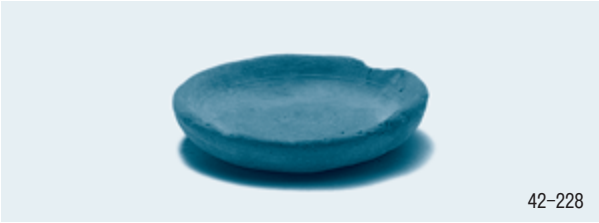
42-207～215

42-224

42-227

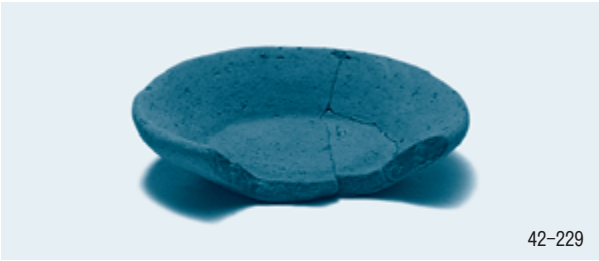


42-225



42-228

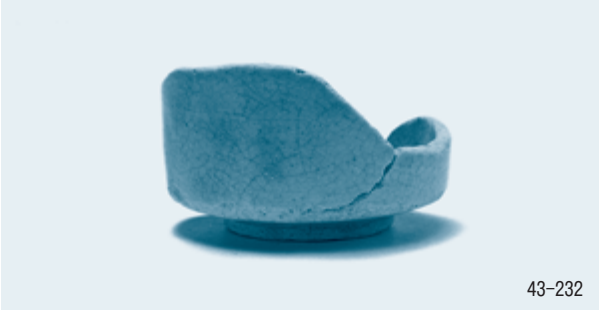
42-226



42-229

鶴喰広田遺跡出土遺物８（陶磁器）

図版22


43-232

43-233

43-234

43-237

43-238

43-240

43-241

43-242

43-243

43-247

43-250

43-252

鶴喰広田遺跡出土遺物９（陶磁器）

43-254

43-255

43-256

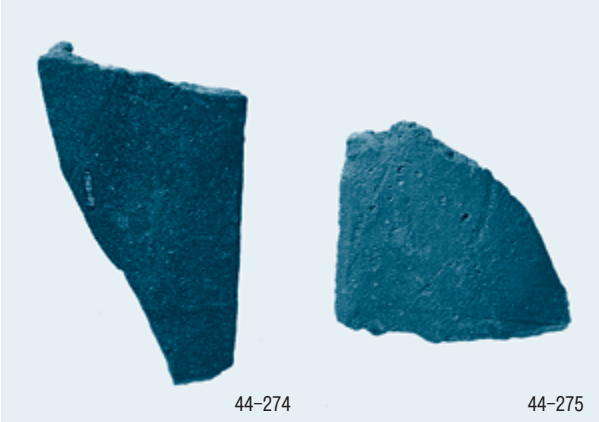
43-257

43-258

43-260

43-261

44-271

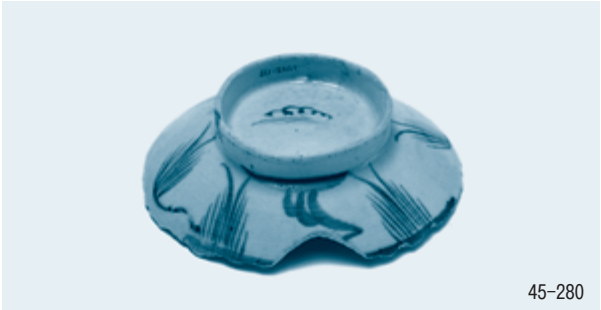

44-274 44-275

鶴喰広田遺跡出土遺物10（陶磁器）

図版24

45-278

45-279

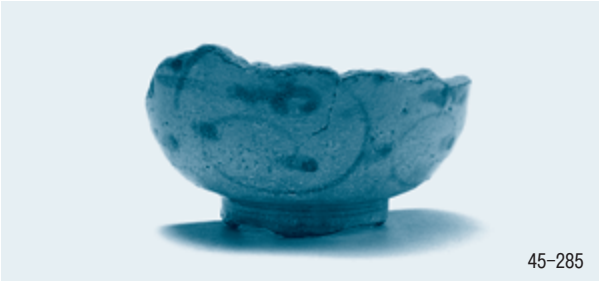

45-280

45-281

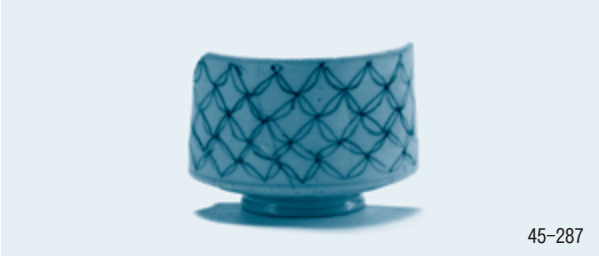
45-282

45-283

45-284


45-285

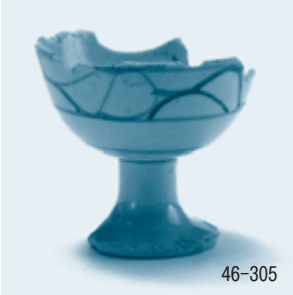
45-286

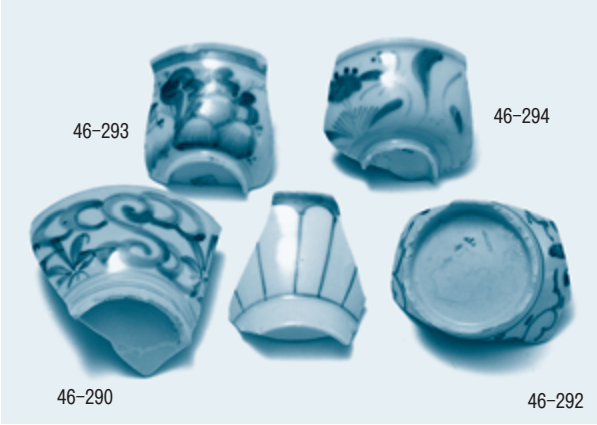

45-287

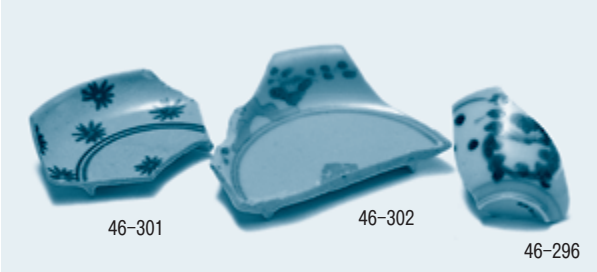
45-288

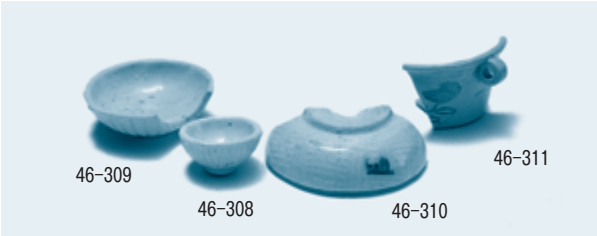
45-289

鶴喰広田遺跡出土遺物11（陶磁器）



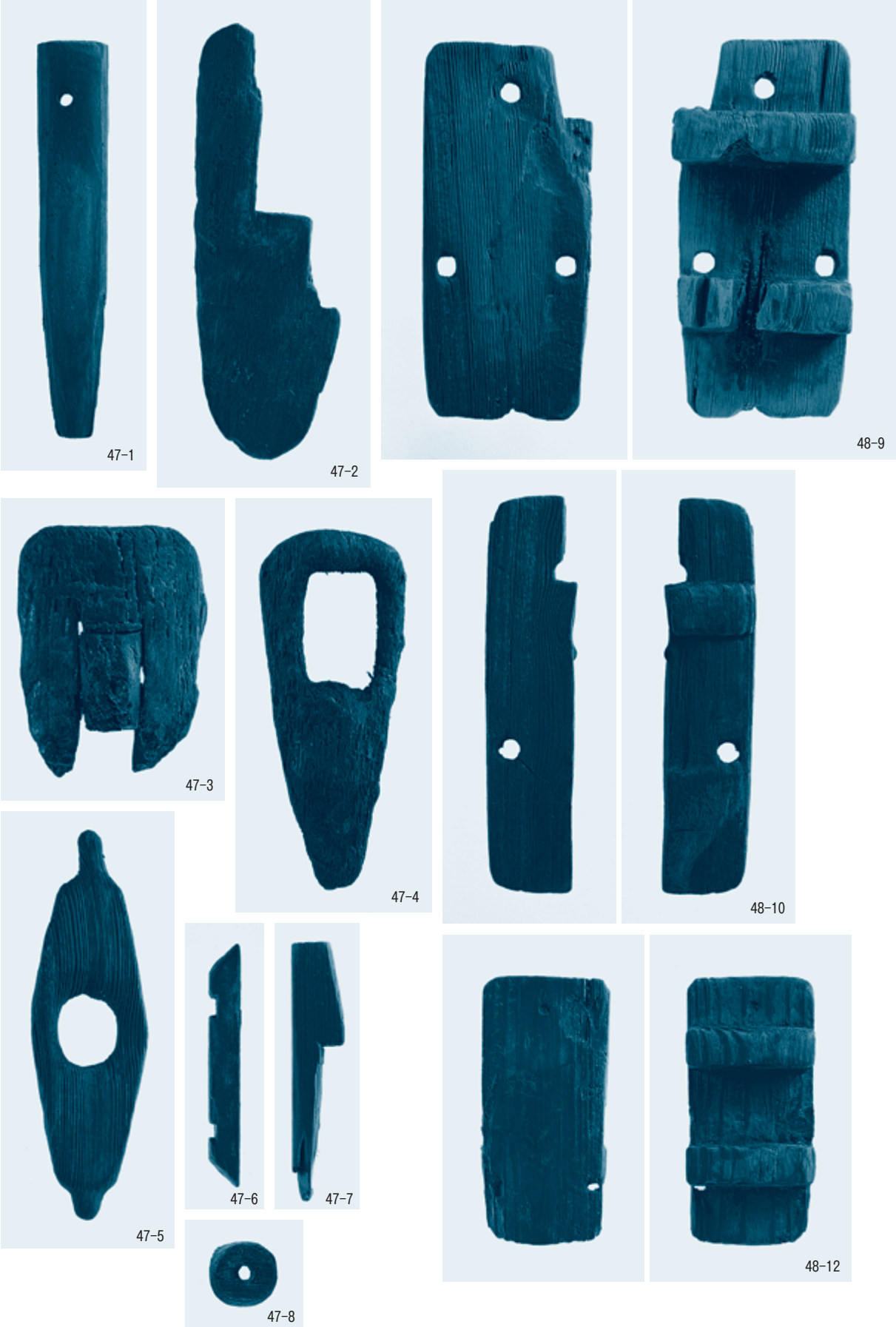






鶴喰広田遺跡出土遺物12（陶磁器他）

図版26



鶴喰広田遺跡出土遺物13（木製品）

49-14

49-15

49-16

49-17

50-18

50-19

鶴喰広田遺跡出土遺物14（木製品）

図版28

50-20

50-21

50-22

51-24

51-23

51-26

鶴喰広田遺跡出土遺物15（木製品）

51-28

52-30

52-31

52-33

53-36

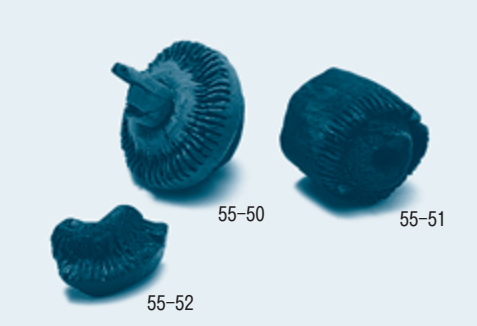
53-37

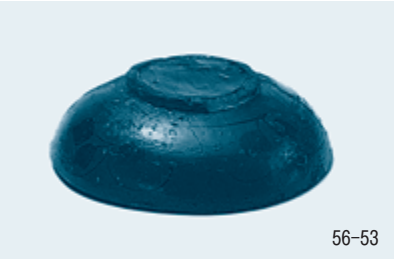
鶴喰広田遺跡出土遺物16（木製品）

図版30

鶴喰広田遺跡出土遺物17（木製品）

55-49


55-50 55-51 55-52


56-53

56-57

56-58

56-59

56-60

56-61

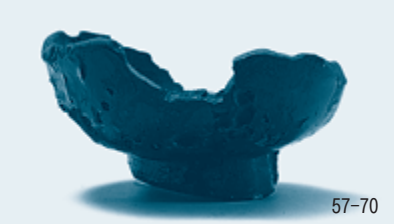
56-63

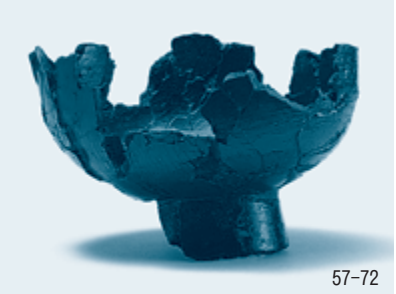
56-64

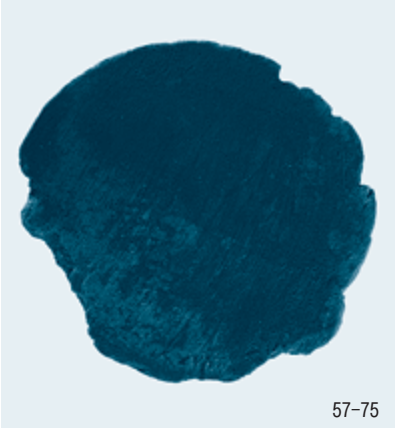
56-65

56-68

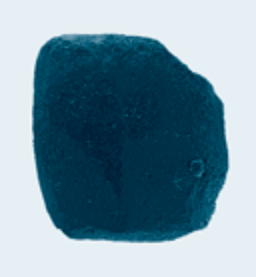
57-69

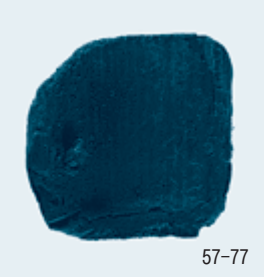

57-70


57-72


57-75

57-76




57-77

鶴喰広田遺跡出土遺物18（木製品）

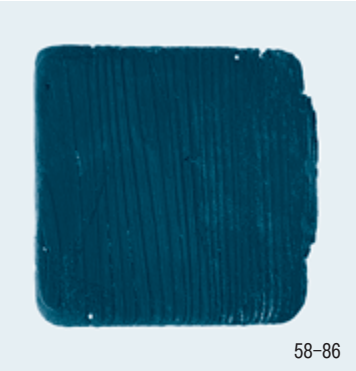
図版32

58-82

58-83

58-84

58-85

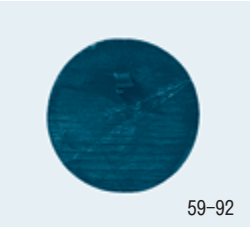

58-86

59-87

59-88

59-89

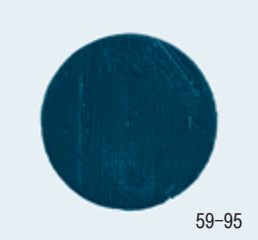
59-90

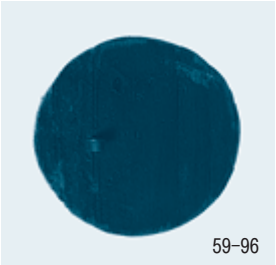

59-92

59-93

鶴喰広田遺跡出土遺物19（木製品）

59-94

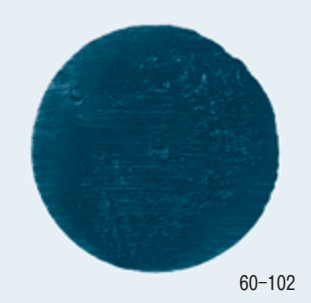

59-95


59-96

59-98

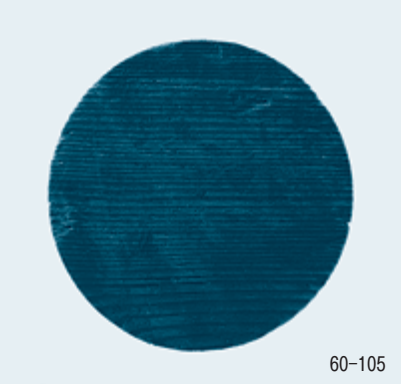
59-99

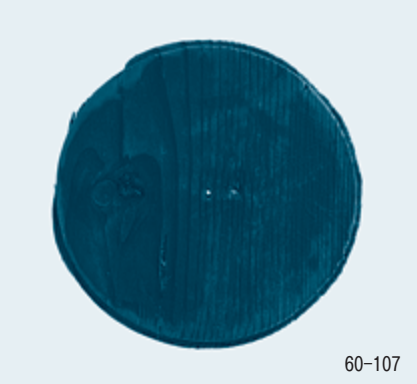
59-100


60-102

60-103

60-104


60-105

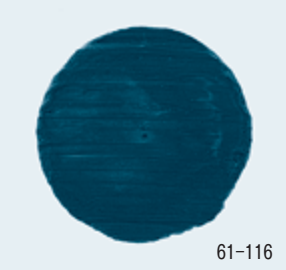

60-107

60-108

60-109

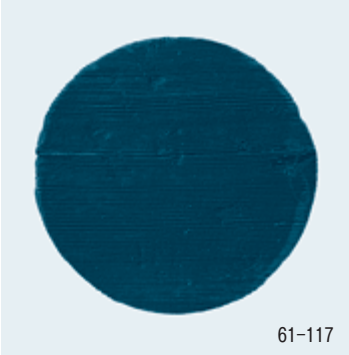
61-112

61-114


61-116

鶴喰広田遺跡出土遺物20（木製品）

図版34


61-117

61-118

61-119

61-120

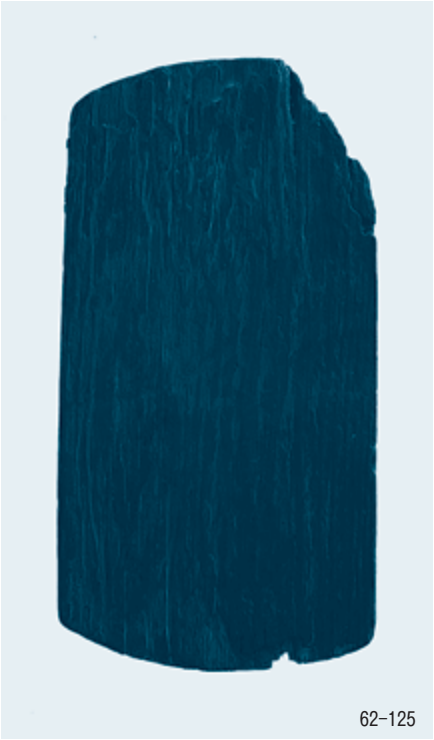
62-121

62-122

62-123

62-124

鶴喰広田遺跡出土遺物21（木製品）


62-125

63-126

63-131

63-127～130

鶴喰広田遺跡出土遺物22（木製品）

図版36

63-132～143

65-147

64-144

65-148

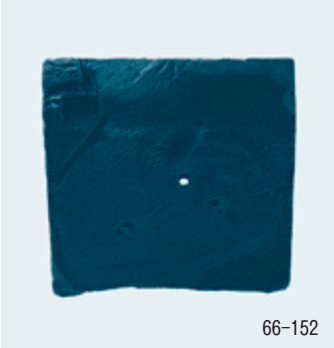
64-145

65-149 65-150

64-146

65-151

鶴喰広田遺跡出土遺物23（木製品）


66-152

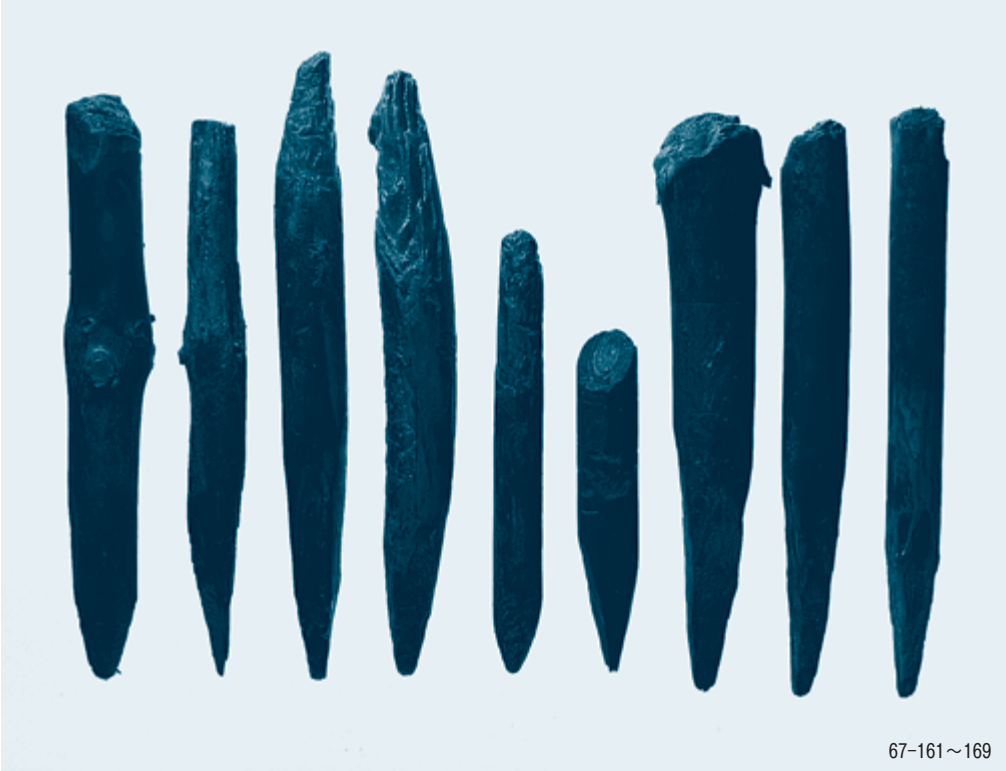
66-155

66-157

67-158

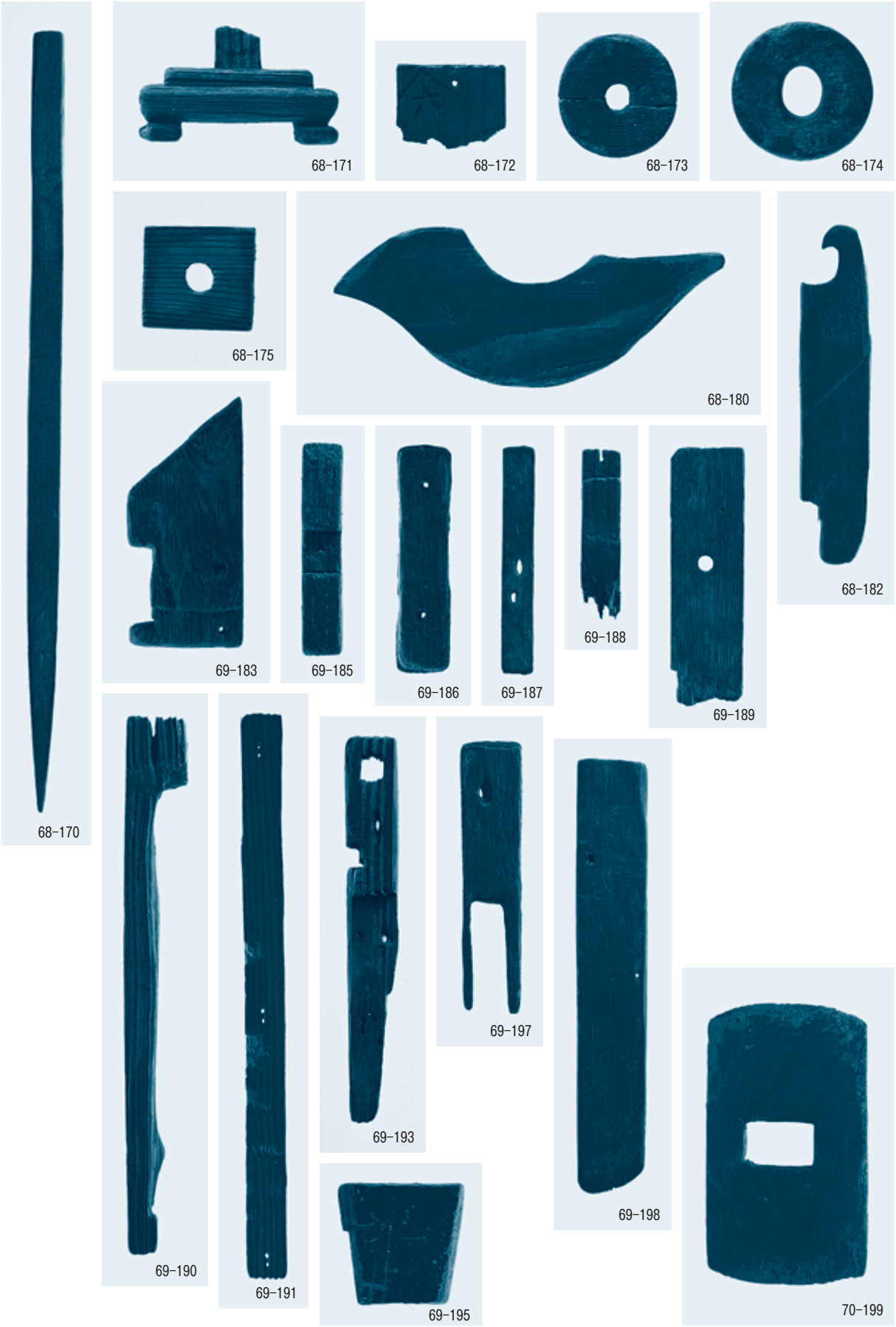
67-159

67-160


67-161～169

鶴喰広田遺跡出土遺物24（木製品）

図版38

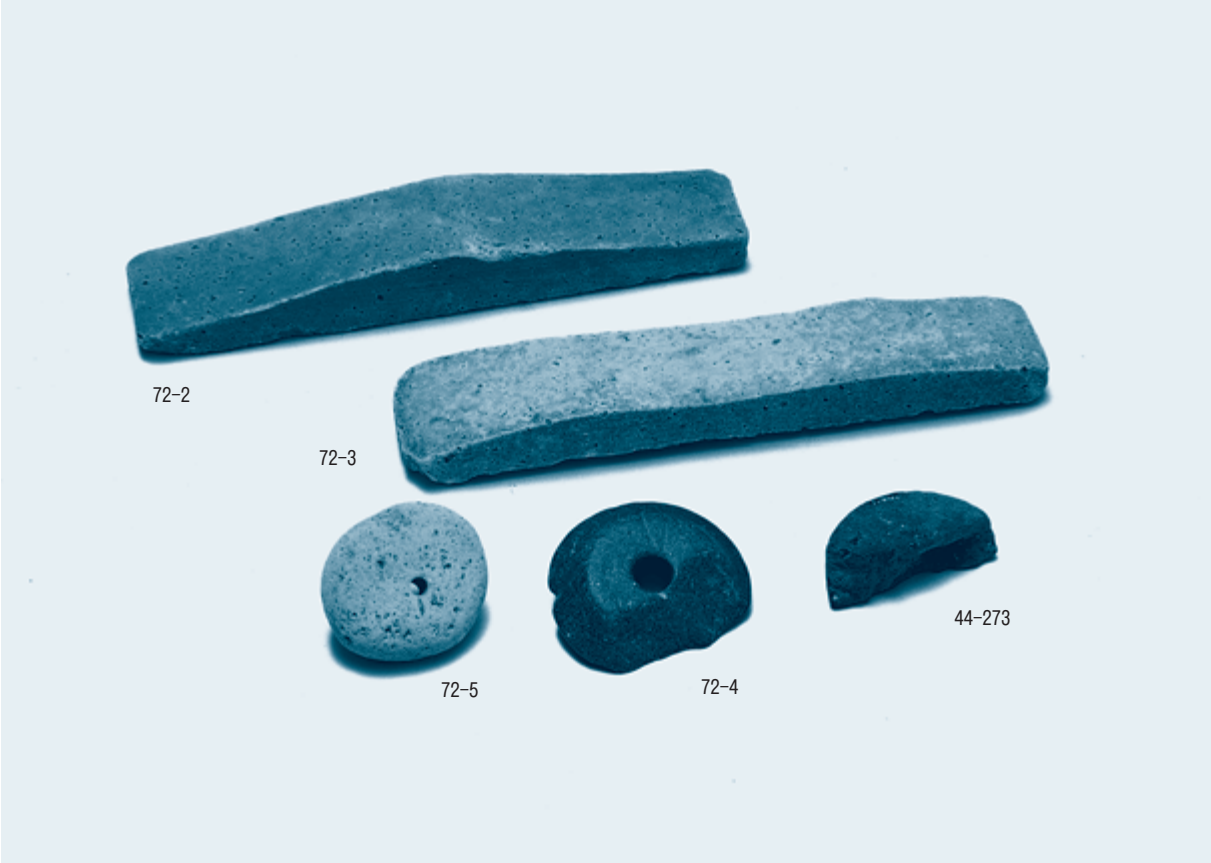


鶴喰広田遺跡出土遺物25（木製品）

鶴喰広田遺跡出土遺物26（木製品）

図版40

手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（石器）



鶴喰広田遺跡出土遺物（石器・石製品）

鶴喰広田 72-6

鶴喰広田 73-7

鶴喰広田 73-8

鶴喰広田 73-9

鶴喰広田 73-11

鶴喰広田 73-10

手乱 23-6

手乱 23-4

手乱 23-5

手乱 23-7

鶴喰広田 73-12

鶴喰広田 73-13

鶴喰広田 73-14

鶴喰広田 73-15

手乱遺跡・鶴喰広田遺跡出土遺物（金属製品）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ごてんがわりゅういきいせきぐん　　てみだれいせき・つるはみひろたいせき
書名	御殿川流域遺跡群Ⅴ　手乱遺跡・鶴喰広田遺跡
副書名	一級河川御殿川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第39集
編著者名	溝口彰啓　岩名健太郎 小林和貴・小川とみ・鈴木三男（東北大学植物園）　中村賢太郎（パレオ・ラボ）
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒422-8002　　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　　電話　054(262)4261(代)
発行年月日	平成25　年　３月　29日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
手乱遺跡（てみだれいせき） 鶴喰広田遺跡（つるはみひろたいせき）	静岡県三島市（しずおかけんみしまし） 鶴喰（つるはみ）　他（ほか）	22206		35°5′59″	138°55′53″	200805～200810 200911～201003	手乱遺跡 540㎡ 鶴喰広田遺跡 360㎡（H20） 359㎡（H21）	開発等の事業に伴うもの（河川改修工事）

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
手乱遺跡 鶴喰広田遺跡	河川跡	弥生時代～江戸時代	旧河道 杭列	縄文土器、弥生土器、土師器、陶磁器、土製品（土錘） 木製品（農具･下駄･漆椀・曲物・箸・建築材）、石製品（磨製石斧）、金属製品（鏡・銭貨・キセル）	

要　約	御殿川流域遺跡群では河川改修工事に伴って継続的な調査が行われている。今回は平成８年・９年実施調査区に隣接する地点で行われた手乱遺跡及び鶴喰広田遺跡の発掘調査である。御殿川の旧河道の一部が検出され、旧河道に長期間にわたって堆積した包含層より、弥生時代～江戸時代にかけての遺物が多量に出土している。出土したのは、土器、陶磁器や木製品といった日常生活に関わる多種多様な遺物であり、これらは周辺に展開する集落域を考える上で貴重な資料群といえる。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第39集

御殿川流域遺跡群Ⅴ

手乱遺跡・鶴喰広田遺跡

平成19～24年度　一級河川御殿川広域河川整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年３月29日　発行

編集発行　静岡県埋蔵文化財センター

〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL　054-262-4261（代）

FAX　054-262-4266

印刷所　松本印刷株式会社

〒421-0303　静岡県榛原郡吉田町片岡2210

TEL 0548-32-0851（代）